はにわの動物園（総社歴史資料館）

大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録３　2018　前橋市教育委員会

地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

The Omuro Park

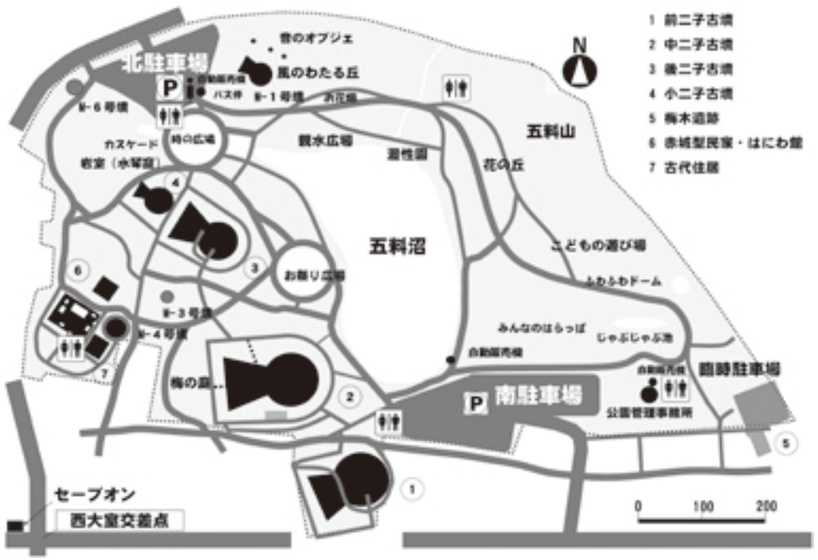
大室古墳の教室

考古学講演会・講座の記録 3

匠の教室「関東と関西の動物埴輪をつくる」（鼻毛石町一心窯）

2018. 1

前橋市教育委員会事務局文化財保護課



大室公園案内図

平成29年度　地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業

大室古墳の教室
考古学講演会・講座の記録３

発行日　2018（平成30）年１月25日
発　行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853　群馬県前橋市総社町三丁目11－4
電話　027－280－6511
印　刷　朝日印刷工業株式会社

目　　次

1　平成28年度大室古墳の教室事業について……　1～ 20

2　匠の教室・制作品完成記念
考古学講演会
「馬形埴輪の世界～群馬県出土の埴輪を中心に～」
（三浦　茂三郎：高崎市観音塚考古資料館））……　21～ 48

3　講座・赤城山南麓の考古学2016

1　「シベリアを旅した石器」
（石田　典子：群馬県立歴史博物館）……　49～ 54

2　「縄文の美　赤城山麓の縄文中期世界」
（山口　逸弘：公益財団法人　群馬県
埋蔵文化財調査事業団）……　55～ 72

3　「前二子古墳の馬具をめぐって」
（内山　敏行：公益財団法人　とちぎ未来
づくり財団埋蔵文化財センター）・　73～ 94

4　「赤城山南麓を襲った平安時代の巨大地震」
（加部　二生：桐生市教育委員会）……　95～118

5　「勢多郡と佐位郡ができる頃の赤城山南麓
～神沢川と桂川流域の遺跡と古墳の動向を中心に～」
（永井　智教：日本考古学協会会員）……　119～142

1　本書は、平成28年度に地域の特性を活かした埋蔵文化財活用事業で開講した考古学講演会・講座の発表をまとめた記録集である。

2　本書の編集は文化財保護係　前原　豊が行った。

3　講演会・講座の文章化については、文化財保護係　中島侑子が行った。

4　本事業の開催にあたっては、市民ボランティア（展示）の阿部信一、宇佐美 渡、上島和子、柴崎まさ子、柴田敏子、戸丸澄江、野下登志子、萩原保彦、峰岸あや子、吉田真理子の協力があった。

5　講演会・講座については講演内容と配布レジュメを掲載し、原則として当日使用したスライドについては、紙数の都合から割愛した。

「前二子古墳石室復元市民プロジェクト」と「大室古墳の教室」事業の経過

項目	一般向け体験学習																小学生向け体験学習							講演会	市民プロと教室事業		年報
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		25
年度	馬、石見、盾持人、動物の埴輪	前二子、筒形器台、装飾の須恵器	山王廃寺跡の瓦	上西原遺跡の瓦塔	前二子古墳の土師器	群馬と全国の土偶	群馬の耳飾	法隆寺と山王廃寺の塑像	前二子と全国の馬具	前二子古墳のガラス玉	前二子古墳の鏡	金冠塚古墳の冠	元総社蒼海遺跡群の前期土偶	金色ストラップ	プラ板ストラップ	鬼瓦、土偶、埴輪のお面	小学生はにわ	小学生どぐう	小学生かがみ	小学生まがたま	小学生ばぐ	小学生金色ストラップ	小学生プラ板	考古学講演会の講師	市・前二子古墳石室復元市民プロジェクト 教・大室古墳の教室		文化財保護課年報
H16																											35号
H17																								高久健二			36号
H18		●前			●																			白石太一郎	市01	前二子の土器	37号
H19									●															杉山秀宏 平出　豊	市02	馬具	38号
H20										●	●													右島和夫	市03	鏡、ガラス玉	39号
H21													●														40号
H22		●筒																						山本孝文	市04	装飾器台	41号
H23												●				●								右島和夫	市05	金冠	42号
H24	●馬																							和田一之輔	市06	石見・馬	43号
H25	第２回古代東国文化サミット～ググっとぐんま・大室古墳フェスタ～																							白石太一郎 柳澤一男 右島和夫 高久健二 前原　豊			44号
H26		●壺					●		●							●	●		●	●	●			右島和夫	教01	装飾壺	45号
H27	●盾					●		●法	●				●	●	●	●	●	●	●	●		●		日高　慎	教02	盾持人	46号
H28	●動					●		●山	●				●	●	●	●	●	●	●	●		●		三浦茂三郎	教03	動物埴輪	47号
H29			●	●					●				●		●	●	●		●	●	●		●	前澤和之	教04	瓦・瓦塔	48号

●カラーパンフレットシリーズ

1　『赤城山南麓の旧石器～1946年、ここで旧石器が発見された～』
2　『赤城山南麓の縄文 part１～移り行く縄文土器～』
3　『底の尖った土器～赤城山南麓の縄文 part２～』
4　『朝倉・広瀬古墳群～群馬の古墳時代はここから始まった‼』
5　『前橋市大室古墳群～赤城南麓の大豪族の威勢～』
6　『東国の雄　総社古墳群』
7　『赤城山南麓の古墳～裾野は長し赤城山～』
8　『榛名山東南麓の古墳～古代群馬の中心地　ここから群馬が始まった』
9　『国指定史跡　山王廃寺跡～よみがえる白鳳の世界へ～』
10　『史跡　女堀～赤城山南麓を横断する巨大用水路～』

●記録集

1　平成26年度大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録１　2016. 3
2　平成27年度大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録２　2016. 12
3　平成28年度大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録３　2018. 1
4　平成29年度大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録４　2018. 3

1　平成28年度大室古墳の教室事業について

1　事業名称

地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

「大室古墳の教室」

2　目　　的

大室古墳群史跡整備事業は古墳の整備は完成したが、当初計画された資料館の建設は実現していない。そこで「大室古墳の教室」で体験学習や考古学講座を開講し、展示場を開設し、市内の埋蔵文化財の活用や本市の古代文化を紹介するとともに郷土愛を育むことを目的とする。

3　事 業 費

3,600,000円（50％国庫補助対象）

4　開催した普及事業

⑴　小学生夏休み森の考古学教室

期　間：平成28年７月21日㈭から８月12日㈮までの毎週木・金曜日

時　間：午前９時から午前12時まで

講　師：文化財保護課職員

会　場：大室公園管理事務所ホール

図１　小学生夏休み森の考古学教室・鏡つくり

第１回　土偶をつくろう１

期　日：平成28年７月21日㈭14名

第２回　土偶をつくろう２

期　日：平成28年７月22日㈮９名

第３回　埴輪をつくろう１

期　日：平成28年７月28日㈭17名

第４回　埴輪をつくろう２

期　日：平成28年７月29日㈮20名

第５回　勾玉をつくろう１

期　日：平成28年８月４日㈭18名

第６回　勾玉をつくろう２

期　日：平成28年８月５日㈮19名

第７回　鏡をつくろう１

期　日：平成28年８月11日㈭18名

第８回　鏡をつくろう２

期　日：平成28年８月12日㈮23名

○小学生作成の埴輪と土偶の焼成

平成28年８月18日㈭一心窯の穴窯焼成

平成28年８月23日㈫一心窯の窯出し

○作品引渡

平成28年８月25日㈭から26日㈮まで

⑵　講座・赤城山南麓の考古学2016

「赤城山南麓の古代を学ぶ」

期　間：８月27日㈯から10月１日㈯までの毎週土曜日

時　間：午前９時半から午前11時半まで

会　場：大室公園民家園

図２　講座・赤城山南麓の考古学2016

第１回　赤城山南麓の旧石器時代

「シベリアを旅した石器」

講　師：石田　典子（群馬県立歴史博物館）

期　日：平成28年８月27日、参加者：26名

会　場：大室公園民家園離れ

第２回　赤城山南麓の縄文時代

「縄文の美・赤城山麓の縄文中期世界」

講　師：山口　逸弘氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）

期　日：平成28年９月３日、参加者：29名

会　場：大室公園民家園離れ

第３回　赤城山南麓の古墳時代

「前二子古墳の馬具をめぐって」

講　師：内山　敏行氏（公益財団法人とちぎ未来づ

くり財団 栃木県埋蔵文化財センター）
期　日：平成28年９月10日、参加者：36名
会　場：大室公園民家園主屋
第４回　現地見学
「赤城山南麓の古墳めぐりバス・ツアー」
講　師：深澤　敦仁氏（群馬県立歴史博物館）
期　日：平成28年９月17日㈯
時　間：午前９時から午後３時半まで
参加者：21名

図３　講座・赤城山南麓の考古学2016・古墳見学

第５回　赤城山南麓の古代１
「赤城山南麓を襲った平安時代の巨大地震」
講　師：加部　二生氏（桐生市教育委員会）
期　日：平成28年９月24日、参加者：23名
会　場：大室公園民家園離れ
第６回　赤城山南麓の古代２
「勢多郡と佐位郡ができる頃の赤城山南麓」
講　師：永井　智教氏（日本考古学協会会員）
期　日：平成28年10月１日、参加者：29名
会　場：大室公園民家園離れ

⑶　匠の教室

図４　匠の教室・動物埴輪をつくる

第１回　動物埴輪をつくる
講　師：石井　政幸氏（一心窯主宰）
期　間：平成28年10月13日㈭から
10月18日㈫まで
時　間：午前９時から午後４時まで
参加者：19名　延べ人数：94名
会　場：大室民家園主屋・離れ
第２回　縄文土偶をつくる
講　師：石井　政幸氏（一心窯主宰）
期　間：平成28年10月27日㈭から
10月31日㈪まで
時　間：午前９時から午後４時まで
参加者：11名　延べ人数：45名
会　場：大室民家園主屋・離れ

図５　匠の教室・縄文土偶をつくる

第３回　剣菱形杏葉をつくる
講　師：杉山　秀宏氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
日　時：平成28年11月25日㈮
時　間：午前９時から午後４時まで
参加者：11名
会　場：前橋市総社歴史資料館体験学習室
第４回　山王廃寺の塑像をつくる
講　師：桜岡　正信氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）
期　間：平成28年11月３日、
５・12・19・26日㈯
時　間：午前９時から午後４時まで
参加者：14名　延べ人数：60名
会　場：前橋市総社歴史資料館体験学習室
第５回　山王廃寺の古代文様タイルをつくる
講　師：永井　智教氏（日本考古学協会会員）
期　間：平成28年12月10日㈯・11日㈰
時　間：午前９時から午後４時まで
参加者：40名　延べ人数：52名
会　場：前橋市総社歴史資料館体験学習室
第６回　動物埴輪窯詰め
指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
会　場：鼻毛石町一心窯

日　時：平成28年11月29日㈮
　　午前９時から午前12時まで
参加者：４名
第７回　動物埴輪焼成と縄文土偶野焼き
指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
会　場：鼻毛石町一心窯
日　時：平成28年12月３日㈯
　　午前９時から午後４時まで
参加者：11名
第８回　動物埴輪窯出し・窯詰め
指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
会　場：鼻毛石町一心窯
日　時：平成28年12月12日㈪
　　午前９時から午後２時まで
参加者：７名
第９回　動物埴輪第２回焼成
指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
会　場：鼻毛石町一心窯
日　時：平成28年12月13日㈫
　　午前８時から午後６時まで
参加者：３名
第10回　動物埴輪第２回窯出し
指　導：石井　政幸氏（一心窯主宰）
会　場：鼻毛石町一心窯
日　時：平成28年12月17日㈯
　　午前９時から午後３時まで
参加者：11名

⑷　制作品完成記念考古学講演会

図６　制作品完成記念考古学講演会・三浦茂三郎氏

日　時：平成29年２月４日㈯
　　午後２時から午後４時まで
演　題：「馬形埴輪の世界
　　～群馬県出土の埴輪を中心に」
講　師：三浦茂三郎氏（高崎市観音塚考古資料館）
会　場：前橋市総合福祉会館多目的ホール
参加者：155名

⑸　大室はにわ館の展示

開設年月日：平成26年11月３日
会　場：西大室町2510大室民家園土蔵
面　積：１階24㎡・２階24㎡計48㎡
開　館：４月から12月まで
　　木曜日から日曜日・祝日
　　１月から３月まで
　　土・日曜日・祝日、年末年始は休館
時　間：午前９時から午後４時まで
展示資料：
①大室古墳群・内堀遺跡群出土品。旧石器・縄文・古墳時代の遺物・埴輪など
②前二子古墳石室復元市民プロジェクトの市民ボランティア制作品。埴輪・馬具・玉・鏡・須恵器・冠など
③韓国慶州民俗村新羅窯の新羅焼。高杯・壺・装飾土器など。
④東京福祉大学柴田研究室制作学習教材。「３Ｄ映像でみる大室古墳群」
⑥お面をつくる・土偶をつくる・縄文文様体験しようコーナー
⑦大室古墳群模型
⑧入館者数：平成28年度8000人

⑹　総社歴史資料館での展示

図７　総社歴史資料館で匠の教室制作品展示

会　場：前橋市総社町総社1584番地１
展覧会名：匠の教室企画展「埴輪の動物園」
　　関東と関西の動物埴輪たち
会　期：平成29年２月18日㈯から４月９日㈰まで
内　容：匠の教室で制作した関東と関西の動物埴輪
　　20点の展示

⑺　ボランティア活動

第１回　民家園主屋障子張り替え
期　日：平成28年９月２日㈮参加者：９名
会　場：民家園主屋・離れ

第２回　匠の教室埴輪つくり会場準備
　期　日：平成28年10月７日㈮
　会　場：民家園主屋・離れ　参加者：４名
第３回　会場撤去・土偶つくり会場準備
　期　日：平成28年10月21日㈮５名
第４回塑像つくり会場準備
　期　日：平成28年11月１日㈫
　会　場：総社歴史資料館　参加者：６名
第５回　匠の教埴輪窯詰め
　期　日：平成28年12月11日㈮
　会　場：鼻毛石町一心窯　参加者：４名
第６回　匠の教室埴輪・土偶焼成
　期　日：平成28年12月14日㈪
　会　場：鼻毛石町一心窯　参加者：14名

図８　大室古墳の教室ボランティアのみなさん

第７回　匠の教室埴輪窯出し
　期　日：平成28年12月20日㈰
　会　場：鼻毛石町一心窯　参加者：18名
第８回　匠の教室埴輪窯出し
　期　日：平成28年12月26日㈯
　会　場：鼻毛石町一心窯　参加者：３名
第９回　考古学講演会準備・撤去
　期　日：平成29年２月６日㈯
　会　場：日吉町総合福祉会館　参加者：８名
第10回　藤棚藤の剪定
　期　日：平成29年３月16日㈭
　会　場：大室公園古墳の藤棚、参加者：５名
第11回　制作動物埴輪の屋外設置
　期　日：平成29年４月22日㈫
　会　場：総社歴史資料館芝生広場　参加者：５名

⑻　制作動物埴輪の屋外設置

　予定日：平成29年４月22日㈫
　会　場：総社歴史資料館芝生広場
　展示数：６点
　１：馬形埴輪（前橋市白藤古墳出土）
　２：馬形埴輪（角川写真文庫掲載品）
　３：馬形埴輪（天理市荒蒔古墳）
　４：犬形埴輪（橿原市四条古墳）
　５：鹿形埴輪（橿原市四条古墳）
　６：猪形埴輪（橿原市四条古墳）

⑼　後二子古墳石室模型の製作委託

図９　後二子古墳の石室模型

　期　間：平成28年７月20日から平成28年10月31日まで
　内　容：後二子古墳石室模型を縮尺１/15で製作。
　　文化財保護課総社ギャラリーに展示。

⑽　印刷物の刊行

①大室古墳群パンフＡ４判20頁2000部
②赤城山南麓の旧石器パンフ16頁2000部
③赤城山南麓の縄文時代 part１　16頁2000部
④赤城山南麓の縄文時代 part２　16頁2000部
⑤赤城山南麓の古墳パンフＡ４判16頁2000部
⑥総社古墳群パンフＡ４判16頁2000部
⑦赤城山南麓の中世・女堀Ａ４判16頁4000部
⑧朝倉・広瀬古墳群パンフＡ４判16頁2000部
⑨「考古学講演会・講座の記録２」Ａ４判144頁　400部

５　来年度に向けて

平成26年から平成28年までの３か年にわたって大室はにわ館と藤棚などを整備することができた。また、夏の小学生を対象とした考古学体験教室は大室公園管理事務所ホールで開催したが、新設の総社歴史資料館には体験学習室が備わっていることから積極的に利用していきたい。

本年度、新たに古代文様タイルを実施したが好評であったため、来年度は回数を増やしていきたい。本市の埋蔵文化財を積極的に活用しながら、より楽しく学べるような内容で充実を図っていきたい。

大室古墳の教室　動物埴輪をつくる

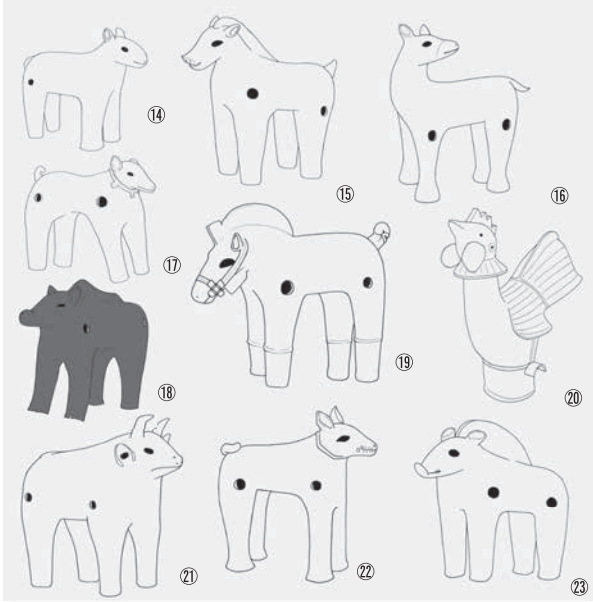
●関東と関西の動物埴輪

古墳にたて並べられるハニワには、武人や巫女や農夫などの人物、家や倉などの建物、大刀や盾などの器財とともに、動物たちがあります。今、ここに動物たちが古墳から抜け出して遊んでいます。飾りをつけた馬、飾らない馬、人を乗せた馬、狩る犬、射られた猪、夜明けを告げる鶏、鮎をとる鵜などです。ひとつひとつ動物のしぐさや表情をじっくりとご覧なり、そっと近寄って話しかけてみてください。

●関東の動物埴輪

①ウマ（前橋市白藤Ｖ－４号墳）
②ウマ（前橋市白藤古墳群）
③ウマ（大泉町古海松原11号墳）
④イヌ　⑤イノシシ（伊勢崎市上武士天神山古墳）
⑥狩人　⑦イノシシ　⑧イヌ（高崎市保渡田７遺跡）
⑨ウ　（高崎市保渡田八幡塚古墳）
⑩ウマ　⑪ウマ（前橋市内堀４号墳）
⑫ウマ　（前橋市後二子古墳）
⑬ウマ　（太田市高林西原古墳群）

●関西の動物埴輪



⑭イヌ　⑮イノシシ　⑯シカ（橿原市四条古墳）
⑰イヌ　⑱イノシシ　⑲ウマ（天理市荒蒔古墳）
⑳ニワトリ　㉑ウシ　（高槻市今城塚古墳）
㉒イヌ　㉓イノシシ　（高槻市昼神車塚古墳）

●焼き上がった動物埴輪を囲んでのひととき

●一同勢ぞろい・焼きがった関東と関西の動物埴輪（鼻毛石町・一心窯）

湿気の少ない秋に１週間かけて大室公園民家園の主屋と離れで関東と関西の動物埴輪をつくりました。

動物埴輪の制作は人物埴輪を作るのと勝手が違います。４本の脚があるためとても難しいのです。脚の上に胴体がのり、さらに頭がつきます。つけるときのタイミングが合わないと落ちてしまいます。お腹と背中をふっくらと仕上げるのに一番苦労しました。

埴輪は穴窯を使って丁寧に焼き上げます。薪材に炎が長く伸びる赤マツを使い８００度の高温になるまで約８時間かけて焼きました。窯入れまでの乾燥段階では、ヒビ割れの心配がありますが、ほとんど割れずに完成しました。

大室古墳の教室　動物埴輪をつくる

●脚から腹部、頭と難しい作業が続く（西大室町・大室民家園離れ）

●腹部をつくる（西大室町・大室民家園主屋）

●窯詰め完了、明日は窯焚き（鼻毛石町・一心窯１号窯）

●大型馬の窯出しは重くてたいへん（鼻毛石町・一心窯）

●一同勢ぞろい（鼻毛石町・一心窯）

●埴輪を囲んでおっ切り込み（鼻毛石町・一心窯）

●精悍な表情の狩人「イノシシを仕留めるぞ」（鼻毛石町・一心窯）

●埴輪を囲んで記念撮影（鼻毛石町・一心窯）

大室古墳の教室　山王廃寺塑像をつくる

●山王廃寺の塑像

昭和34年に山王廃寺で女性像頭部が発見されたことから、塑像の存在が予想されてきました。平成９・11年の調査で、塑像などをまとめて埋めた大きな埋納坑が、塔から西方約40mのところに見つかりました。そこから瓦片や炭、土器に混じって人物、動物、山岳、磯形、壁画など3000点を超える塑像片が発見されました。この中に以前、発見された女性像頭部と対になる像がありました。法隆寺や興福寺の塑像との比較研究から山王廃寺の塑像は、711年の法隆寺塔本塑像より新しく、阿修羅で有名な興福寺八部衆と同時期の８世紀中頃に作られたことが判明しました。

●まとまって見つかった塑像

●左から阿修羅像頭部・神将像頭部・女性像頭部

●匠の教室で制作された山王廃寺の復元女性像（石粉粘土製）

●山王廃寺の塑像を復元する

山王廃寺で発見された塑像は、全体が一つに復元できるものはありませんでしたが、多様な破片が見つかってます。この破片を基に、東京藝術大学松田誠一郎教授と愛知県立芸術大学の山崎隆之名誉教授の二人を指導者として復元作業を進めています。また、九州国立博物館より全面的な協力をいただき、復元に使用する精密な複製品をＣＴスキャンでデータ分析し、３Ｄプリンタで制作しました。また、匠の教室では桜岡正信先生の指導により石粉粘土を使って女性像の復元を行いました。

●山王廃寺の神将像とヨロイが共通する興福寺八部衆畢婆迦羅の復元（石粉粘土製・桜岡正信氏）

●芯に縄を巻く。

●石粉粘土を盛りつけ、顔をつける。

●頭部を仕上げてから胴部や手足をつける。

●紙やすりで全体を磨いて完成

大室古墳の教室　前二子古墳の馬具をつくる

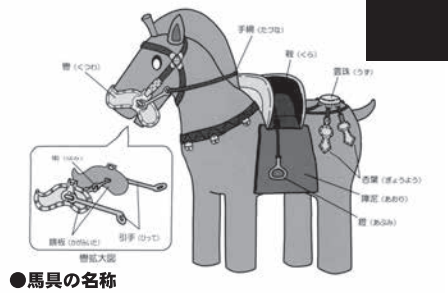
●前二子古墳の副葬品

前二子古墳は明治11年に石室が開口されました。石室の床面には加工された凝灰岩製の敷石があり、内部は全面ベンガラで真っ赤に塗られていました。

副葬品として、土器18点、鉄鏃112点やフック20点などの鉄製品、青色ガラス玉451点、金メッキされた馬具などがありました。

このうち馬具は一揃えあり、ｆ字形鏡板付きくつわ１組、尻がい用の剣菱形杏葉４枚、胸がい用の双葉剣菱形杏葉４枚、前輪、後輪などの鞍金具、輪鐙がみつかっています。

● 市民ボランティアによって復元された馬具と玉

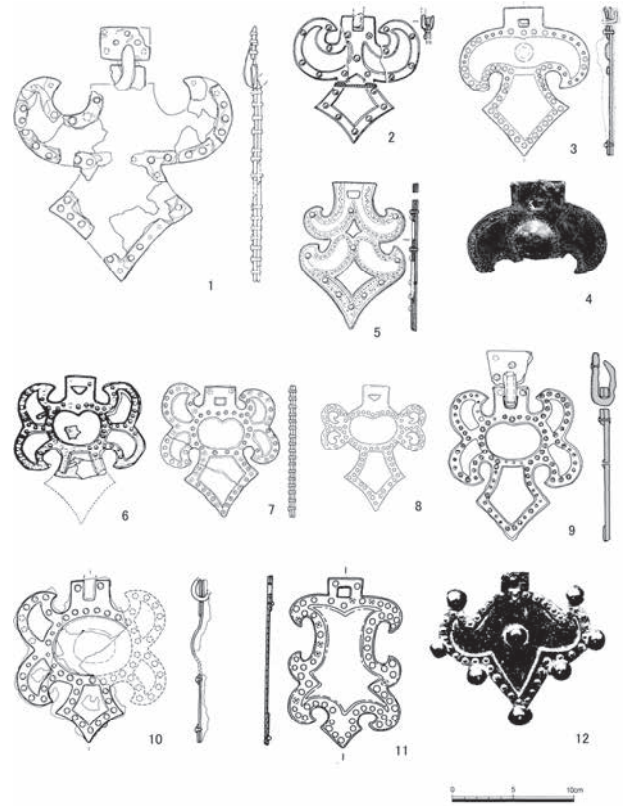


●馬具の名称

●双葉剣菱形杏葉（そうようけんびしがたぎょうよう）の分布

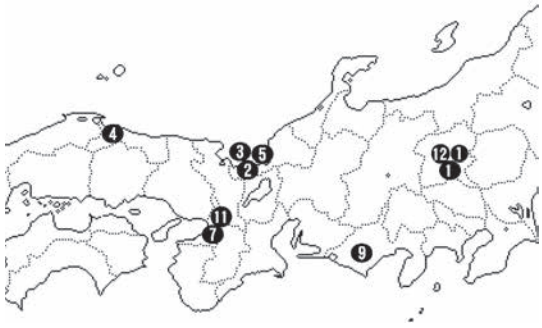
前二子古墳には、双葉剣菱形杏葉という特色ある杏葉が見られます。右図に１２古墳を掲載しました。このほかに岡山県西郷免古墳や奈良県葛城市芝塚２号墳、奈良市野神古墳などにも存在しますが、このタイプの杏葉の分布には偏りがあり、福井県、群馬県、大阪府、奈良県、島根県、岡山県に限定されます。さらに海を越えた朝鮮半島の松鶴洞１号墳からも見つかっています。

●各地の双葉剣菱形杏葉



1 群馬県前二子古墳
2 福井県十善の森古墳
3 福井県大谷古墳
4 島根県仏山古墳
5 群馬県恵下古墳
6 福井県丸塚山古墳
7 国學院大學蔵
8 大阪府今城塚古墳
9 大阪府槻原4号墳
10 韓国松鶴洞1号墳1A－1号石室
11 静岡県新山古墳
12 群馬県薬師塚古墳

●双葉剣菱形杏葉の分布



大室古墳の教室　山王廃寺の文様タイル

●山王廃寺塑像の彩色と文様

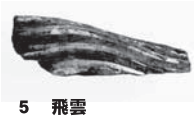
山王廃寺から見つかった塑像は火災により、文様が焼かれて黒ずんでいました。しかし表面に焼け焦げて残された成分を分析した結果、黄土、群青、鉛白、白土、ベンガラ、緑青、金とさまざまな顔料が見つかりました。山王廃寺の塑像に残された天平文様には、宝相華（ほうそうげもん）文、唐草文、団花文（だんかもん）などがあり、纈纈彩色（うんげんさいしき）といったグラデーションや金箔を細く貼った截金文様（きりかねもんよう）で豪華に飾られていました。

1　胡人像
（纈纈彩色の唐花文）

2　女性像
（唐花文と小花文）

3　神将像
（小札文、はた袖に截金）

4　金具
（宝相華文と金メッキ）



5　飛雲
（金箔と纈纈彩色）

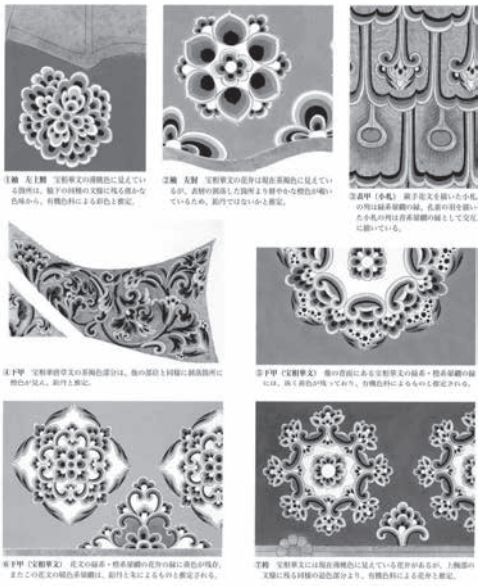
6　天蓋
（蔓手唐草文と三角文）

7　天蓋（団花文）

●東大寺法華堂と戒壇堂の塑像文様

東大寺法華堂の秘仏である執金剛立像（しつこんごうりゅうぞう）や戒壇堂の四天王立像の塑像に多くの文様が残されました。宝相華文などの文様には纈纈彩色がみられ、截金文様もたくさんあります。

●東大寺法華堂執金剛神立像



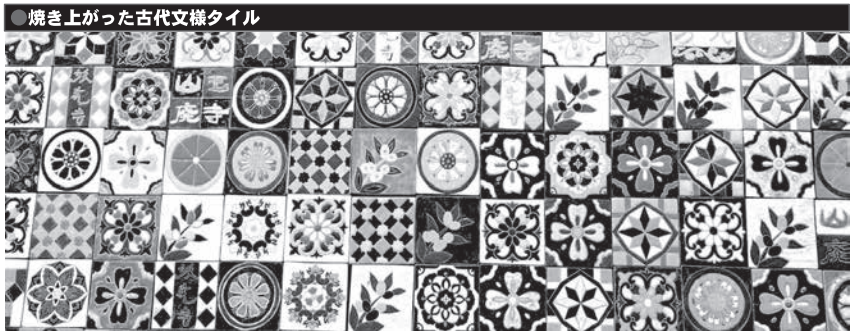
●東大寺戒壇堂四天王立像

匠の教室では、山王廃寺の瓦や塑像に描かれた装飾をもとにした古代文様をタイルに描いて焼き上げました。

素焼きタイルに鉛筆で文様を下書きをして釉薬を塗ります。窯で焼くと釉薬が溶けてきれいになります。

文様には、塑像に付けられた宝相華文や唐草文や隆起線文軒丸瓦、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、複弁七葉蓮華文軒丸瓦の瓦文様、方光や放光寺の瓦の文字も加えました。

●焼き上がった古代文様タイル



群馬県前橋市　後二子古墳の馬・猿と犬

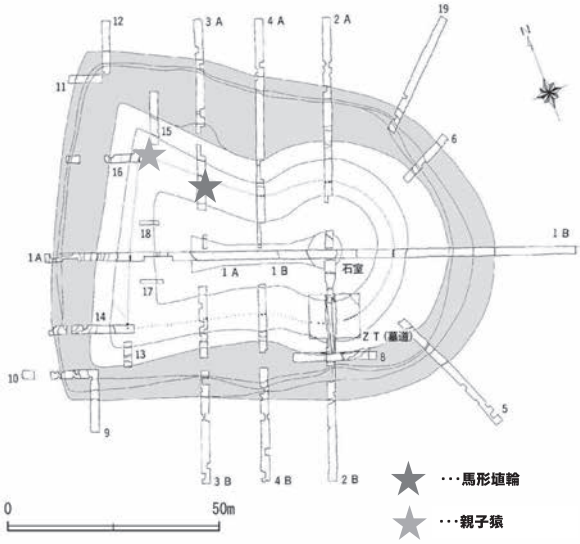
●後二子古墳　うしろふたごこふん

前橋市大室公園には国指定史跡の前方後円墳が３基まとまって存在します。南から前二子、中二子、後二子古墳と呼ばれる100m級の前方後円墳です。後二子古墳は３基の中で最も新しく、６世紀後半に作られた全長85mの２段築成の前方後円墳で、盾形に全周する周堀があります。後円部南側には半地下式の横穴式石室へ続く、深さ0.9m、幅２m、長さ12mにわたる溝のように地面を掘り込んだ墓道があります。その両わきからたくさんの土器が出土しました。また、火を焚いた跡や小刀などが見つかったことから、葬儀の時使ったものと思われています。

前方部の北側からは馬形埴輪に付けられた杏葉破片が出土しました。この破片は、大阪府四天王寺宝物館に収蔵されている「盛装した人が乗る飾り馬」の杏葉とそっくりなため、四天王寺の馬と同様の埴輪が存在したと考えられています。

後二子古墳の位置

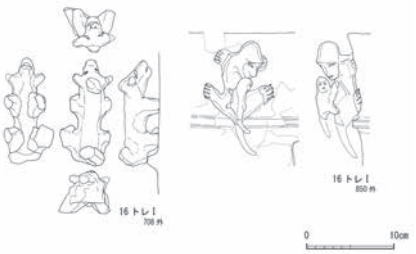
後二子古墳の墳丘測量図と埴輪出土地点



●円筒埴輪につけられた動物

形象埴輪とは別に円筒埴輪にかわいらしいイヌとサルがついています。しかし、表現内容は穏やかなものではありません。人家の近くにあらわれた親子猿を番犬が威嚇をしているのでしょう。このときから「犬猿の仲」が始まったのかもしれません。動物埴輪の中でも猿形埴輪は少なく茨城県行方市大日塚古墳のものが知られています。大阪府今城塚古墳や奈良県小墓古墳に猿形埴輪の可能性があるものがみつかっています。

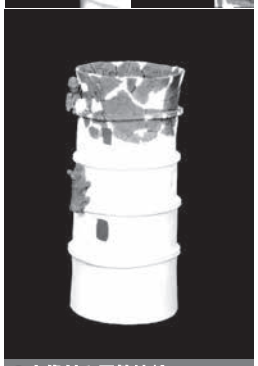
盛装した人が乗る飾り馬制作品（後二子古墳）



●盛装した人が乗る飾り馬
●高さ118cm
●原品　大阪府四天王寺宝物館蔵

●小像付き円筒埴輪
●推定高53cm・サル全長12.3cm・イヌ全長11.1cm
●原品は前橋市教育委員会収蔵

イヌ　サル



小像付き円筒埴輪

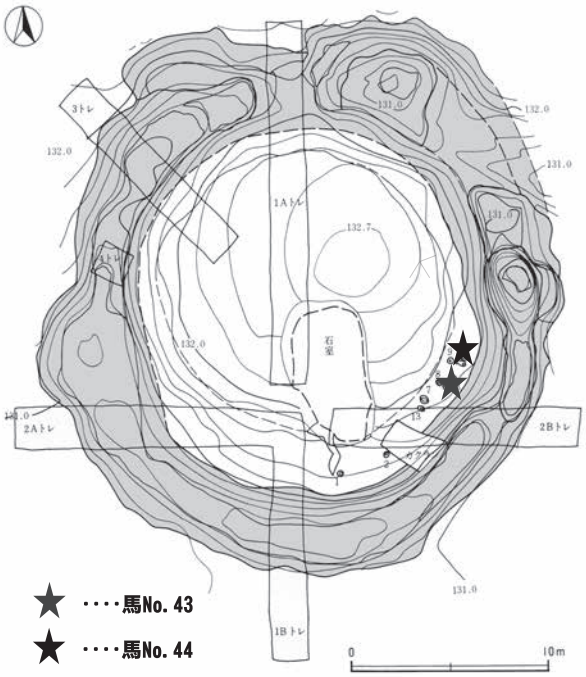
群馬県前橋市　内堀４号墳の馬

●内堀４号墳　うちぼりよんごうふん

大室公園には11基の古墳があり,大室古墳群と呼ばれています。内堀４号墳は大室古墳群の中で４番目に名前がつけられた古墳です。６世紀後半に造られた２段築成の円墳で、周濠（しゅうごう）を含めた大きさが27mあります。墳丘の長さは東西18.5m、南北20.2mで下段の墳丘は地山を削りだしてから一部に盛り土の使用がみられました。石室は石をことごとく抜きとられ壊滅的な被害を受けていましたが、根石の設置痕から無袖形横穴式石室であることが判明しました。石室は全長3.5m、奥壁幅1.4m、幅0.7mであり入り口から斜めに0.5m下にさがっていました。

●内堀４号墳の位置

●内堀４号墳の墳丘測量図と埴輪出土地点

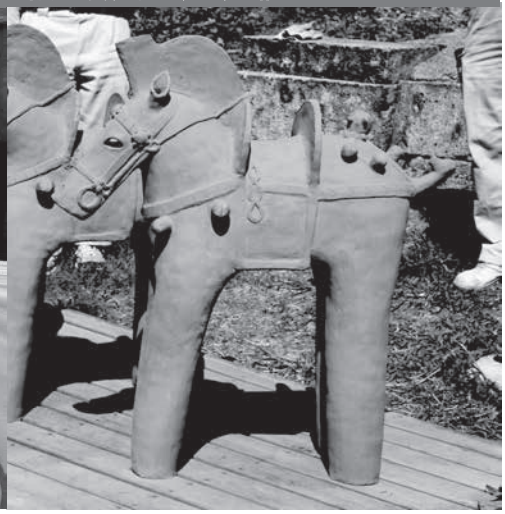


●ウマと馬飼人

人物埴輪は石室の東側の下段平坦面に一列で設置されていました。石室に近い方から女性３個、男性２個、ウマ２個、馬飼人２個体がありました。このほか、盾２個、靫４個、鞆３個、大刀３個体以上があったと思われます。ウマNo.43の高さは102.5cm、ウマNo.44は男性器が表現された雄ウマで、高さは95cmです。ちなみに小二子古墳からも馬形埴輪２個体と馬飼人２個体が出土しています。

●内堀４号墳のウマ（No.43）の作品

●内堀４号墳のウマ（No.44）の作品



●馬形埴輪No. 43
●高さ102. 5cm
●原品　前橋市教育員会蔵

●馬形埴輪No. 44
●高さ95cm
●原品　前橋市教育員会蔵

群馬県前橋市　白藤Ｖ－４号墳の馬

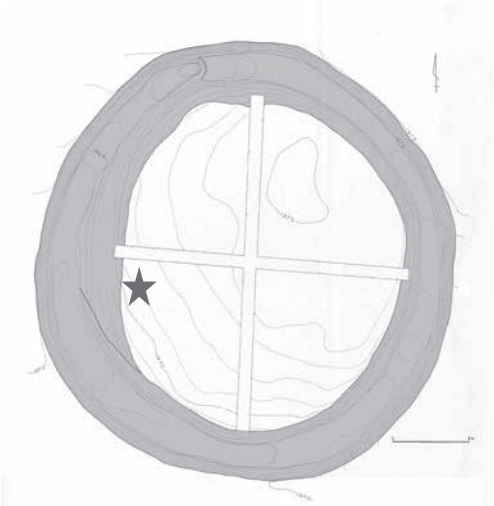
●白藤Ｖ－４号墳　しらふじぶいよんごうふん

前橋市粕川町膳の白藤古墳群の一つで、５世紀末に造られた径21.6mの円墳で内部主体は不明です。赤城山南麓の谷頭に臨む台地上と西に広がる粕川扇状地に面する台地上に位置する、白藤古墳群は５世紀中葉から６世紀前半にかけて連続して22基の円墳群が構築されたいわゆる古式群集墳であり、Ｖ－４号墳は初期の馬形埴輪を２個体出土した古墳として重要です。赤城山南麓での動物埴輪の導入の状況を示す好例となっています。

馬形埴輪２体が31本の円筒埴輪の中に、頭を南に向けた状況で据え置かれていたものと考えられています。

白藤Ｖ－４号墳の位置

白藤Ｖ－４号墳の墳丘測量図と埴輪出土地点

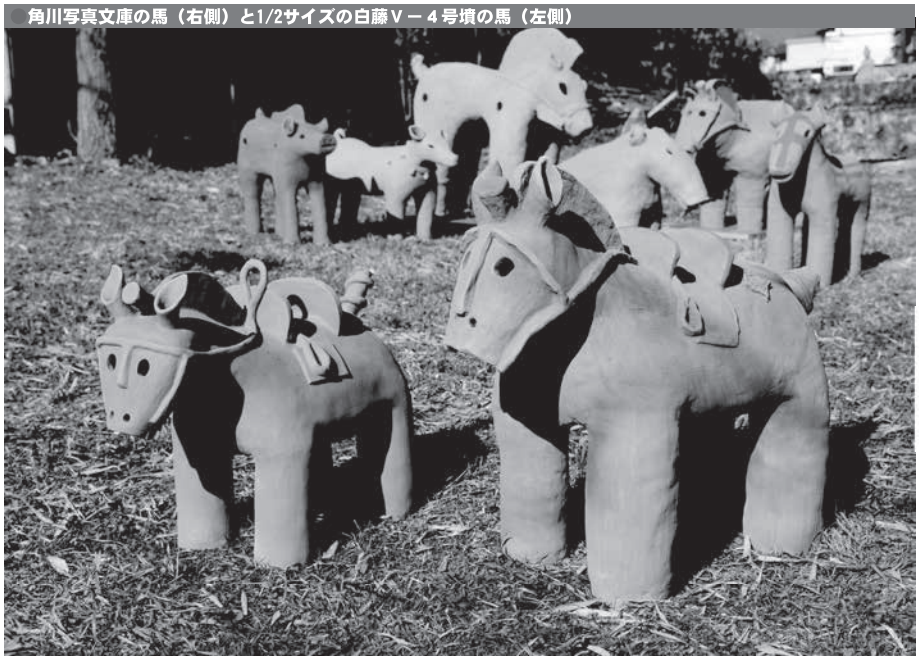


●ぐんまちゃんのモデル

愛らしく、どことなくユーモラスな馬です。それは平板に作った顔にあります。人物・動物埴輪の最も古い段階に属します。鞍・鐙・轡などの馬具の表現もなされてます。白藤古墳群ではＰ－６号墳で盛装した騎乗用の馬形埴輪も出ています。この馬も騎乗用ですが、個々の馬具の表現は簡略され、リアルな形状・装着方法でない点が目立ちます。

馬が群馬県に最初に入ってきたのもこの埴輪と相前後するころであることから、本物の馬を見た人は少なかったと推測されます。この埴輪には兄弟がおり、昭和31年9月20日に初版が発行された『埴輪〈はにわ〉角川写真文庫』６０頁に紹介されています。引き手と鼻の穴が少し異なり、角川写真文庫の方が兄、Ｖ－４号墳の方が弟になります。この写真の馬は一度実物を拝見したいものです。

角川写真文庫の馬（右側）と1/2サイズの白藤Ｖ－４号墳の馬（左側）



●馬形埴輪・白藤Ｖ－４号墳
●高さ５６ｃｍ
●原品　前橋市教育員会蔵

●馬形埴輪・角川写真文庫
●高さ５６ｃｍ推定
●原品　所在不詳

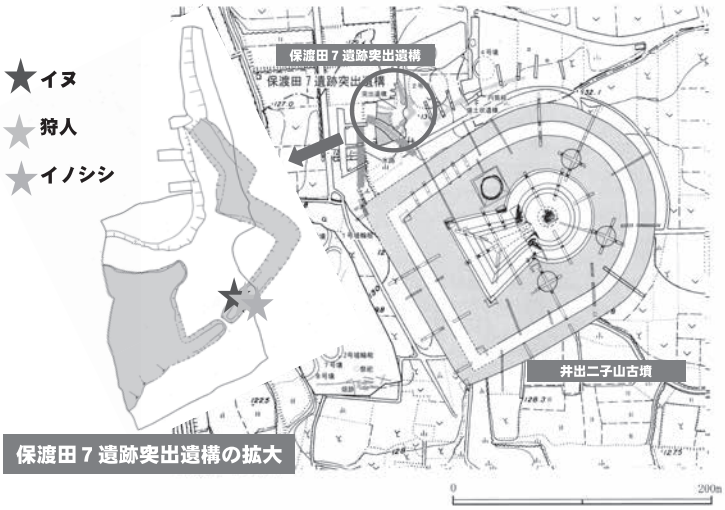
群馬県高崎市　保渡田７遺跡の犬・狩人・猪

●保渡田７遺跡突出遺構　ほとだなないせきとっしゅついこう

榛名山東南麓の相馬ケ原扇状地を流れる井野川の東岸に位置します。５世紀後半に造られた井出二子山古墳から北西に３０ｍと近接した場所にあり、二子山古墳と関連した５世紀後半の古墳の可能性があり、形状は溝によって区画され台形状となっています。また、土橋状のわたりで台地面につながっています。この土橋状のわたり付近の溝から大量の形象埴輪が出土しました。埴輪は、少なくも人物３７点、動物９点、器財１０点、合計５６点を数えます。中心となる人物グループと狩猟シーングループと動物や盾持人のほか家や器財などで構成されるグループがありました。

保渡田７遺跡の位置

保渡田７遺跡突出遺構の測量図と埴輪出土位置



●埴輪による狩りの場面

埴輪の出土した位置から配置復元したのが、狩人・犬・猪のグループです。弓矢で獲物をねらう狩人とそれに付き従う猟犬、そしてねらわれる猪という構成です。猪の腰のところには当たった矢と流れ出る血が表現されています。埴輪により狩りの場面を表している例は、ほかに保渡田八幡塚古墳、上武士天神山古墳があります。狩りが単に野生の動物を捕獲するという行為にとどまるものではなく、首長の存在を誇示する象徴的行為として位置づけられていたことがうかがえます。

保渡田７遺跡突出遺構の犬形埴輪と狩人と猪形埴輪制作品

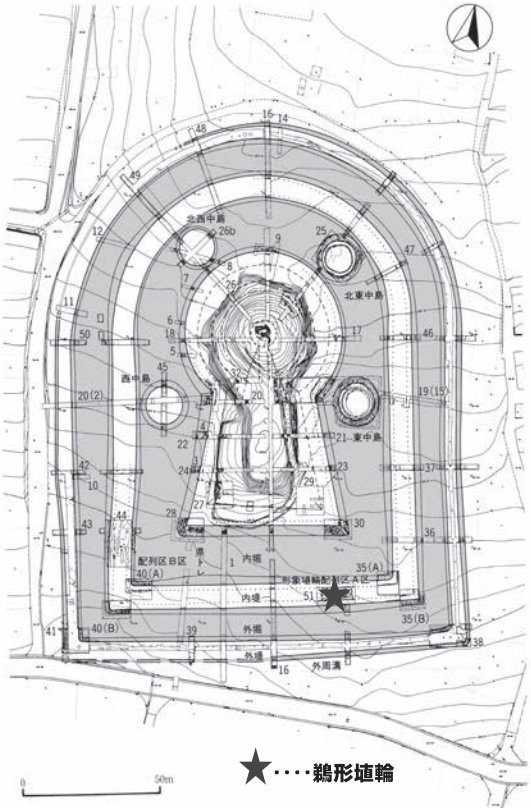
群馬県高崎市　保渡田八幡塚古墳の鵜

●保渡田八幡塚古墳　ほとだはちまんづかこふん

５世紀後半に造られた墳丘長102メートルの前方後円墳で、周濠（しゅうごう）が馬蹄形で二重に取り巻き、さらに外側を幅の狭い外周溝が巡っています。内濠くびれ部と後円部後側に４基の中島が配置されています。墳丘には葺き石が葺かれ、円筒列が墳丘裾部、中島裾部、中堤縁に見られます。前方部前面の中堤上に円筒埴輪列で方形に区画された形象埴輪配列区Ａ区から人物類や、ウマ・ニワトリなどの家畜とイノシシ・水鳥などの狩猟鳥獣をモチーフとした形象埴輪が出土しています。これらの動物埴輪は、埴輪祭祀の一つの表現様式として注目されています。

保渡田八幡塚古墳の位置

保渡田八幡塚古墳の墳丘測量図と埴輪出土地点

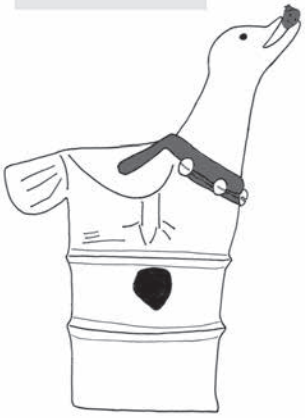


●鵜形埴輪　うがたはにわ

保渡田八幡塚古墳から出土した鵜形埴輪は、首を高く上げ口に魚をくわえ、首に鈴のついた首紐が付けられた鵜の姿を表現したものです。鵜を用いて川漁を行う鵜飼は文献史料においては古代中国の歴史書『隋書』や『古事記』『日本書紀』などに見られますが、保渡田八幡塚古墳出土の鵜形埴輪は古墳時代から儀礼・行事としての鵜飼が行われていた可能性を示す資料として注目されてます。

保渡田八幡塚古墳の鵜形埴輪制作品

●鵜形埴輪
●高さ95cm
●原品　高崎市教育員会蔵



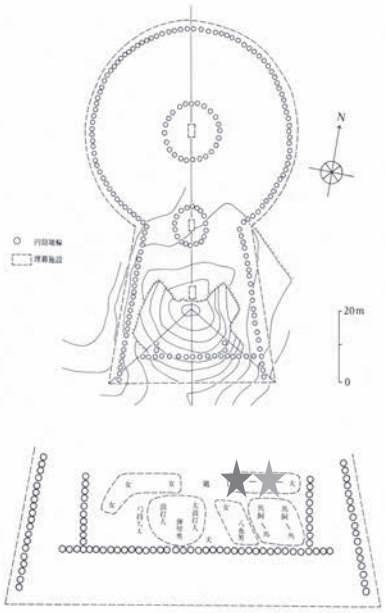
群馬県伊勢崎市　上武士天神山古墳の犬・猪

●上武士天神山古墳　かみたけしてんじんやまこふん

広瀬川の右岸に形成された６世紀前半の前方後円墳（昭和初年の記録によれば墳丘長１２７ｍ）です。保渡田八幡塚古墳の埴輪配列とよく似た配列を持つ古墳です。犬と猪のほか多くの形象埴輪が発見されました。数ある動物の中で、犬ほど人間と身近な関係にあるものはほかにありません。犬と人間のつきあいを示す資料は縄文時代にまでさかのぼり、愛知県の吉胡貝塚では、人間によって飼われ丁寧に埋葬されたと思われる犬の骨が確認されてます。

天神山古墳から出土した犬形埴輪は鈴がついた首輪をしてたことから、人間に飼われていたことはまちがいありません。口を半開きにして舌をのぞかせており、小さなしっぽがくるりと巻いてます。飼い主に従順でかわいがられていたことがうかがえ、この犬は猪形埴輪とセットの関係にあることから、猟犬であったと思われます。

●上武士天神山古墳の測量図と埴輪出土位置



●上武士天神山古墳の位置

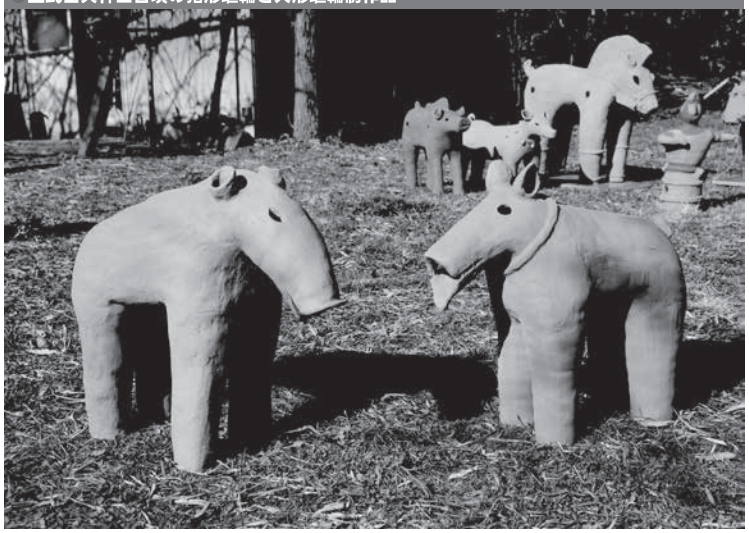
★ 猪

★ 犬

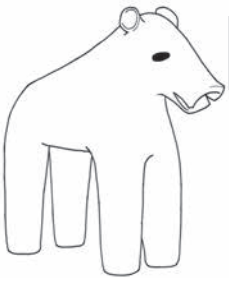
●前方部に置かれた埴輪配列

犬形埴輪と一緒に猪形埴輪が前方部の基壇上に置かれていたことが、発見者からの聞き取りをもとにした記録によって知ることができます。犬形埴輪と猪形埴輪がセット関係にあることは、保渡田７遺跡でも確認することができましたが、全国的にも多くの事例があります。当時の人にとって、犬と猪の組み合わせが定型的なものとして意識されてたようです。この組み合わせが狩猟儀礼の場面を構成するものであったことは、保渡田７遺跡で犬・猪に狩人が加わっていることや矢の刺さった手負いの猪の表現でわかります。農耕を中心とする古墳時代の社会でも狩猟、あるいはそれにかかわる儀礼が重視されたことは、農耕社会の日本文化を考えていくうえで、重要なものです。

●上武士天神山古墳の猪形埴輪と犬形埴輪制作品



●犬形埴輪
●高さ５２ｃｍ
●原品　東京国立博物館蔵



●猪形埴輪
●高さ５５ｃｍ
●原品　東京国立博物館蔵

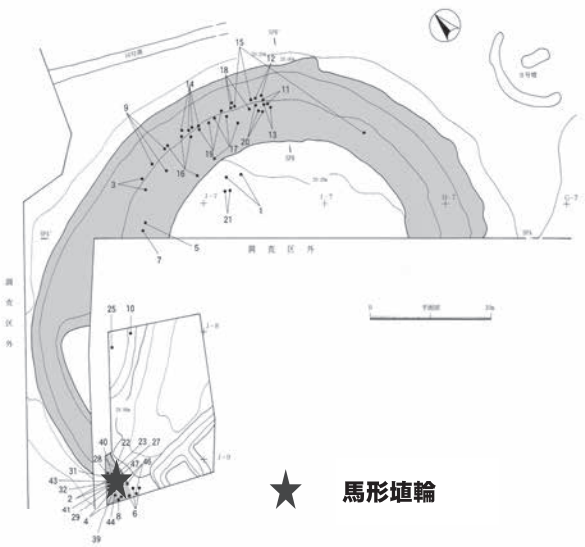
群馬県大泉町　古海松塚11号墳の馬

●古海松塚11号墳

古海松塚古墳群は大泉町市街地から南に３㎞、利根川左岸に面した洪積台地状にあります。古海松塚古墳群は全体で60基を数えます。11号墳はほぼ中央にある５世紀後半に造られた全長35mの大型の帆立貝形古墳です。墳丘がすでに失われていたため主体部は不明ですが、古墳にたて並べられた円筒埴輪および人物埴輪、鹿角装大刀を忠実に表現した大刀形埴輪が出土しています。出土品については平成２０年に群馬県指定重要文化財として登録されました。また、11号墳は、明治時代に六鈴鏡（ろくれいきょう）や三環鈴（さんかんれい）の出土でしられる高徳寺東古墳に想定される古墳です。

●古海松塚11号墳の位置

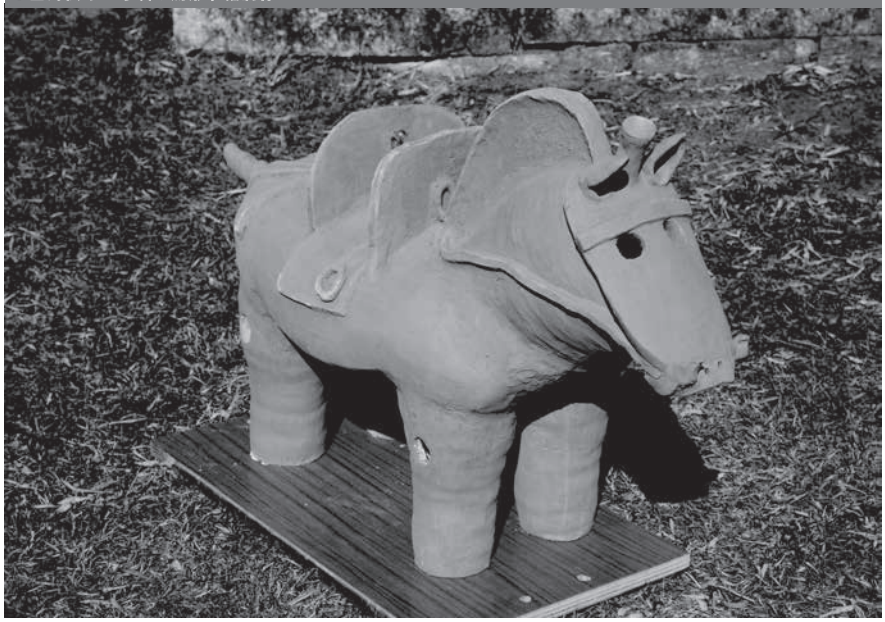
●古海松塚11号墳の墳丘測量図と埴輪出土位置



●特色ある顔をした馬形埴輪

この馬形埴輪は、扁平な顔で正面に目があけられています。口にはｆ字形の鏡板がつけられ、引手、手綱、面がいは粘土ひもで表現されています。装飾がなくシンプルな尻がいが腰の中央から放射状に広がり、前輪と後輪の鞍が表現されてます。このユーモラスな顔をもった馬形埴輪は、白藤Ｖ－４号墳、本庄市北大竹１号墳、角川写真文庫掲載馬が該当し群馬県や埼玉県北部に分布しています。

●古海松塚11号墳の馬形埴輪制作品



●馬形埴輪
●高さ６７ｃｍ
●原品　大泉町教育委員会蔵

奈良県天理市　荒蒔古墳の馬・犬・猪

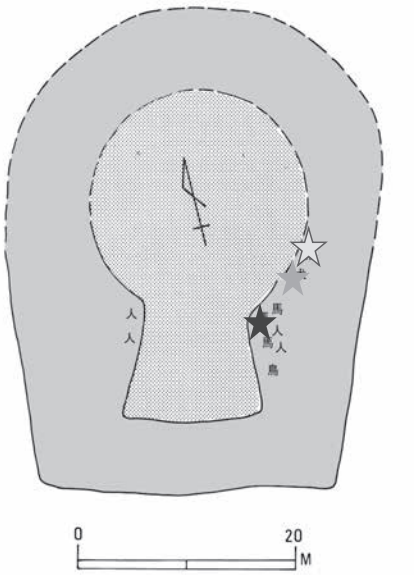
●荒蒔古墳の概要

荒蒔古墳は、6世紀の前半から中葉にかけて造られた墳丘長約30mの帆立貝形の前方後円墳です。現在はマンションが建設されて残っていませんが、発掘調査では水田耕作によって墳丘は削られていましたが、墳丘から周濠内に落ち込んだ埴輪が良好な状態で残っていました。円筒埴輪と盾形埴輪は墳丘の周囲を巡るよう点在しており、その他の形象埴輪は東西のくびれ部から後円部側に多く残っていました。荒蒔古墳北側の墓地には家形石棺を再利用した墓碑がありますが、これは墳丘を削った時に出土した石棺の一部と思われます。

●荒蒔古墳の位置

☆猪
★犬
★馬

●荒蒔古墳の測量図と埴輪出土位置



●荒蒔古墳の形象埴輪

動物埴輪は東側のくびれ部の出土が目立ち、馬や犬・猪・鶏形埴輪がありました。馬は３体ありましたが､杏葉で飾った飾り馬の他に、轡のみをつけて引き縄を背中にまわした裸馬が２体あり、近畿の出土例としては珍しいものです。また、犬には首輪が付けられていて、体の全面を赤く塗った猪とペアになります。この他にも、馬に伴う男子や巫女などの人物、そして鹿を弓矢で射る狩りの様子を線刻で描いた大刀の埴輪やさしば形の埴輪も出土しています。

●荒蒔古墳の猪形埴輪、犬形埴輪、裸馬制作品

●裸馬
●高さ93cm
●原品　天理市
教育委員会蔵

●猪形埴輪
●高さ53cm
●原品　天理市
教育委員会蔵

●犬形埴輪
●高さ53cm
●原品　天理市
教育委員会蔵

奈良県橿原市　四条１号墳の鹿・犬・猪

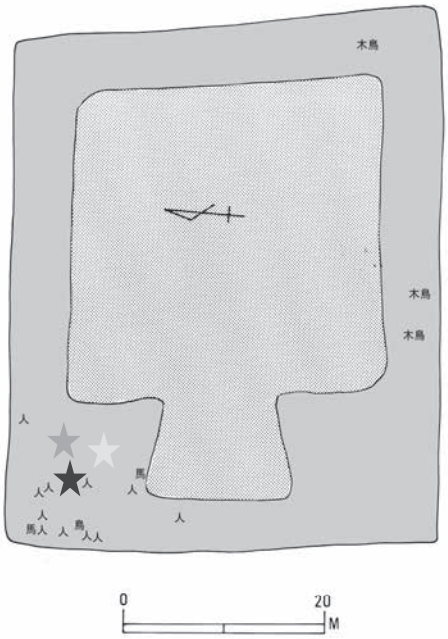
●四条１号墳　しじょういちごうふん

四条古墳群は畝傍山の北東麓、現在の四条交差点付近にあり、12基の古墳の存在が確認されています。地上に墳丘の痕跡も留めていない埋没古墳は、発掘調査によってはじめてその存在が明らかになりました。古墳は藤原京の造営に伴って墳丘が削平され周濠も埋められてしまったようです。古墳群の形成は古墳時代中期前半に始まり、以後、後期前半にかけて100年ほど古墳の造営が続きます。四条古墳群発見の最初となった１号墳は、５世紀後半に築かれた一辺約29mの方墳で西側に長さ約９ｍの造り出しをもちます。周濠内からは円筒埴輪に混じって人物、馬、猪、家、盾などの形象埴輪、さらに笠、翳、盾、鳥、剣などの木製品が多数出土しています。とくに多量の木製品は古墳の葬送儀礼を復元する上で貴重な資料となっています。

●四条１号墳の位置

☆ 猪
★ 犬
★ 鹿

●四条１号墳の墳丘測量図と埴輪出土位置

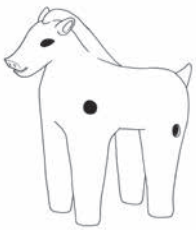


●いろいろな埴輪と木製品

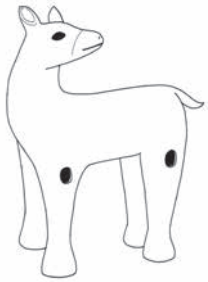
埴輪の種類は豊富で10個体以上の人物と飾り馬・鶏・犬・猪。鹿そして盾・ゆき・家などが確認されています。なかでも人物について力士と盛装した男・弓を持つ男など、いずれも２体あり、そのほかに巫女（みこ）も含まれています。また、大型の飾り馬は鞍から尻がいにかけての部分がリアルに表現されていて馬の装備を再現するときの参考になります。５世紀後半の古墳で、種類の豊富な木製品とともに、埴輪の人物と動物の種類がそろっている点は近畿地方の中で注目される古墳です。

●四条１号墳の犬形埴輪、鹿形埴輪、猪形埴輪制作品

●犬形埴輪
●高さ４５ｃｍ
●原品　橿原考古学研究所蔵



●猪形埴輪
●高さ５９ｃｍ
●原品　橿原考古学研究所蔵



●鹿形埴輪
●高さ６７ｃｍ
●原品　橿原考古学研究所

大阪府高槻市　今城塚古墳の鶏・牛

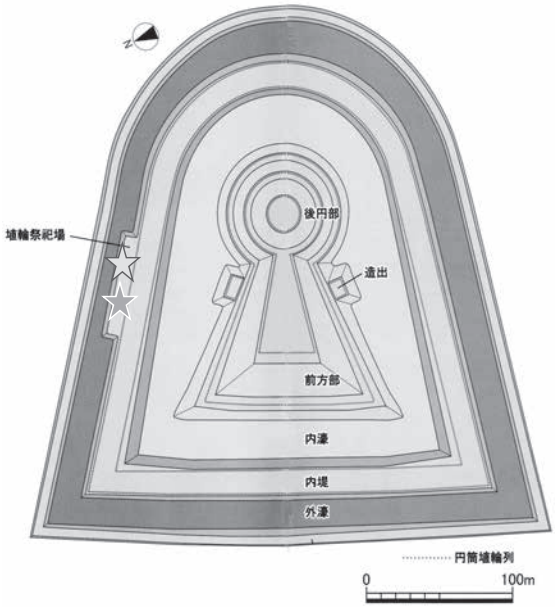
●今城塚古墳　いましろづかこふん

今城塚古墳は、大阪府高槻市三島平野のほぼ中央に位置し、淀川流域では最大級の前方後円墳です。西向きの墳丘の周囲には二重の濠がめぐり、総長約350m・総幅約360mをはかり、日本最大の家形埴輪や精緻な武人埴輪が発見されています。今城塚古墳は、531年になくなった第26代継体天皇の真のお墓と考えられ、古墳時代の大王陵としては唯一、淀川の流域に築かれた古墳です。北側内堤からみつかった埴輪祭祀区（はにわさいしく）は、大王陵での埴輪祭祀の実態を示すものとして大きな注目を集めています。

●今城塚古墳の位置

☆ 牛
★ 鶏

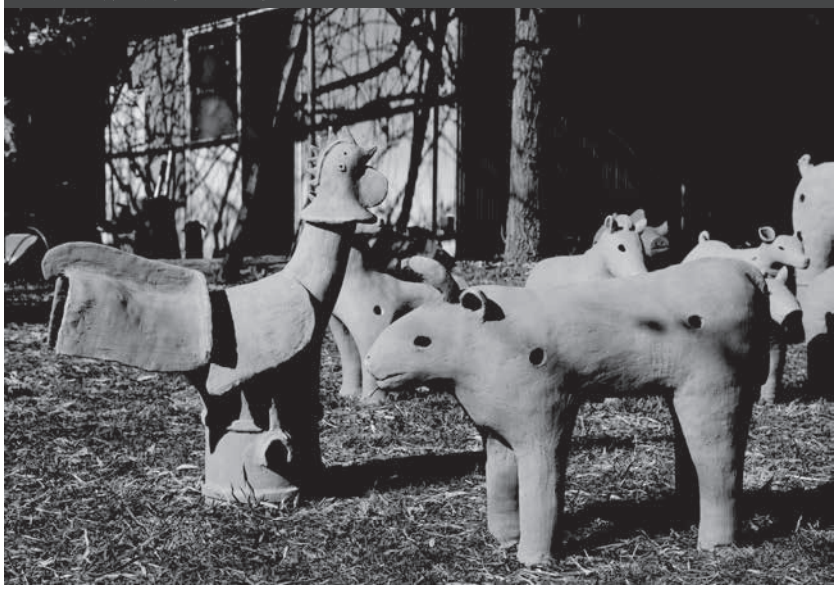
●今城塚古墳の墳丘測量図と埴輪出土地点



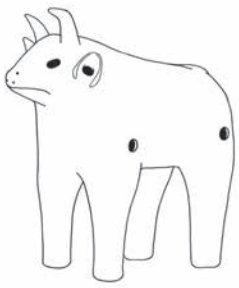
●日本最大の埴輪祭祀場

北側内堤の中央部に長さ65m、幅10mのステージを張り出させ、人物や家などの形象埴輪を130点以上配列した埴輪祭祀場あります。祭祀場は、柵形埴輪で東西4つに区切られ、それぞれに形象埴輪を配置していました。亡き大王をいつくしみ、新しい大王が即位する儀式の様子を表していると考えられます。埴輪は日本最大の家形埴輪（高さ170cm）をはじめとして、どれも大きく、ていねいに作られており、武人や巫女などは一瞬の所作をとらえて造形的にもすぐれています。祭祀場を仕上げるため、埴輪づくりの総責任者が駆けつけて、巫女をはじめとする多数の人物や立派な家、鶏、水鳥、牛、馬などを柵で仕切った区画に並べる作業を、あれこれ細かく指示したことでしょう。

●今城塚古墳の鶏形埴輪と牛形埴輪制作品



●鶏形埴輪
●高さ８７ｃｍ
●原品　高槻市教育委員会蔵



●牛形埴輪
●高さ６５ｃｍ
●原品　高槻市教育委員会蔵

大阪府高槻市　昼神車塚古墳の犬・猪

●昼神車塚古墳　ひるがみくるまづかこふん

昼神車塚古墳は上宮天満宮参道のすぐ東側に位置する６世紀中頃の２段に造られた前方後円墳です。周囲には幅３．５ｍ～５ｍで深さ０．８ｍの周濠が盾型にめぐらされると考えられます。前方部を北に向ける全長60ｍ、後円部径30ｍの前方部の高い古墳で、前方部の発掘調査では、犬や猪、角笛（つのぶえ）をもった狩人などの埴輪が出土しました。現在、前方部は復元・整備され、その様子は復元埴輪でみることができます。

●昼神車塚古墳の位置

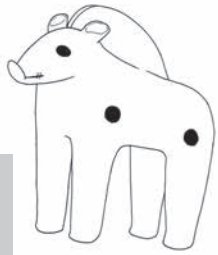
●昼神車塚古墳の墳丘測量図と埴輪出土地点

●テラスの上の埴輪列

前方部北側の下段テラス東半で１４個体の埴輪が出土しました。内外２列に並べられ北側列は人物埴輪３体（力士２、男子１）と円筒埴輪１本、人物埴輪らしい埴輪１体で構成されていました。内側は東から犬形埴輪、猪形埴輪、犬形埴輪、猪形埴輪、犬形埴輪、犬形埴輪、犬形埴輪、犬形埴輪と９体の動物が並んでいました。

●昼神車塚古墳の犬形埴輪と猪形埴輪制作品

●犬形埴輪
●高さ６２ｃｍ
●原品　高槻市教育委員会蔵



●猪形埴輪
●高さ６１ｃｍ
●原品　高槻市教育委員会蔵

2　匠の教室制作品完成記念考古学講演会

馬形埴輪の世界 ～群馬県出土の埴輪を中心に～

三　浦　茂三郎（高崎市観音塚考古資料館）

はじめに

先程ご紹介いただきました三浦と申します。今日、この講演会に呼んで頂きましたのは、これからお話しします、馬の上に人が乗っている非常に珍しい埴輪がきっかけです。この埴輪は、個人の方が壊されている古墳から採取されて、長い時間をかけて復元されたものです。

先程ご紹介がありましたように、私が７年前に群馬の森にある歴史博物館に勤務をしている時に、ちょうど歴史博物館ができて30周年を迎えました。私は30周年の３年前に博物館に勤務することになりましたが、その時にはすでに埴輪をテーマとした企画展をやることが決まっていました。

企画展の内容をどうしようかという事で３年かけていろいろ考えていたのですが、そうやって準備をしている時にたまたま群馬にこういう埴輪があるという事を知りました。そこで、是非、この埴輪を30周年の企画展に出品していただけないかお願いしたところ、快くご了解いただいた次第です。

ですからあるいは皆さんの中には７年前に、県博の方で、あの時は博物館の隣の美術館の展示室もお借りしていたのでそちらに展示してあったのですが、ご覧になった方もいらっしゃることと思います。

このような経緯で私はこの非常に珍しい騎馬埴輪と関わりを持たせていただきましたが、この埴輪の存在を広く知ってもらいたいという思いが強くなりました。そこで企画展終了後に、この貴重な埴輪の報告書を作成させて欲しい旨をお伝えしたところ、これも快くご了解いただきました。実は報告書の作成は６年前から着手したのですが、なかなかまとめきれず今日に至ってしまいました。今やっと完成に近づき、こういう１冊の本ができあがろうとしています。２回目の校正が終わりますので、もう間もなく世に出せると思います。このようなことがありまして今日はこの場に来させて頂いた次第です。

１　古代の馬について

まず馬形埴輪の話ですが、私は他県の情報はあまり詳しくはありませんので、群馬の話を中心に話をさせて頂ければと思います。その馬形埴輪について話す前に、馬形埴輪のモデルとなった本物の馬の話を少しさせてください。

魏志倭人伝　日本にはいつから馬がいたのか、レジュメの方にもありますように、よく引用されるものですので簡単に『魏志倭人伝』と言わせてもらいます。それには「その地（日本）には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」と書かれています。虎や豹や羊が出てくるので、この記述は誤りで縄文、弥生時代にも馬はいたんだと言われていました。現に弥生の遺跡から馬の骨が出てくるという例はあったようです。しかし、最近考古学の発掘の精度が上がってくると、どうもその馬の骨は紛れ込んだものであると分かってきて、最近では縄文、弥生時代の日本列島には馬はいなかったというのが一般的な考えです。

日本書紀　ではいつから日本に馬が入ってきたのかというと、有名な騎馬民族国家などの話がありますが、今日はそれは置いておきまして、文献では、『日本書紀』には応神天皇という４世紀末くらいと考えればよいでしょうか、その応神天皇の頃に百済から良馬二匹、二匹というのに意味がありまして、二匹を贈られて、大和、今の奈良県ですが、そこの坂上の所で飼わせたという話が出てきます。かつて文献の人たちの間では、この記事というのは１世紀くらい後の雄略天皇の頃にも似通った内容の記事があるので、この応神天皇の記述は作られたものではないかというような事が言われていました。今もそう考えられている文献の研究者が多いと思うのですけれども、そのような状況の中で考古学的にはいろいろな成果が出てきております。

馬の飼育はいつから　今のところ考古学の方の最も古い例としては、大阪の遺跡から３世紀終わりから４世紀初めの頃の馬の歯が出ており、４世紀代の例に

なると大阪だけではなく近くの山梨県に、私も実際に「甲斐の黒駒」という企画展が行なわれていて、その時のシンポジウムも聞かせていただいたのですが、塩部遺跡や東山北遺跡という所では４世紀終わりくらいのお墓、方形周溝墓という古墳とまでは言えないですが、古墳時代のお墓から馬の骨が出てきています。よってどうも日本には古墳時代の初めの頃から散発的に馬が入ってきているのではないかと考えられてきています。

蔀屋北遺跡　今、ご覧頂いていますのは大阪の四條畷市にあります５世紀の遺跡から出てきた馬の１個体分の骨です。蔀屋北遺跡という遺跡で、ここは馬も飼っていた遺跡ではないかと言われている有名な遺跡ですけれども、こういう馬１体が出てきています。５世紀の後半と考える方が多いとは思いますが、今の骨を復元したものがこれになります。それを更に肉付けなどをやったのがこれになります。大きさですが、馬の大きさは体高といって肩までの高さで表すようですけれども、大体120㎝ちょっとくらいです。木曽の馬など今でも小さい馬はいますけれども、それが大体古墳時代の馬の大きさのようです。左側の馬は今の馬、サラブレットですが、我々よりも少し大きく体高が160～170㎝だそうです。サブレットが入ってくる前は、この在来馬というか日本にいた馬は蔀屋北遺跡で出ているような小型の体高が120㎝ほどのこういう馬だそうです。

朝鮮半島から渡ってきた　次に、誰が日本に馬を持ってきたのかという事ですが、こちらのものが蔀屋北遺跡から出てきた馬具です。右手側の上の方のものは木製の鞍ですが、馬に乗るには鞍などがないと乗れません。あとは足をかける鐙で、こういうものが出ているので間違いなく馬を飼っていたと思います。では誰が持ってきたのかというと、その左側の土器をご覧ください。これは蔀屋北遺跡から出ているものではないのですが、紹介できる写真がありませんでしたので近くの違う遺跡から出土した土器を使って説明させてもらいます。少し分かりづらいですが、この土器は表面を羽子板のようなもので叩いて作っています。その板に刻まれていた文様が土器の表面に残っています。このような土器の作り方は、当時の日本人はしませんでした。この土器の作り方のルーツは朝鮮半島に求められますので、おそらく朝鮮半島から渡ってきた人が馬を船に乗せてやってきて、そして馬を飼い始めたというように今は考えられています。

剣崎長瀞西遺跡　では群馬県はどうなのでしょうか。県道前橋安中線をずっと西に行くと一段高くなった八幡台地と呼ばれる台地がありますが、その台地を上がってすぐの所に昔調査された剣崎長瀞西遺跡があります。遺跡の一角に鉄製の甲や滑石製模造品などが出土したことで知られる剣崎長瀞西古墳があります。それらの出土品は今は東京の国立博物館に行ってしまっていますが、有名な古墳です。浄水場を拡幅するということで長瀞西古墳の東側一帯を平成８年から10年にかけて調査をしましたら、上は削られてしまっていたのですが古墳がたくさん見つかりました。そのうちのこれら古墳は通常の、当時の一般的な土を盛って作った円形の古墳です。ところが、ここに見るような、積石塚というのですけれども、立体的というよりは、石をちょっと積んだくらいで、その中に石で囲んだ埋葬施設を設けた古墳も見つかりました。明らかにこういう当時の日本人の一般的な古墳とは異なる別作りのものがあって、こちらから先程の朝鮮半島の土器と同じようなものが見つかったり、日本にはなかった耳飾りが検出されました。この辺りにあった土坑から、地面を直接掘った穴ですが、轡を装着した馬の歯が出てきました。自動車はハンドルで操作しますが、それと同じように馬をコントロールするものが轡です。轡は馬に噛ませる鉄の棒と、その鉄の棒を押えるための鏡板、そして手綱を付ける引手からなります。馬に乗っている人は手綱であっち行け、こっち行け、止まれなどと操作するわけです。

馬に噛ませる鉄の棒をハミと言いますが、考古学ではハミや鏡板の形などの違いでこれが５世紀だ、６世紀だというような研究をしています。剣崎長瀞西遺跡から出土した轡は日本でも最も古い馬具と言われているものですが、明らかに馬に噛ませた状態で出てきました。轡の下の方に映っているのが、先程見てもらった大阪と同じような叩きのある朝鮮半島の人が作ったであろうという土器です。これらは５世紀の後半のものと言われています。大阪で最初に５世紀代に馬が定着し始めた時期と同じくして、この関東の群馬の地でも馬は間違いなくいました。

井出地区遺跡群　これは、今、浜川運動公園の拡張工事に伴い発掘調査している高崎北高校のそばの遺跡です。浜川運動公園を作る時に調査した御布呂遺跡などからも田んぼの中を歩いた馬の足跡が見つかっていたということですが、私はその時の調査は知りませんでした。今回、同じようなものが出てきたよという話

を聞いて見せていただいて、撮らせてもらったもので、今日使わせて頂きました。小さい田んぼで、これが畦です。畦に囲まれたこんなに小さな田んぼです。古墳時代の田んぼは、こういう小さい、小区画水田と呼ばれるこういうものが多いです。これのここの所に白っぽく見えるのが分かりますか。これが榛名山の二ツ岳というのが古墳時代に２回噴火しているのですけれども、最初の噴火が６世紀初めに起こり、その時に降ってきた火山灰、ＦＡという言い方をしているものです。その二ツ岳の噴火によって積もった火山灰ＦＡの下にある田んぼというのは、その噴火の前に作られたという事を教えてくれます。正にそのＦＡに覆われた田んぼが出てきたわけです。これが馬の足跡です。ここにある、こういうやつがランダムにあり、畦も踏んでいたりしています。耕作ではなく、田んぼの中を馬が歩いている痕跡です。これを掘っていくと少し分かりづらいですけれども蹄の跡がこのような状態です。

ですから先程の剣崎長瀞西遺跡の馬具が出てきたりしたのと同じように、これも５世紀後半のものとすれば間違いなく群馬県にも古墳時代の中頃、５世紀の後半には馬はいたという事が言えると思います。

そのような事で今日はそんな馬の話をさせてもらいたいと思います。今でこそ我々は車に乗っていますよね。車は一般の社会になくてはならないものですが、ただやはり日本に最初に車が入ってきた時には、それを持つことができたのは特定の人に限られていました。馬も４世紀の頃に散発的にはいたけれども、まだ一般的にはなかなか浸透していかなかったのが、５世紀になるとこの遺跡から見ていくと飼育までして広まっていったという事が言えるのではないのかなと思います。群馬県でも馬がそういう風に飼われていたのだと思います。

２　雷電神社跡古墳の馬形埴輪

私が馬の話をするきっかけを頂いたのは、先程言いましたようにまず雷電神社跡古墳の馬形埴輪との出会いがありましたので、今日はこれを皆さんにご紹介させてもらって、自分なりに考えたこの雷電神社跡古墳の埴輪の意味をお話させていただこうと思います。

そしてこの後、今度はこの埴輪から群馬県全体を眺めた馬形埴輪の変遷について考えてみた事を皆さんに後半でお話させていただければと思います。

雷電神社跡古墳の位置　最初はこの資料の紹介的な事になりますけれども、お許しいただければと思います。ご覧のように大体このような配列で出てきたという事です。きちんとした調査ではなかったので壊されている、まさに捨てられてしまう所を急いで回収してきたので詳細な出土状況というのは分かりません。旧佐波郡東村で現在は伊勢崎市になります。スマークがここで、上武道路がこれです。ここにちょっとこう見えるものが前橋古河線です。直線道路です。それと上武が交わる所から東北方向のここにあった古墳です。そこの一画を拡大したものがこちらです。ここに早川という川が流れています。２、３ｍの河岸段丘ができていて、その早川の右岸の段丘上にかつて約70基からなる下谷・上渕名古墳群と呼ばれる古墳群がありました。今はほとんど見ることができませんが、径10ｍちょっとくらいの円墳が主体を占めていました。その中の一番大きなこの前方後円墳は、100ｍあります。前橋古河線を通す時にほとんど壊されてしまっていますが、今も堀が少し残っています。これが上渕名雙子山古墳と呼ばれるもので、この辺一帯を支配していた人のお墓だと思います。

雷電神社跡古墳の墳形　一番新しい前方後円墳になると思いますけれども、これが雷電神社跡古墳です。円墳とも言われていたのですけれども、正直よく分かりません。前方後円墳なのか円墳なのか分かりませんけれども、昔書かれた方の論文などでは前方後円墳と言われていたり、この埴輪を採取された松村先生も地形や周辺の地割りを見れば前方後円墳だったのではないかと言われています。今、現在の状況でもそこら辺ははっきりと分からないのが正直な所です。しかし、推定５、60ｍの前方後円墳であったのではないかという風に考えられています。雷電神社跡古墳という名前の由来は、古墳の上に雷電神社という神社があったからです。神社は、明治時代になり他の神社に合祀されてしまいました。神社が残っていれば古墳は壊されなかったと思います。神社が他に、市町村合併みたいに合併してしまいましので、祀られなくなってしまいましたから、その後火の見櫓が作られたりしていて、そのような状況の中で他所で建物を造る時にどうしても土砂が必要となり、昭和28年にその土砂、土取りのために古墳を壊し始めたらしいです。それをたまたま見たのが埴輪を採取された松村一昭先生でした。その採取された時の状況をお聞きすると、石室が後円部の所にあり、その向かって右側にああいう風に人物が先頭にあり、次に馬、人物、馬、人物、馬というようにセットになるものが４組配置されていたと考えられて

います。

１番目の馬形埴輪　今から１つ１つご紹介させて頂きたいと思います。これが先頭にいた馬です。すごく大きくて130㎝近い大型のものです。またとても立派で、あとでいくつかご紹介しますけれどもこの辺りには鈴が付いているのが一般的ですが、この馬形埴輪は馬鐸という銅鐸みたいな格好をした飾りを付けています。こういうものをもっているのは珍しいです。そしてなんといってもこの馬の特徴はあとで詳しく考えていきたいと思うのですけれども、馬に乗るとき足をかけますよね。鐙をかけて、乗って跨ぎます。そして手綱を持つのですけれども、この馬はここに水平の板を付けています。そして更にその下に鐙を付けているのですけれども、拡大するとこれです。こういう風に水平の板がここから吊り下がっているのが分かりますか。鐙もちゃんと吊るされた状態を表しています。どうもこれは跨って乗る馬ではなくて女性が横向きに座る、そういう馬であったのではないかと言われているものです。珍しいです。詳しくはこの後お話します。これが今見つかった４頭の中の先頭の馬です。

２番目の馬形埴輪　次は２番目にいた馬です。作りは非常に今の馬形埴輪と似ていると思いますが、ただこの辺が馬鐸ではなくて変形の粘土板を付けています。あとこれは鐙です。これも杓子みたいなもので壷鐙というものです。輪だけではなくて、少し立体的な、足をかけるものですので、これも時期的な変遷になると思います。あとは鞍を乗せますけれども、馬だって直接鞍を乗せられると痛いので、その鞍の下にきちんと敷物を敷こうと、鞍下というこういうものを表しているのではないのかなと思います。あとは今度は逆に人間が座る時に直接座ると痛いので、座布団ではないですが鞍敷きという鞍の上に敷物をします。どうもそれもきちんと表しています。この馬の１と２はこのように非常に丁寧な作りをしています。

３番目の馬形埴輪　次は３番目です。１番目、２番目より大きさは少し小さくなります。110㎝くらいになります。少し作りが変わってきています。実は発見されてすぐに１番目と２番目は比較的早く復元できましたが、この３番目と４番目の復元はなかなかできませんでした。それは理由がありました。３番目のこれも人間の足です。人が乗るという事に気付くまでに相当時間がかかったそうです。人物埴輪の顔は出たのですけれども、それがまさか馬に乗るとは思わないで、人物は人物で埴輪があるから別のものだと思っていたそうです。なかなかそれで上手く接合できなかったそうですが、それがこの馬形埴輪３の復元をやっていったらどうもここに人の足が付くことが分かったので、やっと周りにあった人物の破片の接合が分かるようになってきたという事です。ですからこれも人が乗っています。ただこの３の馬は、これ以上はありません。この３の上の人物の実態も破片がありませんから分かりません。これが、このおかげで人物が乗ることが分かった所ですが、壷鐙に足のつま先をちょこっと可愛らしく入れています。これがその壷鐙です。

４番目の馬形埴輪　これが４番目の馬で、先程の３番目のおかげで、やっとこの馬に人が乗るという事が分かり、こういうような埴輪ができました。作りは３番目の馬と非常によく似ております。これは別角度から見たものです。アップですとこういう凛々しい姿をしています。皆さんはこれをどう思いますか。青年というイメージをお持ちになりますか。残念ながらこっちの顔はほとんど石膏復元です。こっちはこの辺まで来ています。

すごく丁寧な作りで、これからその各部を見ていきたいと思います。後ろから見ますと実はこの人は非常に盛装といいますか、私も今日皆さんの前に立ちますから久しぶりに自分の一張羅を着てますが、この人も当時の儀式か何かあって、そこへ出かける一番最高の着飾りをしたのではないかと思います。まず珍しい帽子のようなものを被っています。類例がありません。帽子といっていいのかも分かりませんが、こういう鍔があって、その上に穴が２つ空いているようなこういうものを被っています。それでここの所を見てください。これから拡大していきますけれども、実はここに大刀を持っています。その大刀の上に弓を持っています。弓を射ると弦が跳ね返って手を傷めるので、鞆という手を防御するものを付けます。その鞆がこれです。こっちの腰には弓矢を入れる道具です。背中に背負うものを靫と言いますが、これは腰に下げるもので胡籙といわれる弓矢の入れ物です。それを付けています。それでちゃんと鏃を表現しています。そしてこれが刀です。その上に弓です。見てください。ちゃんと弓の弦も表現してあります。そしてこれが鞆です。非常に丁寧な作りでここに籠手をしています。これがこっちの腰にある胡籙です。蝶結びがあって、ここに鏃がこういう風に表現されています。非常に丁寧な作りをしているものですね。

あとは馬のお尻の所も非常に凝った、蝶結びの飾り

を付けた丁寧な作りで、これが上着です。上着があって、袴が太ももの部分までがふんわりとなっている状況を表して、この下の所で紐で結んでいます。これを脚結と呼んでいます。その蝶結びをきちんとこういうように表しています。面白い事は、綺麗にこのズボンの端を覆うのではなくて、後ろのふくらはぎの方が開いています。カウボーイが履くオーバーズボンのように後ろが開いたりしているのですけれども、鐙の中につま先を入れているという表現です。

馬１の馬子　これが馬１を引っ張っていた人です。これが通常の馬飼い、馬子と呼ばれる、馬の傍から出てくる人物埴輪で、片手を挙げているものは馬引きです。そういう風に一般的には考えられている人です。

馬２の馬子　２番目の人がこれです。２番目の馬とセットになるのがこの人です。

馬３の馬子　そしてこれが３番目です。この人の問題は後に考えていきたいと思います。というのは、馬引きなのに大刀を持って、ここの丸いのは鞆を表現しているので、どうもこの人は馬飼いとしては相応しくないのではないかという意見もある人物です。

馬４の馬子　そしてこれが４番目の人物です。

以上が雷電神社跡古墳から出てきた馬形埴輪と人物埴輪です。

馬形埴輪の２グループ　ちょっと私が考えた事を述べさせていただきますと、まず馬形埴輪の４体には２グループあります。もう皆さんも話をお聞きいただきお分かりになられたと思いますが、１つがこの１と２です。この顔の部分の下から覗き込んだ所ですけれども、この馬を作る時に、６世紀の後半くらいになると頭部を作る時に粘土で板を作ります。この板を作って逆U字形に曲げます。そのまま首に付けるのですけれども、この粘土板を逆U字形に曲げた下に置いている、そういうので頭を作っているものです。これがU字形に曲げたものです。それでその下に粘土板を置いたものがこれです。この１と２の頭部はそういう作り方をしています。

今度は３と４の人が乗る馬は、これは一般的なものです。粘土紐（もしくは粘土帯）で円筒を作ります。粘土紐でこういう円筒状のものを作り、そこの所に頬骨を表現するために板を貼ってあります。これは一般的です。３、４はこういう作りで、大きさも１と２はほぼ一緒で、３と４も小型で一緒です。ですからこの雷電神社跡古墳の馬を作った工人は最低でも２集団はいたのではないかと思います。４体の馬形埴輪は、作り方の差によって２グループの工人がかかわったのではないかという風に思います。

横坐りの馬形埴輪　そして次は２番目として先程の横坐りの馬１ですけれども、横坐りの馬形埴輪については、昨年講演をされた日高慎さんが既に詳しく述べられています。日高さんたちは千葉の姫塚古墳から同じような短冊形の水平板のある馬形埴輪が出てきたので、その研究をなさっています。

これは、日高さんの論文からの引用ですが、海外のウズベキスタンにある壁画です。少し上の方にいる女性が、馬に横坐りになっているのがお分かりになりますでしょうか。これは鐙があって足をかけて跨いで乗るのではなくて、乗った後に女性が横に座って、そしてその板の上に足を乗せています。これらから短冊形の水平板は、女性が馬に乗るための道具ではないかと、つまりこれが付いているものは女性用の馬だったのではないかという風に言われています。ですから雷電神社跡古墳では、４頭の馬の先頭が女性用の馬だったことになります。ただ調査された松村先生の談によれば実はすでに無くなってしまっていたのですけれども、もう１つ先頭がいたと言います。ですからそれですと問題があるので、それによっては解釈が変わってきてしまいます。

全国でこの横坐りの板を持ったものは日高さんたちがやってくれた15例の他に、最近明治大学で整理された茨城県の舟塚古墳に２例と、やはり最近報告書が刊行された栃木県の甲塚古墳に１例あるという事が分かりましたので、今私が知る限りでは18例あります。群馬県の古墳の中で200頭くらいの馬形埴輪が発見されています。全国で言えばすごい数です。その中でたった18例しかないという事は、単に女性用の馬ではなくて、もっと深い意味があるのではないかと私は思います。という事はひょっとするともしこの女性用の馬が先頭にあるとすれば、こういう馬形埴輪を持っている古墳の被葬者というのは女性だったのではないのかなというように私は思いました。推測ですけれども、いずれにしても非常に貴重なものです。

人が乗る馬形埴輪　そしてもう１つは騎馬の埴輪です。馬の上に人物が乗るものですね。これも類例が非常に少ないです。この研究も群馬の南雲さんが事業団の紀要で非常にまとまった論文を書かれていますが、そういう方からいろいろ教えていただくと、雷電神社跡古墳のものと大室古墳群の後二子古墳から出土して

いるものがよく似ていると私は思いました。後二子古墳のものは今は大阪の四天王寺の宝物館にいっちゃっていますけれども、前原さんたちの研究でこれは後二子古墳の馬形埴輪で間違いないだろうと言われています。四天王寺に収蔵されているこの人が乗る馬形埴輪と雷電神社跡古墳のものでは、確かに人の作りとかは異なります。しかし、これをご覧ください。これは群馬の太田市にある高林古墳群から出土した騎馬埴輪です。よく見ると鞍がありません。鞍がない馬を裸馬と言います。この裸馬に人が乗っている埴輪は結構早くから知られている有名なもので、乗っているのは子供だとも言われています。右側の高林から出たものと左側の大室から出た同じ馬に人が乗っているものを見比べてみると、両者の作り方の違いがはっきりと分かると思います。

十数例ある騎馬埴輪の中であえて雷電神社跡古墳のものに一番近いのはどれかというと、私はこの大室出土と言われる四天王寺が持っているこの埴輪ではないのかという風に、今回、見ていて思いました。それにしても少し作りが違います。ただ大室と雷電神社は直線距離にして９㎞くらいです。それくらいの距離のエリアの中でこういう造形の埴輪を作ろうという意識があったのかなと思います。あとはどうして雷電神社跡の人物埴輪があんなに丁寧に作られたということです。

国宝の武人埴輪　これは東博が持っている太田市から出た武人埴輪です。埴輪としては唯一の国宝です。今も東博に行くと正面に展示してあります。実はこれとよく似たものがそこの資料に載せたように伊勢崎の安堀・旧尾島町の世良田・太田市から、厳密に言うと多少に違いはあるのですが、ただ非常にこの武人埴輪と似た作りの良いものが今のところ５例ほど見つかっています。非常に丁寧な作りをしています。これが胡籙という腰に下げる矢を入れるもので、こちらが背中に背負う靫というものです。両方ともちゃんと鏃を表現しています。東博所蔵のものは、正面にある大刀に手をかけて正に抜こうとしている姿で、このタイプを抜刀形、刀を抜く抜刀形スタイルと言われるタイプのものです。ここに弓を持っています。そして手を添えて、ここに先程言った手を守るための鞆を巻いています。

非常によく似た作りの武人埴輪が伊勢崎から尾島・太田にかけて、わずか５例だけですが分布する、こういう６世紀後半くらいの丁寧なつくりの武人埴輪の分布域の中に雷電神社跡古墳もあるわけです。ですから馬に乗る造形をしようとするのは後二子でもあったのですが、さらにそれを作った人たちがどんな人たちが関わったかというと、その伊勢崎から太田にかけて分布するこういう武人埴輪、こういう丹念な作りをしているこういう工人たちの関与がなかったとも言えないのではないかと思いました。これは言いすぎかもしれませんが、ちょっと私が思ったことを述べさせてもらいました。

馬子　先程言った４体の人物埴輪です。皆さんから見て一番左側は、誰が見ても馬飼いです。片手を挙げて手綱を持っています。他の例ではここにちゃんと粘土紐が残っています。おそらく手綱を表現したであろう、粘土の紐がこう残っている埴輪があります。ですからこの片手を挙げるこれは馬飼いの馬子でいいと思います。２番目は行田市の酒巻古墳が調査される中で、やはりそこも４セットくらいの馬と人物の組み合わせが出てきました。その中でこういう所作をする、両手を胸にあてるような人もいて、しかも坊主頭であるという人物がいたので、こういう人も他の例で見ても馬子である事でいいと思います。そして４の人は坊主に見えると思うのですけれども、上の方は復元してあります。ここに美豆良というのがありますが、そのままだらっと下げているものを下げ美豆良といいます。これを上にあげて横から見ると勾玉みたいに見えるものは上げ美豆良といいます。こういう上げ美豆良の馬子は他にも観音山古墳から出てきたものなど６世紀の後半のものに見られます。ですからこの人は上げ美豆良で坊主ではありません。これは復元ですので誤解しないでください。美豆良がここにあるという事は、この人は坊主頭ではなくて、おそらく人物１に近い、あのような帽子を被っていたのではないのかなと思います。そしてこういうここに両手をあてているものですが、県内のいくつかの同じ時代の類例を見ていくと、どうも上げ美豆良のこういう人も馬子でもいいのではないのかと思います。

問題は先程言った３です。刀を持っていて、しかも鞆も持っているから、この人は馬子ではないという意見もあります。ですが、結論から言うと私は馬子でいいのではないかと思います。先ほど言った酒巻でもこういう髪の毛を真ん中から分けて、ちょっと馬子とは思えない振り分け髪の人物がいるので、そういう事を考えればこれだって良いのではないか。と言うのは馬子にはいろんな姿をしているものがあっていいと思います。何も馬子は片手を挙げていなくてはいけないと

いう規則はなくて、いろんなタイプの人がいて、それを馬子の中でも何か階層差みたいなものを私は表しているのではないかと思います。ですからこの中でリーダーは人物３かもしれません。でも３番手がリーダーでしょうか。リーダーといったらなぜ先頭にいないのか。先程の酒巻は振り分け髪は先頭にいます。しかし、この馬３は人物が乗る馬で、人物の乗る馬の先頭にこの人が置かれたというのではないのかなという風にも考えられるのではないかと思います。

もう一度言いますが、人物この４点はいずれも馬子、馬飼いだと思います。そして馬飼いはいろんな様相があっても良いのだと思います。それは馬飼いの中で何か微妙な階層差というものも表現しているのではないのかなという風に思いました。これもあくまで私の意見・考えです。

雷電神社跡古墳の埴輪　雷電神社跡古墳というのは６世紀後半も前方後円墳が造られなくなっていく最後の方の古墳です。関西ではもう埴輪は作られなくなっています。ですが関東・群馬では最後の最後まで埴輪に固執します。そういう中で非常に傑作な埴輪群像が作られた古墳、しかもその中では他に類例を見ないような非常に精度の高い人物を表現している埴輪群像がこの雷電神社跡古墳の中にあるという事です。そしていろんな考え方があると思いますが、なぜそこに先ほど言った佐波東のあの所にそういうものがあったかという事をもっともっと考えていく必要があると思います。

次は更に群馬県全体の馬形埴輪を見ていきたいと思います。

～休憩～

３　群馬県内の馬形埴輪

では後半は群馬県の馬形埴輪について、特に時期的な変遷について述べてみたいと思います。雷電神社跡古墳から出た馬形埴輪を私がたまたま知ることとなって、それを報告書にまとめたいと思う中で、それだったら群馬県内の馬形埴輪を調べてみようと思いました。そのような中で、現時点で私が精一杯考えた成果を今から皆さんにお話させていただきたいと思います。５世紀の中くらいに群馬県でも馬形埴輪が作られ始めます。雷電神社跡古墳などが最後となる６世紀の終わりから７世紀の初めまでの150年くらいは馬形埴輪があるわけですけれども、ずっと同じように作られるのではなくて、その間に馬形埴輪も幾つか変遷していくという、その事を少しお話させていただきます。これは保渡田古墳群の八幡塚古墳に並べられている埴輪群像です。堀と堀の間にある堤の上にあるもので、埴輪群像の中にはこのように馬もここに隊列として置かれています。他にも古墳には馬が複数隊列として置かれる例があります。一番最後の所で違う古墳をご紹介させていただきます。

馬具の名称　皆さんには失礼かもしれませんが、これから話をする上でいろいろな言葉が出てくるので、少し整理をしておきたいと思います。レジュメの３頁をご覧になってください。これから話す中で馬に付けられた道具の事を馬具というのですけれども、馬具にはいろいろな呼び方があります。これから話をしていく中でいくつか私の口からその馬具の名称が出てしまうと思いますので、説明させてもらいます。馬というのは何も道具を付けないと乗れないそうです。それを乗りこなすことができるのが騎馬民族の人たちですが、我々は何か道具が付けないと乗れないそうです。轡を付けるために、馬の顔に紐を巡らしていきますが、この紐の造作を面繋という言い方をします。それと鞍を固定するためにも馬の正面とお尻の方にやはり紐を回します。馬の正面に回した紐を胸繋と言い、お尻の方に付けた紐を尻繋と言います。面繋、胸繋、尻繋で三繋と言うのですけれども、その造作が時期と共に微妙に変わってきます。

鞍ですが、馬形埴輪の鞍は半円形の板を背中の前後に乗せて表現されます。その間を跨ぐわけですが、馬に乗る時に足をかけるのが鐙です。鞍の部分には、個別に難しい名前が付いています。前輪、後輪など難しいですよね。絶対読めませんよね。何故後の輪と書いて「しずわ」と読むのか分かりません。そして胸繋や尻繋に飾りを付けます。いろいろな形の飾りを付けますが、その１つに杏葉と言う胸繋や尻繋から垂らす飾りがあります。これもやはり時期と共に形を変えていくので１つの時代の目安となります。

古墳時代の時期　特にその始まりの年代については、以前に比べ古く遡らせようとするのが現在は一般的です。奈良県に宮内庁が倭迹迹日百襲姫命の墓ということで管理をしている箸墓古墳という大きな前方後円墳があります。それを卑弥呼の墓だという人がいましたけれども、私が学生の頃はそれを信じる人は何人いたでしょうか。ところが時代が経ちまして、今やその箸墓古墳こそ卑弥呼の墓であろうと考える人が大変

多くなっています。そして箸墓古墳の成立をもって、日本の古墳時代の幕開けと考えられるようになりました。しかも卑弥呼が247年頃に亡くなっていますので、古墳時代の開始を３世紀中頃と考える、今はだいぶそういう説、皆さんそれに近い考えになってきました。ですから日本の古墳時代は３世紀中頃から700年頃の初めくらいまでの約450年くらい続くわけです。

埴輪　その中で埴輪というのは、最初から古墳に設置されますけれども、最初から並べられるのはここに示したような円筒埴輪です。それ以外の埴輪というのは、全てが一斉に出てきたわけではありません。一番最初に古墳に飾られた円筒埴輪というのは、このような弥生時代の特殊器台の系譜を受け継いだものと考えられています。あとは比較的古く出てくるのは、家形埴輪と動物埴輪では鶏形埴輪があります。ですが今日話す馬形埴輪というのは、450年くらいにならないと出てきません。５世紀中頃から古墳に馬形埴輪が設置されます。という事をご承知置きください。

最初の馬形埴輪　それでは最初の馬形埴輪はどれかというと、大阪の仁徳天皇陵古墳のものです。仁徳天皇陵古墳を最近は大山古墳と言います。私は仁徳天皇陵古墳と言った方が混乱しなくて良いと思いますが、教科書を見ると今は大仙陵古墳となっています。そして、これがその仁徳天皇陵古墳から出てきた最初の馬形埴輪で、日本で一番古い馬形埴輪の１つと考えられているものです。誰かがアーモンド形の目と表現していましたけれども、どうでしょうか。仁徳陵古墳の馬形埴輪のタテ髪は先端が両側に突出したＴ字形をしています。通常の馬形埴輪のタテ髪はここに角状タテ髪というのがもう１つ付くのですが、この仁徳陵のものにはありません。後ろのタテ髪だけです。これが一番古い馬形埴輪の１つです。

群馬県の馬形埴輪の時期区分　それでこれからお話をしますけれども、群馬だって決して遅れることはなく、５世紀の中ぐらいには馬形埴輪は登場します。私は群馬の馬形埴輪の変遷を考える上で、先程言いました榛名山の二ツ岳噴出の火山灰に注目してみました。５世紀の終わりから６世紀初めの最初の噴火で降った火山灰ＦＡ。古墳の堀を掘っているとＦＡが堆積しているものがあります。ですからそれが堆積している古墳というのはＦＡが降る前のものだと分かります。２度目は６世紀の中ぐらいに今度は軽石が降ってきます。ブロック塀を作る、ブロックの原料となる軽石です。ＦＰと言っています。やはりこれに覆われている古墳が出てきます。私は大きくはこの２つの層で分けました。さらにＦＡの降下前を２期に分けました。ですから群馬の馬形埴輪の変遷については、ＦＡ降下前を１・２期、ＦＡとＦＰの間を３期、ＦＰ降下後を４期という４つの時期を設定しました。これは邪道かもしれません。考古学というのは、ものをたくさん集めてきて、それらからいろんな要素を抽出してグループ分けをし、そのグループに時間軸を設定し行くのが本来のやり方です。しかし、私は先に時期を４つ設定してしました。そして４つの時期を設定して、それぞれの時期だと思われる埴輪から要素を抽出するというやり方をしていきましたので、少し考え方が邪道と言われるかもしれませんが、そのようなことで見てください。

１期　ではまず１つ目にいきます。群馬で今一番古いと言われている馬形埴輪は大泉町から出ています。残念ながらまだこの時期のものはたったこの１例だけです。ですからこの１例をもって群馬に馬形埴輪が定着したのかは分かりません。またこの第１期の馬形埴輪の特徴がすべてこの１体に凝縮されて、これに表現されているのかも分かりません。このあとこれと同じ時期のものが出てきたら、全く馬の様相が違っている可能性もあります。ただ今言える事は、ご覧のとおり非常に胴長です。顔を見てください。扁平な作りをしています。これから見ていただく馬はみんな円筒のこういうものを作って顔としていますが、これは作っていません。真っ平です。首の所にただ板を貼り付けているのだと思います。そして目が集まっています。同じ平面にあるので、よくヒラメって言います。横から見ると、これが鏡板と呼ばれるもので、この形を見ておいてください。変わっています。人によってはアルファベットのｆの字に似ているので、ｆ字と言うのですが、私はちょっと違うのではないのかと思います。そして下から見ると、口先も変化をしますので、ここで１回閉じて刻みを入れます。１度塞いでおいて小刀のようなもので刻みを入れて口を表現しています。鞍は半円形の粘土を背中の前後に置いて表現していますが、そこに微妙に粘土を薄くして貼っています。薄く貼って明らかにその板と板の間に鞍の本体になるこういう木、居木というものを表現しています。そこに人が跨るのですけれども、どうもそういうものを表現したのであろうと思われます。そしてこれがお尻の所で尻繋です。鞍を固定するためには、紐を回して固定しなければいけません。ここの所が雲珠といって紐を固

定したり飾りを垂らしたりするためのものです。これも難しく雲の珠と書いて“うず”と読みます。そしてお腹の所は平らに作られています。

そしてこれが鏡板です。これについて少し考えてみたいと思います。これは奈良の千賀さんという方が書かれた論文に紹介されていた写真です。応神陵古墳、今は誉田御廟山古墳と呼ばれるのが一般的ですが、そこから出土した馬形埴輪の写真です。応神陵古墳は、仁徳陵古墳に次いで第２の大きさを誇る古墳です。時期的には仁徳陵古墳より少し古いと思います。ちょっと写真が分かりづらいかもしれませんが、鏡板の部分が非常によく大泉町から出土している馬形埴輪のものと似ていませんか。これをｆ字形の鏡板と捉えるか、棒状のものでハミを固定した鑣（ヒョウ）轡と捉えるかは意見の分かれるところですが、両者は非常によく似ています。ですからこの大泉町の古海松塚11号墳から出土した馬形埴輪、今のところ群馬県で最も古いとされるこの馬形埴輪の鏡板の表現というのは、日本で一番古いといわれる応神陵古墳から出ている馬形埴輪のそれとよく似ている、時期的には５世紀の中頃と考えてよいと思います。くどいようですけれども、今のところこの時期、５世紀中ぐらいと言われるものはこの１例しかありませんので、第１期と私が言っているこの時期の馬形埴輪の特徴をこの埴輪が全て語っているかは分かりません。ただいろんな要素を見ていくと近畿地方のものと非常に似た要素はあるという事です。そして次からは増えます。

２期　今度は第２期のものです。なぜ第２期にこんなものを出すのかと思いますが、これは第２期をよく表現しているものですので、出します。これは旧尾島町の諏訪下古墳群という所から出たものですけれども、全然違ってきます。このようなものがたくさん出てきます。ただやはり西毛と東毛ではないですが、微妙に表現が違います。今度は群馬町の保渡田です。保渡田古墳群の二子山古墳のすぐ近くにある直径20mくらいの円墳から出てきたものです。保渡田の古墳群はみんな堀にＦＡが積もっていますので、ＦＡが降る前に造られた古墳、それを集めたものです。

これは井出北畑の古墳ですね。３号墳と９号墳です。これが箕郷から出た太子塚古墳という、調査に行った時に同じ収蔵庫にあったので撮らせてもらったものです。少し先にいってからもう少し詳しく特徴をお話します。少しご覧ください。これがその同じ地域のものです。保渡田Ⅶ遺跡と言われるものです。これが八幡塚です。馬もタテ髪がないと何か異様な感じがしませんか？やはりこのタテ髪が付いて馬なんだなと思いますね。これはみんな復元です。こういう所の色が本物です。そしてこれもそうで、藤岡のものです。これは群馬の森の近くにある若宮八幡北古墳のものです。

第１期の大泉の馬形埴輪は首の所の平べったい板を付けただけで顔を作っています。ところが第２期になると粘土紐で円筒を作って、首に付けて馬の頭部とします。第２期になると頭部はほとんどがこの作りになります。ですから見た目が全然違いますよね。ただ藤岡のもの、上栗須薬師前６号墳のものは少し違います。これは粘土板を４つほど作って、それを繋ぎ合わせて頭部を作っています。また、若宮八幡北古墳のものは、まだ私自身充分に理解できていないのですが、雷電神社のように粘土板をＵ字形にして下に粘土板を貼り付けているのかと思われますが、もしそうであればこれがこの技法としては一番古い例となります。埴輪はみんな復元されていて、私たちが見させてもらうと復元されているからなかなか詳細が分かりづらいのですが、そういう中でこれは顎のところが平らになっているのが分かります。ここですね。南雲さんたちが書かれている報告では、Ｕ字形に曲げた粘土板を「アーチ状の粘土板」という表記をされています。そうするとこの技法としては一番古い例です。ですからこの時期には円筒状のものだけではなくて、いくつかの頭部の製作技法が認められるようです。保渡田Ⅶからも上栗須薬師前６号墳と同じように粘土板を４つくっつけたものが確認されています。ただ第２期になって、これ以降主流になっていく粘土紐を巻き上げて作った円筒状のものを頭部とする技法が登場し、広く普及したと思います。これが頭部の作りです。

これは小島課長が調査をした旧粕川村の白藤古墳群のＰ－６号墳から出土した、この時期を代表する馬形埴輪です。非常に綺麗なものです。胸繋と尻繋に馬鐸が付いています。この時期では非常に珍しいです。あとは円筒の頭部に頬骨を表現した粘土板がありますが、この時期では一般的ではありません。私は、これを見た時に唖然としてしまいました。というのは、それまで私は漠然とＦＡが降る前の頭部はみんなただ円筒だけで、ここに頬骨を表現する粘土板は付けないと思っていました。頭部は円筒だけで、まだ馬の頬骨を表現する側板は付けないと思っていたら、付いていました。これはＦＡの後になって一般的に出てくるもの

ですが、実はこの第２期の５世紀後半でもここの所の側面に少し分かりづらいですが、側面に粘土板をこういう風に貼って表現をしているものです。ちょっとこの馬形埴輪は、他のものより作りや馬鐸といった飾りなどやや特殊です。

これは同じ白藤古墳群のＶ－４号墳から出土した馬形埴輪です。群馬県内の馬形埴輪の中でもたいへん人気があり、可愛がられているものです。最初の古海松塚11号墳のものと見比べてみてください。よくこの２つは似ていると言われます。両者は目が一つの平面にあるヒラメなところなどが共通しているので似ていると言われますが、作りは全然違います。特に頭部の作りは全く異なります。古海のものは頸に粘土板を置くのに対し、白藤Ｖ－４号墳は粘土板の顎に顔の部分の粘土板を完全にアーチ状にせず側面に丸みを持たせて被せています。ですから時期も全然違うと思います。Ｖ－４号墳は非常に愛くるしい感じではありますけれども、いろんな意味でこれは特殊です。鏡板がなく、面繋も口先の途中で途切れていて留めるものがなければこのような装着はできないですし、面繋の紐が手綱になっています。足をかける鐙なども簡単に付いていて、可愛らしい要素もあって人気者の埴輪ですけれども、作りとしては少し特殊です。尻尾はきちんと紐が巻いてあります。非常に小型だという事も特徴です。これなどを見ていると先程の古海とは全然違いますよね。

次に第２期の面繋について見ていきます。顔の所のクロスさせる紐が、目の上に１つだけのものを単条系と呼ばせていただきます。それに対して鼻の上にもう１つ、これとは別にもう１つあるのが複条系と呼ばせてもらいます。圧倒的に多いのは、１本だけ回す単条系です。ただこの２期になってこういう２本回す、顔を横断する帯が２本になる複条系のものも見られます。これから２期、３期とやっていきますが、皆さんここをよく見ておいてください。みんなこの時期のものはこの横の帯２本の間にここに沿ってもう１本鼻梁革といわれる紐があります。だけど最後の時期にいくとなぜかありません。複条でもこの間の紐がありません。なくなってしまっているのでご覧ください。あとはこの紐と紐の交差部分には、紐と紐を結ぶための鋲が粘土の丸い粒で表現されています。この複条系の例の諏訪下70号墳の馬形埴輪などは、円筒形の頭部だという事が良く分かっていただけると思います。

鏡板を私が撮った分だけ集成しました。圧倒的にアルファベットのｆに似ているのでｆ字形と呼ばれる鏡板が多いです。ほとんどこの古手の５世紀後半の２期のものは圧倒的にこのｆ字の鏡板です。タテ髪ですが、通常、馬形埴輪のタテ髪は前の円筒形のものと後に伸びている２つのタテ髪で構成されています。この円筒形を私は角状タテ髪とこれから言います。それに対して後にこうなっているものを板状タテ髪と言います。先程の古海松塚はこれとこれが独立しています。２つは別々に作られています。だけどこの第２期になると２つのタテ髪がくっつきます。そのくっつき具合がまだ微妙に下の方でくっついているようになっています。しかし第４期になるとほとんどこの角状と板状タテ髪が一体となる作りをしています。角状にこの板状がここの所でくっついています。このようなものがタテ髪表現です。これが徐々に変わってきますので、そのような所もご覧になっていただければと思います。あとは口先ですが、閉じています。１期のものも閉じていましたけれども、先端を塞いでしまって、ここに刻みを入れます。この例などは完全に塞がないで、粘土の先を折っているのではないかと思います。その折る時に少し刻みを入れているためなのか、ここにこういうシワみたいなものがあります。ただいずれにしろこの時期は塞いで後で切り込みを入れるのと、それからこうやって粘土の先を窄めていき、少し開放しているこういうパターンがあります。これがやがてばかーっと開放されていきますが、まだこの時期は口先のこのような特徴があります。

あとは鞍も非常に丁寧に作っています。前輪と後輪の間に居木という人が乗る板の表現をするのですけれども、その板をきちんと表してあげて、その上におそらく敷物を置いたであろう、その敷物をこう列点などで表現しています。この時期の鞍は非常に丁寧に表現している印象を受けます。ですから馬体に前輪と後輪の板を乗せた後に、その間にまた馬体とは別の粘土をきちんと盛っています。ところが新しくなると単に馬体に前輪と後輪の板だけを乗せるだけの表現となっています。しかし、この辺はまだ非常に丁寧な作りをしています。小島課長が調査した白藤古墳群のＰ－６号墳のものですけれども、非常に丁寧な列点を刻んで敷物の文様を表していますが、こういうものが多く見られます。

それから尻繋です。後輪から２本もしくは３本の帯を尻尾の方に向けて取り付けています。２本とか３本のどちらの例が多いかは分かりません。鞍から２本出

てくるものと３本のものがあり、それが雲珠という、ここの所でまず留められます。そしてそこから尻尾の所にぐるりと回す、２本のこういう帯を回して固定します。あくまで鞍を固定するものですから、鞍から出して、それをこの雲珠の所にまとめて、またお尻の後ろにぐるりと帯を回す。それが特徴で、真ん中の雲珠というのは円形をしているので、環状雲珠と言っているのですけれども、この時期のものはほぼ円形の環状雲珠です。しかもそこに飾りを付けます。杏葉と言います。これは鈴杏葉です。鈴杏葉を左右に１つずつ垂らす。これが鈴です。鈴を付ける本体に３個、三角形だと思ってください。この三角形の所に鈴を１個、２個、３個。大体３つの鈴が付く三鈴杏葉が多いです。ただ全て三鈴ではありません。五鈴杏葉もあります。五鈴が保渡田の中で、馬には付かなかったですけれども、杏葉だけ単独で５つの鈴のある杏葉が出ていますので、もう既にこの時期は５つの鈴を持つ五鈴杏葉もあるようです。ただ、主流はあくまでも三鈴のようです。

３期　今度は第３期です。これは旧尾島町の諏訪下３号墳から出土した２体の馬形埴輪です。２体はペアで雄雌を表しています。ちょっとこれなどを見ると上手く表現はできませんけれども、丁寧でしょう。こちらは太田市の塚廻り古墳群の４号墳から出土したものです。国の重要文化財に指定されているまた特別に良いものです。非常に丁寧な作りです。あとこれは大きいです。私は、塚廻りは従来言われているよりはもう少し時期的に新しく考えていいように思っています。第２期と第３期はあまり大きな変化は見られません。これから紹介していきますが、口先とかが微妙に変わっているくらいです。ただ大きさ的には、徐々に２期より３期の方が大きくなっているようです。鏡板は２期と同じようにｆ字が多いです。こっちは壷鐙という、今度はさっきの２期までに見られなかったこういう壷鐙が出てきます。他の例になりますが、伊勢崎で出ているこれもそうです。これは少し注意していただきたいのは、この時期の鏡板はｆ字が多いと言いましたが輪っかになってしまっています。ですからひょっとするとこれは環状の鏡板の中では、一番古い例かも知れません。これについて、また後で触れます。

面繋は、複条でやはり鼻梁革を持っています。３期になると更に資料的に増えてきます。しかしいろんな形があるでしょう。一概に第３期、第２期の各期の埴輪はこれだというスタイルはありません。いろんな形があるという事を分かっていただければと思います。くどいようですけれども単条と複条で、複条の方にはこうやって鼻梁革がきちんと付いています。これは集めてみた鏡板です。ｆ字がやはり多いです。ただしｆ字以外のものも出てきます。四角のもの、丸のもの、楕円のもの、丸に鈴が付いているもの、これが先程言った環状のもので、やはり３期で環状が出てくるのかなと思いました。ただまだｆ字が主流だけれども、３期になるとそれ以外のものも結構入ってきます。タテ髪もこのようなものです。単純にこの角状タテ髪に板状タテ髪が付く、これが徐々に上に上がってくると言えればいいのですが、そう簡単には言えなくて、そんなに綺麗に２期とは分かれません。タテ髪の変遷も、１期は独立をしていて、２期になるとこれがくっつくけれどもまだ意外と下の方で、３期になると上の方になると綺麗に言えればいいのですが、そう単純には言えません。ご覧のようにこのようなものがあります。いろんなくっつき方があります。このようなものも出てきてしまいます。これは旧箕郷町の上芝古墳です。角状に段が出てきて板状にくっつきます。これは旧榛名町の下里見のものですけれども、角状タテ髪とこういう段が付く板状タテ髪がもう既に出てきてしまう。この後の４期になるとこういう板状タテ髪だけのものもたくさん出てきますけれども、もう既にこの時期にこんな例もあります。そして口先の特徴は、古い要素もありまして先程と同じで窄めています。これは完全に閉じた後にここに刻みを入れています。ただし抜けてはいませんので沈線みたいになっています。それとは違って少しだけ窄めるだけの、４期に近い開口的なものもあります。こういうものが徐々に出てきます。しかし多少は窄めています。鞍は古い要素があります。これは多田山古墳群のものですけれども、２期と同じように鞍を忠実に再現しています。多くのものは単純にこうやって乗せるだけです。居木のここの所を非常に簡略して、馬の本体にただ前、後の板を乗せるだけというものが出てきます。雲珠は似ています、あまり変化はありません。２期から３期はあまり変化はありません。尻繋も鞍から２本か３本の帯を出し、杏葉を付けています。

４期　今度は４期ですが、今までの２、３期とは非常に大きな画期が認められます。まず一口で言うと馬が突然大きくなります。これは観音山古墳の馬形埴輪ですが、スライドでは分かりませんが非常にこのように大きな馬形埴輪が作られるようになります。これが

前橋の内堀Ｍ－１号墳出土の馬形埴輪です。こういう風に４期になると非常に大きな馬形埴輪が多くなります。

この時期のものは、みんな円筒状の頭部に頬骨を表現した粘土板の側板を付けています。また、下から見るとこのように顎の部分に穴を開けています。これもこの時期の特徴です。これは前橋のＭ－１号古墳から出土している２頭の馬形埴輪のうちの片方ですが、顎の部分に何も付けていません。ただ、粘土板をアーチ状というかＵ字形に曲げて、それを首に付けただけです。群馬ではこういう例は少ないです。こういう頭部の作りのものもあります。こういう作りの頭部を持つ馬形埴輪は、元々、埼玉県の行田市周辺の古墳によく見られます。

この時期の馬形埴輪の頭部の作り方には、もう１つあります。粘土板をＵ字形に曲げて、顎の部分に粘土板で塞ぐものです。雷電神社跡古墳の馬１・２と同じ作りのものです。ですからこの時期の馬形埴輪の頭部の作り方には円筒の頭部に側板をつけたもの、粘土板をＵ字形に曲げて顎を粘土板で塞いだもの、それと粘土板をＵ字形に曲げただけで顎のないものの３パターンがあります。多いのは円筒に側板を付けたもので、下から見ると顎に穴を開けています。顎に穿孔する例は３期くらいから出ているのですけれども、まだ一般的ではありません。

この４期になると面繋の複条系のものに鼻梁革が見られなくなります。２期・３期のものにはみんなここにあったものが、この時期になるとなくなります。私も県内の全ての馬形埴輪を見ているわけではありませんが、私が見た限りではこの時期のこの複条系の面繋には鼻梁革が伴わないということに気づきました。鏡板はこのように全て環状になります。これは感動しました。鏡板がみんな環状になっています。これも私が見た限りですが。ではこれはいつから出てきたのかという事ですけれども、これが弱りました。これは総社の資料館に展示してあるもので、総社古墳群の遠見山古墳から出土したものです。遠見山古墳の堀にＦＡが積もっています。ですから５世紀です。第２期です。環状鏡板の付くものは、これ以外は全て３期以降です。ですから総社資料館の資料も３期、６世紀ではないのかと感じています。しかし、この資料がはっきりと遠見山古墳から出土したものであると言えれば、群馬県でもこの環状鏡板というのは５世紀の後半には出現していた事になります。第３期には環状鏡板が結構ある事が分かります。ただ、私が見た限り第４期の馬形埴輪は、全て環状鏡板でしたよという事だけお話をさせてください。

タテ髪も、３期まであった角状タテ髪もある事はありますが、もうこんな風になっています。少しあるだけです。ほとんどが板の板状タテ髪だけになります。これも角状タテ髪を表しているのですけれども、ほとんどこういう板状になっています。板状もこういう風に前の方が、おそらくこの前までが角状タテ髪を表現していたであろうと思われる段を持つものと、段を持たないものがあります。そして尻繋も雲珠と言っていいのか分かりませんが、この帯が雲珠に付かないようなものが出てきます。これはかろうじて固定はしていますよね。時間がありませんので簡単に言いますと雲珠というのは、尻繋の帯を留めるものが雲珠です。しかし、帯がそれにくっつかないものがこの時期に出てきますので、それを雲珠と言っていいのか分からないのですけれども、その本来雲珠がある所にこういう丸い球状のものや円柱状のものなどいろんなものをそこに置いているものがこの時期に出てきます。帯は鞍から平行に２本出てきて、帯がお尻に直接平行しながらぐるりと回る、そんな表現のものがこの時期には出ています。それで最も大きな特徴は今までになかった横、鞍の後ろからこういう風に出す、こういう横帯が付くのが、この時期の大きな特徴です。

馬形埴輪の集成表を、そこのレジュメの方に見づらいですが載せておきました。あとグラフも載せておきましたので、ご覧ください。

まとめ　何と言っても視覚的に見て、今私が話した変遷を知るには大きさが非常に反映されていると思いました。古い程小さく、大きくなる傾向は、全体にその流れはあると思います。ただやはり２期と３期の大きな違いというのは、そんなには指摘出来ないかもしれません。しかし３期から４期になるのは、馬が非常に大型化するのと、今話したいろんな要素で大きな変化が認められました。それがなぜなのかというのはまだ私には、何も皆さんにお話できるだけの準備がありません。

これは大阪の高槻市にある今城塚古墳です。真の継体天皇陵と言われている古墳です。宮内庁は別の古墳を継体天皇陵に指定していますが、それではなくこちらの古墳の方が本当の継体天皇陵だと誰もが認めています。それを高槻市がこのように整備しました。先程

の保渡田と同じように周溝と周溝の間の中提上にこういう埴輪を復元しています。見てください。すごいでしょう。子供の大きさと見比べてみてください。そこに馬がこれだけいます。ですから大王陵級の、あるいは地方の有力豪族級などの、こういう前方後円墳には非常に多くの他の埴輪と共に、馬形埴輪の大きな隊列が置かれていたことが分かります。

最後、時間の配分が悪くて、まとまりのつかない話になってしまったのですが、雷電神社跡古墳の馬形埴輪の紹介をさせてもらいまして、そこから私が考えた群馬の馬形埴輪の変遷の、概略だけで申し訳なかったのですが、お話させていただきました。ぜひこれを機会にまたそういう目でこれから馬形埴輪をご覧になっていただければ幸いだと思います。以上で終わります。

～質問～

Ｑ１　作り方が主体で今日お話がありましたが、次回またやっていただく時は使われ方を、軍事に使ったのか、常用に使ったのか、重機として使ったのかその辺が分からないので、私は馬なんかが大きい石を運んだり、大きい土を運んだりするのは重機として使った部分がだいぶあるのかなと思っているのですけれども、その辺の話をしていただけると嬉しいです。

Ａ１　馬の導入によって、運送力がかなりアップしたという事は一般的には言われています。荷物を運ぶというまさに今のトラックではないですけれども、そういう要素もあったと思います。

Ｑ２　一番古い埴輪は何年くらい前にできたのでしょうか？

Ａ２　先程の表で、最初に古墳に立てられるのは円筒形の、こういう一般的に見られる埴輪です。それというのは今では定説になっているのですけれども、今の岡山県、吉備の地域で弥生時代にこういう筒型のものに壷を乗せて、お墓の所にお供えするというものがあり、それが徐々に変化をして円筒埴輪ができたと言われております。ですから円筒埴輪は、一番古い古墳に伴います。一番古い古墳の実年代については、人により違うのでしょうけれども３世紀の後半には確実に埴輪は登場しています。もちろん卑弥呼の墓だといった箸墓古墳にも、吉備の特殊器台の傾向を引くものもがあります。ですから最初からあります。

Ｑ３　埴輪というのは“はに”と“わ”だと思うのですけれども、“はに”と“わ”というのはどういう意味でしょうか？

Ａ３　『日本書紀』垂仁天皇32年条に埴輪の起源説話がりますが、それによると「埴（はにつち）」で人や馬などのもろもろのもの形のものを作ったが、これを埴輪と言ったとあります。ですから「はに」は土、粘土のことです。はっきりどこの記事であったか覚えていないのですが、天香久山から「埴土」と取るような記事があったと思うのですが、「埴」は単なる粘土ではなく、神聖なものであったのだと思います。

「わ」は円筒埴輪などを作る時に粘土を「輪」にしたことなのでしょうか。これは私には分かりません。

「馬形埴輪の世界－群馬県出土の埴輪を中心に－」

三浦茂三郎（高崎市観音塚考古資料館）

はじめに－日本列島にいつから馬はいたのか－

○『魏志倭人伝』・・・「その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし。」←かつてはこの記述は誤りで、縄文・弥生時代に馬はいた、とされた。しかし、現在では縄文・弥生時代の日本列島には馬は生息しないと考えるのが一般的。

○『日本書紀』応神天皇15年８月・・・「百済王は阿直岐を遣わして、良馬二匹を奉った。それを大和の軽の坂上の厩で飼わせた。」

○遺跡からの馬歯・馬骨の出土事例

・最も古い例・・・亀井遺跡(大阪府八尾市)から３世紀末～４世紀初頭の馬歯出土

・４世紀・・・西岩田遺跡(大阪府東大阪市)・佐堂遺跡(大阪府八尾市)・塩部遺跡(山梨県甲府市)・東山北遺跡(同)

・５世紀・・・大阪河内湖周辺に馬歯・馬骨出土遺跡増加　その代表が蔀屋北遺跡で馬の全身骨格出土

○群馬県の事例

・剣崎長瀞西遺跡－13号土坑から轡を装着した馬骨、114号住居跡貯蔵穴から子馬の骨

・ＦＡ下の水田から蹄跡の検出(芦田貝戸遺跡など)

⇒(まとめ)

古墳時代前期に散発的渡来の可能性。古墳時代中期になると馬歯・馬骨出土遺跡の増加や馬具副葬古墳の出現などが示すように日本列島に本格的に馬が導入されたと考えられ、５世紀後半には群馬県にも馬がいた。

本日の話

１　雷電神社跡古墳出土の埴輪群像(←馬形埴輪研究の端緒)

２　群馬県における馬形埴輪の変遷(←雷電神社跡古墳出土馬形埴輪から考えたこと)

１　雷電神社跡古墳出土の埴輪群像

（１）雷電神社跡古墳

・伊勢崎市東小保方町3861番地(旧佐波郡東村大字東小保方字下谷)に所在した

・全長50ｍ前後の前方後円墳で、内部施設は南西に開口する両袖型の横穴式石室

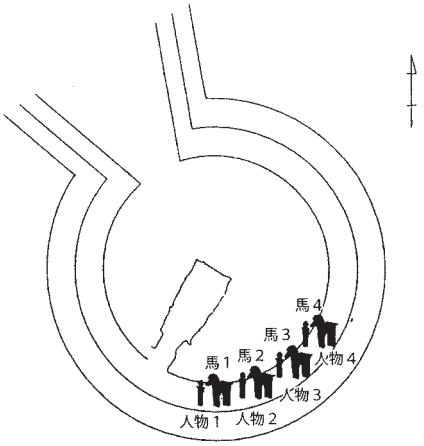
（２）石室内出土遺物

挂甲小札破片13(他小破片多数)、直刀破片１、刀子破片１、刀装金具破片４、
金銅製環１、金銅製中空丸玉２、金銅製金具破片２、金銅製馬具破片１、鉄製馬具破片１、
鉄製鉸具(尾錠)１、木芯鉄張鐙金具破片７、鉄製金具３、
有柄尖根型鉄製鏃根破片６(他小破片多数)、有柄平根型鉄製鏃根破片１、
無柄平根型鉄製鏃３、須恵器破片１

（３）埴輪の出土状況

本埴輪群は、墳丘東南部から発見されたものである。墳丘は二段に築かれていたようであり、これらの埴輪は石室開口部向かって右側の平坦部で確認された。平坦部外側には円筒埴輪列が巡り、その内側約１ｍの距離をおき形象埴輪列が配置されていた。

石室開口部寄りから人物１･馬１→人物２･馬２→人物３･馬３→人物４･馬４とそれぞれ組になり配置されていた。組と組の距離は約１ｍであったという。



埴輪出土状態概念図

（４）馬形埴輪

	大きさ(cm)		頭　部	面繋	鏡板	胸　繋	鞍	尻　繋
	長さ	高さ						
馬１	123.5	121.7	∩＋粘土板	複条	環状	馬鐸	鞍褥･下鞍	雲珠なし？
馬２	119.4	116.8	∩＋粘土板	単条	環状	円形粘土板	鞍褥･下鞍	雲珠不明
馬３	112.6	104.0	粘土紐円筒	単条	四角	円形粘土板	人が乗る	雲珠部穿孔
馬４	111.0	103.2	粘土紐円筒	単条	四角	円形粘土板	人が乗る	雲珠部に円柱

（５）人物埴輪

	高さ(cm)	手の所作	鎌の有無	その他の特徴
人１	86.2	右手を挙げ､左手を腰に置く	有り(腰背面)	上げ美豆良　帽子を被る
人２	62.8	両手を胸に置く	有り(腰背面)	坊主頭
人３	106.0	両手を脇腹に置く	無し	下げ美豆良　帽子を被る 首飾り　大刀・鞆
人４	73.9	両手を胸に置く	有り(腰背面)	上げ美豆良　首飾り

（６）雷電神社跡古墳出土埴輪群像の考察

①馬形埴輪の２グループ

・頭部の成形や大きさなどから馬形埴輪１・２と馬形埴輪３・４の２グループに区分

・２組の工人集団が関与か

②「横坐り」乗馬用の付属具を有する馬形埴輪

・日高慎氏らの研究によると短冊形水平板を有する馬形埴輪は、現在、17例(関東11例、近畿･東海5例、不明1例)ほどが知られる

・群馬県内からは4例(雷電神社跡古墳･田向２号古墳･諏訪下23号古墳･猿田Ⅱ遺跡)

③人が乗る馬形埴輪

・南雲芳昭氏の研究によると人が乗る馬形埴輪で確実なものは14例で、その分布は福岡２･石川３･福島1･**茨城1･栃木1･埼玉3･群馬3**で関東に集中する

・大阪四天王寺宝物館所蔵の伝群馬県出土資料と雷電神社跡古墳の馬形埴輪

・群馬県内出土の挂甲武人埴輪群<太田市飯塚町出土資料(東博)・太田市成塚町出土資料(相川考古館蔵)・太田市世良田出土資料(天理参考館蔵)・伊勢崎市安堀出土資料(国立歴民博蔵)・太田市内出土資料(シアトル美術館蔵)>工人と雷電神社跡古墳出土資料との関わり

・人が乗る馬形埴輪の性格・・・古墳の主？　子ども？　有力従者？

④人物埴輪

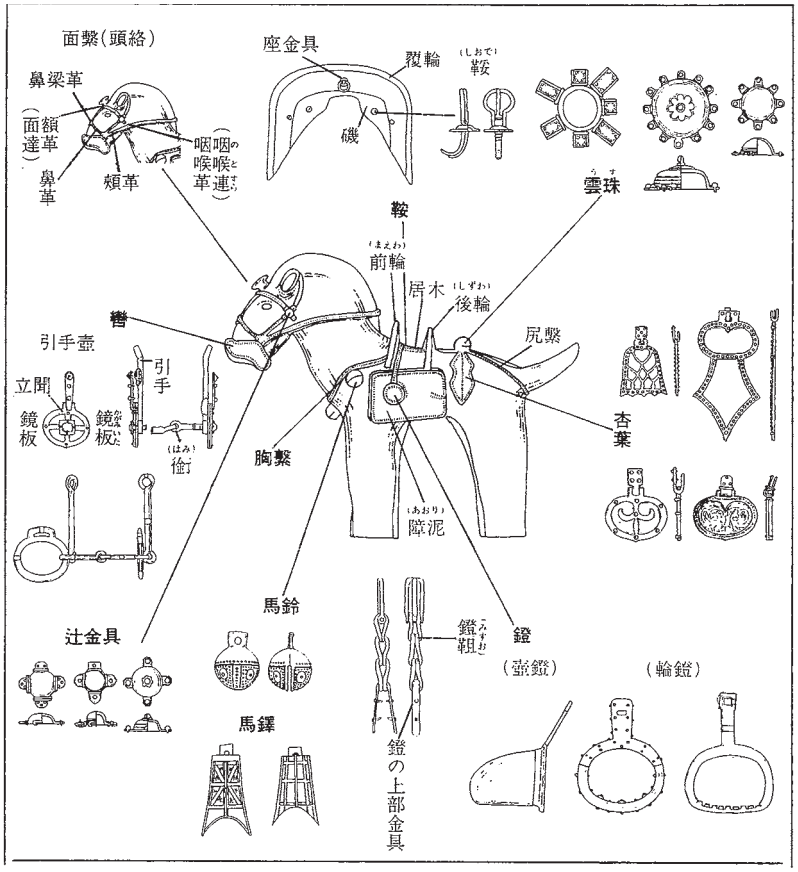
・人物１－馬形埴輪の近くから出土し片手を挙げる人物埴輪については、馬飼と考えるのが一般的

・人物２－酒巻14号古墳の馬形埴輪とセットととなる人物 No, ４、両手を胸に置き頭部は坊主頭表現である。人物２はこれとよく似る。

・人物４－帽子を被る例は中原古墳出土の２体の馬飼にも認められ、首飾りが巻かれる例は中原古墳・綿貫観音山古墳にも見られる。

・人物３－大刀と鞆を持つ。大澤伸啓氏は、馬飼とは考え難く馬３に乗る人物を警護する役割を持った特殊な例であるとされた。しかし、酒巻14号古墳では４者４様の姿。

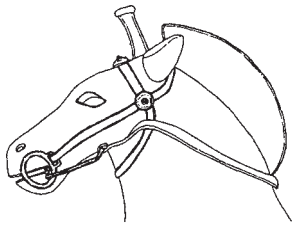
２　群馬県における馬形埴輪の変遷



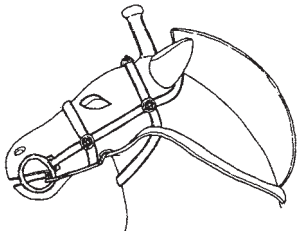
馬具の名称

ニューサイエンス社1983『日本考古学小辞典』より

面繋（頭絡）



（単条系）



（複条系）

（１）時期の設定

第Ⅰ期：５世紀中葉（ＴＫ208型式期）

第Ⅱ期：５世紀後半（ＴＫ23・ＴＫ47型式期）

（ＦＡ降下）

第Ⅲ期：６世紀前半（ＭＴ15・ＴＫ10型式期）

（ＦＰ降下）

第Ⅳ期：６世紀後半～７世紀初頭（ＴＫ43・ＴＫ209型式期）

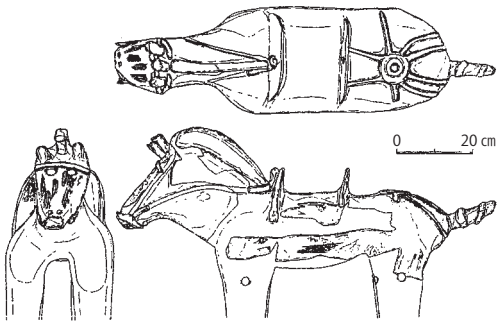
（２）第Ⅰ期の馬形埴輪

・第Ⅰ期の資料としては、現在までのところ古海松塚11号古墳出土の１例のみ。

・長さは100㎝、高さは約60㎝に復元。全体的に胴長であるのが特徴。

・頭部は、頸の頭部寄りを広げ、そこに粘土板を貼り付ける。このため顔は扁平。

・口先は粘土塊で塞ぎ中央に小さな穴を開け、そこから左右の側面に切り込みを入れる。



古海松塚11号古墳出土馬形埴輪

・面繋は単条系。鏡板はＳ字状を呈するが、両端が尖っていることや幅の狭さからｆ字形鏡板を表現したとは考え難く何か別のものを模したと思われる。
・タテ髪は、角状のタテ髪が両耳の間に独立してあり、板状のタテ髪が頸部にある。
板状タテ髪は、端部を左右に突出させたＴ字形を呈している。
・胸繋は、胸の部分と前輪の下端部が欠損しているため付けられていたか不明である。
・前輪と後輪の間隔は15㎝ほどで、着座部には居木を表現した薄く粘土を貼る。
・尻繋は、後輪から２本の粘土帯が伸びて環状の雲珠に繋がる。環状の雲珠は外径８㎝、幅２㎝ほどの粘土で表され、中央には径2.4㎝の透孔がある。環状の雲珠から左右に各１本、尻に４本の粘土帯が伸びる。
・尾には螺旋状に粘土紐を巻かれ、尾の先端は丸みを持つ。腹は平らに近い。

（３）第Ⅱ期の馬形埴輪

・頭部の成形は粘土紐輪積み(もしくは巻き上げ)が一般的。円筒状を呈し、そのまま頭部とするものが主流であるが、頬骨を表現する粘土板を側面に取り付けたものもある。
・口先は、粘土板もしくは粘土塊を当て口先を丸めて完全に塞ぎ切り込みを入れるものと丸味をおびながら窄め、塞がずに円形に開放するものがある。
・面繋は圧倒的に単条系が多い。複条系は鼻梁革を有する。
・頬革・額革・鼻革・鼻梁革の各交差部には、辻金具の鋲を表現した粘土粒が貼付されるのが通例である。
・鏡板は残存するもの及び痕跡から類推できるものを合わせると８例がｆ字形である。
・引手のあるものは諏訪下27号古墳と若宮八幡北古墳の２例のみである。
・タテ髪は角状タテ髪と板状タテ髪からなるが、この時期では板状タテ髪が角状タテ髪の下部で接続するのが一般的である。
・胸繋には鈴が付く。白藤Ｐ－６号古墳は左右に各２個の鈴が付き、その間に各１個の馬鐸が装着される。
・鞍は居木を意識した作りになっているのがこの時期の特徴である。
・鐙は、確認できるものは全て輪鐙である。
・尻繋は後輪から２本ないし３本の帯を伸ばし環状の雲珠に連結し、さらに雲珠から２本の帯が尻尾の下へ向かう。
・環状雲珠からは左右側面及び尻尾方向に３個の杏葉が付く。杏葉は確認できるものは上栗須薬師前６号古墳例を除き全て三鈴杏葉。ただ、保渡田八幡塚古墳Ｂ区出土の尻繋部片には五鈴杏葉を確認できるものもある。この時期の杏葉は、鈴の付く本体が帯状を呈しているのが特徴。白藤Ｐ－６号古墳例では鈴杏葉の他に後輪から伸びる帯に左右各１個づつの馬鐸を吊る
している。
・尻尾は中実で先が跳ね上がり、端部が尖る。

（４）第Ⅲ期の馬形埴輪

・頭部の成形は粘土紐輪積み(巻き上げ)が一般的。円筒状の頭部に頬骨を表現する粘土板を側面に取り付けるのが一般化する。
・顎に穿孔するものは少なく、諏訪下23号古墳馬２と下里見諏訪山古墳馬１のみ。
・口先は、丸く閉塞し切り込みを入れるタイプと先端部の粘土紐の径を小さくし窄まる
・面繋は第Ⅱ期に比べ複条系の割合が増す。
・頬革・額革・鼻革・鼻梁革の交差部には鋲を表現する４個ないし５個の粘土粒を貼付するものが多い。
・鏡板はｆ字形鏡板が主流であるが、ｆ字形鏡板以外にも形の違ういくつかの鏡板が見られるようになる。ｆ字形鏡板以外では諏訪下23号古墳馬２と下里見諏訪山古墳馬２に環状鏡板が見られる

ようになるのも、この時期の特徴の１つである。
・第Ⅱ期に比べ引手表現のあるものの割合が増すが、それでもまだ半数以上は引手表現が省略されている。
・第Ⅱ期と同じように角状タテ髪と板状タテ髪が角状タテ髪の下部で接続するのが一般的であるが、接続位置が第Ⅱ期に比べ角状タテ髪の下部からやや上位になる。
・胸繋は第Ⅱ期と同じように鈴が付く。上芝古墳では３個の馬鐸が装着される。
・鞍は多くの馬形埴輪では馬体本体に前輪と後輪の粘土板を乗せるだけで、着座部に粘土を貼って居木や鞍褥を表現していた第Ⅱ期に比べ省略化が進む。
・鐙は塚廻り４号古墳馬形埴輪１と上芝古墳例は壺鐙であり、他は全て輪鐙である。
・尻繋は後輪から伸びる２本ないし３本の帯が雲珠に連結し、さらに雲珠から２本の帯が尻尾の下へ向かう。雲珠の多くは環状雲珠。
・杏葉は鈴杏葉のものが多く、塚廻り４号古墳馬１が五鈴杏葉の他は三鈴杏葉である。
・尻尾は中実で先が跳ね上がり、端部が尖る。

（５）第Ⅳ期の馬形埴輪

・頭部の成形には３つのタイプが認められる。１つ目のタイプは粘土紐輪積み(巻き上げ)によるものである。頬骨を表現する粘土板を側面に取り付けることは、ほとんど例外なく見られる。顎部に穿孔するのが一般的である。２つ目のタイプは粘土板を∩形に曲げ顎部を粘土板で塞ぐもので、断面形態が⍝形になる。３つ目のタイプは、粘土板を∩形に曲げただけのものである。
・口先は全て開放される。左右側面に切り込みを入れるものが多い。
・面繋は単条系と複条系が拮抗する。ただ複条系で特筆されるのは、第Ⅱ・Ⅲ期の複条系には全て鼻梁革を伴ったが、第Ⅳ期では全ての複条系で鼻梁革が伴わないことである。
・頬革・額革・鼻革の交差部に表現された辻金具にも変化が見られる。第Ⅱ・Ⅲ期では交差部の四方もしくは四方と中央部に粘土粒を貼付し辻金具を表現するものが多数を占めたが、
第Ⅳ期では交差部の中央に円形の粘土板もしくは半球形の粘土を貼るものが数を増す。
・鏡板も雷電神社跡古墳馬３と４を除き全て環状鏡板となるのも、この時期の大きな特徴。
・引手はほとんどの馬形埴輪で認められる。
・目は木葉形を呈するものも見られるようになる。
・タテ髪にもこの時期になると大きな変化が見られる。この時期のタテ髪は大きく２つのタイプに分けられ、それぞれのタイプもまたその形状から２種類に分類できる。

１つ目のタイプ

角状タテ髪と板状タテ髪を別作りとするもので、２種類が認められる。

１種類目…第Ⅱ・Ⅲ期と同じような作りのものである。

２種類目…角状タテ髪端部の輪状部分だけを残し板状タテ髪が角状タテ髪に取り付けられる側面から見ると角状タテ髪と板状タテ髪が一体に作られているように見えるが、正面から見ると柱状に作られている角状タテ髪を看取できる。

２つ目のタイプ

板状タテ髪だけでなるもので、第Ⅳ期の大きな特徴の１つを構成する。

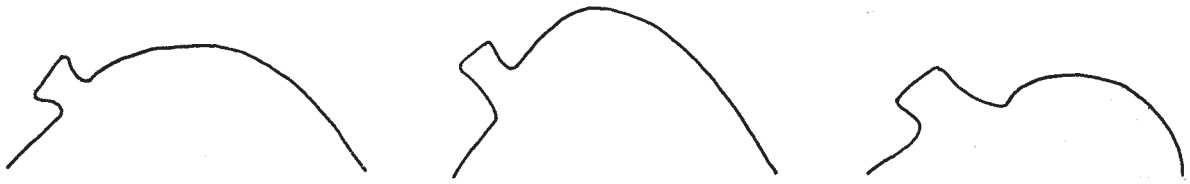
このタイプも頭頂部付近に段を持つものと段を持たない２種類が認められる。

１種類目…段を持つものの頭部寄りの一段高くなった部分は、恐らくは角状タテ髪を形骸的に表現したものであろう。

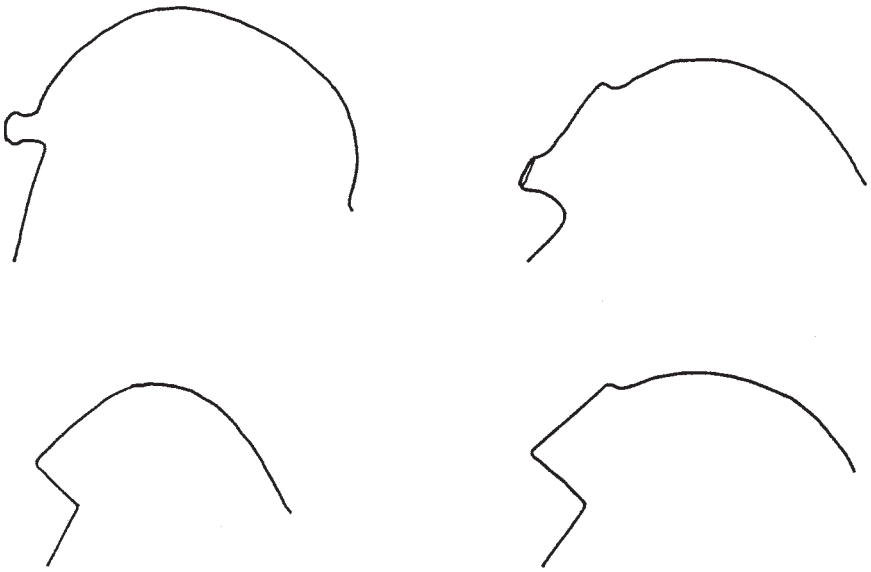
２種類目…頭部付近で　直に立ち上がりあたかもモヒカン刈りのような様相を呈している。

・胸繋は第Ⅱ・Ⅲ期と同じく鈴を付けるものが多い。ただ、この時期で注意されるのが、鈴の取り付け方である。第Ⅱ・Ⅲ期では全て面繋の下端に、もしくは下端に吊るすように鈴が取り付けられていたが、帯上に取り付けられるものが多い。

・胸繋に新たな装飾も見られる。１つは帯に円形の粘土板を貼付するもの。もう１つは中央に粘土粒を乗せた方形の粘土板を帯に添付する。帯には何も付けず、帯表面を隙間なく竹管文で充填するものもある。
・鞍は、馬体本体に前輪と後輪の粘土板を乗せるだけで着座部に居木や鞍褥などを表現するものが何も見られないもの、居木を表現した２条の粘土帯があるもの、鞍褥と下鞍も表現されるものがある。
・鐙は確認できるもので輪鐙が９例、壺鐙が７例である。第Ⅲ期から壺鐙は見られるようになるが、この時期になるとその割合が増すようである。
・尻繋は、確認できるものでは後輪から尻尾に向かって伸びる帯は全て２本となっており、その帯が雲珠に連結するタイプと雲珠に連結しないタイプの２つタイプが認められる。
　１つ目のタイプは、これも帯と雲珠との接続の仕方に２種類ある。後輪から雲珠に伸びる帯も、雲珠から尻尾へ向かう帯もいずれも帯先は雲珠と完全に連結し、４本の帯は４本の粘土帯を貼って表現したものである。上から見ると雲珠を中心にＸ字状を呈する。これに対し後輪から尻尾に向かう帯を２本の平行する粘土帯を貼って表現し、帯と雲珠の連結は左右の雲珠の脚を帯に被せ固定する。２つ目のタイプは、雲珠と連結しないもの、もしくは雲珠を持たないタイプである。
・この時期の尻繋に見られる最大の特徴は、後輪の両側面の下端から胴部を横断して尻尾に向かう帯が付けられることである。この帯にも鈴や方形・円形の粘土板が付けられたり、線刻や竹管文を施す例が見られる。
・尻尾は多くは跳ね上がらず、先端も尖らない棒状を呈している。



第Ⅱ・Ⅲ期の馬形埴輪のタテ髪

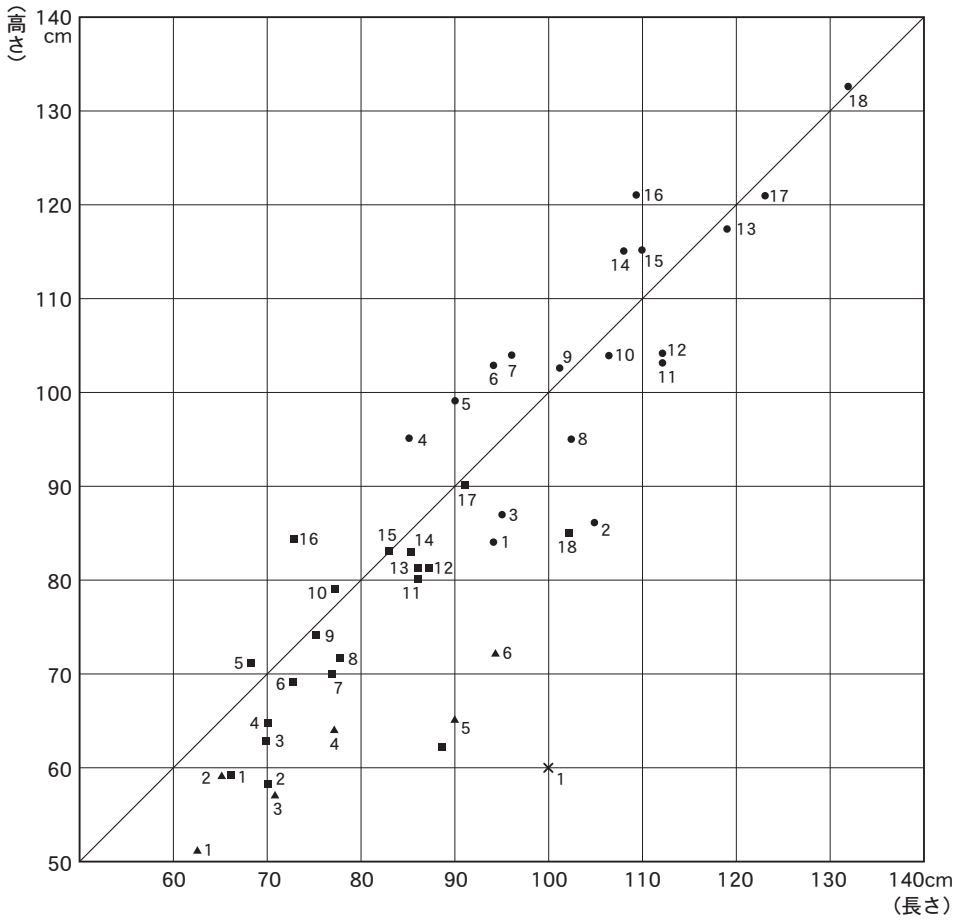


第Ⅳ期の馬形埴輪のタテ髪

番号	馬形埴輪	頭部のつくり	頬骨板の有無	顎穿孔の有無	面繋	鏡板	引手有無	口　先	目	タテ髪
第Ⅰ期の馬形埴輪										
1	古海松塚11号古墳	粘土板	×	×	単	S字	×	閉切込	円	角･板独立
第Ⅱ期の馬形埴輪										
1	諏訪下27号古墳（頭部）	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	○	閉切込	円	角＋板
2	諏訪下70号古墳	粘土紐円筒形	×	×	複梁	f字	×	開窄む	円	角＋板
3	白藤Ｆ－２号古墳（頭部）	粘土紐円筒形	○	×	単	方形	×	開窄む	円	角＋板
4	白藤Ｐ－６号古墳	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	×	開窄む	円	角＋板
5	白藤Ｖ－４号古墳	粘土板＋∩	×	×	単	×	×	開窄む	円	角＋板
6	保渡田八幡塚古墳	粘土紐円筒形	－	－	複梁	f？	×	－	楕円	－
7	保渡田Ⅶ遺跡馬１（頭部）	粘土紐円筒形	－	－	単	－	－	閉切込	楕円	－
8	保渡田Ⅶ遺跡馬２（頭部欠）	－	－	－	－	－	－	－	－	－
9	保渡田Ⅶ遺跡馬３（頭部）	粘土板□形	×	×	※単	f字	×	閉切込	楕円	角＋板
10	井出北畑３号古墳	粘土紐円筒形	×	×	単	f字	×	－	楕円	角＋板
11	井出北畑９号古墳馬１	粘土紐円筒形	×	×	※単	f字	×	開？	楕円	角＋板
12	井出北畑９号古墳馬２	粘土紐円筒形	×	×	単？	f字	×	開窄む	楕円	角＋板
13	若宮八幡北古墳（頭部）	粘土板＋∩	○	○	単	－	○	－	楕円	－
14	上栗須薬師前６号古墳	粘土板□形	×	×	単	f字	×	開窄む	円	角＋板
第Ⅲ期の馬形埴輪										
1	成塚石橋２号古墳馬１	粘土紐円筒形	－	－	－	－	－	－	円	角＋板
2	成塚石橋２号古墳馬２	粘土紐円筒形	○	×	単	星形	○	開窄む	円	角＋板
3	塚廻り４号古墳馬１	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	○	開窄む	円	角＋板
4	塚廻り４号古墳馬２	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	○	－	円	角＋板
5	高林西原８号古墳	粘土紐円筒形	○	－	単	f字	×	－	円	角＋板
6	諏訪下３号古墳馬１	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	×	閉切込	円	角＋板
7	諏訪下３号古墳馬２	粘土紐円筒形	○	×	単	f字	×	閉切込	円	角＋板
8	諏訪下23号古墳馬１	粘土紐円筒形	○	×	複梁	f字	○	－	円	角＋板
9	諏訪下23号古墳馬２（裸馬）	粘土紐円筒形	○	×	複梁	環状	○	開窄む	円	角＋板
10	諏訪下30号古墳	粘土紐円筒形	○	×	複梁	方形	×	開窄む	円	角＋板
11	釜ノ口４号古墳（頭部欠）	－	－	－	単？	f字	－	－	円	角＋板
12	多田山２号古墳	粘土紐円筒形	○	×	単	円盤	×	開窄む	円	角＋板
13	多田山４号古墳	粘土紐円筒形	×	×	※単	方形	×	閉切込	楕円	角＋板
14	多田山６号古墳（頭部）	粘土紐円筒形	×	×	複	円形	－	閉沈線	－	－
15	多田山９号古墳（頭部）	粘土紐円筒形	○	×	単	鈴環	×	開狭む	円	－
16	上芝古墳	粘土紐円筒形	○	×	複梁	f字	○	開窄む	楕円	角＋板
17	下里見諏訪山古墳１（裸馬）	∩＋粘土板		○	※単	U形？	×	閉切込	円	角＋板
18	下里見諏訪山古墳２（頭部）	－	－	－	複	環状	－	－	円	－
19	後閑３号古墳	－	－	－	－	f字	－	閉切込	円	角＋板
第Ⅳ期の馬形埴輪										
1	大道西遺跡	粘土紐円筒形	○	○	複	環状	○	開放	楕円	－
2	雷電神社跡古墳馬１	∩＋粘土板		○	複	環状	×	開放	円	角＋板
3	雷電神社跡古墳馬２	∩＋粘土板		○	単？	環状	×	開放	円	板？
4	雷電神社跡古墳馬３	粘土紐円筒形	○	○	単	四角	×	開放	円	板
5	雷電神社跡古墳馬４	粘土紐円筒形	○	○	単	四角	×	開放	円	板
6	内堀Ｍ－１号古墳	粘土紐円筒形	○	○	単	環状	○	開放	楕円	角＋板？
7	内堀Ｍ－４号古墳馬１	粘土板∩形			単	環状		開放	木葉	板
8	内堀Ｍ－４号古墳馬２	粘土紐円筒形	○	○	単	環状	○	開放	木葉	板？
9	小泉長塚１号古墳	粘土紐円筒形	○	○	複	環状	○	開放	木葉	角＋板
10	中原Ⅱ遺跡１号古墳馬１	粘土紐円筒形	○	○	単	環状	○	－	楕円	－
11	中原Ⅱ遺跡１号古墳馬２	粘土紐円筒形	○	○	単	環状	○	開放	楕円	板
12	綿貫観音山古墳馬１	－	－	－	－	－	－	－	－	－
13	綿貫観音山古墳馬２	粘土紐円筒形	○	○	複	環状	○	開放	楕円	板？
14	安坪６号古墳	粘土紐円筒形	○	○	単	環状	○？	開放	楕円	板
15	安坪16号古墳	－	－	－	－	－	－	－	－	－
16	安坪19号古墳馬１	－	－	－	単	－	－	－	楕円	－
17	安坪19号古墳馬２	－	－	－	－	－	－	－		
18	神保下條１号古墳	粘土紐円筒形	○	○	複	環状	○	開放	円	板？
19	神保下條２号古墳馬１	粘土紐円筒形	○	○	複	環状	○	開放	円	板？
20	神保下條２号古墳馬２	－	－	－	－	－	－	－	－	板

各時期の馬形埴輪一覧表（各時期の馬形埴輪の番号は、第17～22図の馬形埴輪の番号と対応する。）

胸　　繋	鞍	鐙	障泥	尻　　繋	尻　尾
―（※鈴が出土している）	前・後輪間に粘土を貼る	―	―	環状雲珠（穿孔）　杏葉無し	巻上
―	―	―	―	―	―
―	刺突による居木・鞍褥	―	―	環状雲珠（穿孔）　三鈴杏葉？	跳ね・尖
―	―	―	―	―	―
鈴（左右各２・正面０）・馬鐸２	刺突による居木・鞍褥	輪	腹下	環状雲珠　三鈴杏葉　馬鐸	跳ね・尖
×	前・後輪のみ	輪	腹上	帯のみ	棒・巻上
鈴（左右各２・正面１）	膨らみを持たせ居木を表現	―	―	―	―
―	―	―	―	―	―
―	刺突による居木・鞍褥	輪	腹下	環状雲珠　三鈴杏葉？	跳ね・尖
※鈴の剥離痕有り	―	―	―	―	―
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪間を落込ませ居木表現	―	―	環状雲珠　三鈴杏葉	―
鈴（左右各２・正面０）	刺突による居木・鞍褥	―	―	環状雲珠（穿孔）　三鈴杏葉	―
鈴（左右各２・正面０）	前・後輪のみ残	輪	腹下	雲珠部欠損　三鈴杏葉	跳ね・尖
―	―	―	―	―	―
鈴（左右各２・正面１）	刺突による居木・鞍褥	輪	腹下	環状雲珠　左右帯先に１つ鈴	跳ね・尖
―	刺突による居木・鞍褥	―	―	―	―
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹下	環状雲珠　三鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各２・正面１）	居木・鞍褥	壺	腹下	環状雲珠（上に鋲）　五鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各２・正面１）	前・後輪間の２本帯で居木表現	輪	腹下	円形雲珠　心葉形杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹下	環状雲珠三鈴杏葉	―
鈴（左右各２・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹上	環状雲珠　三鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各２・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹上	環状雲珠　三鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪下端に帯中央窪む	輪	腹下	半球形雲珠　剣菱形杏葉	跳ね・尖
なし	なし	なし	なし	なし	跳ね・尖
鈴（左右各２・正面０）	前・後輪のみ	―	―	環状雲珠　三鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各２・正面０）	前・後輪のみ	輪	腹下	環状雲珠　三鈴杏葉	跳ね・尖
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹	環状雲珠　三鈴杏葉	―
鈴（左右各１・正面１）	刺突による居木・鞍褥	輪	腹上	円形雲珠　円形杏葉	跳ね・尖
―	―	―	―	―	―
―	―	―	―	―	―
馬鐸（左右各１・正面１）	居木端部がコブ状に盛上る	壺	腹下	雲珠葉不明　剣菱形杏葉	―
なし	なし	なし	なし	なし	斜め上・棒
―	―	―	―	環状雲珠　帯先に鈴	―
鈴（左右２・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹上	環状雲珠？　三鈴杏葉？	跳ね・尖
円形粘土板（左右各２・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹下	半球形雲珠　平行帯　胴帯有	斜め上・棒
馬鐸（左右各１・正面１）	鞍褥　下鞍	壺	腹	雲珠無　平行帯　胴帯有	斜め上・棒
円形粘土板（左右各２・正面１）	鞍褥・下鞍	壺	腹	雲珠等不明　胴帯有	斜め上・棒
円形粘土板（左右各１・正面１）	（人が乗る）	壺	腹下	雲珠部穿孔　胴帯有	斜め上・棒
円形粘土板（左右各２・正面１）	（人が乗る）	壺	腹下	雲珠部に円柱　胴帯有	斜め上・棒
鈴？	前・後輪のみ	壺	腹下	雲珠？　胴帯有	斜め上・棒
鈴（左右各２・正面２）	前・後輪のみ	輪	腹下	雲珠有　胴帯無　帯先に鈴	斜め上・棒突
鈴（左右各２・正面０）	前・後輪のみ	輪	腹下	半球形雲珠　胴帯有　帯先に鈴	斜め上・棒突
なし	なし	なし	なし	背・尻・胴側面に特異な繋構造	斜め上・棒突
竹管文のある粘土帯のみ	２条の粘土帯による居木	輪	腹下	球形雲珠平行帯帯先に鈴胴帯有	斜め上・棒
方形飾金具の付く粘土帯	２条の粘土帯による居木	輪	腹下	―	斜め上・棒
鈴（左右各２・正面１）	鞍褥・下鞍	壺	腹下	雲珠　帯先に鈴　胴帯有	斜め上・棒
馬鐸（左右各１・正面１）　円形粘土板	鞍褥・下鞍	―	腹下	鈴付き円盤雲珠	斜め上・棒
鈴（左右２・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹下	鈴付き雲珠　帯先に鈴	斜め上・棒
方形飾金具の付く粘土帯	２条の居木の剥離痕あり	輪	―	―	―
鈴（左右各１・正面１）	２箇所に居木の剥離痕あり	壺	腹上	―	―
鈴（左右各１・正面１？）	前・後輪（？）のみ	壺	腹下	―	跳ね・尖
鈴（左右各１・正面１）	２条の粘土帯による居木	輪	腹下	半球形雲珠　左右後方に鈴	―
鈴（左右各１・正面１）	前・後輪のみ	輪	腹下	雲珠部円形剥離痕　菱形杏葉	―



馬形埴輪の大きさ

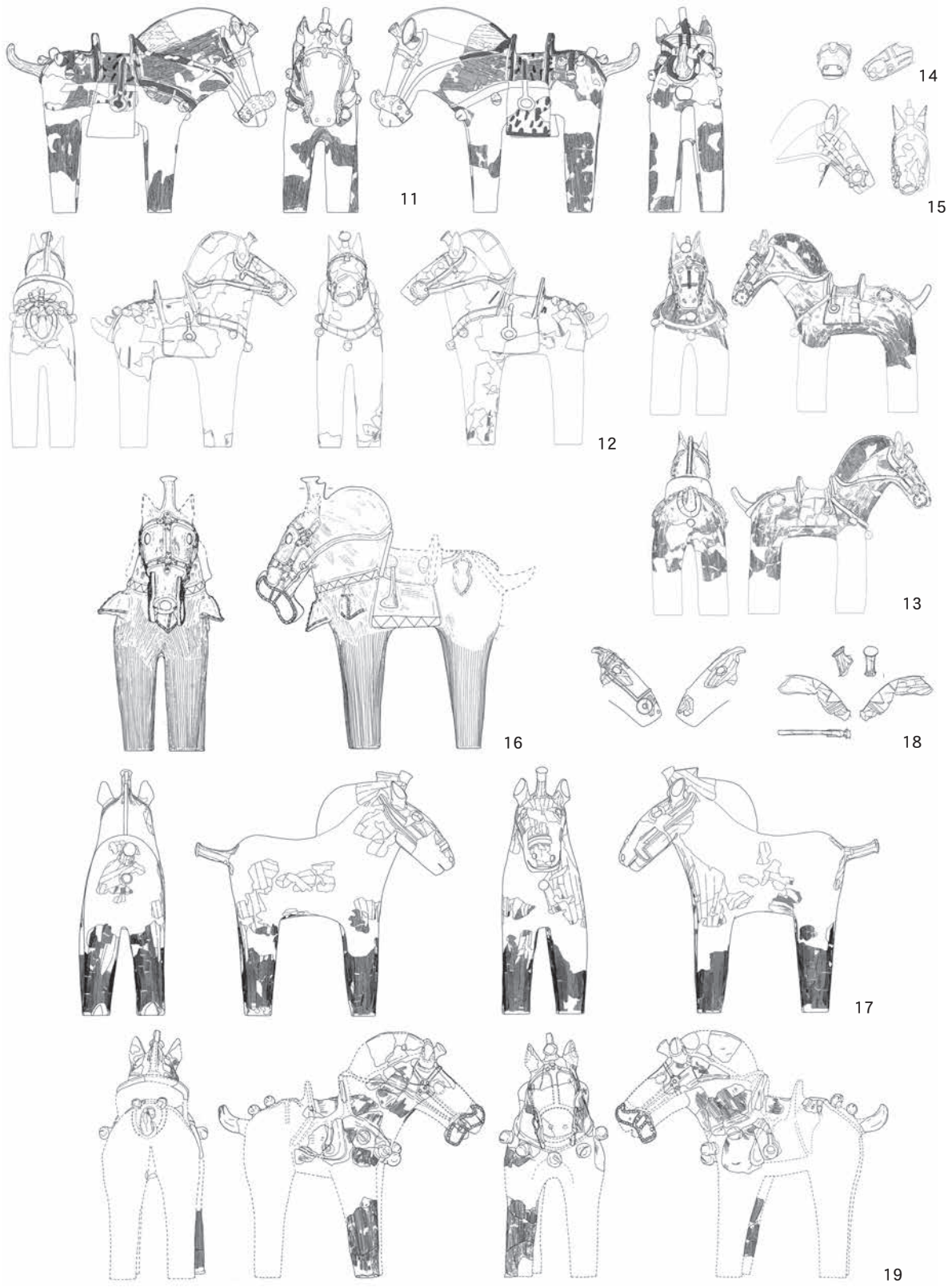
（記号は、×：第Ⅰ期　▲：第Ⅱ期　■：第Ⅲ期　●：第Ⅳ期の馬形埴輪を示す。それぞれの数字は第４表の各時期の番号と対応する。）

期	番号	資　料　名	長さ(cm)	高さ(cm)
Ⅰ期	1	古海松塚11号古墳	101	60
Ⅱ期	1	白藤Ⅴ−４号古墳	62.2	51.2
	2	上栗須薬師前６号古墳	66.5	59
	3	白藤Ｐ−６号古墳	70.6	56.8
	4	井出北畑９号古墳馬２	77	64
	5	井出北畑９号古墳馬１	90	65
	6	保渡田Ⅶ遺跡馬２	94.2	72.2
Ⅲ期	1	多田山４号古墳	66	59
	2	諏訪下３号古墳馬１	70.2	58
	3	諏訪下３号古墳馬２	69.8	62.8
	4	東博亀岡出土品	69.9	64.4
	5	多田山２号古墳	68	71
	6	高林西原８号古墳	72.6	69.2
	7	塚廻り４号古墳馬２	76.7	70
	8	東博県内出土品	77.7	71.2
	9	成塚石橋２号古墳馬２	75	74
	10	東博石山出土品	77.2	78.9
	11	後閑３号古墳	86.5	80.5
	12	諏訪下23号古墳馬１	87.2	81.8
	13	下里見諏訪山古墳馬１	86	81.8
	14	東博大泉町出土品	85.5	83
	15	諏訪下23号古墳馬２	83.2	83.4
	16	諏訪下30号古墳	72.6	84.2
	17	上芝古墳	91	90
	18	塚廻り４号古墳馬１	102.2	85.6
Ⅳ期	1	神保下條１号古墳	94	84
	2	神保下條２号古墳馬１	105	86
	3	神保下條２号古墳馬２	95	87
	4	内堀Ｍ−４号古墳馬２	85.5	95
	5	中原Ⅱ遺跡１号古墳馬２	90	99
	6	中原Ⅱ遺跡１号古墳馬１	94	102.8
	7	大道西遺跡	96	104
	8	内堀Ｍ−１号古墳	102.2	94.8
	9	内堀Ｍ−４号古墳馬１	101.2	102.5
	10	安坪６号古墳	106.4	104.2
	11	雷電神社跡古墳馬４	111	103.2
	12	雷電神社跡古墳馬３	112.6	104
	13	雷電神社跡古墳馬２	119.4	116.8
	14	東博白石出土品	108.5	115.2
	15	オクマン山古墳	110	115
	16	小泉長塚古墳	109.2	121.6
	17	雷電神社跡古墳馬１	123.5	121.7
	18	綿貫観音山古墳馬２	132	132.4

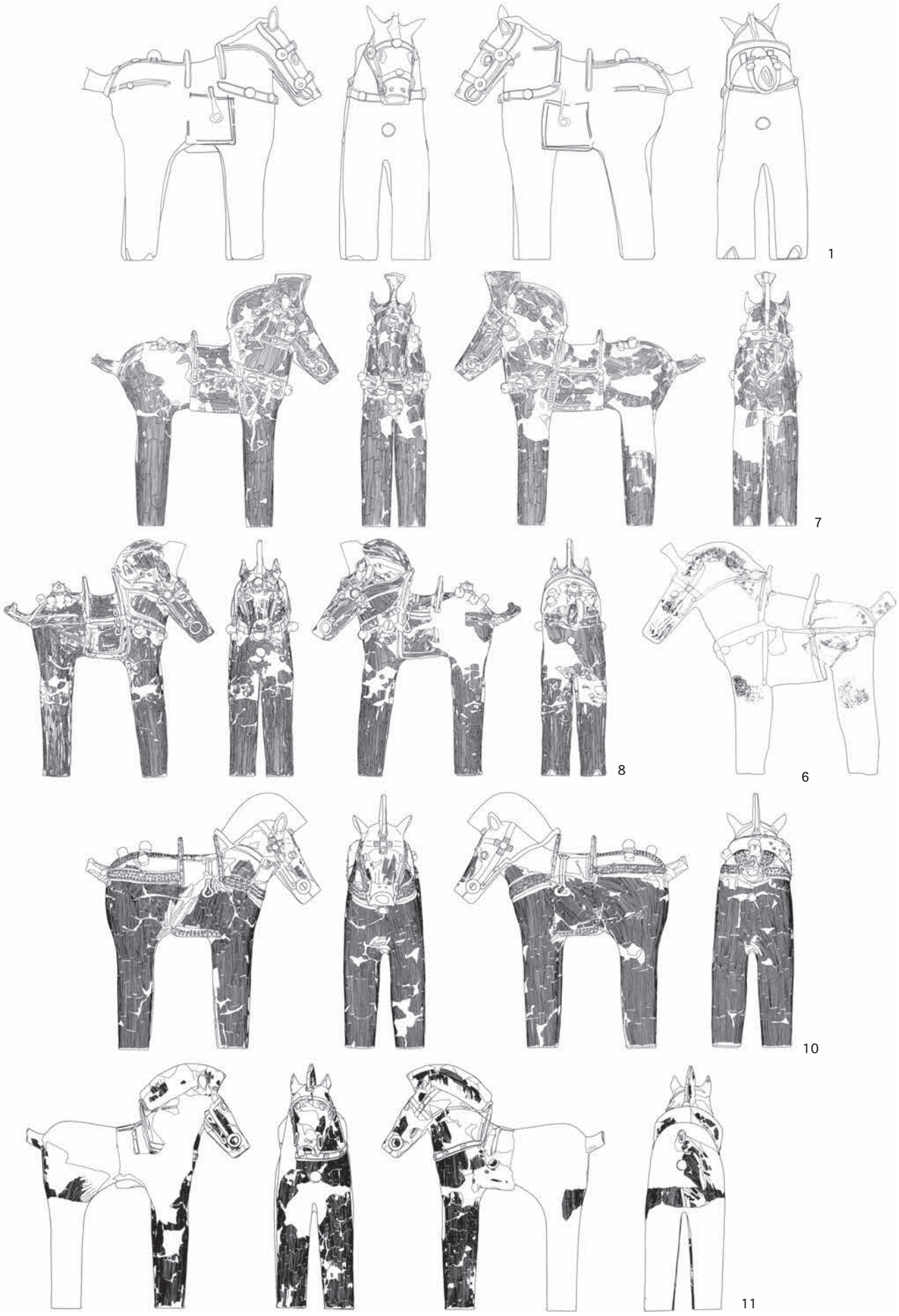
馬形埴輪の大きさ一覧表（各時期の馬形埴輪の番号は、第23図の各時期の番号と対応する。）

第Ⅱ期の馬形埴輪（S＝1／20）

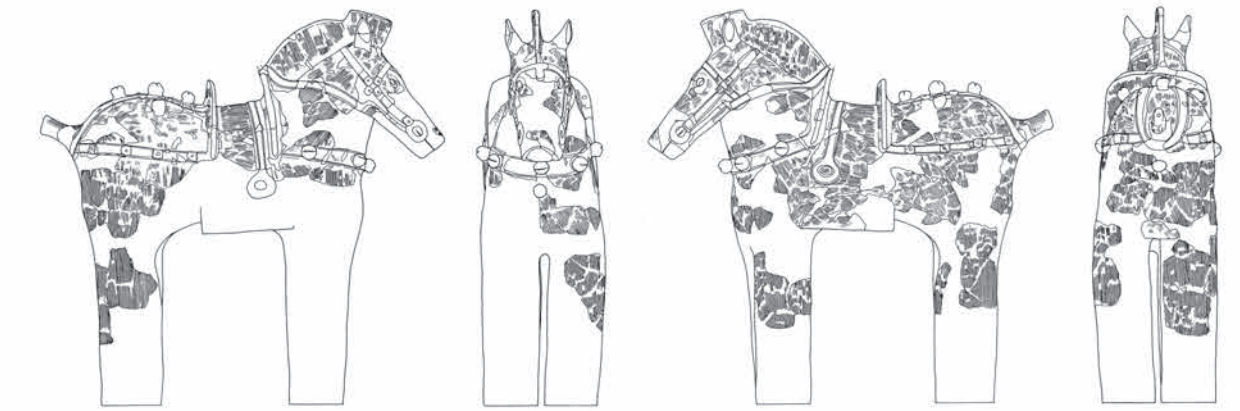
第Ⅲ期の馬形埴輪（1）（S＝1／20）

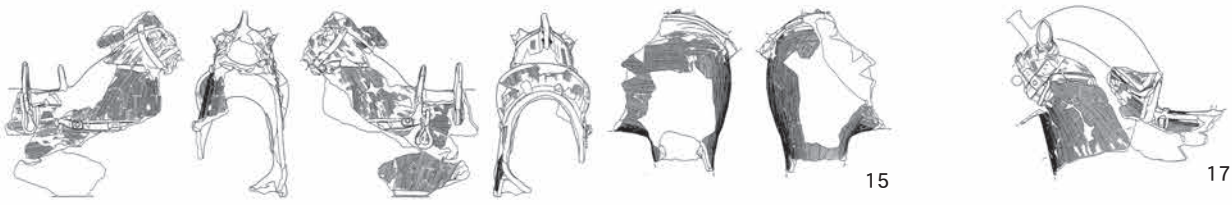


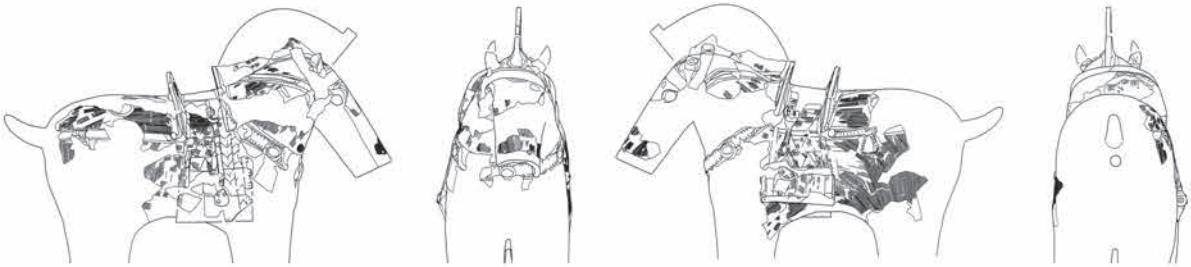
第Ⅲ期の馬形埴輪（２）（Ｓ＝１／20）

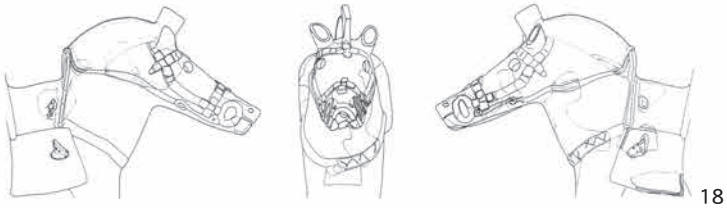


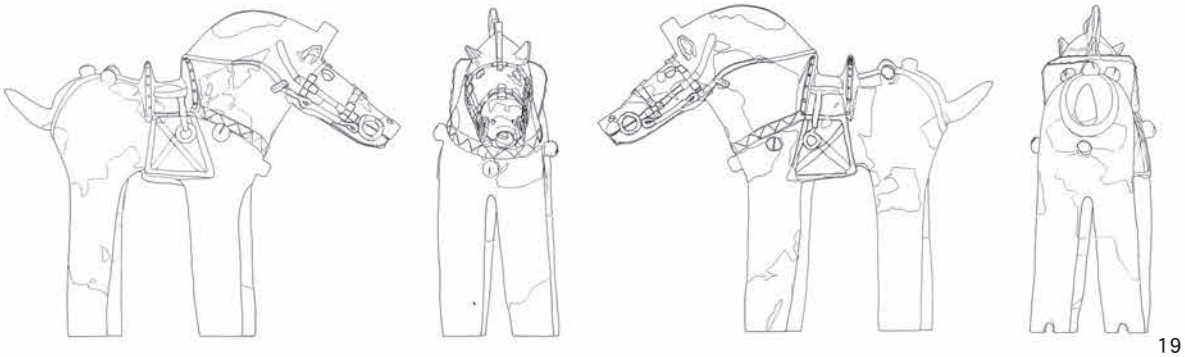
第Ⅳ期の馬形埴輪（１）（Ｓ＝１／20）

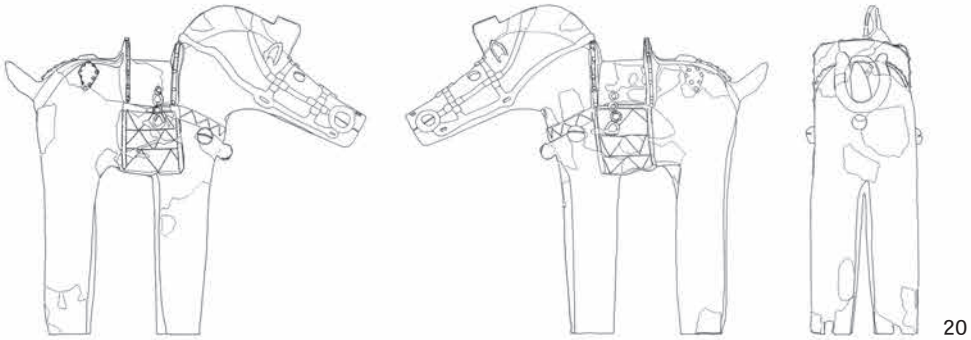




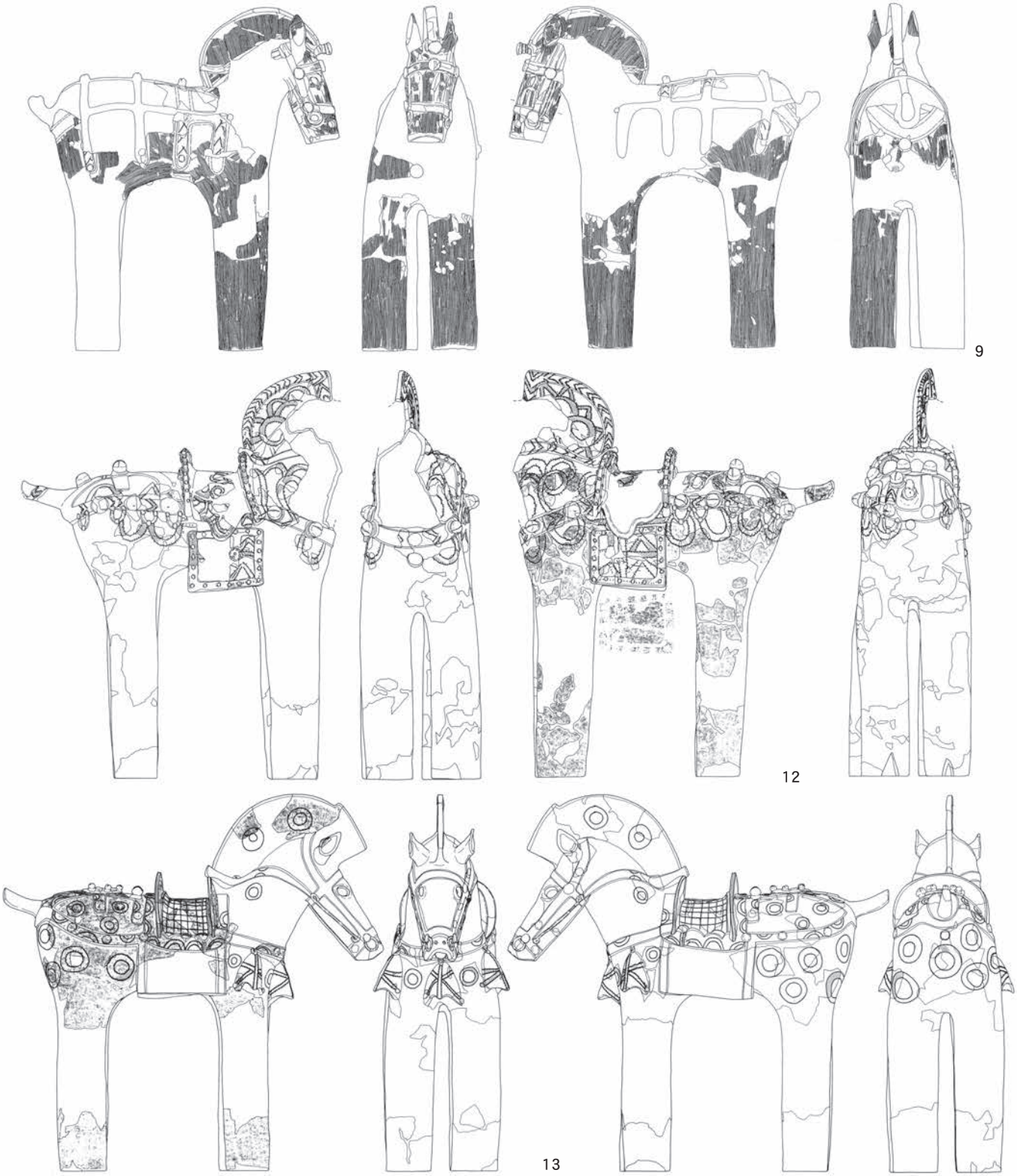








第Ⅳ期の馬形埴輪（２）（Ｓ＝１／20）



第Ⅳ期の馬形埴輪（3）（S＝1／20）

3　講座・赤城山南麓の考古学2016

シベリアを旅した石器

石　田　典　子（群馬県立歴史博物館）

はじめに

今日は「シベリアを旅した石器」と題しまして、旧石器時代の１万５千年くらい前の石器について、お話をしたいと思います。

本日の話は、まず旧石器時代はどんな時代だろうかという話を簡単にし、旧石器時代の終末期に登場する細石刃石器群の特徴について、最後に前橋市上細井町にあります新田上（しんでんかみ）遺跡の発掘調査と発見された石器についてという内容で進めていきたいと思います。

１　旧石器時代って？

まず初めに、旧石器時代は日本列島の場合、３～４万年くらい前から１万５～６千年前までの時期をいいます。旧石器時代は人類の歴史の中で最も古い時代です。この時代は非常に長く、人類の歴史を１ｍのものさしに例えると、実に99㎝以上が旧石器時代となります。人類の歴史を考える上で、この時代の研究は欠かせないと言えます。

旧石器時代の環境　旧石器時代は非常に寒い氷河期でもありました。最寒冷期のおよそ２万５千年前から２万年前には現在よりも６～７℃気温が低かったと言われています。前橋の辺りですと、現在の尾瀬あるいは北海道の釧路辺りの気候だと考えられています。気温がこのように低いと、地球上の水分が氷となって陸地に上がります。そのため、海水面が現在よりもおよそ100m、もしくはそれ以上低かったと言われています。さらに日本海が今よりも小さくなっていたため、当時の日本列島は乾燥し、雪は少なかったと推定されています。

旧石器時代はマンモスに代表されるように、大形動物がいた時代です。そのほかに、野尻湖で有名なナウマンゾウ、ヤベオオツノジカ、野牛の仲間のハナイズミモリウシなどもいました。そして、旧石器時代の後半になってくると大形動物が姿を消し、ニホンジカなどの小形動物にかわっていきます。

一方、植生について、宮城県仙台市の富沢遺跡は約２万年前の樹林や植物がそのまま発見された遺跡として大変有名です。この遺跡の調査成果によると針葉樹が大部分で、下草にはササなどが生えているというような景観が旧石器時代の風景として推定されました。

旧石器時代の遺跡を発掘調査した時に土壌サンプルを取って、花粉分析や植物珪酸体分析が行われることがあります。伊勢崎市三和工業団地Ⅰ遺跡（註１）では、落葉広葉樹が検出され、針葉樹ばかりでなく落葉広葉樹も一定の割合含まれていることがわかりました。

旧石器時代人　旧石器時代人はどんなくらしをしていたのかイメージが出来ますか。“はじめ人間ギャートルズ”みたいに石斧を担いで、遠くの方では火山が噴火しているというようなイメージがありますが果たしてそうなのでしょうか。

群馬県立歴史博物館では改修工事にあたり、常設展示をリニューアルしました。私は原始展示室の展示製作を担当させてもらいました。その時に旧石器時代の復元画を描いてもらうことになりましたが、どのような絵にしたらいいか、本当に分からないことばかりで難しい作業でした。

旧石器時代の人々は基本的に狩猟採集生活をしていました。先ほど話しました大形動物の狩りをしたり、あるいは木の実を取ったり、植物の根っこなどを掘って食べていたと考えられます。生活道具を持ち、食糧を求めて、季節的にあるいは何らかの理由で、一定の範囲を周期的に遊動する生活を送っていたと考えてられています。ここで少し話が逸れるのですが、縄文時代人も狩猟採集生活をしていました。最近は縄文時代にマメ類の栽培が行われていたという研究もありますが、やはり狩猟採集が生活の中心でした。旧石器時代人と縄文時代人の違いは、移動、遊動している狩猟採集民は旧石器時代人。そして定住している狩猟採集民は縄文時代人と大きく考えられていただければ分かりやすいかと思います。

２　細石刃石器群とその時代

次に細石刃石器群についてお話します。細石刃は旧

石器時代の終わり頃に登場する小さな石器のことです。

群馬の場合はAs-YP、浅間板鼻黄色軽石という１万４千年くらい前に浅間山から噴出したといわれる特徴的な軽石がありますけれども、その直下で見つかることの多い石器です。まさに旧石器時代最後の石器です。

細石刃は長さ１～５㎝、厚さ１㎜程度の小形の石器で、石器の両脇が剃刀の刃のように薄く、動物の角などに複数はめ込んで槍先として使ったものです。この柄の部分は、日本では発見されていませんがヨーロッパなどで発見されているものを見ますと、柄に溝を掘って細石刃をはめ込んでいるのがわかります。

細石刃は非常に優れた石器で、少ない石材で効率よくたくさんの道具をつくることができます。もし使って欠けてしまったとしても、壊れた部分だけ取り替えればいいという大変便利な石器です。イメージとしてはオルファという替え刃式カッターに近いです。

北方系の細石刃石器群　細石刃石器群は日本列島では大きく分けて２種類発見されています。まず１つは北から南下した北方系と呼ばれる石器群です。細石刃核の形は舟底のような形をしています。そして、前橋ではこの石器がたくさん見つかっています。鶴が谷町の柳久保遺跡群頭無遺跡、前に並んでおりますのは頭無遺跡の石器です。また、鳥取町の鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡、上細井町の新田上遺跡の石器群も北方系です。そして、太田市の八ヶ入遺跡も同様の石器がたくさん発見されたことで有名な遺跡です。

石器群の中身を見ますと、組み合わせて槍にした細石刃と舟底形の細石刃核のほか、先端に特徴的な加工を入れる彫刻刀形石器や石器の両側に加工を入れるスクレイパーと呼ばれる石器があります。これらの石器群を見ると、硬質頁岩と呼ばれる群馬では産出しない石材を好んで使用していることがよくわかります。

南から来た細石刃石器群　続きましてもう一方の南から来た細石刃というのがあります。これも細石刃核が特徴的な形を持ち、円錐形または角柱形をしています。こちらの石器群も前橋にあり、市之関前田遺跡です。この石器は黒曜石製で、先ほどの北方系とは全く違うやり方で細石刃をとっています。

もうひとつの北方系の細石刃石器群　先ほど日本列島には細石刃は２種類あると言いましたけれども、群馬にはもう一つあります。北方系と呼ばれるものと石器の形は似ているのですけれども、ちょっと違うというものです。これらは茨城県の北部から群馬県辺りの北関東の山沿いに分布しています。これらは地元の石材でもって舟底形の石核を作ります。地元の石というのは黒色安山岩と呼ばれるものです。前橋市には地元の石材を使って作るという第３の細石刃石器群もあり、柏倉吉見沢遺跡や桝形遺跡、龍ノ口遺跡です。いずれも赤城山南麓にある遺跡です。図１は県内の主な細石刃石器群の遺跡の分布を示しています。群馬県地域では細石刃石器群が山沿い、特に赤城南麓を中心に分布しているということが分かります。

本日は細石刃石器群の中でも北から南下してきた石器群を中心にお話したいと思います。北方系細石刃石器群は北海道から東北・関東地方まで分布しており、群馬県地域は南限に近いということができます。さらに視野を広げてみますと、これらの石器群はシベリア・極東・中国北部・日本列島のほかに北米にも分布しています。遺跡の多さから、起源はシベリアのバイカル湖周辺と考えられています。

荒屋型彫刻刀　北方系の石器群は荒屋型彫刻刀を伴うことが多いです。荒屋型彫刻刀は非常に特徴的な石器で、薄い石の欠片を材料にして、腹面側から加工をいれまして、だいたい周囲をぐるりと加工します。その後、石器右上から左下に向かって、彫刻刀面をつくり出します。荒屋型彫刻刀は新潟県長岡市の荒屋遺跡からこの石器が大量に出土したことから、東北大学の芹沢長介先生が「荒屋型」と命名されたものです。

後ほどお話しますが、荒屋型彫刻刀は主に彫刻刀面と呼ばれる部分の側縁を使っていたことが分かりました。金属顕微鏡を使って観察したところ、彫刻刀面の側縁部を用い、皮をなめしたり、骨を削ったりしたことが分かりました。刃部が鈍くなったり、あるいはつくった時に思った角度ではなかったりするとまた同じように叩いて直すということが出来る石器です。細石刃と同様、彫刻刀形石器もまた機能的・効率的な優れた石器といえます。

～休憩～

３　前橋市新田上遺跡

前橋市新田上遺跡の調査成果について報告させていただきます。この遺跡は群馬県の蔵文化財調査事業団が2012年に発掘調査をしました。調査原因は、上武道路を造るための事前調査です。現在は整理作業を終えまして、2015年３月に調査報告書（註２）が刊行されています。

遺跡は赤城山南麓に位置し、地形的には赤城白川によってつくられた白川扇状地上に立地しています。この扇状地ができたのはおよそ２万年前といわれていますが、白川扇状地ができて、数千年後に旧石器時代人が遺跡にやってきたと考えられます。また、新田上遺跡から南東約2.5㎞の所には鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡があります。

地形を詳しく見ますと、赤城山から流れてくる白川のほかにも小さな川がたくさんありまして、概ね北から南へ流れています。これらの河川がつくり出す谷と台地が繰り返し見られる特徴的な地形で、新田上遺跡は台地上に立地しています。

旧石器時代の石器は100点余り出土し、これらはいくつかのまとまりをもっていました（図２）。石器群が出土した層位は１万４千年前くらいに浅間山から噴出したYPという軽石の直下です。出土した石器は全部で109点です。旧石器時代の石器としては、それほど多くない点数ですが、石器群の内容はよくまとまっていました。

出土した石器は、細石刃が１点、細石刃核が４点、荒屋型彫刻刀を含む彫刻刀形石器で、スクレイパーなどです。石材には硬質頁岩のほか、利根川でも採れる黒色頁岩、ホルンフェルスなどが見られます。細石刃と細石刃核、荒屋型彫刻刀といった北方系の石器群に特徴的な石器は全て硬質頁岩でした。

ひとつ特徴的な石器がありました。報告書では石製品としたもので、大きさは10㎝くらいです。下は欠けているため全体の形はわかりませんが、表面には磨かれた痕跡がはっきりと観察できます。何に使ったかよくわからないのですが、非常に興味深いものです。

４　石器使用痕分析とは？

新田上遺跡から出土した石器を対象に使用痕分析をしました。その結果についてご紹介したいと思います。まずは、石器使用痕分析について話します。石器使用痕分析は石器の表面を顕微鏡で観察し、石器がどの部分を、どんな風に、何に使ったのかということを推定するものです。機能を推定するにあたり、複製の石器をつくり、例えば旧石器時代の場合ですと当時の環境の中で使用したと考えられる木や鹿の角、骨、皮、肉を加工する実験をたくさん行います。そして実験した複製石器の観察から得られたデータに基づいて、実際に出土した石器がどのように使用されたか推定するものです。観察は200～400倍、最近はレーザー顕微鏡を使い1000倍くらいで観察する場合もあります。観察する使用痕は微小剥離痕、線状痕、光沢面（ポリッシュ）、摩滅、破損、残滓（さんし）（付着物）の６種類あります。残滓は旧石器時代の石器では通常見られませんが、ほかの５種類について肉眼やルーペ、金属顕微鏡等を用いて観察します。こうした実験使用痕研究は、日本では東北大学のチームが最初に行いました。最近ではいろいろな研究者により、新しい時代の石器についても研究が進められています。

観察する使用痕の中で、加工対象物を推定するのに重要なのが光沢面です。これが特徴的であると何に対してたくさん使っているかというのが推定できます。光沢面はＡ～Ｆのタイプに分類され、おおよそ加工対象物との関連が明らかになっています[註3]。Ａタイプですと草、イネ科植物、まれに竹で実験をすると出てきます。Ｂタイプは木や竹、草に対して使った時の最初段階です。Ｃタイプは水づけの鹿角を加工すると出てくることが多いです。Ｄ１、Ｄ２というのは骨や鹿角について加工すると出てきます。おおよその傾向がどのようなものに対して使ったかが分かります。そして、Ｄ１、Ｄ２というのは顕微鏡で見た時に、石器縁辺に限定して見られる明るい光沢面です。対象物が硬い場合は、石器は対象物に対して少ししか入り込まないので、顕微鏡で見た時は縁辺の限られた所にだけ光沢面が現れます。Ｅ１、Ｅ２というのは皮を加工した場合に高い確率で観察できます。Ｆ１、Ｆ２というのは肉などの加工、あるいは作業の初期段階に見られる弱い光沢です。

次に使用痕分析の手順を簡単にご紹介します。まず初めに石器を石けんで洗います。これは余分な汚れを取り除くためです。普通の固形石けんを手で泡立ててやさしく洗います。次に、アルコールを含ませた脱脂綿で石器の表面を拭きます。これは手の油脂なども観察の邪魔になるので、取り除くためです。事前準備が終わった後、観察を行います。観察では実測図を使って使用痕の範囲や特徴を記入し、写真撮影箇所の記録も行います。

新田上遺跡の石器で使用痕観察を行なったものを図３と表１に示しました。硬質頁岩の石器を中心に観察しました。その結果、細石刃には使用痕がありませんでした。細石刃核、これは石核ですが表面状態を観察するためと、細石刃核そのものを使ったかもしれないと考え見てみました。その結果、あまり表面状態がよくなく使用痕観察に適切ではないという状況でした。

16点を観察して、使用痕と確認できたのは２点の彫刻刀形石器だけでした。これらの石器の使用部位は彫刻刀面と腹面のなす縁辺で、どちらも刃に対して直交する線状痕がありました。一方の彫刻刀形石器ではＥ２という乾燥皮なめしをした時によく出現する光沢面タイプを確認しました。もう一方の石器では、Ｄ１という鹿角や骨などの硬いものを加工した時に見られる光沢面が見られました。このことから、これらの彫刻刀形石器は乾燥皮の掻き取りや骨や角の削りに使っていたことがわかりました。

16点観察しまして、使用痕が認められたのが２点です。観察した石器の数が少ないですが、使用痕の検出率を出すと12.5％ということになります。だいたい旧石器時代の石器の場合はこのくらいです。10点見て１～２点で使用痕が確認できれば普通です。旧石器時代の石器は表面状態の変化が大きいのでそのくらいの割合です。新田上遺跡の分析の結果を荒屋遺跡の使用痕分析結果と比較しました。荒屋遺跡でも174点の彫刻刀形石器の使用痕分析をしておりまして、ないものや不明というものがたくさんありますが、確認できた中で一番多い使い方は乾燥皮のなめしでした[註４]。次に多いものは骨や角を削るもので、同じ分析結果でした。荒屋遺跡と新田上遺跡から出た彫刻刀形石器の使い方はだいたい一緒でした。従いまして、荒屋型を含む彫刻刀形石器は遺跡が違っても共通した使い方をしているということがわかってきています。

最後に、新田上遺跡の石器群についてまとめたいと思います。これらの石器群は北方系の細石刃石器群で、他の北方系の石器群と同様、非常に硬質頁岩という石質と強固な結びつきがあることが確認できました。また、使用痕分析を行った結果、２点の彫刻刀形石器で使用痕が観察でき、乾燥皮を掻き取ったり、骨角を削るのに使用していたことがわかりました。

～質問～

Q　先ほどの使用痕のある石器が10数％しかないというのは、その他の石器というのは使わなくてストックとして持っていたということですか？

A　使用痕が、確認できなかった石器全てが未使用だったとは考えておらず、使用痕を観察するのに不適であった石器も多く含まれているということです。旧石器時代の石器はその後の縄文、弥生時代のものに比べると表面の変化が大きく、観察しにくい状態ものが多いです。

Q　シベリアの方から技法が伝わってきてというご説明いただいたのですが、石材というのはシベリア地方から来たという証明はあるのですか？

A　その石器の作り方、技術がシベリアから北海道・東北経由で本州に入ってきたということで、石材そのものがシベリアから持ち込まれているわけではありません。石材は東北地方日本海側で多くとれる硬質頁岩が専ら使われていました。

Q　使用痕の関係で、昔はよく脂肪酸の付着などを研究されていたと思うのですが、最近はどうですか？

A　最近では脂肪酸分析はあまり実施されず、否定的な研究者の方が多いと思います。

Q　細石刃のはめ込み方は真っ直ぐの刃になるようなはめ込み形なのか、尖がった細石刃で、ギザギザの鋸状になるようにはめ込むのか、その辺はどうですか？

A　真っ直ぐになるようにはめ込んだものと、斜めに装着したものの両方が推定されています。

註

(1)　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『三和工業団地Ｉ遺跡（１）―旧石器時代編―』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第246集

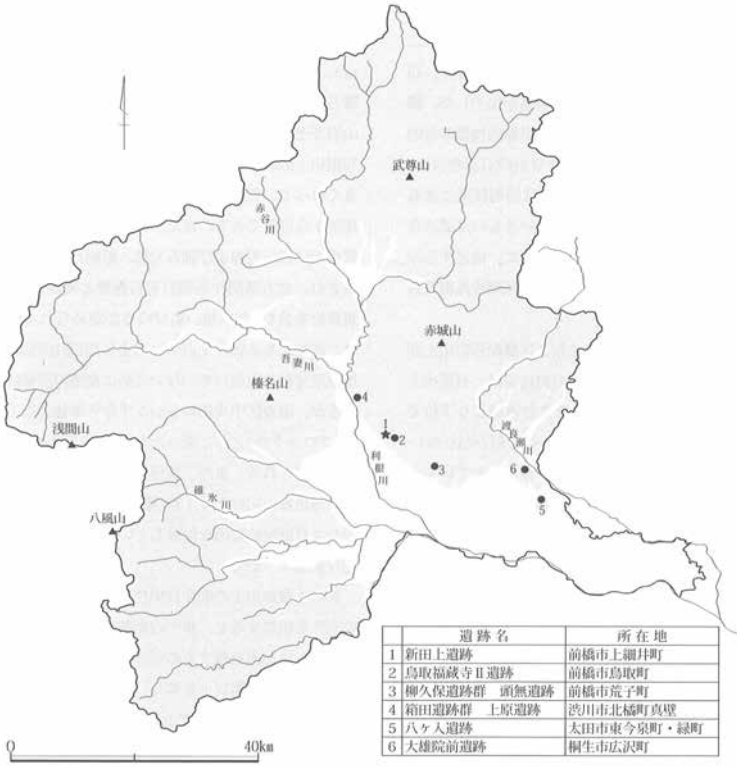
(2)　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『新田上遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第591集

(3)　阿子島香1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社　ほか

(4)　東北大学大学院文学研究科考古学研究室2003『荒屋遺跡』

図表出典

図１～３、表１：(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『新田上遺跡』より転載



	遺跡名	所在地
1	新田上遺跡	前橋市上細井町
2	鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	前橋市鳥取町
3	柳久保遺跡群　頭無遺跡	前橋市荒子町
4	箱田遺跡群　上原遺跡	渋川市北橘町真壁
5	八ヶ入遺跡	太田市東今泉町・緑町
6	大雄院前遺跡	桐生市広沢町

図１　群馬県地域の主な北方系細石刃石器群出土遺跡分布図

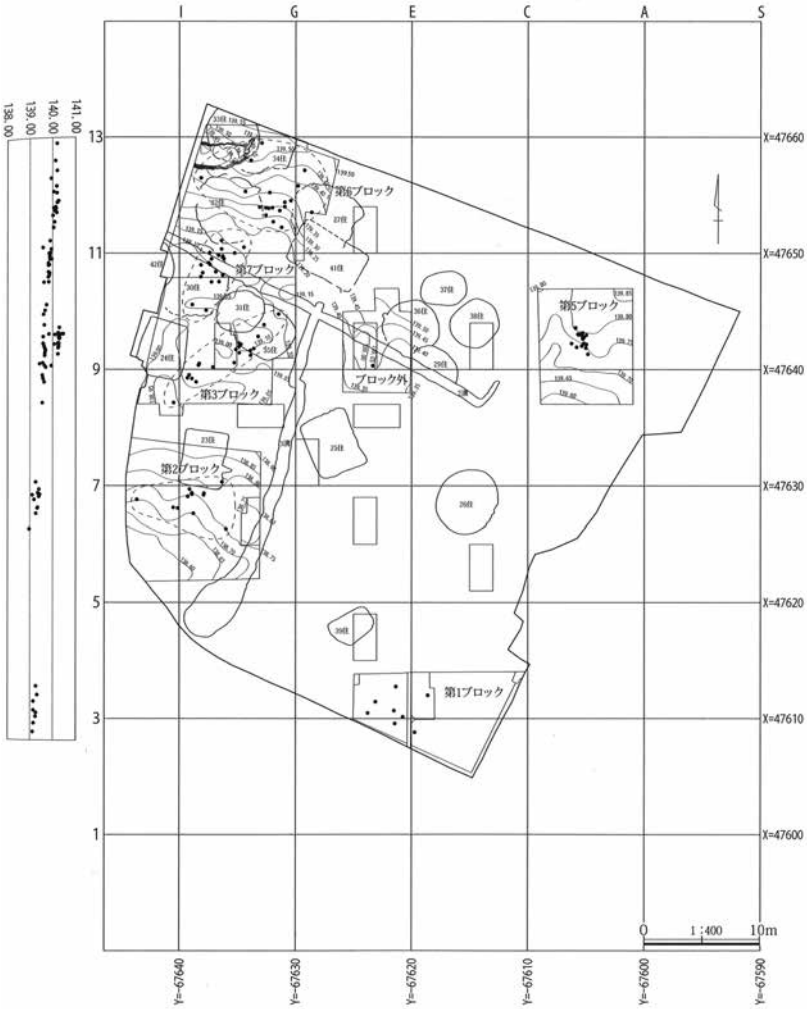


図２　新田上遺跡　石器分布図

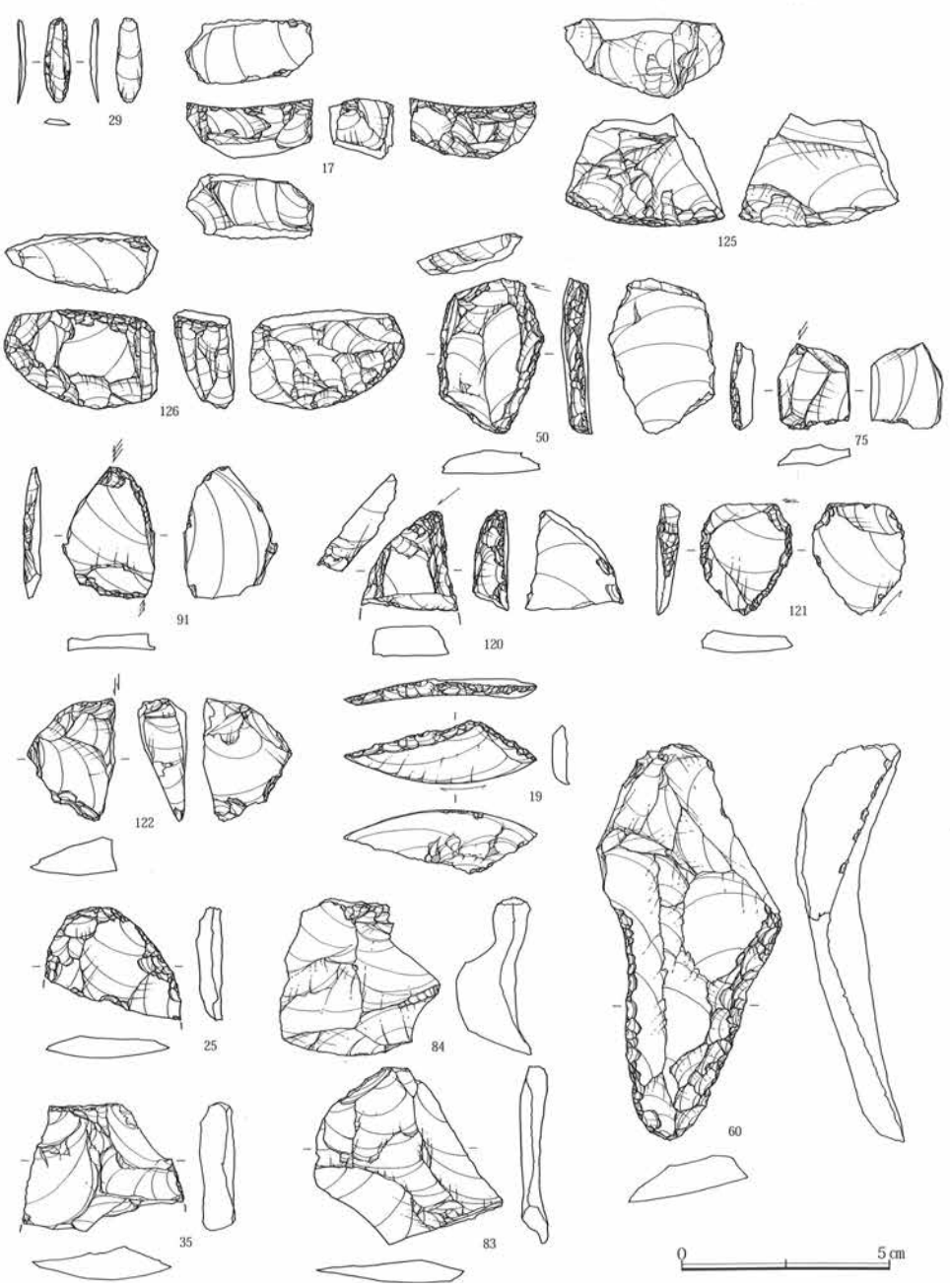


図３　新田上遺跡　使用痕観察を行った石器

★は使用痕が認められた石器

No.	器 種	石 材	出土位置	観察結果
29	細石刃	硬質頁岩	第２ブロック	使用痕認められず
17	細石刃核	硬質頁岩	第２ブロック	表面状態が悪く、観察不適
125		硬質頁岩	縄文以降住居	表面状態が悪く、観察不適
126		硬質頁岩	縄文以降住居	表面状態が悪く、観察不適
★50	彫刻刀形石器	硬質頁岩	第３ブロック	(a)Ｅ２タイプの光沢面を確認。刃部に直交する線状痕・摩滅を伴う。
75		硬質頁岩	第６ブロック	表面状態が悪く、観察不適
★91		硬質頁岩	第６ブロック	(a)Ｄ１タイプの光沢面が点在。刃部に直交する線状痕を伴う。
120		硬質頁岩	縄文以降住居	表面状態が悪く、観察不適
121		硬質頁岩	縄文以降住居	表面状態が悪く、観察不適
122		硬質頁岩	縄文以降住居	表面状態が悪く、観察不適
19	スクレイパー	硬質頁岩	第２ブロック	表面状態が悪く、観察不適
60		珪質頁岩	第５ブロック	使用痕認められず
25	二次加工ある剥片	硬質頁岩	第２ブロック	使用痕認められず
35		硬質頁岩	第３ブロック	使用痕認められず
84	微小剥離痕ある剥片	硬質頁岩	第６ブロック	表面状態が悪く、観察不適
83	剥片	硬質頁岩	第６ブロック	表面状態が悪く、観察不適

表１　新田上遺跡　使用痕観察石器一覧

講座・赤城山南麓の考古学2016　第２回

縄文の美　赤城山麓の縄文中期世界

山　口　逸　弘（公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団）

はじめに

今日は『縄文の美　赤城山麓の縄文中期世界』というお題をいただきました。そして「赤城山南麓の考古学」というシリーズということを聞いていましたので、南麓の縄文時代中期のお話しかなと漠然と思っていました。実を申しますと私、中期土器を勉強して参りましたけれども、注目していたのは、赤城山西南麓、今の渋川市－旧北橘、赤城村の辺りです。私が就職したてのころ、丁度、赤城村の三原田遺跡という大きな環状集落跡が報告書になりまして、それからそれとほぼ同時くらいに房谷戸遺跡という中期前半の集落を掘ることができました。それからしばらくして、当時の北橘村教育委員会が道訓前遺跡という、出土土器が国指定になった大変すばらしい遺跡を調査、報告書刊行をされまして、そういう動きに、直接的にあるいは間接的に関わらせていただきました。西南麓の縄文時代中期遺跡を随分拝見させていただきました。

そして現在八ッ場ダムの調査に、通算10年くらい携わっておりまして、これがまた、あちらにもすごく良い土器がありまして、夢中で見てまいりました。このように赤城山西南麓、吾妻川流域である八ッ場ダムの対象地域を主なフィールドとしておりますから、どうしても長野県や新潟県の土器を参考にするべく、随分出かけては見て歩くという近況です。

ですから、厳密な意味での赤城山南麓の土器はあまり見ていません。いつも、中期土器を見る時は愛でるようにして、見ているのですが、赤城山南麓の中期土器は詳しく観察した記憶がありません。ですから今日は、あまり詳しい解説ができないかも知れませんが、ご勘弁お願いします。

赤城山南麓ということで、群馬県の地図（画１図）を出しましたが、私が今、働いている所は、吾妻川流域で、長野県や新潟県に近い場所でして、八ッ場ダム関連で調査をしている場所は主に長野原町と申します。長野原町という地名からも解りますように、長野県と大変近しい地域でして、出土する土器も長野の影響を受けた土器が大変多いです。ですから、長野の土器を勉強するべく、長野県へ行ったり来たりしてきたのですが、最近、新潟県の方の土器にも似ているものがあるという事が解って来ました。これはおそらく、三国峠を越えてくるよりも、長野経由で新潟の土器が入って来るのではないのかという事を考えています。

さて、群馬県の地図でこの丸で囲っている所が縄文中期の遺跡がたくさん調査された所で、色を変えたここが南麓です。私が今まで見てきました西南麓といいますと、房谷戸遺跡、道訓前遺跡、三原田遺跡などがあります。あとは、県北の利根川上流では旧月夜野町の見沢遺跡、こちらはあまり知られていませんけれど、結構な良い土器がたくさん出土しております。次に、西毛地域といっております、群馬県の西部で鏑川・碓氷川流域です。主に上信越自動車道建設の前に調査された新堀東源ヶ原遺跡や下鎌田遺跡、その後の土地改良関連で調査された富岡市の上屋敷遺跡などが、このあたりで調査されています。あとは、この榛名山の辺りです。詳細が不明ですが、おそらく中期遺跡があるだろうと思い、グループにしております。榛名山の火山灰や泥流に覆われている地域でして、古墳時代の遺跡は随分調査されていますけど、その下の縄文時代の遺跡はなかなか解っていません。しかし、少しずつですが土器が出土していますので、ここも良い遺跡があるに違いないと期待して、一つのグループにしております。

今日は、赤城山南麓の縄文時代中期遺跡を中心に、先日、私も勉強がてら土器を拝見させていただきましたので、その辺りを報告させていただきます。

１　縄文時代中期概観

その前に、私はこういうお話しをする前に、縄文時代中期とはどういう時代かを簡単に解説することにしています。

縄文時代中期というのは、狩りで獣を捕ったりするような社会ではなくて、高度な狩猟採集社会という事

です。主に植物を生活の糧にしていたと理解して下さい。植物というのは、クリとクルミ、イモ類、球根類などを主食にしていたのだといわれております。実際に、シカやイノシシ、動物を捕まえるにしても、それなりの労働力が必要です。私が行っている八ッ場でもイノシシが結構出てくるのですが、ちょっとちょっかいを出すと、こちらに向かって来ます。これが結構、怖いです。現代でもこのように危険を伴うので、縄文人といえども、狩猟の方は稀に行う程度で、普段はクリ・クルミという木の実を採っていたと思います。

レジュメの１図に示しましたが、縄文時代中期－今から約5000年前。この年代も今は科学分析が複雑化し、数値が前後していますが、概ね5000年前と覚えていただければ良いかなと思います。

今日お話しするのは、この図の右にあります中期の勝坂式・阿玉台式から加曽利Ｅ式の間になります。これは関東の土器編年を軸にした図ですが、私たちが使う用語では、中期中葉～中期中葉末・中期後葉初期、つまり中期のほぼ真ん中あたりの土器の様子ということになります。

縄文中期というのは、レジュメ２図にも挙げましたが、小山修三さんが作成されたデータ（小山1984）ですが、全国の遺跡数から集落の割合を割り出して、当時の人口密度を測りだしたグラフがあります。これをみても解りますが、縄文中期になりますと、どの地域も集落が増えます。これは群馬も一緒です。前期でも増える傾向は見られるのですが、やはり中期の方が遺跡数は多いようです。それだけ、人口は多くなっているということです。ちなみに最近の研究も、その人口を維持するのにどういう生活様式をしていたのかという研究方向です。小山さんの研究はその端緒だったようです。

話しを戻しまして、レジュメ３図に挙げましたのは、長野県北村遺跡で行われた同位体分析という科学分析のデータです。出土した人骨を調べて、どういう食べ物を採っていたかを調べたグラフです。ここのＣ４植物というのはイネ科を指します。北村遺跡の人骨はＣ３植物と草食獣の間の辺りを示しています。Ｃ３植物というのはクリなどの木の実類、草食獣はシカやイノシシなどを指していると言われています。

レジュメ４図のイラストは、長野県御代田町川原田遺跡の報告書から転載したものです。縄文時代中期は、こういう食料だったに違いないというイラストですので、今回はお借りして掲載してみました。イラストの下の方にカエルがあります。カエルも食料として描くのなら、是非イモムシなども描いて欲しいなと思いますが、ちょっと気持ち悪くて、描かなかったのでしょうね。このように、自然に接する中で食べやすい食料、毒ではない食料を積極的に摂っていたと思います。

その中で、クリ・クルミは縄文人が集落を作る時に切り拓いた山野に大変生えやすい植物で、「桃栗三年、柿八年」というようにクリは３年もすれば、実がなってきますので、植物を主とする生活様式では大変うってつけの食べ物だったようです。

余談ですが、クリ・クルミの他に、ドングリも食料の一つだったようです。群馬の事業団もかつてドングリを使ったクッキーのような縄文食を皆さんに振る舞ったことがありまして、皆さん珍しがって召し上がってくれるのですが、そのうちいつの間にか、ゴミ箱に縄文クッキーが捨てられていました。私も食べてみたんですけど、苦くて捨てられるのは仕方ないかなと思います。これを見た栃木県の埋文事業団の職員の方が、あちらの催し物の時に、クリとクルミで作ったクッキーを振る舞いまして、これは大変好評だったようです。

栃木県はトチノミと言いますけれど、トチノミは縄文時代中期ではそんなに食べられていません。

ドングリと同様にアク抜きが必要ですし、手間もかかるため敬遠されたかもしれないのですが、縄文時代後期になって、気候が少し冷えてきてくる頃に、トチノミが人間社会の近くに生えるようになったようです。そのころから、縄文人もトチノミを食べるようになったようです。おそらく、アク抜き技術が発達したのだと思います。

実際、本当にクリやクルミが遺跡から出土しているのか？という素朴な疑問がありますが、レジュメ５図にありますように、群馬県内でもクリやオニグルミが縄文前期の遺跡－安中市の遺跡から出土しております。その他にエゴマを固めたものが出土しています。左端は、「縄文クッキー」と呼んでいますけど、焼いたものが出土しております。このクッキー、中央に凹みをつけたり、裏に模様をつけたり、大変優れたものです。このように、安中市教育委員会の熱心な調査のお陰で、植物性の加工品が出土しております。私も発掘調査をしていて、クルミやクリの欠片が出土してくるのですけども、こんなにまとまって出てくることもないのです。もう少し丁寧な調査をすればいいのです

が、なかなか上手く生きません。

また、クリはとても堅くしっかりした材料です。なので、竪穴住居の建築材－柱などに使われていたようです。このように、食料や建築材などの様子が解ってきますと、私たちが目にする復元図が描けます。画面に挙げました絵（画面２）は、これは知り合いに描いてもらった、集落の景観復元です。

竪穴住居の建築材にクリやカヤを使って、外には木の実などの食料を干しています。周辺の植物は、落葉広葉樹を初めとする二次林－人間生活に密着した植物で構成されています。

縄文人の体型や衣装の復元図も色々試みられています。縄文人の体型―特に女性の体型は栄養的にもスリムだったのではないかとか、もっと豊満だったんじゃないかと色んな意見を聞きます。先ほどグラフを紹介した長野県北村遺跡ですけど、出土した人骨から復元した様子を読みますと、山沿いの集落という原因もあるようですが、斜面を登り降りしていることもあり、女性も下半身などががっちりした体型だったようです。

余談だらけで脱線しながらですが、縄文時代中期の集落の様子はまあこんな感じと想像してください。

２　赤城山南麓の中期遺跡

赤城山西南麓としました、旧赤城村や北橘村、実はここに私の職場でもあります埋文事業団があります。地の利もありまして、若い頃は、赤城村や北橘村の中期遺跡の見学などはいつも行っておりました。

こちらの、旧宮城村、大胡町、あと前橋市芳賀地区などは、なかなか見に行かなかったのですが、これも私事ですが、私はこちらの芳賀団地に住んでおりまして、そのくせ、この辺りの土器をあまり見ていないのは、ひんしゅくだなと思いますけれども、反省を踏まえて、定年後はこの辺りの土器を見ていこうかと思います。

画面では、今日取り上げる五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡にドットで位置を示しています（画面３）。さらに、赤城山西南麓から南麓を便宜的に北橘・赤城地域、芳賀・富士見地域、宮城・大胡地域、桐生・大間々地域（レジュメ６図）に分けたのですが、これは私が勝手に分けたので、おそらくこの辺りは一帯とした縄文時代中期の文化圏だったと思います。今日はその中の一つである、芳賀・富士見地域をご紹介していこうと思います。

今日お伝えする大事なことを最初に書いておきます。赤城山南麓域－芳賀・富士見地域は他地域との交渉や移動に大変楽な地域ということです。当時は今より遙かに樹木が茂っているとは思いますが、それでも緩やかな斜面地形で、隣接地域との連絡－コミュニケーションが極めて簡単だと思われます。一方私が今、勤めています吾妻川流域などは結構な斜面が展開していますから、他地域との連絡はなかなかできるものではありません。それでも、吾妻川流域の縄文人は、なんとかやっと、長野から行ったり来たりしているのですけれども、それから比べると、赤城山南麓域は平坦地に近いですので、どんどんいろんな情報が入ってくる、そういう地域だと思います。このような特性が赤城山南麓の大事な利点です。南麓ですから日照も良く、当時から生活するのにも最適の場所です。

それでは五代伊勢宮と五代深堀遺跡の出土土器の紹介に移りたいと思いますけど、なぜこの二つの遺跡を選んだかと申しますと、先ほども言いましたように、私の住んでいる芳賀地区にある遺跡でして、距離的にも大変近いので選んだのです。あまり深い意味はありません。

３　五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡

今日ご紹介いたします、五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡。これが芳賀団地でこちらが芳賀小学校、これが芳賀中学校。鳥取町にも住宅団地があって、その下に工業団地が随分建ち並んでいる所であります。その工業団地の事前調査という事で、この２つの遺跡が調査されています。この数年、何回も調査されておりまして、縄文時代以外にも古墳時代の集落跡なども出ております。ちなみに、少し上は上武道路が走っておりまして、こちらは事業団が調査したのですけれども、残念ながら縄文中期はあたりませんでした。なぜか前期ばかりあたっております。おそらく縄文前期の集落のゾーンと中期の集落ゾーンは少し標高差があるようです。上武道路は、前期の集落ゾーンのある標高を走っているようです。これは、赤城山の西南麓でも同様でして、関越道の調査では縄文前期の集落ばかりがあたっていました。少し標高の下がった場所を調査したときに、中期があたり、それが房谷戸遺跡という遺跡です。１つだけ中期集落があたり、後は全部前期だったのが関越道新潟線でした。こちらの芳賀地区も上武道路のこの部分が前期のゾーンで、少し外れた下の部分に中期のゾーンがあるのだろうなと思います。ただ少し離れた上の住宅団地のあたりにも、中期のゾーン

がありますので、お互い関連し合いながら生活していたのだろうなという事が解ります。もちろん、こちらの低い所や高い所にも中期の遺跡があると思うのですが、まだ詳しい様子は解っていませんので、そのあたりは現在、研究からは省いています。これがどんどん解ってきますと、集落の間の距離が議論される事になり、縄文人の「ナワバリ」はだいたい３㎞くらいが単位だろうということも言われています。これはもう少し、研究を重ねていけばと思います。

中期中葉末から中期後葉初期を中心に土器を写していきます。この時期はどういう時期かというと、全国的に土器が錯綜している時代です。装飾が派手になっていく時代です。装飾が派手なので、そちらばかりに目がいってしまい、なかなか時期を特定できなかったり、型式として特定できなかったりする土器がたくさんあります。

「焼町土器」・・・聞いたことがあります。

「三原田式」・・・これは、群馬県の土器と言われています。

これらの土器は、型式として私はお話しすることができなくて申し訳ないです。「何々式」と決定的に話せなくて、せいぜい「何々類型」と言っております。ですから、「焼町土器」や「三原田式」は「焼町類型」、「三原田類型」と言っています。ちょっと専門的で恐縮ですけど、私自身が大事に思っているのは、類型というのは型式より下位の部分で、類型が幾つか集まって型式として成り立つと考えています。型式というのは、皆さんは加曽利Ｅ式とか勝坂式という名前は聞かれた事があると思います。博物館などのキャプションなんかで、よくお目にかかると思います。縄文土器の名称のように思って居る方も多いと思います。

でも、当時の縄文人が「ワタシ、加曽利Ｅ式土器を作ろう」なんて思って作っているわけではありません。「こんな感じの土器を作ろう」「こんな感じが良いよね」という、曖昧な雰囲気の中で作っていると思います。その曖昧な雰囲気の中に、当時の土器作りの規則みたいなのがあるかもしれません。

型式というのは、考古学、特に研究者の人たちがその土器を理解するために、空間的にも時間的にも、区切りをいれるために使っている便宜的な枠組みです。あくまでも研究のための用語です。縄文人を具体化する用語ではありません。

その便宜的な枠の作り方を間違えると、学問の混乱が生じます。ひとつ間違えると、少し似ているだけで、あれも加曽利Ｅ式、これも加曽利Ｅ式、みんな加曽利Ｅ式になってしまいます。遠く仙台の方の土器も岐阜の方の中期土器全部を加曽利Ｅ式土器と呼んでしまったりします。これでは、全部加曽利Ｅ式土器になってしまい、うまくありません。研究になりません。

それは違うだろうと、研究者たちは地域別の型式というのも設定していきます。複雑な文様を示す土器や特徴的な土器を集めて、型式を作っていきます。

そうしますと、また逆に、地域毎に色んな型式ができたりする。土器というのは手作りですから、それぞれに個性があり、その個性のみを選び出すと１個体を１型式に分けてしまう危険も出てきます。そのような学問の混乱を避けるために、私は「類型」という用語を使っています。画面に示しましたように、この「類型」が集まって１つの型式として考えられています（画面４）。型式と型式が重なる部分もあったり、類型と類型が重なる部分があったりします。大変複雑です。また、特徴的な土器群を「類型」と呼んでいるのですが、その特徴的な土器群―「類型」相互が文様の交換をしたりして、さらに複雑な土器の顔付きを見せています。

60歳になって、まだこんな考えを巡らすのですが、色んなジレンマや事実に行き当たってしまいまして、こんな複雑な事を理解することはできない、是非、若い人たちにお任せしたいと思っております。次回このような催し物をされるときは、是非若い方を選んでいただければと思います。

では、土器の写真をご覧いただきます。しばらく五代伊勢宮遺跡の写真が続きます。

私が写真を前橋市の収蔵庫で撮らせていただいたのですが、その際には、本日後ろに座ってらっしゃる小川卓也先生にお手伝いいただいております。バックを白にして本格的に写真は中々撮れません。真夏のすごく暑い日の撮影だったのですが、小川さんのご協力がありまして、私的には良い写真が撮れました。家宝といいますか、お宝写真にして、ずっと持っていようと思っています。

（レジュメ写真１）

これは少し栃木風味の把手です。あちらでも出ています。これも変な形ですが、これも比較的栃木県や茨城県で出ているタイプです。

（レジュメ写真２）

これは前橋の文化財保護課で撮った、白い紙を後ろ

に敷いていないので、ダンボールが映っていたりします。こういう口縁部が平らで、口頸部が内湾しております。下の頸部、この辺りに立体的な装飾を集中するタイプを「三原田類型」と呼んでいます。

（レジュメ写真３）

これはまた、前橋の収蔵庫で撮ったものです。まだ一般化されていない土器の名称ですが、「道訓前類型」と名付けられております。口縁部を火焔型土器みたいな装飾だと言われる方もいらっしゃるのですが、口縁部に派手な装飾を付け、この頸部に半円状の弧線文を当てるのが「道訓前類型」の特徴の１つです。これは大変大きいです。これは良い土器です。これからもどんどん活用して、展示されると思う良い土器です。これは覚えておいてください。

五代伊勢宮遺跡の道訓前類型です。

（レジュメ写真４）

これも変な土器ですね。これは前橋市の文化財保護課で撮らせていただきました。台付土器で、丸い透かし孔や三角の透かし孔があり、埴輪みたいな文様構成の形ですが、こういう事例は今まであまり、私は接していなくて、透かし孔が円形の事例は多いのですが、三角孔と交互に配置するというのも非常に面白いと思います。これは器面全体がピカピカに磨いてあり、綺麗な土器です。どこの土器と言われたら困るのですが、おそらく長野から群馬にかけての土器だろうなと思います。

次は急に、芳賀公民館の写真になりましたが、芳賀公民館にも五代伊勢宮の土器が展示されています。皆さんぜひ出かけられる時には、一番気楽に見る事のできる所ですので行ってみてください。ガラスケースに入っており、見づらいです。写真を撮ろうとしても反射してしまいます。ここも小川さんの協力を得まして、ケースから出して、写真を撮らせていただきました。やはり展示するだけあり、良い土器が多いです。

（レジュメ写真５）

これは勝坂式土器と呼んでいますが、勝坂式土器からかなり変化しすぎています。ただやはり、区画文をきちんと作っている所を見ると、勝坂式土器の系統にあるのだろうなと思います。おそらく南関東から長野にかけて伝わってきた土器が群馬で発展した土器です。

（レジュメ写真６）

こちらの口縁部のこの部分が先ほど言いました焼町土器、焼町類型の文様構成ですが、下の方はやはり勝坂式の文様構成が採用されております。２つの文化の文様構成が融合している土器です。非常に変わった土器です。

（レジュメ写真７）

このようになると複雑すぎて困るくらいです。上の方のこういう装飾、一番近いのは東北地方の装飾です。中空状突起などと言っているのですが、どうしてこんな複雑に作るのか、そういう突起がたくさんあります。中には透かしが繋がっております。これは実測するのは大変です。どうやって立体感を出すのか苦労する土器です。

そして東北地方の装飾を口縁部に設けて、だけど下の方の文様は一応、東北地方のクランク文を充てながら、さらにその間を繋げたりしまして、少し関東っぽい所を見せております。おそらく、東北の土器文様が群馬県で変化して付けられたのではと、想像しています。東北地方のそのような土器文化が入ってくるのは、先ほど言いました赤城山の緩やかな傾斜地が原因していると思います。一番東の桐生や大間々の方から入ってくるもの、例えば足尾の方からも入って来るかも知れません。日光の方からも、来るかもしれません。あとはもっと、平野部をずっと伝ってくるかもしれません。いろいろなルートはあると思うのですけれども、東北の土器の文様構成がスムーズに赤城山南麓に入ってきています。その原因の一つに、赤城山南麓の地形があると思います。

（レジュメ写真８）

こちらも東北系の土器です。ただ胴部は完全に関東の文様構成です。上の方が少し派手々々しいので、アップにしてみました。内側も綺麗に文様をつけておりまして、これも実測が大変です。こういう東北地方の文様の影響を受けた土器が、この五代伊勢宮にたくさん出ているのが特徴の１つです。

次は五代深堀遺跡で、こちらのパンフレットでも同じ写真が使われています。このページにもあります。同じ写真です。報告書から転載した写真ですけれども、五代深堀遺跡も良い土器がたくさん出ております。五代深堀遺跡と五代伊勢宮遺跡、工業団地の中でも隣り合う遺跡で、おそらく同じ集団が中期中葉末に大きい集落を造っていたのだろうなと思います。こちらの写真の方は後からじっくり見られますので、後で見てください。

（レジュメ写真９）

これが「焼町類型」です。五代伊勢宮遺跡にもたく

さん出ているのですけれども、私も飽きるほど「焼町類型」をずっと見てきたものですから、いざ写真を撮る時に小川さんがこれも撮りましょう、と持ってきてくれたのですが、後回しにしてしまって、結局「焼町類型」は撮影しておりません。本当に申し訳なくって、五代深堀遺跡の「焼町類型」で勘弁してください。「焼町類型」、「焼町土器」というのは、隆帯文で弧線文やグルグルと渦巻文を器面いっぱいに付ける土器です。ですから曲隆線文土器などと言われていますけれども、群馬県から長野にかけて集中的に出てくる土器群です。北橘の道訓前遺跡では、この「焼町土器」の立派なものが国指定になっています。ただ、道訓前遺跡の焼町に負けずともっと立派なものが、近頃は各地で報告されていますので、所々の博物館や資料館でお目にかかると思います。

（レジュメ写真10）

これは私たちが阿玉台Ⅲ式と呼んでいる栃木県の方の土器です。このタイプが完形土器で出てくるのは、そんなにたくさんはありません。県内でも10例は無いと思います。五代深堀遺跡では土坑から出土しており、大変感激した土器です。

（レジュメ写真11）

勝坂式土器です。長野や南関東の方で見られますけれども、このタイプの土器は群馬ナイズされたものです。これは赤城山南麓ばかりでなく、西南麓でも見るのですけれども、こういう細長い、鶴と狐のイソップの民話に出てきそうな、細長い形の土器が群馬県で変形した勝坂式土器です。

（レジュメ写真12）

こちらの土器、パンフレットには大木系などと書いておりますけれども、五代深堀遺跡のこれも私は「道訓前類型」の１つだと思っております。ちょっとした変化形だと思います。少し小さいですけど、弧線が鱗のようについております。面白いなと思うのが、鋸歯状口縁。鋸の歯のような口ということです。どこかに、こういう土器があるなと思うのですけれども、例の火焔型土器に近いものがあるかなと思います。実は、ほぼ同じ時期ですが、火焔型土器の文様構成とは全然違います。これを火焔型土器だという人はいません。しかし凄く似ている部分があります。それではなぜ、似ているのか？そのような疑問が出てきます。これを火焔型土器や馬高式と呼ぶのは変です。ではなんと呼ぶのかと言われた時に、とりあえず類型名という事で「道訓前類型」という言葉を使わせていただいております。

展開写真もお見せします。こちらのパンフレットにも使われています。文字が被っていてよく見えないと思いますので、これを見ていただければと思います。こちらの土器を整理された会社が撮影した写真ですが、とても良い写真資料だと思います。きっちり器面を割り付けしておりまして、結構几帳面な人が作ったのだろうなと思います。こう展開写真にすると、この鋸歯状の火焔土器にあるようなギザギザの口縁部と下の弧線文がよく解ります。それから横の隆帯もギザギザとしていて、上と合うような感じです。あと一番下もギザギザしています。これを制作した縄文人が上から下までギザギザにする、そういう意識を持って作ったのだと思います。

五代深堀遺跡の「道訓前類型」です。

（レジュメ写真13・14）

そして、これが大変不思議な土器です。こちらのパンフレットにも展開写真が載っていますけれども、出土状態も載っています。確かこの２個体が同じ土坑から出てきたので、同じ時期だという事が分かります。この「へんてこりん」なこんな土器は今まで類例がありません。何式だと言われたら解りません。こんな土器が出てくるのですから、赤城山南麓はちょっと変だとやっぱり思います。おそらくこれは土器の下半分は欠損しているのですけれども、下半分はシンプルな2,3本の隆帯を、縦に下まで４単位に貼り付けられて、間を縄文が施されるという、シンプルな文様に対し、口頸部にこういう派手な装飾を付けるという事で、類例もなければ名前をつける事ができません。私も類型名を色々付けていますが、「深堀類型」とはまだ言いきれません。これが他の地域でも出てきて、地理的にも１つのまとまりを見せるかなと思ったら、最初に報告された深堀遺跡をとって、「深堀類型」、あるいは「五代深堀類型」というかもしれませんけれども、まだ類例が全然ありませんし、そうこうしているうちに他のタイプの土器を「五代深堀類型」という人が出てくるかもしれませんので、そういうのも学問、研究の中でのちょっとした研究手法にもなっております。

～休　　憩～

４　様々な土器群の共存

群馬県は関東平野のどん詰まりの所にありまして、

周りに新潟県、長野県、福島県、栃木県が北のほうをグルッと巡っておりまして、下は埼玉が接している、そういう地理的条件です。私が群馬に来た時に、群馬というのは土器が吹き溜まる所、土器文様や文化が集まってくる所だと思っていたのですけれども、峠を越えていく人たちが結構いるなという事が分かってきました。今はほとんど常識になって、このように各型式が群馬に集まったり、行ったり来たりしているのだという、そういう土器の流れを考えてきていたのですけれども、それが複雑になってきたなという、どこかの大きな集落を掘る度にいつも変わった土器が出てきて、先ほどの五代深堀遺跡の「へんてこりん」な土器も出てきたりしますと、どう解釈したらいいのか解らなくなってきまして、近頃は、この図（画面５）のように、土器文化が群馬の周りを回っているのだろうと。そして頻繁に、他地域と交渉しあっているのだろうなと思う様になりました。もちろん赤城山南麓も渦のなかにありますし、渦の中心のときもあれば、外れている時もあるだろなと、思っています。これが山梨の縄文人から見ると、この渦が周る循環が、山梨を中心に回っていると思われます。そういう複雑なネットワーク、それが縄文時代中期に存在していたわけです。もちろん馬もなければ、船もそんなにない。もちろん飛行機もありません。高速道路もありません。そんな中で徒歩だけで情報が巡っていくというのはすごく面白い事だと思います。どうやってそういう情報がもたらされるのかというのは、これからも研究を重ねていかなければいけないテーマの一つです。

少し前の研究では土器文様の伝播には、婚姻、要は女性が土器文様の情報を持って、遠く他の地域に嫁いでいくという考え方が主流でした。今もその考え方は基本にあります。その他の考え方では贈り物として、土器の中に贈り物を入れて他の地域に持っていくという事が繰り返されていって、他地域に土器が広まっていくという、考え方の一端が示されています。あと、レジュメにも載せましたが、狭い地域の中でも土器文様の交換があります。土器文様の交換にはどういう背後があるのかというのを考えますと、例えばこの芳賀・富士見の集落と桐生・大間々の集落の中で贈り物があるとした場合、芳賀・富士見の方から桐生・大間々の方に持っていくとなると、何を持っていくのが良いのか、例えばクリ、クルミやクリのクッキーなどを、土器の中に入れて持っていくとしたら、どんな土器が良いのか。という時に、おそらく「焼町類型」などの中で、ちょっと良い土器、見栄えのする土器、そういう土器を選んで持っていくのではないのかなと思います。

もちろん桐生・大間々の人が芳賀・富士見に持っていくとしたら、芳賀・富士見地域にあまりない土器を持っていこうではないかという事で、東北地方の影響を受けた土器－大木系の土器を選ぶのではないでしょうか。そしてお互いに文様が行ったり来たりするのだと思います。

こちらも、レジュメにも書いたのですが、土器を選んで、他の地域に持って行くという行為の中で、「選ばれない土器」があります。選ばれない土器はどういう土器かというと、へたくそな土器です。やはり他人に見せるものに、ちょっと格好悪いものは選ばれないようです。ですからその下手な土器がその集落に残っています。私たちが大きな環状集落を発掘や整理をすると、みっともない土器が結構残っています。少し失礼な言い方ですけれども、小学生が土器作り教室で作るような土器が出てきます。そういうものを見ますと、良い土器が選ばれて、他の地域、隣り合う地域にも、遠隔の地域にも持って行って、ちょっとこれは恥ずかしいよねというような土器は、自分たちだけで使って、人様には見せないようにしようと、したのではないかなと思っています。例えば、地面に埋めて埋甕にして、他人に見えないようにした土器もあるのかなと思っています。

あと、もう一つあって、他地域の人には絶対見せたくない、という土器があります。これは宝物だからそばの地域の人に見せても、少し離れた地域には見せたくないという土器もあります。それが火焔型土器じゃないかと思っています。火焔型土器は関東ではほとんど出ていません。新潟県などに見に行くと沢山出ているのですが、関東－特に群馬県のみなかみ町－旧新治村や旧月夜野町あたりに出ていても良さそうですが、出てきません。私は八ッ場に行っているのも、いつか火焔型土器が出てくるに違いないと思って待っているのですけれども、出てきておりません。火焔型土器というのは、新潟地域の人にとっても、特別な土器だったのだと思います。

新潟県の研究者で、寺﨑祐助さんという方がいらっしゃるのですが、この方も、火焔型土器というのは日常の土器ではなくて、儀礼の時に作られて、煮炊きをして、それでお客さんを接待するのではないかとおっしゃっていた時もあります。ですから、火炎型土器の

多くに煤やおこげの痕跡が付いているそうです。私も、それに近いなと思うのですけれども、実際にもたらされてこない良い土器もあるという事は重要な事だと思います。でも、このようなことを言っていると、明日にでも八ッ場で火焔型土器が出たりするのですけれども、でも今までずっと出てこなかったのですから出てこないと思います。出ない土器を考えるのも一つのやり方かなと、土器研究の突破口になればなと思っています。

これはレジュメにもあります実測図（７図）です。このような実測図を書くのは大変だったろうなと思います。立体的な複雑な文様で、左右に展開もしたりして、苦労したなと思いますけれども、「焼町類型」がこういうタイプです。五代深堀遺跡の報告書図を使わせていただいていますけれども、先ほどの「へんてこりんな土器」もこれが実測図（７・８）です。こういうものと「焼町類型」（５）が一緒に出ております。乱暴な考え方かもしれませんが、一緒に出てくるということは、ほとんど同じ時期だろうという事が判断できます。こちらの「焼町類型」（４）と５は少し派手さが違います。おそらく「焼町類型」もいろんな影響を受けて、このような凄い突起を付けるようになるのですけれども、結構派手に変化をするのですけれども、それに伴って不思議な土器も一緒に出てくるというのが赤城山南麓の芳賀あたりの特徴です。この現象は西南麓でも同じような様子を示しています。これも東北地方の土器と思われるのですが（６）、これは何式と言われても分かりません。本当にこの時期は解らない土器が多いです。型式名や類型名はなかなか判断できません。

その中で私が先ほど触れました「道訓前類型」、これも１つのキーワードになるのではないかなと思い、３つ並べてみました（７図９～11）。９が先ほど紹介しました五代深堀遺跡の「道訓前類型」です。これが五代伊勢宮の大きい土器（10）です。あとのこれは富士見村の旭久保Ｃ遺跡という所で出た土器（11）です。この２つはとても弧線文が特徴的です。少し変化をしているのですけれども、鋸歯文とここの弧線文、それとこちらの不思議な狭い文様帯も特徴だと思います。この「道訓前類型」というのは、おそらく多くの土器群の影響を受けて発生したものだと思うのですけれども、そのためか、変わった土器と共伴するようです。やはり「焼町類型」の新段階と同時期のものだと思います。そういう中で口頸部に粘土紐で突起をたくさん付けた土器も出てきております（12・13）。13の文様構成が先ほど芳賀で見た東北の大木っぽい土器、すごく派手々々しい土器に大変近いものです。おそらくこういうものから「三原田類型」などの群馬県独特の土器に発展していくのだと思います。それはまだ私が思っているだけですが、またこれから勉強を重ねて、土器同士の繋がりを考えていきたいなと思っています。

これが三原田式と言われた端緒の土器（15）ですけれども、口頸部の雰囲気が河童に似ているから河童と言われております。三原田式に関していうと、同じ時期に東関東に中峠式という型式があります。中峠式の研究者達が文様構成から三原田式ではなくて「三原田型深鉢」として類型とした解釈で中峠式の内部に含めて考えております。三原田式と独立した型式として考えるより、中峠式の中の一類型とした理解のほうが、わかりやすいからという理由です。私もそれに近い考えです。あまり型式名をこの時期に、例えばこれは道訓前式、これは感じが違うけど把手の特徴から焼町式、この辺は三原田式だといって、同じ時期に型式名がたくさんあるというのは大変だなと私は思います。しかし、研究者のお考えはそれぞれですから、今後どうなるかは予測がつきません。

「道訓前類型」を二つ並べます（画面６）。左が道訓前遺跡の「道訓前類型」。やはり弧線文がずっとあります。右側が五代伊勢宮の「道訓前類型」です。非常に文様構成が近いものがありますけれども、体部の文様構成が違います。「道訓前類型」が、「三原田類型」への変化の一要因になっていると思いますが、直接的には繋がっていないかもしれません。これからの課題です。

福島県柳津町の石生前遺跡という少し地味であまり知られていませんけれども、少し新潟寄りの会津ですが、新潟との土器の交渉がすごく頻繁な地域です。こんな土器が福島の１つの遺跡に出ているという事で、参考にしていただければと思います（画面７）。先ほどの芳賀公民館の土器にもありました同じような装飾です。ですから、やはり赤城山南麓と福島との交渉があったのだろうなと想像できます。あとは非常に変わったこういう把手を付けて、曲隆線ともいえるような模様をつける土器もあります。キャプションには「冠をつけ、獣面把手をつけた深鉢土器」とあります。大変面白いキャプションをつけておりまして、こちらもすごく神話みたいな説明がついています。真面

目な考古学をやっている人はけしからんと言うかもしれませんが、それはそれで楽しいことなので、柳津町に行かれたら楽しんでいただけたらと思います。これも非常に変わった文様で、この口縁部にこの模様が集中しているという事が分かります。あとこれが向こうでいう火焔型土器です。こういうのがとても特徴だと思います。たしかに火焔型土器にこういうモチーフがあります。キャプションが面白かったです。「襲いかかる蛇の文様をつけた火焔式土器」どれが襲い掛かっているのか、これかなと思っているのですけれども、鶏頭冠という火焔型土器で特徴的の突起があります。その突起が少し退化したような感じで、おそらくこれは会津の人が、火焔型土器がもたらされて来て、それを真似て作ったのかなと思います。このことから、新潟の縄文人は、会津には頻繁に交渉しているようですね。そして、火焔型土器を渡したりしています。反面、群馬に持って来ない。やっぱり変ですよね。

これが国宝になった十日町の笹山遺跡（画面８左）のものです。国宝ともなると写し方がとても芸術的で、小川忠博さんという方が、よく撮ってくださるのですけれども、さすがに私たちが撮るものとは違います。プロの写真家は凄いなと思います。五代伊勢宮や五代深堀の土器も小川先生に撮っていただければなと思います。こちらは、津南町の諏訪前遺跡（画面８右）というこれも立派な火焔型土器です。２個体とも大変似ています。こういう突起やこういう鶏頭冠、それから胴部の垂れ下がった文様。火焔型土器は底部ギリギリまで模様を付けています。関東の土器はこういう事はしません。底部ギリギリまで付けるというと、どうやって付けるのだろうなと思います。今はテーブルがあるので、土器作り教室でも底部ギリギリまで文様を付けられますが、当時はテーブルがありませんので膝に抱え込んでやっているのかなと思います。あとはやっぱり台があったのかなと思います。それでも随分土器作りの作法も違うのだなと思います。先ほど五代深堀で見たギザギザの口縁部も火焔型土器の１つの特徴です。よくこういう装飾をするなと思います。これが群馬に来ていないですね。これだけ手間隙をかけて作ったのだから持って来てほしいと思うのですけれども、来ていません。

同じ十日町の野首遺跡という所で、少し古いタイプですけれども、これは私が「新巻類型」と呼んでいるものです（画面９）。五代伊勢宮の土器よりはずっと古いです。この間、拝見させていただいたのですけれども、これは良い土器です。おそらく十日町市の博物館にこれから行きますとどんどん展示されていると思いますから、機会があれば見てあげてください。他に良い土器がもっとたくさんあります。やはり、同じような火焔型土器もたくさん野首遺跡から出ております。

次は長野にいきます。これは私たちが曽利１式土器と呼んでいますけれども、火焔土器に対抗して水煙土器といわれた土器です（画面10左）。これは昔、はがきの絵柄になっていました。それだけでも有名な土器ですけれども、現物もすごく綺麗です。私も、長野県の博物館に展示されていたのを見て、すごいなと思いながら見ました。実に渦巻き文が水の流れというか水の煙という感じです。昔の研究者はそういうネーミングをすごく上手くやりましたね。そしてこちらの川原田遺跡の焼町土器（画面10右）です。道訓前遺跡より先にこちらの焼町土器が国指定になりましたけれども、私も観察などを頼まれた事があり、この遺跡に通っていたのですけれども、当時は国指定にされるとは思っていませんでした。今は御代田町の博物館で、綺麗なケースの中に入っておりまして、我が子が良家にお嫁さんに行ったようで、随分違った雰囲気になってしまいました。

群馬に戻りますが、この土器は私が一昨年整理した林中原Ⅱ遺跡の土器です。結構良い土器ですが、撮影が下手でしたね。これも「新巻類型」と呼んでいます（画面11左）。十日町に出ているものと同じもの、同じタイプです。この間まで事業団で展示をしていました。そのうちまた出てくると思いますから、その時に見てあげてください。

そしてこれが旧赤城村の資料館、今は渋川市赤城町ですね。こちらに展示をしているこの土器、やはり「新巻類型」です（画面11右）。こういう流れるような弧線文が特徴的です。細長い器形で、このような器形は、新潟にもあまりありませんし、栃木や福島にもいません。南関東でも見る事はありません。さきほど見ていただいた、五代伊勢宮の勝坂式土器に近い器形がありましたが、群馬県の特産です。こんなのは、グツグツ煮た後にどうやって取り出すのかなと。何か柄でもあるのかなと思います。そういうものも想像してしまいます。

こちらが「焼町類型」－焼町土器です。これは突起が縦になっている古いタイプです。富岡市の上丹生屋敷山遺跡で出ています（画面12左）。

こちらは赤城町の「焼町類型」です（画面12右）。

突起が縦から斜めへ向きかけています。そして、こう真正面に向くとかなり新しくなります。「三原田類型」や「勝坂式」でもすごく新しいタイプと一緒に出てきています。この辺は飽きるほど出土しているのですが、その割には研究があまり進んでおらず、恐縮しております。

このように、他の地域でも、五代伊勢宮遺跡や五代深堀遺跡出土土器と同じような顔つきをしています。けれども、「焼町類型」が多く出土しているのは、群馬県北西部や長野県東部、赤城山南西部になります。赤城山南麓部はやや少ない印象を受けます。

そしてこちらは全然違いますが、こちらは長野原町の教育委員会が整理しています林中原Ⅰ遺跡の土器ですね（画面13右）。少し前まではこれは大木９式、東北地方の土器と言われておりました。資料をあたりますと、長野県の千曲川の屋代遺跡という所に同じような土器（画面13左）がありまして、こちらの方が先に報告されていますから、今は「屋代類型」と呼んでいます。東北地方のおそらく福島会津だと思うのですが、東北地方の土器が群馬に直接来たのかというと、そうは捉えられておらず、おそらく新潟・長野の県境を経由して千曲市更埴などのあの辺りにもたらされて、そのまま峠を越えて長野原町に来たのではないかと言われています。

おわりに

それでは終わりという事で、先ほどから何度も言いましたように土器の選択行為というのは、集落の中で相手に贈答する時は土器を選ぶという事です。

それからもう１つ、言い忘れましたが、お葬式の時に副葬品として土器が使われる事があります。副葬される土器を、この人は栃木から来た人だから、栃木ゆかりの土器を入れようという事や、あとは栃木から群馬へ来たのだから栃木と群馬の土器を一緒に入れるというように、その時に集落の中にあって、被葬者に近い土器を選んで、副葬しているのだと思います。複数の地域の影響を受けた土器が一つの墓穴から出土するのはこういう背景があったからではないでしょうか（レジュメ８図）。

それから、お隣の集落にプレゼントする時は、少し良い土器選んでそれに入れて贈るという風習があったと思います。そして選ばれた土器というのは、特別な土器として、相手方も大事にしますし、その良い土器を模倣して作っていくのではないかと思っております。何度も言って恐縮ですが、土器作り教室で作られたような、ちょっと上手くない土器は選ばれないのではないかなと思います。

特定の地域には渡さない土器、新潟の火焔型土器のように群馬には渡さない、選ばれない土器もある。どうやらそういう土器があるようだと思います。

土器作り教室という話しになりましたが、おそらく皆さん土器作り教室とかいらしたことがあると思うのですが、作っている時、隣の人の土器が気になりますよね。こいつ上手いじゃないかとか。あと指導している、担当者に格好悪く見られたくないという思いから、なるべく良く作ろうとするではないですか。それと同じように縄文人も、自分で土器を作っている時に、隣の奥さんと一緒に作って、みっともない土器は作れないから、格好よく作ろうとしたり、面白い文様にお互い興味をもって、文様の情報を交換しあったり、施文具というか、道具を交換しあったりと、そういう事が行なわれていたかと思います。そうしますと、お隣の奥さんが作っている土器文様が自分の土器文様にも影響をしてくる。ましてや選ばれた土器などが集落に入ってきていますから、あんな格好良い文様を付けようではないかという事で、他の地域の文様を自分の土器に取り込んでいく現象があると思います。これが私たちの言葉でいう異系統土器－違う系統の土器文様の融合、交換といいます。

ここで、結論の一つを言ってしまいますけれども、赤城山の南麓域は最初にも言いましたように、非常に他地域との交渉が頻繁にできる所です。ですから、赤城山南麓域は異系統の土器文化が、容易に集まってくる地域だと位置付けられるのです。

私は、異系統土器群の共存社会における土器交渉と、少し難しい言葉で言っています。要は集落内の縄文人は、お互いに土器文様を融通しあっているのだろうなと思っております。そして先ほども言いましたように、赤城山南麓中期遺跡のネットワークという事をもっと強く明らかにしていけば、解ってくる事柄も増えると思います。ミクロの視点とマクロの視点。ミクロの視点とはこの文様のこの部分が東北だよねとか、このギザギザの文様が火焔かもしれないねというのがあります。だけれども、マクロの視点というのは、遺跡同士の土器文様の交換などを徐々に明らかにしていくという事が大事な研究だと思っております（レジュメ９図）。

そして、こういう感じで赤城山南麓域というのはい

ろんな地域の土器文様を受容した結果、複雑な土器文様を持つ土器群で占められる。もう私たちが困ってしまう、何式ですかと聞かれて、何式か解らないと開き直ってしまうような土器群ばかりが共存する地域になります。

そのように、違う系統の複雑な、土器群相互が共存しあうことによって、人と人との繋がりがより強固になっていきますから、それで集落を更に拡大していく、と予想しています。

最初に言いましたように縄文中期は、植物性食料、クリやクルミを主食のようにしているということで、食生活は安定しているわけですから、人との繋がりを密接にする事により、村というのは拡大されていく、すごく繁栄していくと思います。

ただやっぱり、自然環境は厳しく、この間みたいな台風が来たり、とても寒い日があったりすると、いきなり人が減り、非常に厳しい生活が強いられる年が、何年かに１回はあります。人口の増減などを繰り返しながら、100年200年の間に縄文中期という時代は集落を少しずつ拡大していきます。その結果、関東地方の中期土器社会における拠点的な地域、これが赤城山南麓地域になるのではと考えます。

他の地域、例えば赤城山西南麓に行ったら、西南麓が中心となるかもしれませんが、しかしやはり地理的な条件を見ると、関東地方の一番奥にある赤城山のすごく良い立地条件が揃った集落に、人々が集まるのは当たり前の事です。おそらく南関東や東関東の貝塚地帯と密接に連携しあうような、豊かな縄文社会が赤城山南麓にあったと思います。そうでなくては、あんなにすごい土器たちがたくさん出てきません。

最後にですが、本日私が話した内容は、常日頃、土器好きの仲間たちといいますか、友人たちと何かと雑駁な意見交換をしながら、縄文時代のことを私なりに想像しながら、組み立ててきた事柄です。ですから雑談めいた話しで、確固たる証拠がある話しばかりではありません。ご容赦下さい。

そういう所で本日は、長い時間土器の話しばかり、聞いていただきありがとうございました。

～質問～

Q　土器は男性が作ったのですか？女性が作ったのですか？

A　時代によって違うといわれています。ただ全般的に女性が作ったほうが、より社会のシステムとしてはよく回るだろうといわれています。男性は何をしていたかというと、集落の陽向で、石器をプチンプチンと作っていたという社会だと思っております。

講座・赤城南麓の考古学２０１６

縄文の美　赤城山麓の縄文中期世界

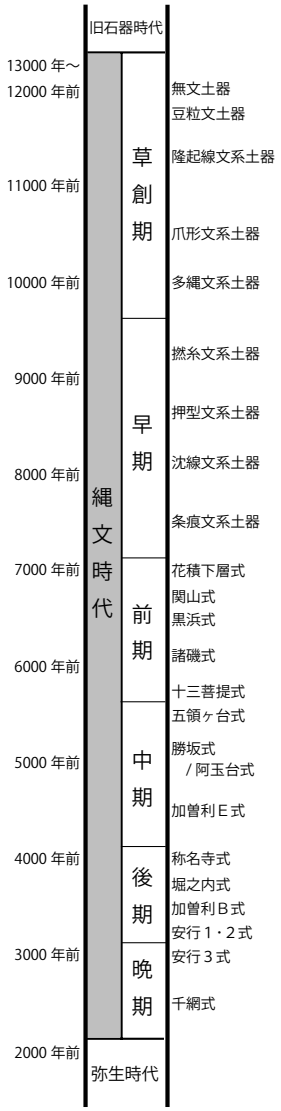
平成 28 年９月３日　於：大室公園民家園
（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　山口逸弘

はじめに
１　縄文時代中期概観
２　赤城山南麓の中期遺跡
３　五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡
４　様々な土器群の共存
おわりに

１．縄文時代中期概観（高度な狩猟採集社会）

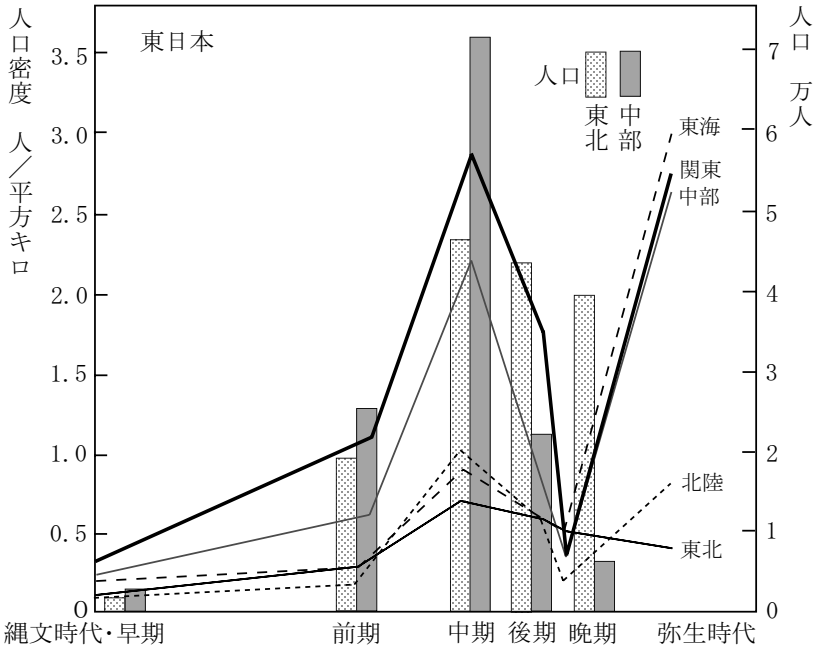
- 縄文時代前期で安定化した集落が、さらに充実した時期
  日本列島は温暖化が安定化し、現在の海岸線に近い。
  人口増に伴い、食料獲得システムの確立
- 定住性が高まり、各地で大規模な集落が営まれる
  →環状集落跡の調査　三原田遺跡
  長野原一本松遺跡
  横壁中村遺跡など
- 植物性食料はクリ・クルミなどの堅果類
  管理栽培とも言われている
  安定した食料の確保
  打製石斧・石皿・磨石・凹石
- 動物性食料はイノシシ・シカ・ウサギ・鳥類
  飼育の可能性も指摘されている
  石鏃・石錐・スクレイパー
- 食料調理道具としての深鉢・・・煮炊き
  煤などの付着物（使用痕）からの研究
- 土器→異系統土器群共存社会
  多数の地域の土器が共存する社会
  様々な地域の集団が集落に存在する

温暖な自然に囲まれ、豊かで高度な狩猟採集社会と言われるが、現実的には、自然災害や疾病への抵抗力が弱く、集落の維持を保つのがやっとだったと思われる。



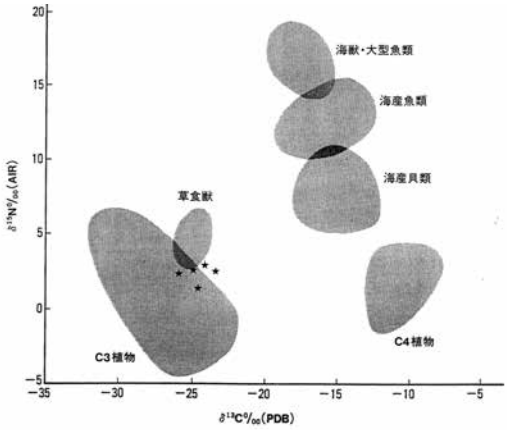
１図　縄文時代の時期区分

レジュメ１



早期後半から始まった、温暖化により、海水面の上昇とともに、落葉広葉樹の拡大が内陸部に広がった。同時に、クリ・クルミといった食用植物が、縄文前期～中期集落の食生活を支えた。その結果、中期にかけて人口は爆発的に増加し、各地で大型集落が営まれることになる。

２図　東日本における縄文時代の人口密度
(小山修三 1984 を改変)



北村縄文人の炭素・窒素安定同位体分布結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム（人骨の同位体分析結果は食物の同位体比に補正して示す。図232、236～244も同様）

３図　北村遺跡出土人骨の同位体分析（長野県教委）

４図　中期の推定食物 (御代田町教委)

５図　遺跡より出土した植物性食料（安中市教委　）

レジュメ２

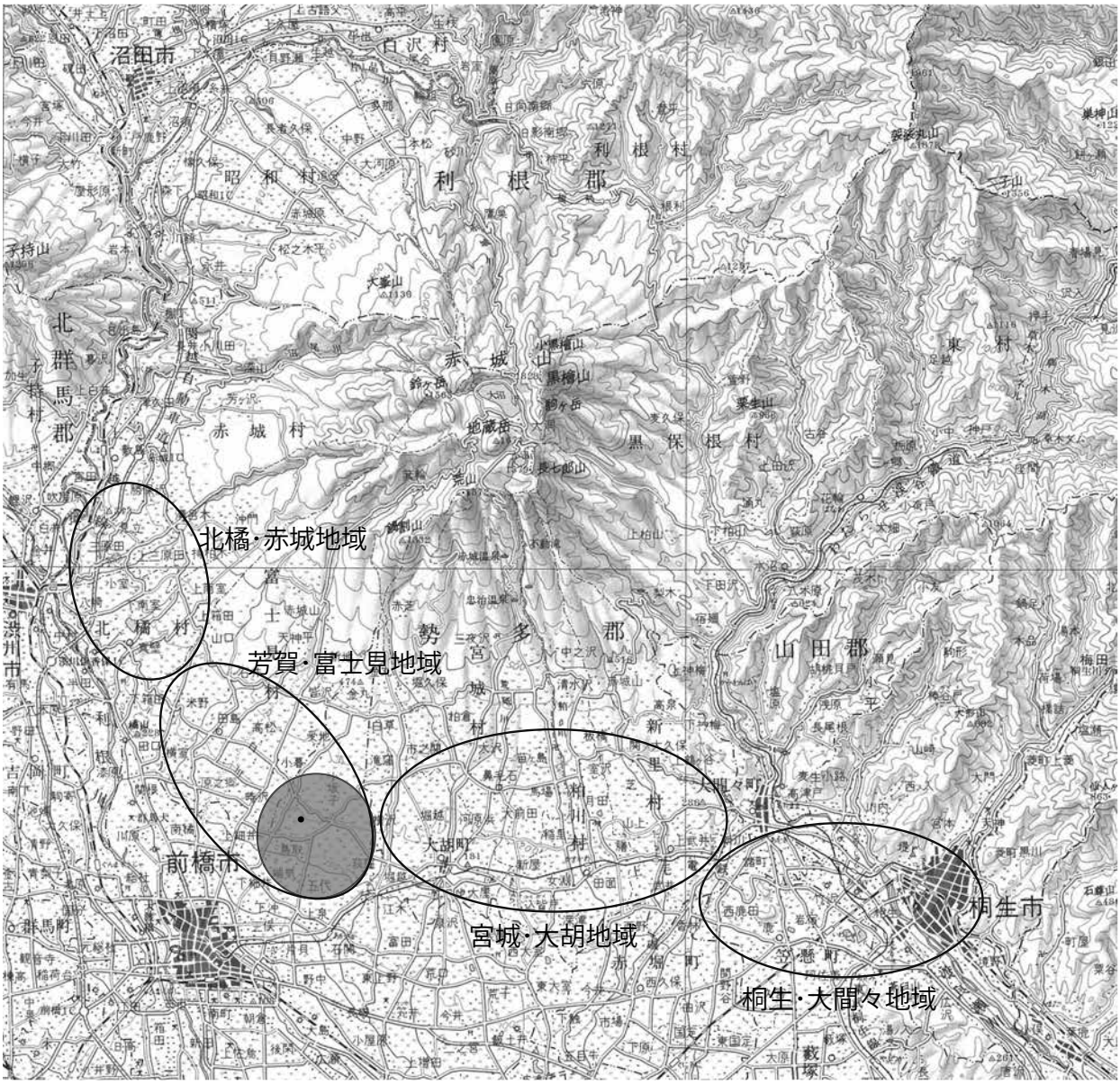
２．赤城山南麓の中期遺跡

赤城山南麓域には多くの縄文時代中期遺跡が広がる。中期集落は、赤城山南麓裾野の広い台地上に占地しており、日照・飲料水・食糧資源に恵まれていた環境である。さらに、緩やかな傾斜地形や平坦地形から、周辺地域との交渉は頻繁であり、各集落が連接し、拠点的な性格を持っていたと思われる。

下図では便宜的に、南麓域の東から桐生・大間々地域(三島台遺跡･瀬戸ヶ原遺跡･清泉寺裏遺跡)、宮城･大胡地域（鼻毛石中山遺跡・上ノ山遺跡・稲荷窪Ａ地点遺跡)、芳賀・富士見地域（五代伊勢宮遺跡・五代深堀遺跡)、北橘・赤城地域（道訓前遺跡・房谷戸遺跡・三原田遺跡）と４つのグループに分けた。

それぞれのグループには様々な特徴が見られるが、出土する土器の傾向として、東側のグループには東関東や東北地方の影響が強く、西側のグループは群馬県北西部や信州地域の影響が強く、新潟県域の土器も見られる地域である。

今回は、この４つのグループから芳賀・富士見地域から、芳賀地区にある五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡の出土土器に注目したい。



６図　赤城西南麓から南麓にかけての中期遺跡グループ

レジュメ３

3. 五代伊勢宮遺跡と五代深堀遺跡

五代伊勢宮遺跡（1）

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

レジュメ 4

五代伊勢宮遺跡（2）

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

レジュメ 5

五代深堀遺跡

写真 9

写真 10

写真 11

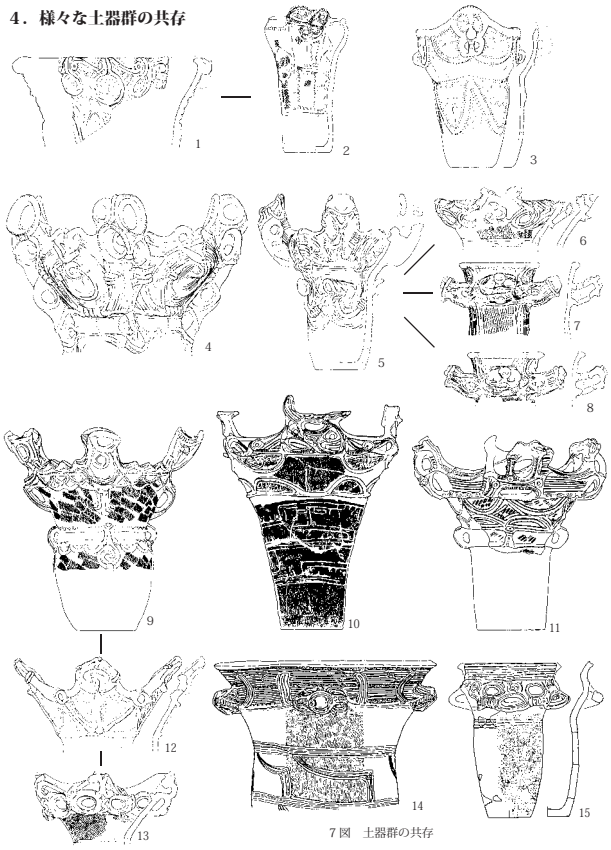
写真 12

写真 13

写真 14

レジュメ 6

4. 様々な土器群の共存



7 図　土器群の共存

1 ～ 9･12･13：前橋市五代深掘 I 遺跡 (2)（前橋市教委）、10: 前橋市五代伊勢宮VI遺跡（前橋市教委）、11: 前橋市旭久保 C 遺跡（前橋市教委）、14: 前橋市上ノ山遺跡（前橋市教委）、15 渋川市三原田遺跡

レジュメ 7

4．様々な土器群の共存

・異系統土器共存社会

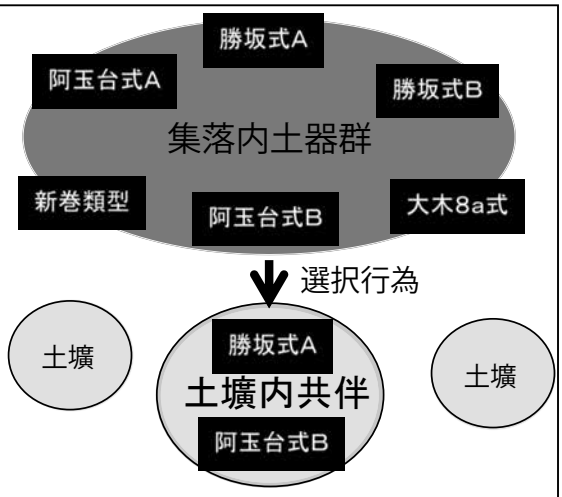
縄文時代中期遺跡では、様々な地域の、様々な系統の土器が一緒に出土する現象が見られる。また、一つの遺構から出土する複数の土器にも、異系統土器群が共存する現象が見られる。これらは異系統土器群の共伴現象と呼ばれ、かつて、佐藤達雄氏が提示した重要な学説の一つである。

さらに、一個体内の土器文様にも異系統土器文様が共存している現象が知られてきており、一遺跡、一遺構、一個体の異系統土器の共存は、一緒に出土する土器同士の比較検討を行うことによって、中期土器研究の基礎的な分析手法となっている。

・土器の選択行為

赤城山南麓域－芳賀地区の中期遺跡より出土した土器群を眺めてきたが、いずれも多彩な顔付きをした土器群が共存しており、きわめて複雑な様子が窺われる。これらの土器が、遠くの地域に運ばれる場合、当時の縄文人の意図が働いて、特定の土器が選ばれて運ばれたのではないか。

異系統土器が共存する、縄文時代集落の中で、特定の土器が選ばれたとすると、その土器は異系統土器の中で特別な扱いを持たされた土器であろう。時期によって、地域によって選ばれる土器は様々である。阿玉台式の浅鉢は、遠隔地まで運ばれている。反面、選択されずに集落あるいは領域にとどまる土器もある。このような選ばれる土器と選ばれなかった土器を見極めることも重要な研究課題である。



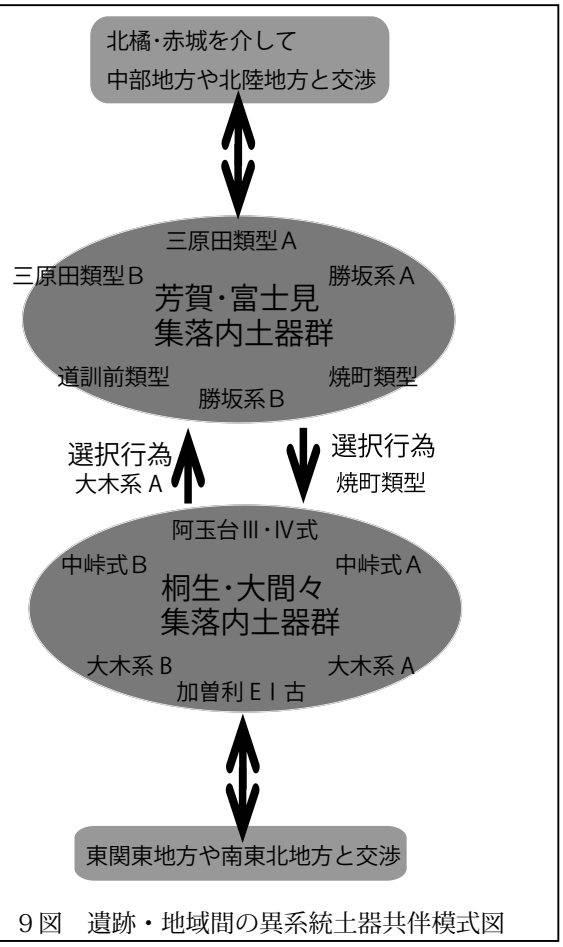
8図　土壙出土の異系統土器共伴模式図

・土器交渉の背後

異系統の土器製作者が一つの集落で出会った場合、お互いの作る土器文様を意識するのは当然である。自分の土器文様と他者の土器文様の比較も行われていたであろう。他者の土器文様を受け入れる集落であれば、多くの異系統土器群が共存する現象が見られることになる。一方、他者の土器文様を受け入れない集落であれば、少数の系統の土器のみで構成されていることになる。

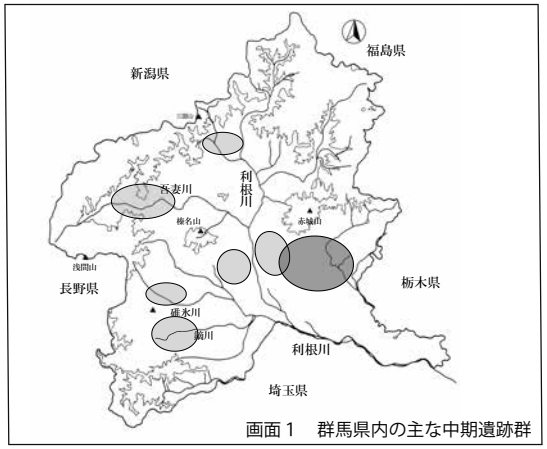
前橋市芳賀地区の中期土器の場合、東の桐生・大間々地域あたりから徐々に東関東や南東北地方の土器文様が影響し、西の北橘・赤城地域からは長野県域～吾妻川流域の土器が浸透してきている。反対に芳賀地域で作られた土器も赤城山の裾野を横切り東西の集落へもたらされている。

このような土器あるいは土器文様の浸透が各地域で行われた結果、東関東地方の土器を初め中部地方や北陸地方、南東北地方の土器が、赤城山南麓域で在地の土器と混在して集落が営まれていたのであろう。いいかえれば、他者の文様を受容する風土が、赤城山独自の土器文化を生み出したといえよう。



9図　遺跡・地域間の異系統土器共伴模式図

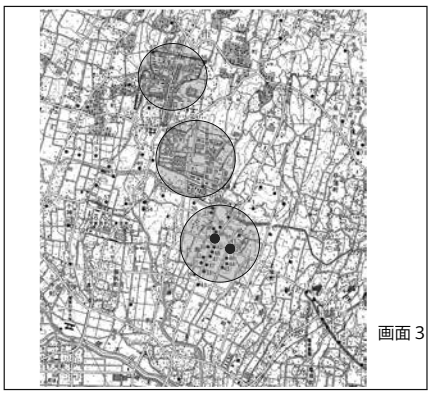
レジュメ7

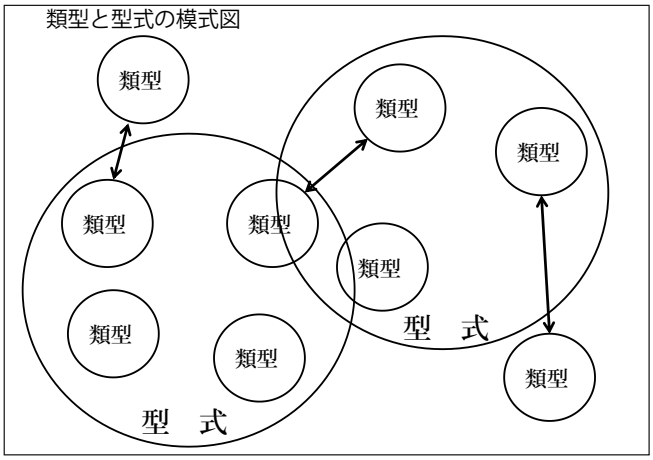


画面１　群馬県内の主な中期遺跡群

画面２　中期集落復元想定

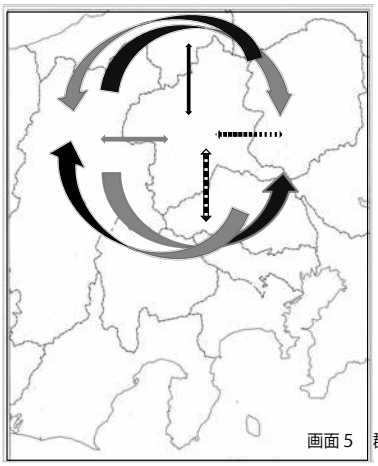
パワーポイント
1


画面３　五代伊勢宮遺跡と
五代深堀遺跡　位置図



画面４　類型と型式の模式図

パワーポイント
2


群馬県を中心に見ると、様々な土器群に取り囲まれるような位置にある。

土器が他地域に伝播する様相は、直接的な伝播ばかりではなく、徐々に浸透していくケースが多いのではないか

画面５　群馬県周辺の中期土器循環模式図

画面６　「道訓前類型」（右：道訓前遺跡、左：五代伊勢宮Ⅵ遺跡）

パワーポイント
3

画面７　福島県柳津町石生前遺跡出土土器

パワーポイント
4

画面８　火焔型土器２例（左：笹山遺跡、右：諏訪前遺跡）

画面９　新潟県の「新巻類型」（十日町市　野首遺跡）

パワーポイント
5

画面 10　長野県の曽利１式 (左)、「焼町土器」（右）

画面 11　群馬県の「新巻類型」(左：林中原Ⅱ、右：三原田諏訪上）

パワーポイント
6

画面 12　群馬県の「焼町類型」(左：上丹生屋敷前、右：三原田東峯）

画面 13　東北地方の影響を受けた中期後葉の土器
（左：長野県屋代遺跡群、右：群馬県林中原Ⅰ遺跡）

パワーポイント
7

おわりに

土器の選択行為

- 集落内で共存する様々な土器が選択される現象
- 選択された土器の特別な立場
- 選択されない土器もある

土器交渉の背後

- 他者の視線を意識した土器作り
- 他者の文様を受容した結果の土器作り
- 他者の文様＝異系統土器との融合
- 異系統土器共存社会による土器交渉

赤城山南麓の中期遺跡集落のネットワークをさらに考える必要がある。土器の伝播システムをミクロな視点とマクロな視点で明らかにしていきたい

おわりに２

- **赤城山南麓域の中期土器は、多様な地域の土器文様を受容した結果**
- 複雑な土器文様を持つ土器群で占められる。
- 複雑な土器相互が共伴しあい、集落を維持・拡大している。
- 言い換えれば、縄文時代中期中葉末において、南麓域全体が関東地方の中期土器社会における拠点的な地域だと窺われる。

パワーポイント
8

講座・赤城山南麓の考古学2016　第３回

前二子古墳の馬具をめぐって

内　山　敏　行（とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター）

はじめに

今日の話の要点は、３つあります。

ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉　前二子古墳の馬具はｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉がセットになる事が注目点です。ｆ字形鏡板付轡は馬の口に噛ませる道具です(図１の写真)。馬のお尻に剣菱形杏葉を付けます。どのような大きさの、どのような古墳から出るのかを調べると、これをセットで飾る馬にどういう人が乗ったのか分かります。上毛野の各地域でも一番有力な首長のお墓に入ることが分かります。このデザインは、朝鮮半島の南部に加耶地域があり、その中でも大加耶地域の馬具が基になっています。

双葉剣菱形杏葉　第２に、前二子古墳の馬具で、双葉剣菱形杏葉が注目されます。ｆ字形鏡板付轡や剣菱形杏葉は日本の80箇所くらいの古墳から出ますけれども、双葉剣菱形杏葉は数が少なく、あまり出ません。双葉剣菱形杏葉は、東日本では群馬県から出る種類の杏葉です。西日本は各地で点々と出土し、福井県でたくさん出ます。なぜ群馬と福井に多いのかを考えます。この杏葉も大加耶地域に由来するデザインを基にして日本で作ったと考えます。この種類の馬具が韓国まで逆輸出された場合もあります。これが２番めです。

鉄製輪鐙　第３に、馬に乗るときに足をかける、「鉄製輪鐙」が注目できます。バラバラの破片になって、今は鐙の形として見ることが難しいです。明治時代の絵に形が描かれています。鉄製輪鐙も前二子古墳の時期頃に日本で使われるようになる最新式の鐙で、その前までは韓国、特に新羅などにあります。これも新しい要素として、前二子古墳の馬具に組み合わさっています。

ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉は上毛野地域の最高の有力者が持っている馬具です。双葉剣菱形杏葉は変わった馬具で、結論から言うとこれは馬の胸を飾る金具と考えられるようになりました。

双葉剣菱形杏葉を付けることは、ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を持っている人の中でも、とりわけ別格です。双葉剣菱形杏葉は、更に格が上という意味で付けると考えます。それに加えて鉄製輪鐙もあるので、馬の飾りとしても非常に立派で、馬に乗る人の地位も高い。有力者の古墳で出る馬具のなかでも、更に優位な馬具です。

１　ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を伴う馬具

馬の口に付けるｆ字形鏡板付轡と、お尻に付ける剣菱形杏葉はセットで使うことが多い馬具です。ただし、そうではない場合もあります。

鈴杏葉　有名な埼玉県の稲荷山古墳の馬具（図１の下段）は轡がｆ字形鏡板ですけれども、杏葉が剣菱形杏葉ではありません。涼しい音が鳴る鈴杏葉に替わっています。ｆ字形鏡板付轡が出土する場合でも、剣菱形杏葉が付く場合と、そうではなくて鈴杏葉などに替わる場合があります。轡と鈴杏葉が一緒に出る場合でも、鍍金で金色に飾るｆ字形鏡板付轡ではなく、もう少し安っぽい鉄の轡にする場合もあります。

杏葉の種類と古墳の大きさ　図３は、群馬県と、近接する栃木県足利地域で出た剣菱形杏葉やｆ字形鏡板付轡です。前二子古墳は後期１段階で６世紀前葉です。図の上３段が古墳時代中期で、下２段は古墳時代後期です。中期６段階は５世紀後葉、中期７段階は５世紀末頃から６世紀に少しかかる頃、後期１段階は６世紀の初めから６世紀前葉。古墳の大きさと、馬具の組み合わせの関係を見てゆきます。

助戸十二天古墳　十二天古墳は群馬県ではなくて栃木県足利市ですが、ほとんど群馬と変わらない地域です。ｆ字形鏡板付轡とセットになる杏葉は鈴杏葉です。このように、剣菱形杏葉がセットでない場合、古墳が少し小さい。前方後円墳ではなく、帆立貝形の古墳で長さ30mです。

広瀬鶴巻塚古墳　ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉がセットになる場合はどういう古墳から出るか。広瀬鶴巻塚古墳の５～７はｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉がセットの約束を守って（崩さないで）出ています。長

さ70m～80mの前方後円墳で、この時期の前橋市周辺で最も有力な人の墓です。30mの十二天古墳よりは明らかに格が上です。

保渡田八幡塚古墳　８は高崎市（旧群馬町）の保渡田八幡塚古墳です。一緒にｆ字形鏡板付轡がありますが、本当に保渡田八幡塚古墳で出たのかどうか疑問があるので図は載せていません。長さ96mの前方後円墳という格付けです。

ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の両方をセットで付ける馬に乗る人は、古墳時代中期には、長さ70m～90mくらいの前方後円墳に入っています。

天ノ宮古墳　それに対して剣菱形杏葉が持てなくて、鈴杏葉に替えている組み合わせを持つ人は長さ30mくらいの帆立貝形古墳に入っています。さきほど足利市の例を出したのですが、群馬県でも同じような事例があり、高崎市（旧箕郷町）の天ノ宮古墳です。この古墳はｆ字形鏡板付轡を２組持っています。これに対して剣菱形杏葉は持っていません。やはり鈴杏葉や楕円形杏葉に替えていて、約束が崩れています。それほど大きな古墳ではなかったと考えられます。

ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉のセットが、群馬県地域の古墳の格付けと関係することが分かります。ここまでは古墳時代中期の話です。

轡と古墳の大きさ：恵下古墳と前二子古墳

前二子古墳と同じ古墳時代後期の例も見ます。前二子古墳の近くの、伊勢崎市の恵下古墳では剣菱形杏葉がありますが、轡がｆ字形ではなく、鉄で作った実用的な轡になっています（20）。お尻の杏葉は金色に光るけれども、轡は光っていません。ｆ字形鏡板付轡を持たない恵下古墳は、径27mの円墳です。ｆ字形鏡板付轡の組合せを守っている前二子古墳は長さ90mです。古墳の格付けと関係することが分かります。

金井東裏遺跡　甲を着たまま火砕流に埋った人が出た渋川市の金井東裏遺跡では剣菱形杏葉も出土しています。これは庶民が持つ馬具ではなく、小さい場合でも20～30mの古墳、大きい場合は長さ70m～90mの古墳に入る人でないと、この飾り馬に乗りません。その人は、立派な甲を持ち、金井東裏遺跡で逃げ遅れたか、何かをしていて火砕流に飲まれて死んだ。この人が乗る馬に剣菱形杏葉が付いていたと考えます。この人は小札甲を着ています。この甲に注目します。

中期は小札甲を伴う　図３で、上半分が古墳時代中期、下半分が古墳時代後期です。

古墳時代中期でｆ字形鏡板付轡か剣菱形杏葉のどちらか、あるいは両方が出た古墳は、全て小札甲が一緒に出土しています。小札甲は、火山灰に埋った人が着ていたと同じ種類の甲です。

保渡田八幡塚・広瀬鶴巻塚はｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の両方を持っている地域のトップリーダーで、一番偉い。天ノ宮古墳のようにｆ字形鏡板付轡を持っていて剣菱形杏葉がなければ第２位で、二番目に偉い。すべて甲が出ています。古墳時代中期には甲と一緒に出土します。

古墳時代後期の初めに榛名山が噴火していますから、金井東裏遺跡は後期の初めです。この遺跡では剣菱形杏葉の近くで甲を着た人が埋まっています。地域のリーダーであると同時に甲を持っている。地域の有力者兼軍人です。甲が墓に入っている、あるいは甲を着て何か活動をしていることは、軍人を意味します。指導者でもあり軍事司令官でもある。そのような人が、古墳時代中期には墓にこのような馬具を入れます。

後期に甲冑が伴わない　ところが、古墳後期の恵下古墳と前二子古墳は甲が出土していません。中期には、ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の両方あるいは片方を持っている人は、墓に甲を入れますけれども、後期にはそうでない人が増えます。前二子古墳は地域の最有力者の墓で、ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を持っていますけれども、甲はありません。恵下古墳にもありません。

実は、これは日本中で見られる現象です。中期古墳は、一番か、二番目に有力な古墳でも甲や冑が出ますが、後期になると甲冑が出る古墳が減ります。中期の甲が出土した古墳は現在400箇所くらい分かっているのですが、後期では200箇所くらいで、半減します。このことと関係して、前二子古墳では杏葉と轡の両方を飾る馬具が出ているけれども、甲が一緒に出ない。

北朝鮮は金正恩総書記が軍隊のトップも兼ねています。日本の首相は軍隊のトップを、何かあれば兼ねるのでしょうけれども、実際は防衛大臣が別にいるわけです。軍事司令官と最高指導者が同じ人か、違う人かという二通りが考えられる。古墳時代に関していうと、中期の最有力者の人のお墓を掘るとほとんどの場合甲が出てきます。後期になると前二子古墳を掘っても甲が出ないことは、政治的な最有力者が、軍事的な役割からやや離れる、役割が違うと考えられるかもしれません。

ほかにもいろいろな理由があり、当時の人の考え方にも左右されるかもしれません。お墓に甲を入れない

ことと、実際に持っていないことは、本当に同じなのかを考える必要があります。お墓に立派な飾馬具を入れることは良いけれども、戦争の道具である甲を入れる事はどうかな -- という考えもあると思います。

前二子古墳に一番良い轡と杏葉があるけれども甲がないことは、社会の変化や、地域の最有力者の役割を反映しています。

2　双葉剣菱形杏葉

前二子古墳の双葉剣菱形杏葉の話に入ります（図４の19）。図４は下段が群馬県、上段が福井県や熊本県の古墳から出た関連資料です。双葉剣菱形杏葉は図の右下です。

双葉剣菱形杏葉は馬の胸の飾りだと、最近いろいろな人が言い始めました。最初にこの意見が出たのは2015年に奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で行なわれた『継体大王とヤマト』という展示会です。図１の上段は、展示会の図録から作った図です。継体大王は、前二子古墳が造られた古墳時代後期初め頃の大王です。

坂　靖氏の研究　６世紀初め頃の古墳の出土品を集めた展示会を奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で行ない、奈良県の芝塚２号墳の馬具を展示して、そこに解説文を付けました。ｆ字形鏡板付轡は馬の口に付け、剣菱形杏葉はお尻に付ける。そういう埴輪があるので、この２つを付ける場所に異論はないのです。双葉剣菱形杏葉はどこに付けたのかに関して、お尻には剣菱形杏葉が付いているから、双葉剣菱形杏葉は馬の胸に付けたのだろうと指摘されました。坂さんの意見では、双葉剣菱形杏葉は胸を飾った可能性が高い。芝塚２号墳の他にも、奈良市の野神古墳でも同じように双葉剣菱形杏葉が１個ずつ出土しています。だからこの復原図では胸に１個だけ描いています。ただし、古墳はほとんどの場合盗掘されていますので、当初、古墳に入っていた時も双葉剣菱形杏葉が１個しかなかったかどうかの判断は、実は難しい。馬のお尻は剣菱形杏葉だから、他に付ける場所は胸だろうという意見です。

宮代栄一氏の研究　坂さんの意見を受けたのかどうかは分かりませんが、宮代栄一さんが同じ年の論文で、芝塚２号墳の双葉剣菱形杏葉は胸に付けたのではないのかと書いています。宮代さんは、胸繋（胸のベルト）へ付けるために、双葉剣菱形杏葉をはじめいくつかの変形杏葉が出現したのではないかと書かれました。

ただ宮代さんは慎重で、この１個しかない杏葉が胸だというけれども、お尻に１枚だけ杏葉を付ける可能性も捨てきれないと述べます。双葉剣菱形杏葉が５個も６個もあればお尻に入る余地はありませんから、胸につける事になります。１個しか出ていない芝塚２号墳や野神古墳だったら、お尻に割り込ませることもできるから、胸に付けたとは断定出来ないと考えています。

前二子古墳の場合、双葉剣菱形杏葉は３個以上出ています。４個が出土している状況を描いた昔の絵もあります。ですから宮代さんの意見を参考にすれば、前二子の双葉剣菱形杏葉はお尻に付けるには多すぎるから、胸に付けると考えられます。

宮代さんの2015年の論文にある馬の胸とお尻のベルトの復元図（図２の下段）のように馬の胸のベルトを飾ったのではないのかと思います。胸には音の出る馬鐸を付ける場合もありますし、杏葉を付ける場合もある。双葉剣菱形杏葉はこの図には載っていませんが、種類が違いますが３番が似ています。

横に長い吊金具　馬のお尻のベルトは真っすぐ垂れて、その先に正方形の吊金具で杏葉を付けます。胸の場合は横に回るベルトに金具を付けて下げますから、吊金具が横に長い場合があります。図４が双葉剣菱形杏葉の出土例です。前二子古墳の馬具は、吊金具が二種類あり、横長の金具（19）と正方形の金具（18）があります。馬の胸へ横に回すベルトに横に長い金具で吊り下げる可能性があります。剣菱形杏葉は馬のお尻に付けたことが埴輪の表現から見て間違いありませんので、正方形の吊金具は、お尻用です。前二子古墳で３枚か４枚出ている双葉剣菱形杏葉に横長の吊金具があることは、胸に付けた証拠です。

西郷免古墳　前二子古墳だけではなくて、他にも同様な例があります。西日本で出ている双葉剣菱形杏葉が図５です。前二子古墳と一番良く似た双葉剣菱形杏葉が岡山県瀬戸内市―合併する前は邑久町といい、備前の国です―の西郷免古墳にあります。この西郷面古墳でも横に長い吊金具が出ています（12）。

梶原 D-１号墳　大阪府高槻市の梶原 D-１号墳でも横長の吊り金具が付いています（20）。前二子古墳だけではなく、よく似ている西郷免古墳でも、それからあまり似ていない梶原 D-１号墳でも、一緒に出ている横長の吊金具は、双葉剣菱形杏葉が馬の胸を飾った可能性を示す証拠です。多くの場合に、飾り馬の尻には剣菱形杏葉を、胸には双葉剣菱形杏葉を付けた事が分かります。

西幸子氏の研究　福岡県山の神古墳でやはり馬の胸

を飾ったのではないのかという杏葉があり、これも剣菱形杏葉を変形したものです（図２下段左の１番）。2015年に出た山の神古墳の報告書にある西幸子さんの論文で、馬の胸に飾りを付ける意味と、変形剣菱形杏葉の位置づけがはっきりしてきました。西さんの指摘を資料２ページ下の中ほどに引用しました。

胸繋杏葉　結論からいうと、馬の尻だけでなく胸も装飾することは、装飾性が高く、乗っている人の地位も高いことを意味します。西さんの論文によると、尻繋つまりお尻のベルトだけを装飾する馬装に比べると、胸のベルトまで装飾する馬装はより多くの杏葉を持つ点、そしてより壮麗な馬装である点で更に高い階層を示す事が窺えます。「胸繋杏葉は有力古墳の中でも更に優位に位置づけられる古墳の副葬品に含まれる」。西さんが挙げた例には前二子古墳が載っていませんので、前二子古墳の双葉剣菱形杏葉が胸のベルトの飾りだという事に、この論文を書いた時点では気付いておられません。しかし、結果としてこの指摘は当たっています。前二子古墳はその大きさを見ても上毛野地域で最有力な古墳であることは間違いないのです。ですから、有力古墳の中でも更に優位に位置づけられる古墳の副葬品に含まれる。

また「事例が少なく希少なこと」はその通りで、剣菱形杏葉が80くらいの古墳から出ていますが、双葉剣菱形杏葉は本日の資料に載っている例くらいしか出ていませんから非常に出土例が少ないのです。「事例が少なく希少な事からｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を持つ古墳の被葬者の中でもさらに優位な階層の被葬者に配布され、その身分表象として使用された可能性が考えられる。尻繋杏葉のみ装備する階層よりも相対的に優位であることを示すため保持する事に意義があり、胸繋杏葉の種類自体は問題ではなかったため、規格品とは異なる変則的な形状やデザインのものが採用され、明確な制度化を見ないまま消えていったと考えられる」（西2015論文から引用）。

そして胸のベルトに付ける杏葉も剣菱形杏葉が変形したようなものが多いことが分かってきました。まさに西さんの言われる通りで、変則的な形状です。剣菱形が本当のデザインですが、胸繋杏葉はアレンジしているわけですね。剣菱形の由来は朝鮮半島にあると思うのですけれども、変形である事は間違いないです。しかも出土する数が少なく、あまり使われないうちにやがて消えてしまったので、西さんはまるで前二子古墳の馬具を見ながらこの文章を書いているかのようです。西さんの意見が前二子古墳で補強されます。

前二子古墳は有力古墳でも更に優位です。ｆ字形鏡板付轡に加えて剣菱形杏葉も持っている事だけでもトップクラスです。更に双葉剣菱形杏葉を持つので、トップクラスの中のトップになります。ですからｆ字形と剣菱形を持っているよりも更にワンランク上になります。

双葉剣菱形杏葉が多い地域　双葉剣菱形杏葉が多い地域は群馬県と福井県です。双葉剣菱形杏葉自体がそんなに多い馬具ではないので、群馬県で３つの古墳から出ているのは多いです。群馬県の双葉剣菱形杏葉は図４の右下です。前二子古墳、それから高崎市の保渡田薬師塚古墳、そして伊勢崎市恵下古墳です。３つとも双葉剣菱形杏葉ですが、デザインがかなり違います。まさに変則的な杏葉で、明確な制度化を見ないまま、その場その場で変えて作っているかのようです。群馬県で３つ出ているのは東日本では一番多い。というより、東日本では群馬県でしか出ていません。他はみな西日本です。だから東日本で一番多いのは当たり前です。

西日本で双葉剣菱形杏葉が多い奈良県と大阪府では複数出ています。大阪では厳密にいうと少しデザインが違うのですが、似たものを含めて大阪で２基、奈良県で４基の古墳で出ています。奈良・大阪は当時の政治の中心ですから当然として、地方では福井県で３基の古墳から出ています。

群馬の古墳　どんな古墳から出土するのかに注意をしておきます。保渡田薬師塚古墳は100mを超える前方後円墳で、前二子古墳も90mを超える前方後円墳です。恵下古墳だけは少し小さくて径27mです。恵下古墳だけ組み合わせになるｆ字形鏡板付轡を持っていなくて、鉄の轡なので、この人はトップではなくて第２位か第３位くらいの人です。ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉をセットで持つ保渡田薬師塚と前二子古墳がトップクラスです。

なぜ恵下古墳にあるのか？は、注意すべき点です。恵下古墳は剣菱形杏葉２枚と双葉剣菱形杏葉１枚が出ています。恵下古墳は盗掘された形跡があまりないので、この３枚しかなかったように思います。そうするとお尻に飾る３枚だけです。つまり恵下古墳の場合は馬の後半分は飾っているけれど、前半分にいくとダサくなる馬装です。前半分は鉄の簡素な轡で、後だけ飾ることからみて、恵下古墳の剣菱形杏葉２枚と双葉剣菱形杏葉１枚の組み合わせは、全部お尻に付けたと

考える余地があります。たくさん出ていれば胸に付けても良いけれども、１枚くらいは胸に付けたとは断定できず、お尻に割り込ませる付け方もありうる ― という宮代さんの意見を先ほど紹介しました。恵下古墳の場合もそうだと思います。横に長い吊金具が恵下古墳にないので、恵下古墳の馬は胸を飾っていなくて、お尻に付けた３枚の杏葉のうち１枚だけが双葉剣菱形杏葉だった可能性があります。先程の西さんの論文では、有力古墳の中でも胸も飾る馬具は更に優位だという話ですが、恵下古墳でお尻に３枚付けていたとしたら胸は飾っていないですね。轡もｆ字形ではない鉄の轡です。古墳の規模を見ると、長さ90～100mの薬師塚古墳や前二子古墳古墳の馬具は胸も飾るけれども、直径27mの恵下古墳の馬具は胸を飾らない、双葉剣菱形杏葉もお尻に１つ付けているだけです。群馬県で双葉剣菱形杏葉が出た３古墳のうちで、恵下古墳だけ最有力者の古墳とはいえないのに双葉剣菱形杏葉がある理由です。

福井の古墳　群馬県と同じ数、３つの古墳から出ているのが福井県西部の若狭です。１つは十善ノ森古墳で、あと２つは図５の大谷古墳（11）と丸山塚古墳（19）にあります。

群馬県では、胸も飾ると考えられる場合にはトップの古墳から出ていました。では福井県ではどんな古墳から出るのか。資料２ページの下に福井県の古墳の大きさを書いてあります。

十善ノ森古墳　１つは十善ノ森古墳、長さ68mの前方後円墳で、古墳時代中期末の若狭では一番大きな古墳で、地域の最高首長墓です。

大谷古墳　次に、福井県の大谷古墳は、円墳で直径27.5m。先程の恵下古墳も27mでした。古墳の大きさだけを見ると、十善ノ森古墳の68mに比べて小さいけれども、横穴式石室がすごく大きい。石室から見て相当有力な人のお墓です。大谷古墳の石室は、天井の高さが3.2mです。私たちがいるこの部屋よりも高い。横穴式石室の大きさは、基準の取り方がたくさんあります。ひとつひとつの石が大きいとか、長さが長いとか。前二子古墳の石室は長いです。一般的には、高さが２mを超える石室はその地域でも大型といえます。小さな石室は、天井に頭が当たるか当たらないか、または屈まないと入れない石室が多い。私は身長1.7mで、昔の人は身長1.5mくらいです。大谷古墳は高さが3.2mですから、大きな石室を持っています。若狭地域では、十善ノ森や丸山塚には及ばないけれど、かなり有力な人のお墓です。その大谷古墳で双葉剣菱形杏葉が出ています。

丸山塚古墳　もう１つは丸山塚古墳で、直径50mの円墳です。18・19番が丸山塚古墳の馬具で、双葉剣菱形杏葉の他にも別種類の杏葉を持っています。杏葉だけで４種類もあるのはすごいことです。お尻に剣菱形杏葉と胸に双葉剣菱形杏葉を付けて、１セット。別の種類でもう１セットだろうと思います。直径50mの円墳は、前方後円墳より格が下だと思われるかもしれませんが、それは関東地方にいる人の感覚です。群馬県や栃木県は、古墳後期の前方後円墳が一県に100から200ありますから、そういう地域で有力な人は皆前方後円墳を作りますが、西日本では古墳後期には前方後円墳そのものをあまり作らなくなります。一番偉い人でも大型の円墳に入ります。50mの円墳は同時期の若狭に存在しないので、若狭の最高首長の墓です。石室も大きいです。大谷古墳の石室は大きいと言いましたが、丸山塚古墳の石室は、その1.5倍くらいの規模です。ものすごい石室です。福井県で洪水があって堤防を修理しなくてはいけない時、1960年代ころに土取り工事でこの古墳は壊されてしまいました。現地に行くと、崩された大きな石が積んであり、すごい石室だったことが分かります。これは間違いなく福井県でもトップクラスの古墳です。

上中古墳群　十善ノ森古墳も大谷古墳も、丸山塚古墳も、福井県若狭町にあります。福井県の西部で古墳時代に一番有力な首長がいた地域です。合併前の地名は上中町で、上中古墳群と言われる事もあります。福井県に双葉剣菱形杏葉が多いのですが、それは３つの古墳で出ていて、石室の規模や大きさから見て当時の若狭でトップクラスのお墓で、３つとも全部若狭町にあります。当時の若狭の中心で、かなり注目される地域です。

～休憩～

双葉剣菱形杏葉は群馬県と福井県に多いという話と、恵下古墳はトップではないですけれども、それ以外は各地域で最高のクラスの人のお墓に入っているという所までお話しました。

最古の双葉剣菱形杏葉　前二子古墳にあるような双葉剣菱形杏葉はどうして、どこに最初に入ってきた、どういうものかという話です。図４は下段が群馬県の出土例、上段が関連資料です。

十善ノ森古墳　今知られている中で一番古いのが、福井県若狭町の十善ノ森古墳の双葉剣菱形杏葉です(図４の９番)。古墳時代中期を７つに分けた最後、中期７段階で、５世紀の終わり頃です。前二子古墳は後期１段階の後半です。前二子古墳より１世代、20～30年前の十善ノ森古墳の双葉剣菱形杏葉が一番古い。これが最古の双葉剣菱形杏葉です。これがどういう性格の馬具か、一緒に出た他の馬具から探ることができます。

十善ノ森古墳は双葉剣菱形杏葉（９）と剣菱形杏葉（７）と内彎楕円形鏡板付轡（３）が出ています。轡は馬の口に付けます。剣菱形杏葉はお尻に付けます。今までの話からすると双葉剣菱形杏葉は胸に付けただろう。若狭では最高首長のお墓だから馬の口とお尻の他に胸も飾っています。花弁形杏葉（４）も胸を飾っているのではないのかと言われています。そうだとしたら、胸を２種類で飾っていた可能性もあります。そして、これらの馬具はおそらく日本の製品ではないと考えられます。類例が少ないので断定できませんが、韓国で作り日本に輸入した馬具と考えられます。いくつか根拠があるのですが、図の３・７番は両側に「耳」が飛び出す鈴を使います。杏葉（７）だけでなく、轡（３）を作る板の間にも同様な鈴を挟み込んでとめる作り方をしています。

江田船山古墳の馬具　東京国立博物館にある有名な熊本県江田船山古墳の馬具（図の１・２番）も、両側に耳の付いた鈴を鏡板に挟んで付けています。十善ノ森古墳と江田船山古墳の馬具は同じような地域で作られています。

鏡板は、馬の口から轡が抜けないようにストッパーとして付ける。鏡板の外側に手綱を結ぶ「引手」という棒があり、手綱を右に引けば馬が右に曲がり、左に引けば馬が左に曲がります。１・２のように鏡板の外側に引手が付いていると、龍の模様が引手に隠れて良く見えない。十善ノ森古墳（３）では鏡板の内側に引手を付けて、外側の模様がよく見えます。つまり、飾りが重視されてくると引手が内側に変わります。そして日本では後期１段階の後半から引手が内側に変わります。前二子古墳の轡の引手は内側です（17)。十善ノ森古墳は中期の終わりで既に引手が鏡板の内側にあります。これは、日本の馬具にはまだ見られない特徴を先取りしています。両側に耳がある鈴を付けることや、日本より早く引手が内側に変わることは、朝鮮半島の大加耶地域の特徴です。

大加耶の馬具　朝鮮半島は北側に高句麗、東側に新羅、西側に百済、そして地図で真中の下に加耶があります。加耶の拡大図があります（図２の上図)。加耶は１つの国ではなく、複数の小国家の連合体といわれます。加耶の中に複数の地域があります。金官加耶・阿羅加耶・大加耶・小加耶などと呼びます。「だいがや」「しょうかや」は日本語読みで、本来は「テガヤ」と「ソガヤ」と言います。阿羅加耶は韓国語でも「アラガヤ」、金官加耶は韓国語で「クムガンガヤ」と言います。

おそらく大加耶の地域で作られた馬具が日本に輸入されて江田船山古墳と十善ノ森古墳に副葬されています。大加耶の一番有力な古墳群で池山洞44号墳という所から、十善ノ森古墳とそっくりの剣菱形杏葉が出ました。大加耶の馬具と一緒に、日本で最古の双葉剣菱形杏葉が十善ノ森古墳にある。確実には将来この大加耶地域で双葉剣菱形杏葉の古い資料が出土した時点で確定できるので、今の段階ではまだ断言できませんが、大加耶地域で双葉剣菱形杏葉が出現して日本に伝わった可能性があります。十善ノ森古墳は前二子古墳より１世代前の古墳です。江田船山古墳は３人くらい死んだ人が入っていると思うのですが、最初に死んだ人が前二子古墳より２世代ほど前です。前二子古墳より１世代から２世代前ころに、大加耶から日本に馬具が輸入され、それが熊本と福井の有力者の所有物になった。輸入品の馬具ですから今で言うと外車に乗る気分でしょうか。輸入品の馬具を付けた馬に乗っていた首長が各地にいました。

熊本県の江田船山古墳と福井県の十善ノ森古墳については、福井県や熊本県の首長が朝鮮半島からその馬具を輸入したと考える意見があります。福井県は日本海に面し、九州は朝鮮半島に近くて熊本県は有明海に面し、朝鮮半島に渡りやすい地域です。朝鮮半島への行き来は盛んだっただろうし、飾り馬や馬具などを手に入れる機会もあったと解釈する意見があります。

福井県の高校の先生で、北陸の古墳を詳しく研究している入江文敏さんの論文では、十善ノ森古墳の段階で「半島に出自をもつ遺物を地方豪族が独自に入手した」と考えています（図２の表)。福井県で次段階の双葉剣菱形杏葉が出ている丸山塚古墳については、「地方豪族の独自性が目立たなくなる」、つまり馬具を朝鮮半島から輸入するのではなく、ヤマト政権から馬具を入手するようにかわったというのが、入江さんの意見です。

倭の変形剣菱形杏葉　十善ノ森古墳と丸山塚古墳の

間の時期に群馬県で前二子古墳が造られます。パターンとしては十善ノ森古墳ではなくて丸山塚古墳のようにヤマト政権から馬具をもらっていると考えます。その根拠ですけれども、十善ノ森古墳の馬具から日本製の双葉剣菱形杏葉に変わる中間段階に変形杏葉があります（図４の15番）。大阪府の軽里４号墳で出土したものです。唐草模様を二つ付けた形を双葉形といいます。軽里４号墳の杏葉は唐草模様になっていない。くるっと巻いていません。これは双葉剣菱形杏葉とは呼ばないですけれども、でも明らかに双葉剣菱形のデザインから影響を受けています。こういう変形剣菱形杏葉が後期の初めに日本で出土し始めます。

高槻市の今城塚古墳にも類例があり、これも大阪府です。これは巻いているのではなくて、完全にくるっと丸くくっついて、中が勾玉模様になっているので、双葉剣菱形杏葉ではありませんが、しかしデザインに関係がある事は間違いありません。先程の軽里４号墳も、この今城塚古墳の杏葉も双葉剣菱形杏葉と関連を持って出てきた変形剣菱形杏葉の一種です。今城塚古墳の杏葉は、高槻市の博物館で復元制作したのですが、小さな破片から復元しています。勾玉模様が付く変形剣菱形杏葉で、１つの復原案としてこのようなデザインもあるという意見です。大加耶から輸入した杏葉をヒントにして、日本で近畿地方の王権がこういう変形剣菱形杏葉を造り始めた。出土している場所は、今城塚古墳や軽里４号墳といった大阪府の古墳です。

この今城塚古墳は、さきほどから話に出ている継体大王のお墓でほぼ間違いないと考えられています。継体大王が乗っていた馬に付いていた杏葉かどうかはわかりません。今城塚古墳から複数の石棺の破片が、盗掘でバラバラになっていますけれども、出ています。継体大王またはその近辺にいた関係者で、何人かの人が今城塚古墳に葬られた、そのうちの誰かの飾り馬に変形剣菱形杏葉が付いていたことが分かります。大阪府羽曳野市軽里４号墳は河内平野の古市古墳群にあって、古墳時代中期には一番有力な古墳がたくさんあった地域です。

大王の墓地に関わる大阪の中枢で後期１段階の軽里４号墳のような杏葉が出ることからみて、こういう杏葉を作った勢力は近畿地方の王権だと考えるべきです。福井県、熊本県では朝鮮半島から輸入したという考えになりますが、今城塚古墳のある大阪府地域では朝鮮半島からの輸入と考えるよりは、朝鮮半島のデザインを取り入れながら倭政権の力で自分たちの馬具として新しいデザインを作ろうという動きがあり、その結果生み出されたものが後期初めの変形剣菱形杏葉だと考えます。

その馬具をおそらく継体大王の政治権力が作って、東日本では群馬県の首長３人に与えています。薬師塚・前二子・恵下古墳の被葬者です。

他の双葉剣菱形杏葉は日本で作っているとしても、恵下古墳の杏葉は、日本製かどうかという点に異論があります。恵下古墳の双葉剣菱形杏葉（図４の14）は他のものと違い、模様が複雑です。だから、恵下古墳の杏葉は輸入品だというのが京都大学名誉教授の小野山節先生の意見です。その場合は恵下古墳の剣菱形杏葉や轡などは日本で普通に出る馬具なので、日本製と朝鮮半島製をミックスした馬具になります。それが当たっているかどうか、私は何とも言えません。恵下古墳に３枚ある杏葉の１枚だけが輸入品というのは不自然と思います。確かに模様は複雑ですけれども、時間をかければ恵下古墳の双葉剣菱形杏葉を日本でも作れる。藤ノ木古墳の鞍でしたら、時間をかければ出来るとは言いませんが、恵下古墳の杏葉は日本製で良いとも思います。模様が複雑だから輸入品だという意見は決着がついていません。薬師塚古墳や前二子古墳の杏葉は日本製とみて良いと思います。

保渡田薬師塚古墳の杏葉（16）は銅の鋳物です。この馬具は古墳時代ではなくて、江戸時代ころに作った偽物ではないかという意見があり、解決していません。偽物だとしても、古墳時代の馬具のデザインを知らないと作れませんので、実際に古墳から出土した馬具を見ながら作った、元になった馬具が出土したと考えます。本物か偽物は今後の議論に待つとして、こういった双葉剣菱形杏葉が古墳時代にあったと思います。

上巻きと下巻き　双葉剣菱形のデザインには、上巻きと下巻きがあります。群馬県のものは上巻きです。西日本では下巻きと上下巻が多いです。

図５は西日本で出土した双葉剣菱形杏葉です。４は下が壊れていますけれども本来は６・９のような下巻きです。４が島根県の仏山古墳、９が奈良県の野神古墳です。６が2015年の展示会で馬の胸飾りという説が出た芝塚２号墳のもので、これも下巻きです。島根県で下巻きが出て、奈良県で下巻きが３つの古墳から出て、それから福井県で、十善ノ森古墳の杏葉は上巻きだったのですが、その次の大谷古墳では下巻きが出ています（11）。ですから下巻きは西日本で多い。

上巻きは東日本に多い。東日本の群馬の３古墳と、

福井県十善ノ森古墳と、あともう１つは岡山県の西郷免古墳（13）でも上巻きが出ています。前二子古墳の双葉剣菱形杏葉に１番似ている杏葉が岡山県で出ていることが重要です。上巻きは群馬県で多く、群馬県で出た３例は全部上巻きという事から考えると、これは群馬で作っているという意見が出るかもしれません。ところが岡山県でなぜ出るのかという説明が難しいです。群馬で作っているのではなく、やはり近畿中枢の大阪か奈良で作って、そこから西の有力勢力である吉備の岡山と、東の有力勢力である毛野の群馬にそれぞれあげたから、このように遠く離れた地域で出土すると考えます。西日本の岡山県で上巻きが出ていることが重要です。

それから、上と下両方を巻く「上下巻き」という形が西日本にあります。國學院大學所蔵の杏葉は出土地不明ですが、上下巻きなので西日本出土だろうと推測できます。

上下巻きは西日本で多いのですが、１つだけ韓国の固城松鶴洞１Ａ－１号墳で出ています（17）。これは韓国で作られたという意見もあると思うのです。実はこの古墳では、日本製品と思われる遺物がたくさん出土しています。松鶴洞１Ａ－１号墳から出てくる剣菱形杏葉やｆ字形鏡板付轡、甲（よろい）も、日本製と思われる須恵器も出ています。このことからみると、松鶴洞１Ａ－１号墳の杏葉は韓国製ではなくて、大加耶のデザインをもとにして日本で作った馬具が逆輸出されて韓国に渡ったものと考えます。一番古い双葉剣菱形杏葉はおそらく大加耶（テガヤ）地域のどこかで作ったのではないかと思います。大加耶の有力古墳群は池山洞古墳群で、それに対して松鶴洞１Ａ－１号墳は南の小加耶（ソガヤ）地域にあります。ですから最初は大加耶地域で生み出された杏葉が倭に輸出されます。近畿地方でそれをモデルに新しく倭製品を作りはじめ、それを岡山県や群馬県などに配って、それが西に渡って、海に面していて日本からいろんなものが入ってくる小加耶にある。日本に近い所に逆輸出されたと考えます。松鶴洞１Ａ－１号墳のような馬具が小加耶地域や大加耶地域の古墳でもっと多く出てきたらこの意見はひっくり返りますが、現在の出土数から見る限り韓国ではこれ１つしか出ていない。日本では福井や大阪とか國學院大學が持っているものとか各地で複数の古墳から出てますから、上下巻きの双葉剣菱形杏葉は日本製で、日本から海を渡って韓国に行ったものと考えます。

若狭に多い背景　次は資料３ページ目の中段です。双葉剣菱形杏葉は福井県と群馬県に多いのですが、しかし群馬県であまり研究している人がおらず、北陸の人は熱心に研究しています。他にあまりないのに福井県に３例集中していることに関心を持つ人が多く、先程紹介しました入江文敏さんや、伊藤雅文さんという北陸の研究者がこの馬具について論文を書いています。

入江さんの論文では、若狭の有力者の系譜を示す馬具に双葉剣菱形が必要で、特定の入手経路が続いたという意見を出しています。入江さんが1986年に書いた論文と2011年に書いた論文でそれぞれ考えを述べています。双葉剣菱形杏葉が福井県西部の若狭に集中していることについて、被葬者の系譜的意味合いを1986年に考えています。福井県でこれを出している古墳は３つとも若狭の上中古墳群にあります。これは偶然ではなくて、上中の豪族、一族の系譜があり、その人たちがこの飾りを付けた馬に乗るという系譜的意味合いがあったと考えられます。

それから「同一供給源から入手した可能性が大きいように思われる」と1986年の論文で述べています。この同一供給源について、入江さんは2011年の論文では違う書き方をされて、「この種の杏葉の入手経路が断続的に続いていた…（中略）…入手にあたって被葬者側にある程度の選択権があったものか」と書いています。これ以上書いていないので、どういうことか私なりに理解します。一番初めの十善ノ森古墳の馬具は輸入品の可能性がありますが、その後で大谷古墳（11）と、それから少しデザインが違いますけれども丸山塚古墳（19）で出ています。こういった双葉剣菱形杏葉は、おそらく近畿の中央政権で作っていると思います。「同一供給源」は、近畿中央の政権です。中央政権に従属するから、地方豪族が飾馬具や優れた馬をもらえます。「入手にあたって被葬者側にある程度の選択権があったものか」という入江さんの意見は、若狭の首長は近畿の大王に従いますから、こういうデザインの飾り馬が欲しいと希望したということでしょう。若狭の首長にとって先々代くらいの十善ノ森古墳の首長が大加耶から良い馬具を入手し、その中に双葉剣菱形杏葉のデザインがあった。他の人は馬のお尻を飾っている時に、十善ノ森古墳の首長は馬の胸もこれで飾った。先々代からの伝統のデザインとして若狭は馬のお尻だけでなく胸に変形の杏葉を飾る希望を持ち、ある程度の選択権、中央政権に伝えた希望が認められて、このデザインの杏葉をもらったという解釈になる

と思います。

この意見が当たっているかどうかは難しい問題です。珍しいデザインの杏葉が福井県西部の若狭の上中古墳群だけで３古墳、古墳中期の終わりの十善ノ森古墳から、後期中頃の大谷古墳と丸山塚古墳まで、60～70年間にわたって３古墳の首長が同じデザインを使うことは偶然で説明するには難しいので、入江さんの解釈になる余地はあるかもしれません。

上毛野に多い背景　では群馬県はどうなのか。これはまたすごく難しいのですけれども、福井県と同じ特殊な状況が群馬県にもある。日本で何個も出ていない、本日の資料の図くらいしか出ていない特別な双葉剣菱形杏葉がこの群馬県で後期前葉の３古墳に出ています。図４は年代順に並んでいて、恵下古墳と保渡田薬師塚古墳は後期１段階の初めで、前二子古墳は少し後だと考えます。近畿の中央政権から飾り馬具を貰った順序は恵下と薬師塚の２人が少し早く、前二子古墳はわずかに遅い。恵下・薬師塚・前二子古墳の被葬者は、若くして死ぬ人もいれば、長生きする人もいるので、死んだ順序と年齢順は違います。同じ時代にこの群馬の地で顔を合わせた事のある有力者の３人だと思います。そのうち薬師塚と前二子の２人は高崎と前橋のトップで、恵下は轡が鉄で、杏葉が胸まで飾る枚数を持ってなさそうですから、恵下古墳の主はワンランク下です。恵下古墳は伊勢崎市上植木町にあって、前二子古墳から近いので、場合によっては前二子古墳の被葬者の下で働いていた人の墓という可能性もあります。馬具は恵下古墳のほうが少し古いかもしれません。

そういう近い時代に、同じこの地域で顔を合わせていた３人が、同じデザインの馬具を貰ったという事は、おそらく福井県と同じような何かの事情がある。それは具体的には上毛野の各地域の首長たちの間に、例えば政治的同盟関係や、親族関係や、「氏（ウジ）」という集団関係などの繋がりがあって、入江さんの言葉を借りれば「被葬者の系譜的意味合い」ということになります。福井県では３代の被葬者にわたって時間的に繋がっていた。群馬県の場合には後期の初め頃の３人の首長の繋がりとして双葉剣菱形のデザインが必要な状況が近畿中央の政権に認められて、この３つが入ってきた可能性があると思います。この意見が当たっているかどうかは異論があると思いますので、難しいのですけれども、１つの意見として若狭と上毛野に多い理由としては系譜的意味合いがあると思います。

３　鐙について

次は鐙の話です。図６の左上隅の小さな金具２つは後二子古墳の出土品と思います。明治時代に出土した資料なので、前二子古墳の遺物と後二子古墳の遺物は区別が分かりにくくなっています。

前二子古墳の鉄製輪鐙　前二子古墳の鉄製輪鐙はバラバラになっています。破片になってしまって、全体の形が分かりにくいのですが、本来は明治時代に描かれた絵のような形をしています。丸くて、棒があって、右足用と左足用があって、馬に乗る時や降りる時、また乗っている時でも足をが安定する道具が鐙です。今の競馬でも、デザインが少し違う輪鐙を使っています。前二子古墳の鐙の昔の図を見ると、足を入れる穴の下部が二股に分かれている。そこの内側がボコボコと出ている形は滑り止めです。

江田船山古墳の鉄製輪鐙　図６の右上は熊本県の江田船山古墳の鐙で、下が二股に分かれて、中央が穴になります。二股に分かれて足をかける場所が広く、凸凹の滑り止めがあると足が安定して、滑り落ちる危険が少ない工夫がされています。前二子古墳は破片しかないのですが、明治時代の絵から推測すればよく似た形になります。

江田船山古墳の家形石棺は横に出入口が開けられている埋葬施設で、冠が３つ出ているので、３回埋葬していることになります。江田船山古墳に最初に埋葬された人は中期６段階で前二子古墳より２世代くらい前です。鉄製輪鐙は３回目に埋葬された人の副葬品と考えます。前二子古墳の時期に近く、中期の終わりか後期の初め頃に副葬された鐙です。

日本で５世紀の鉄製輪鐙は長野県の飯綱社古墳にあるのですが、特殊な事例で、単発の輸入品です。それ以外の鉄製輪鐙は中期の古墳からは出なくて、後期初め以後に出てきます。韓国では５世紀から鉄製輪鐙があります。古墳時代の品物やデザインは、朝鮮半島に先にあって、日本は後から学んで取り入れる場合が多いです。

江田船山古墳の馬具は、最初の埋葬者が持っていた中期６段階の轡も大加耶地域からの輸入品だと言いました。鉄製輪鐙もおそらく輸入品だと思います。断面が五角形をしている輪鐙は朝鮮半島でも西の方の地域の特徴です。百済や、加耶でも西寄りの地域からの輸入品と考えられます。

古墳後期の鉄製輪鐙　この後、鉄製輪鐙が日本で作られるようになりました。図６の下が編年図です。日

本では中期の終わりか後期の初めに輸入品があり、後期に鉄製輪鐙が作られます。鉄製輪鐙は、新しくなると柄が長くなります。後期初めから後期中頃に柄が伸びて、後期後半に最も長く、後期の終わりから短くなってきます。鉄の棒は断面長方形だったものが、断面が平たく、板状になっていきます。板状の断面形になるのは日本の特徴で、古墳後期には日本で鉄製輪鐙を作るようになったと思います。

前二子古墳は後期の初め頃、後期１段階です。編年図の福岡県正籠３号墳（１）と似ています。違う所は、前二子の鐙は滑り止めが付き、正籠３号墳の鐙は滑り止めがない点です。この段階では輸入品か日本製か、判別が難しいです。中期の終わりか後期の初め頃に江田船山古墳などで、朝鮮半島に起源がある鉄製輪鐙が輸入され、その後日本で作られて平たくなっていきます。２番の鉄製輪鐙は平たいので日本製です。１番の鐙も、前二子古墳の鐙も、後期１段階の鉄製輪鐙は韓国出土の鉄製輪鐙と違う点がわかっていないので、輸入品なのか日本で真似たものか判別が難しいです。

私は先程から、前二子古墳のｆ字形鏡板付轡や剣菱形杏葉や双葉剣菱形杏葉を日本の近畿中央の政権が作り、上毛野の首長たちにくれたと申しました。鉄製輪鐙もそうなのかは、自信がありません。朝鮮半島からの輸入品か、日本製か、今は分かりません。轡や杏葉が日本製だから、輪鐙も近畿中央の政権で作り、上毛野の首長にくれた可能性はあります。輸入品としても、それをモデルに近畿中央政権が作り始めたものとしても、最新式の鐙です。

それ以前の鐙は、丈夫さに欠けていました。鉄製輪鐙以外は、木を刳り貫いて作っている鐙が主流でした（図６の６）。これは、サンタクロースの長靴を縦に切って、その前半分みたいな形の鐙です。木を鐙の形に加工し、鉄の帯で補強していますが、柄の部分が折れやすい形です。実際に折れる事があったと思います。修理したような鐙もあります。それに対して鉄製輪鐙は折れませんから最新式で丈夫だといえます。

木製鐙の改良　丈夫ならば、日本の鐙はみんな鉄製輪鐙に代わるかというと、そうではありません。木製鐙を作っていた人たちも負けていません。鉄製環鐙よりも柄が折れやすいなら、柄を太くすれば折れない。柄の棒から、足を入れる所をつなぐ部分を太くします。６番の細い柄が折れやすいので、７番や８番のように全体を三角形にして上の方まで太くすれば、足に体重をかけた時に柄が折れる心配はありません。そうなると７・８番のような「木心鉄装三角錐形壺鐙」が流行します。出土数でいうと、木で作り鉄板で補強した鐙の方が圧倒的に多く、鉄製輪鐙はあまり流行りません。

前二子古墳の頃では、木で作り鉄で補強したそれまでの鐙に対して、鉄製輪鐙は最新式、当時最先端の丈夫な良い鐙でした。次の段階になると日本製も負けていないという事で、逆に鉄製輪鐙は少なくなっていきます。古墳時代の鐙全体として鉄製輪鐙は主流にならなかったのですけれども、しかし前二子古墳の段階に関して言えば当時最新式の一番良い鐙だったと言えます。

４　前二子古墳の馬具について

前二子古墳の馬具をまとめると、次のようになります（資料４ページ上段）。ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉は、元は朝鮮半島の大加耶地域の馬具がモデルになっていますが、古墳時代中期からずっと使われてきた、日本に定着した伝統的な飾馬具で、最高首長の持ち物でした。

そのようなｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に対して、新しい要素を加えています。１つは双葉剣菱形杏葉です。もう１つは、その後はあまり流行らなかったけれども、当時の段階としては最新式の一番丈夫な鐙です。それらを２つ加えた組み合わせが前二子古墳の馬具です。

前二子古墳では、鞍金具も出ています。しかし、鞍金具の破片が小さくて、この鞍の特徴を検討できるほどの事が分かりませんので、鞍金具は説明から省きました。鞍金具にも新しい特徴があったかもしれませんが、よく分かりません。

伝統的なｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に、当時一番新しいデザインの双葉剣菱形杏葉と鉄製輪鐙を加えた組み合わせが前二子古墳の馬具です。馬のお尻を飾るのに加えて、双葉剣菱形杏葉で胸も飾っていたことがわかってきましたので、装飾性が高くて、馬に乗る人物の地位も高いと考えられる特別な組み合わせが前二子古墳の馬具であるとまとめられます。

５　旧英国大使館別荘とアーネスト・サトウ

少しわき道に逸れた話をします。これは1880年の段階で前二子古墳の調査に来て馬具を報告されたアーネスト・サトウさんの写真です。

アーネスト・サトウさんはイギリス大使館の職員で、その後大使館の公使になりました。その方の別荘

が栃木県の日光にあります。私は栃木県に住んでいますので見てきました。明治時代の建物を修理して、2016年７月から見学できるようになりました。サトウさんがどういう人かよく分かる展示がされていますので、ご紹介します。

日光の旧英国大使館別荘　中禅寺湖の畔にあり、湖が見えます。良い景色ですから別荘を作るのです。このような建物です。建物の２階のベランダから中禅寺湖を見た風景です。かなり暑くなっていた７月ですけれど、日光は標高1000mですから、すごく涼しいです。群馬の方にとっては、軽井沢のような感じです。東京は暑いとなると、サトウさんもこの避暑地に来たのだと思います。

今度は建物です。イタリア大使館の別荘があって、英国大使館の別荘があって、こちらにサトウさんが夏の間に住んでいました。

巧みな日本語　サトウさんが書いた本の翻訳本が展示してあります。日記や旅行案内です。サトウさんは日本通で、日本語が出来て、日本人の奥さんがいて、息子さんも日本で大学の先生になった武田久吉さんという方です。大使館へ赴任してきた普通の外国人ではなくて、日本の事を良く知っていた人で、日本の旅行案内をたくさん書くぐらいですから、外国に対して日本の状況を積極的に発信された方だという事が分かります。幕末維新の英国外交官アーネスト・サトウさんがどういう人なのか、展示を見るとよく分かります。なぜこの人が群馬県に来て古墳を調査したのか。地元の人から出土状況や、他にも周りの古墳はどこにありますか、どのようなものが出ていますか、少し見せてください -- といろいろ調べています。それは本人が英語しか話せないのではなくて、日本語が上手だったから、英語も通じない田舎に来て、通訳なしで古墳を調査できたのかと思います。この時代の外国人で、日本語が出来て日本に詳しかった日本研究の第一人者と言われます。

『図説アーネスト・サトウ』という本を見ると、サトウさんの事が良く分かります。考古学、民俗学、地理学についてもいろいろな論文を書いています。ですから前二子古墳にたまたま興味を持ったのではなくて、いろいろな事を調べた人で、そのひとつとして前二子古墳を調べた人でした。

ベランダから中禅寺湖を見ると、丁度時間帯も良かったので、日ざしが入って明るい感じです。建物の板材もすごく綺麗なので張りなおしたのかなと思ったら、そうではなくて明治時代の建物の板を削りなおして綺麗な面を出して復元しましたと説明されました。すごく良い板を使っているのだと思います。

英国の紅茶とお菓子　見学者が休憩室の椅子に座っていて、イギリスの奥様が紅茶を飲んでいるような雰囲気です。時間帯限定ですが、イギリスのお茶とお菓子を有料で出してくれます。

サトウ関連の著書　廊下の展示にサトウさん関連の本がたくさんあります。『アーネスト・サトウ』『アーネスト・サトウとその家族』『アーネスト・サトウの生涯』。日本の事を明治時代に調べた人としては筆頭に上がってくる有名な人だということが分かります。私も詳しく知らなかったのですが、サトウさんはどのような人なのか、見に行って、よく分かりました。サトウさんが日本で書いた日記を翻訳した本である『遠い崖』は、全部で14冊出版されています。翻訳した人も大変だったと思います。日本人が気付かない事を外国人の素直な目で見てくれている本は、日本人が当たり前だと思って書かない事をたくさん書いてくれるので、読むと勉強になると思います。

日光びいき　「青い目に映った日光」といっていますけれども、日光を外国に紹介した最初の人はこのサトウさんだそうです。自分で別荘を作ったくらいですから、国際避暑地・日光の歴史はサトウさんから始まったそうです。サトウさんが日光に来て、ここは涼しいよ、夏に来たら良いよと言ったので、イタリア、フランス、ベルギーなどの大使館の別荘だった建物が日光に残っているのですが、それはサトウさんが言ったからです。日光のガイドブックを最初に書いたのもサトウさんです。中禅寺湖畔は理想の避暑地だそうです。サトウさんが書いた日光のガイドブックは、英語で書かれた日光のガイドブックとしては日本で最初です。1880年ころの話で、少し前は江戸時代だったので、日本で最初なのは当たり前ですね。あとはサトウさん以外の、その頃日本に来た外国人関係の本がたくさん展示してあります。「アーネスト・サトウが日本で一番愛した場所です」と、本当かどうかは知りませんが、そう書いてあります。旧英国大使館別荘の入館料は大人200円、子供100円。

中禅寺湖と男体山を少し離れて撮るとこのような感じです。男体山があって、ここに中禅寺湖があります。二荒山神社の鳥居があります。この道を真っ直ぐ行くと別荘が湖の畔にあります。

写真はこれで終わりです。前二子古墳の馬具の話

と、最後はわき道話でしたが、丁度時間になりましたのでこれで終わりにします。

～質問～

Ｑ１　馬具を着けるときはどういう時に付けたのですか？常時付けたのでしょうか？

Ａ１　飾馬具は普段は付けないと思います。例えば鈴杏葉とかは、普段付けていたら走る度にうるさくてしょうがないですね。馬鐸もそうです。それから杏葉などを付けて全速力で走ったら、杏葉が揺れて、馬のお尻に当たって、馬が迷惑だと思います。ですから、正式な場面では飾馬具を付けますが、普段の場面では付けないと思います。普段というのは本当に馬を実用に使う時です。だから場面に応じて、飾馬具は普段着ではなくて、私が今ネクタイをしているようなものだと思っていただければいいです。休みの日や、馬を休ませている時はこのような馬具を付ける事はありませんし、正式な儀礼の場に出てくる時にはこれを付けた馬に乗らないと前二子の首長としては格好が付かないという、そういうものだと思います。

Ｑ２　古墳の事あまり分からないのですが、馬も一緒に葬られたら何処に何が付いているか分かると思うのですが

Ａ２　馬を葬る場合は石室の中には入れないで、古墳の外側の堀の脇に穴を掘って入れる事が時々あります。

Ｑ３　その時に飾りとかあったらお尻にあったのか、胸にあったのか分からないのですか？

Ａ３　分かる例があります。ただ双葉剣菱形杏葉が馬のお墓から出た例はゼロなので、これが馬の胸にあったかどうかの証明は出来ません。長野県飯田市宮垣外遺跡や新井原古墳群では、剣菱形杏葉が馬のお墓から出てきた事例があります。それから千葉県佐倉市の大作遺跡では、ｆ字形鏡板付轡とは種類が違いますが、馬の口に轡を噛ませた状態で、馬のお墓から出てきた事例があります。もしもそういうお墓から双葉剣菱形杏葉が出てくれば、胸の位置に杏葉があると証明できると思います。

日光の旧英国大使館別荘全景

内部のようす

展示パネル１

展示パネル２

アーネストサトウの著作物

大室古墳の教室「講座・赤城山南麓の考古学 2016」2016.09.10

前二子古墳の馬具をめぐって

内山　敏行

（公益財団法人　とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター）

１　要旨

１）金銅で飾るｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉をセットで使う馬装は、朝鮮半島南部にある大加耶地域の馬具からアレンジして、倭（近畿中央政権）で作り、上毛野の各地域で最も有力な首長の墓に副葬される。

２）主に馬の胸を飾る双葉剣菱形杏葉は、上毛野と若狭に多い。古墳時代中期末に、大加耶の馬具とのセットとして最初に現れる。後期初めに倭で製作した可能性が高い。「上巻き」が上毛野と備前にあり、「下巻き」と「上下巻き」が近畿と西日本に多い。上下巻きは朝鮮半島南部の小加耶までもたらされた。

３）鉄製輪鐙は、古墳時代後期の初めに導入した新式の丈夫な鐙。古墳時代中期から続くｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に、新しい要素（双葉剣菱形杏葉と鉄製輪鐙）を加えた組み合わせが、前二子古墳の馬具。装飾性が高く、使用する人物の地位も高いと考えられる、特別な組み合わせである。

２　ｆ字形鏡板付轡・剣菱形杏葉を伴う馬具の性格

轡を飾るｆ字形鏡板と、馬の尻を飾る剣菱形杏葉は、倭の古墳時代を代表する装飾馬具の組み合わせ。古墳時代中期の後葉（中期５段階）から現れる。原型は、朝鮮半島南部の大加耶地域にある可能性が高い。

北関東西部地域の剣菱形杏葉は、最有力首長墳では金銅装ｆ字形鏡板付轡と組み合わせて使う。この約束を崩した組み合わせは、中規模古墳や追葬に伴う。

【中期後葉】……大半が小札甲を伴う。

〔ｆ字＋剣菱の組み合わせ〕　地域の最有力首長墳で、小札甲を伴う→軍事的性格（前橋市広瀬鶴巻塚古墳=長70～80m、高崎市井出二子山古墳=長108m）。井出二子山の剣菱+ｆ字は4組で年代差があるので、地域最高首長墳の中心被葬者（石棺）と、推定追葬者の副葬品。井出二子山は小札甲1領か2領と衝角付冑を持つ。

〔剣菱形杏葉→鈴杏葉に組み替える場合〕　中規模古墳か、副次的埋葬（独自の古墳を作らない人物）。小札甲を伴う。（高崎市天ノ宮古墳=中小墳か？、栃木県足利市助戸十二天古墳=推定長30mの帆立貝形、埼玉県行田市稲荷山古墳=長120mの首長墳の追葬者）

〔ｆ字・剣菱の一方を崩した組み合わせ〕　中規模古墳（大泉町古海原前1号墳第1主体=長約37mの帆立貝形、埼玉県川越市どうまん塚古墳=径24.5mで小札甲）。

〔ｆ字＋剣菱？を持つ中規模古墳〕　眉庇付冑を持つ点でも異色の2古墳（高崎市下芝谷ツ古墳=辺20mの方墳、

高崎市普賢寺東古墳=径 18m～30m）。

【後期前半】……甲冑（かっちゅう）を伴わない場合が多くなる。

〔f 字＋剣菱の組み合わせ〕　地域の最有力首長墳だが、甲冑はない（前橋市前二子古墳=長 93m、高崎市保渡田薬師塚古墳=長 105m）。

〔f 字・剣菱の一方を崩した組み合わせ〕　中規模古墳で、甲冑はない（鉄製素環轡+剣菱の伊勢崎市恵下古墳=径 27m、f 字だけの高崎市剣崎町大塚古墳=径 22m）。

３　双葉剣菱形杏葉

前二子古墳の馬具の特徴……f 字形鏡板と剣菱形杏葉のほかに、「上巻き」の双葉剣菱形杏葉があること。

双葉剣菱形杏葉は馬の胸を飾った可能性が高い

「野神古墳と芝塚 2 号墳では、通有の剣菱形杏葉に加え、双葉文の剣菱形杏葉が 1 点ずつ出土している。これらは、その組み合わせから、胸繋（むながい）に取り付けたものと考えられる。」（坂 2015・p.31）。宮代（2015・p.46）も芝塚 2 号墳に同じ意見で、ただし、尻繋（しりがい）の杏葉のうち 1 点が双葉剣菱形の可能性も捨てきれない･･･とした。

「双葉剣菱形杏葉をはじめ、いくつかの変形杏葉の出現は、こうした胸繋への杏葉装着が契機となった可能性がある。」（宮代 2015・p.55）

馬の胸繋（むながい＝胸のベルト）を飾る杏葉や馬鐸を釣り下げる金具が、横に長い事例が前二子古墳・西郷免古墳・梶原 D-1 号墳にあるので、双葉剣菱形杏葉を馬の胸繋に取り付けたという意見を支持できる。

→　ウマの尻だけでなく胸も装飾する、装飾性が高い（＝地位も高い）馬装。ただし、伊勢崎市恵下古墳は、尻繋（しりがい＝馬の尻のベルト）に剣菱形杏葉 2 点と双葉剣菱形杏葉 1 点を付けたかもしれない。

「尻繋のみを装飾する馬装に比べ、胸繋まで装飾する馬装はより多くの杏葉を持つ点、そしてより壮麗な馬装である点で、さらに高い階層を示すことが窺える。」（西 2015・p.312）

「胸繋杏葉は、有力古墳のなかでもさらに優位に位置づけられる古墳の副葬品に含まれること、また事例が少なく稀少なことから、 f 字形鏡板付轡＋剣菱形杏葉を持つ古墳の被葬者のなかでもさらに優位な階層の被葬者に配布され、その身分表象として使用された可能性が考えられる。……（中略）……尻繋杏葉のみ装備する階層よりも相対的に優位であることを示すため保持することに意義があり、胸繋杏葉の種類自体は問題ではなかったため、規格品とは異なる変則的な形状やデザインのものが採用され、明確な制度化を見ないまま消えていったと考えられる。」（西 2015・p.314）

双葉剣菱形杏葉が多い地域は群馬県と福井県

上毛野（群馬県）　3 古墳＝伊勢崎市恵下（えげ）古墳・高崎市保渡田薬師塚（ほどたやくしづか）古墳・前橋市前二子古墳

若狭（福井県西部）3 古墳＝　若狭町の十善ノ森（じゅうぜんのもり）古墳（長 68m）・大谷古墳（径 27.5m）・丸山塚古墳（径 50m）

最古の双葉剣菱形杏葉……古墳時代中期末の若狭（十善ノ森古墳）に「上巻き」の双葉剣菱形杏葉。

十善ノ森古墳では、大加耶の馬具と一緒に出土（参考：韓国慶尚北道高霊 池山洞44 号墳、熊本県 江田船山古墳）。日本製品よりも早く、引手を鏡板の内側へつなぎはじめる。

まず最初に大加耶から倭（若狭）へ双葉剣菱形杏葉を輸入。大和政権を経由しないで、若狭に直接もたらされたと考える意見がある（入江 2011ab）。

古墳時代後期初めの双葉剣菱形杏葉……ｆ字形鏡板・剣菱形杏葉とともに、倭（大和政権・近畿中央政権）で製作をはじめる。関連事例：大阪府軽里4 号墳、奈良県市尾墓山古墳、大阪府今城塚古墳（内田 2012）。

古墳時代後期の分布地域と、双葉が巻く方向（上巻き・下巻き・上下巻き……入江 1986b）

東日本では上巻きが出土する（群馬県の恵下・薬師塚・前二子古墳）。西日本の岡山県瀬戸内市西郷免古墳にも上巻きがある → 東日本の製品ではなく、近畿中央政権で製作。恵下古墳の杏葉は輸入説もある。

西日本は下巻きと上下巻きが多い。下巻きは奈良県野神古墳・芝塚 2 号墳と広島県勇免古墳群（入江 1986a）。

上下巻きは、大阪北部（摂津 梶原 D-1 号墳）、福井西部（若狭 丸山塚古墳）、出土地不明（國學院大學蔵）。岡山県 西郷免古墳の破片にも上下巻きがあるかもしれない。大和政権が配布（入江文敏 2011ab）。上下巻きは、朝鮮半島南部の小加耶までもたらされた（慶尚南道固 城　松 鶴洞1A-1 号墳）。

若狭と上毛野に多い背景…若狭の有力者の系譜を示す馬具に双葉剣菱形が必要で、特定の入手経路が続いたという意見：「双葉剣菱形杏葉が比較的集中して分布していることが指摘される。被葬者の系譜的意味合い、同一供給源から入手した可能性が大きいように思われる」（入江 1986b）「この種の杏葉の入手経路が断続的に続いていた…（中略）…入手にあたって被葬者側にある程度の選択権があったものか」（入江 2011b）

上毛野も、若狭と類似した背景か？　若狭は中期末から後期中頃の数十年。上毛野は後期初めにまとまる。

４　鉄製輪鐙など

古墳時代中期の鐙の主流は、木製品の輪鐙を鉄板で補強したもの（木心輪鐙）。中期の鉄製輪鐙は例外的。

日本では古墳後期の初めに鉄製輪鐙があらわれる　江田船山古墳追葬（断面五角形…百済・加耶から輸入）。

鉄製輪鐙は、当時の最新式の鐙。木心輪鐙よりも、はるかに丈夫。朝鮮半島の鉄製輪鐙は新羅地域に多い。

古墳時代後期の第 2 段階からは、折れにくい丈夫な形の木製鐙が主流になる（三角錐形木製壺鐙）。

そして鉄製輪鐙は、やや少数派の鐙になってゆく。後に続く後二子古墳出土（？）遺物に、木製壺鐙の金具がある。

他の前二子古墳出土馬具には、文様のある鞍金具（くらかなぐ）の小破片がある。

5　まとめ

古墳時代中期から続くｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に、朝鮮半島の馬具から由来する新しい要素（双葉剣菱形杏葉と鉄製輪鐙）を加えた組み合わせが、前二子古墳の馬具。ウマの尻だけでなく胸も装飾する点で、装飾性が高く、馬に乗る人物の地位も高いと考えられる、特別な組み合わせの馬具である。

【参考文献】

1）石関伸一ほか 1986『古海原前古墳群発掘調査概報』大泉町教育委員会

2）伊藤雅文 1986「当麻町 芝塚古墳群 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1985 年度（第 1 分冊）　奈良県立橿原考古学研究所　橿原

3）伊藤雅文 2013「馬具」『若狭と越の古墳時代』雄山閣　東京, pp. 113-118

4）入江文敏 1986a「大谷古墳」『福井県史』資料編 13, pp. 303-304

5）入江文敏 1986b「若狭地方における首長墓の動態-主体部・副葬品の分析を通して-」『福井県史』資料編 13 考古-本文編-, pp. 340-363,

6）入江文敏 2011a『若狭・越古墳時代の研究』学生社　東京, pp. 21-75

7）入江文敏 2011b「十善ノ森古墳の研究(1)」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会　奈良, pp. 186-203

8）内田真雄編 2012『よみがえる古代の煌き　副葬品にみる今城塚古墳の時代』平成 24 年秋季特別展　高槻市立今城塚古代歴史館　高槻

9）小野山節・本村豪章 1980「上毛野・伊勢崎市恵下古墳出土のガラス玉と須恵器と馬具」『MUSEUM』第 357 号　東京国立博物館　東京, pp. 4-31,

10）河内一浩 1994「軽里古墳群」『羽曳野市史』第三巻, pp. 347-356

11）河上邦彦 1984『市尾墓山古墳』高取町教育委員会, p. 51

12）川端博明 1998『梶原古墳群』名神高速道路内遺跡調査会　高槻

13）群馬県古墳時代研究会（加部二生ほか）1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会資料集第 2 集　藤岡

14）後藤守一 1941「上古時代の杏葉に就て」『考古学評論』第 4 輯　東京

15）斎藤　優 1970『若狭上中町の古墳』上中町教育委員会（福井県遠敷郡）

16）杉山秀宏・桜岡正信・友廣哲也・徳江秀夫 2014「群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘調査概要」『日本考古学』第 38 号　東京, pp. 79-90

17）千賀　久 1977「奈良市南京終町野神古墳出土の馬具」『古代学研究』第 82 号　古代学研究会, pp. 34-38

18）張　允禎 2005「韓国固城松鶴洞古墳出土馬具に対する検討」『朝鮮古代研究』第 6 号　朝鮮古代研究刊行会

19）中條英樹 2009「馬具」・「井出二子山古墳出土馬具の編年的位置とその意義」『井出二子山古墳』高崎市教育委員会, pp. 171-181 と 229-242

20）中條英樹 2010「群馬県高崎市・井出二子山古墳出土の馬具について」『比較考古学の新地平』同成社東京, pp. 341-350

21）東亞大學校博物館編輯（沈奉謹編）2005『固城松鶴洞古墳群 第 1 號墳 發掘調査報告書』東亞大學校博物館　釜山

22）中司照世 2006「十善ノ森古墳」『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』福井県立若狭歴史民俗資料館・福井県教委, pp. 31-44

23）西　幸子 2015「山の神古墳出土瓢形杏葉の検討-胸繋の可能性に注目して-」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室　福岡, pp. 309-314

24）橋本英将 2005「双葉剣菱形杏葉の検討」『大谷古墳』上中町教育委員会

25）馬場昌一 2006「西郷免古墳」『邑久町史』考古編, pp. 381-402

26）坂　　靖 2015『継体大王とヤマト』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　橿原, pp. 29-31

27）樋口吉文編 2009『仁徳陵古墳築造』堺市博物館　堺, p. 91

28）藤原郁代 1993『古墳時代の武器・武具・馬具』天理ギャラリー　東京

29）藤原郁代 2006『東西の古墳文化』天理ギャラリー　東京

30）堀田直志編 2005『大谷古墳』上中町教育委員会（福井県遠敷郡）

31）前原　豊・杉山秀宏他 2013『東アジアから見た前二子古墳』前橋市教育委員会　前橋

32）宮代栄一 2000「保渡田八幡塚古墳の馬具および出土伝承遺物」『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会, pp. 451-458

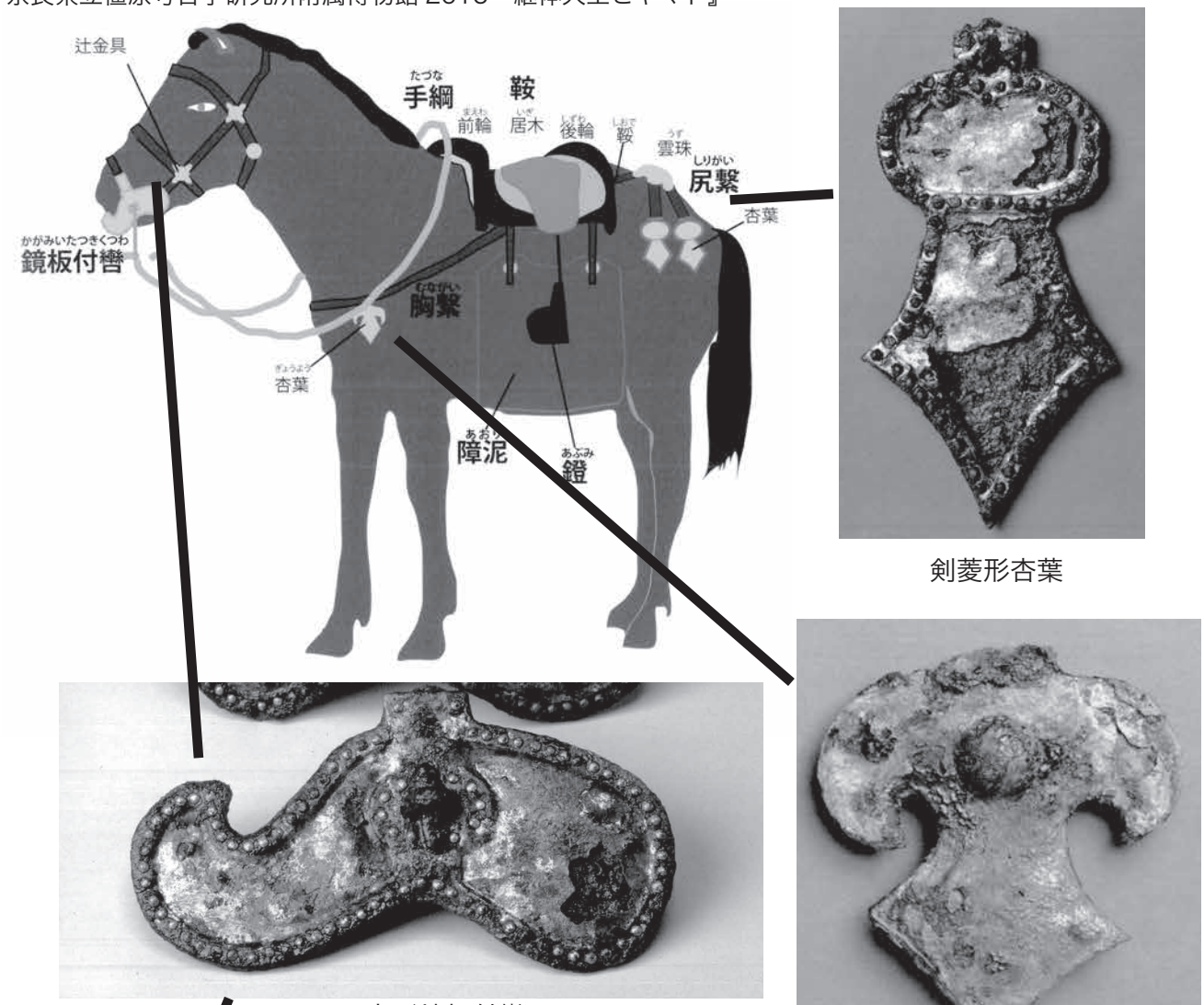
33）宮代栄一 2015「古墳時代馬装における胸繋装着馬具の検討」『土曜考古』第 37 号　土曜考古学研究会　桶川, pp. 37-58

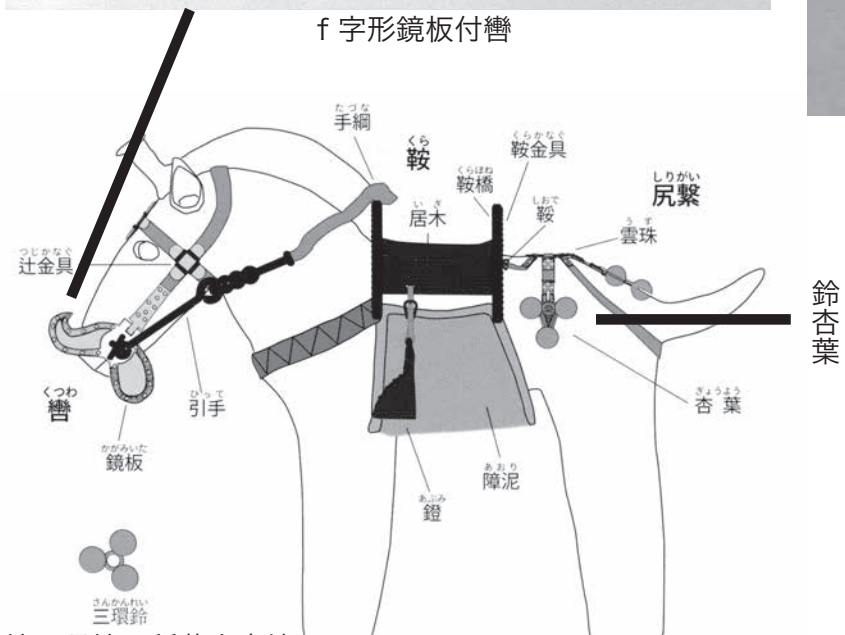
34）本村豪章（古谷　毅作図）1991「古墳時代の基礎研究稿－資料編(II)－」『東京国立博物館紀要』第 26 号　東京国立博物館

35）八幡一郎 1930『馬具』日本考古図録大成第 5 輯　日東書院　東京

36）米田文孝 1987「群馬県藤岡市出土馬具考－鐘形杏葉を中心に－」『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』上 創元社 大阪, pp. 490-524

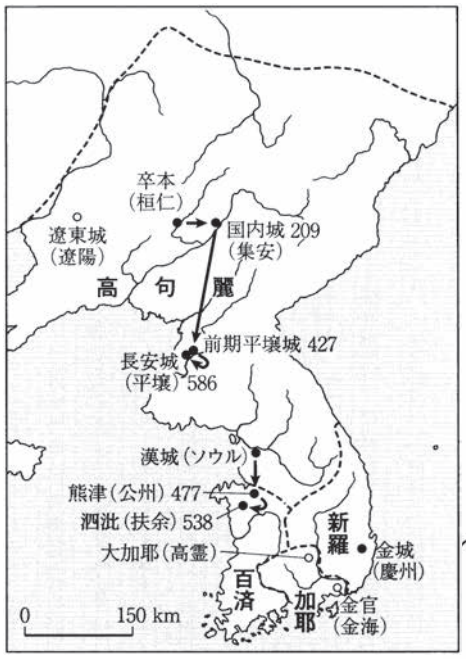
奈良県芝塚２号墳
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015『継体大王とヤマト』





埼玉県埼玉稲荷山古墳
関義則 2016「埼玉古墳群」『埼玉の考古学入門』さきたま出版会

図１　ｆ字形鏡板付轡を伴う馬装の復元例



田中俊明 2013『岩波講座日本歴史』1 より

5 世紀後半の加耶各国の圏域
(韓国考古学会編 庄田慎矢・山本孝文訳 2013『概説 韓国考古学』同成社)

	時　期	大　王	首長墓	特　色	
Ⅰ	中期後半 (5 世紀末)	雄　略	西塚古墳	・半島に出自をもつ遺物は、地方豪族の独自な交渉によって入手したものが多い。普遍的な遺物は大和政権から配布された。	偏在 普遍
Ⅱ	後期初頭 (6 世紀初)	(継体)	十善ノ森古墳 獅子塚古墳	・半島に出自をもつ遺物を地方豪族が独自に入手した（角杯、冠・履）。	偏在
Ⅲ	後期中葉 (6 世紀中)	欽明	丸山塚古墳	・地方豪族の独自性が目立たなくなる。大和政権からの強力なインパクトがあった。畿内系大型横穴式石室の採用。	普遍

← 福井県若狭地方の首長墳の特色
(入江文敏 2011「十善ノ森古墳の研究 (1)」『勝部明生先生喜寿記念論文集』)

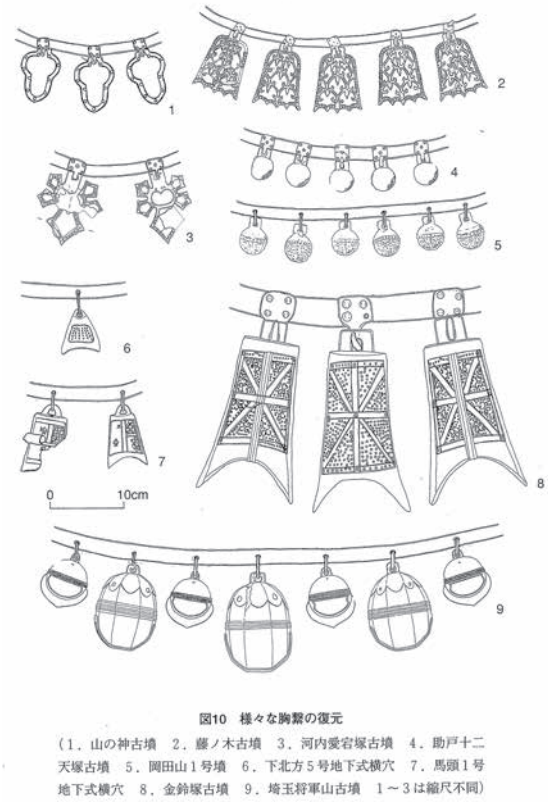
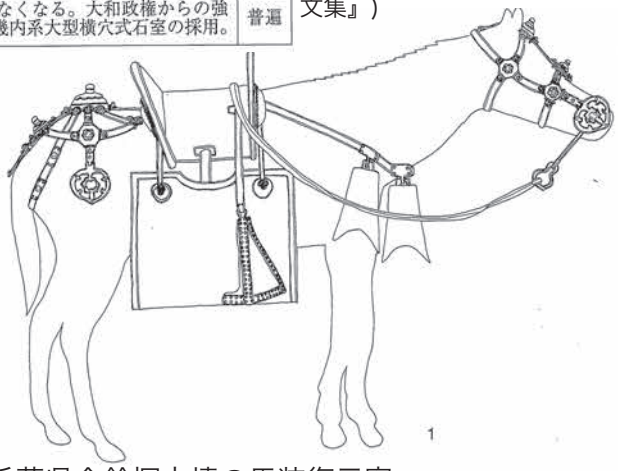


図10　様々な胸繋の復元
(1．山の神古墳　2．藤ノ木古墳　3．河内愛宕塚古墳　4．助戸十二天塚古墳　5．岡田山 1 号墳　6．下北方 5 号地下式横穴　7．馬頭 1 号地下式横穴　8．金鈴塚古墳　9．埼玉将軍山古墳　1～3 は縮尺不同)

様々な胸繋（むながい = 馬の胸帯）の復元
(宮代栄一 2015「古墳時代馬装における胸繋装着馬具の検討」『土曜考古』第 37 号 ,pp.37-58)



千葉県金鈴塚古墳の馬装復元案
胸繋に馬鐸を釣りさげる金具が、横に長い長方形。
(宮代栄一 2015「古墳時代馬装における胸繋装着馬具の検討」『土曜考古』第 37 号 ,pp.37-58)

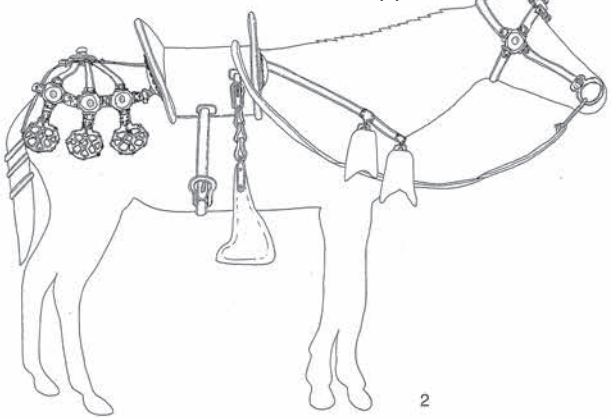


図 2　韓国の地図・若狭の首長墳・胸繋の復元

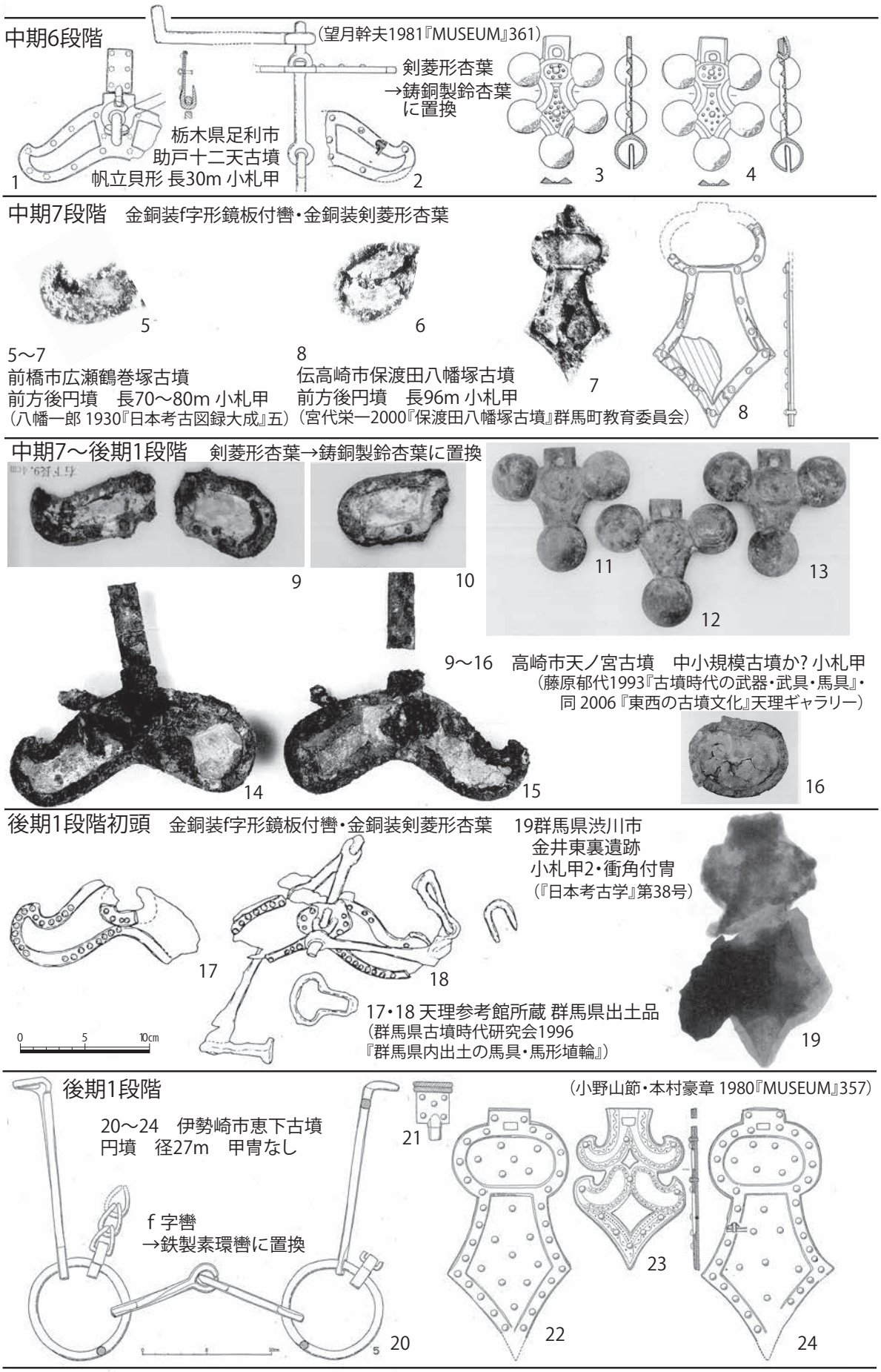


図３　ｆ字形鏡板付轡（左）と剣菱形杏葉（右）の出土事例　古墳の大きさ、甲冑の有無

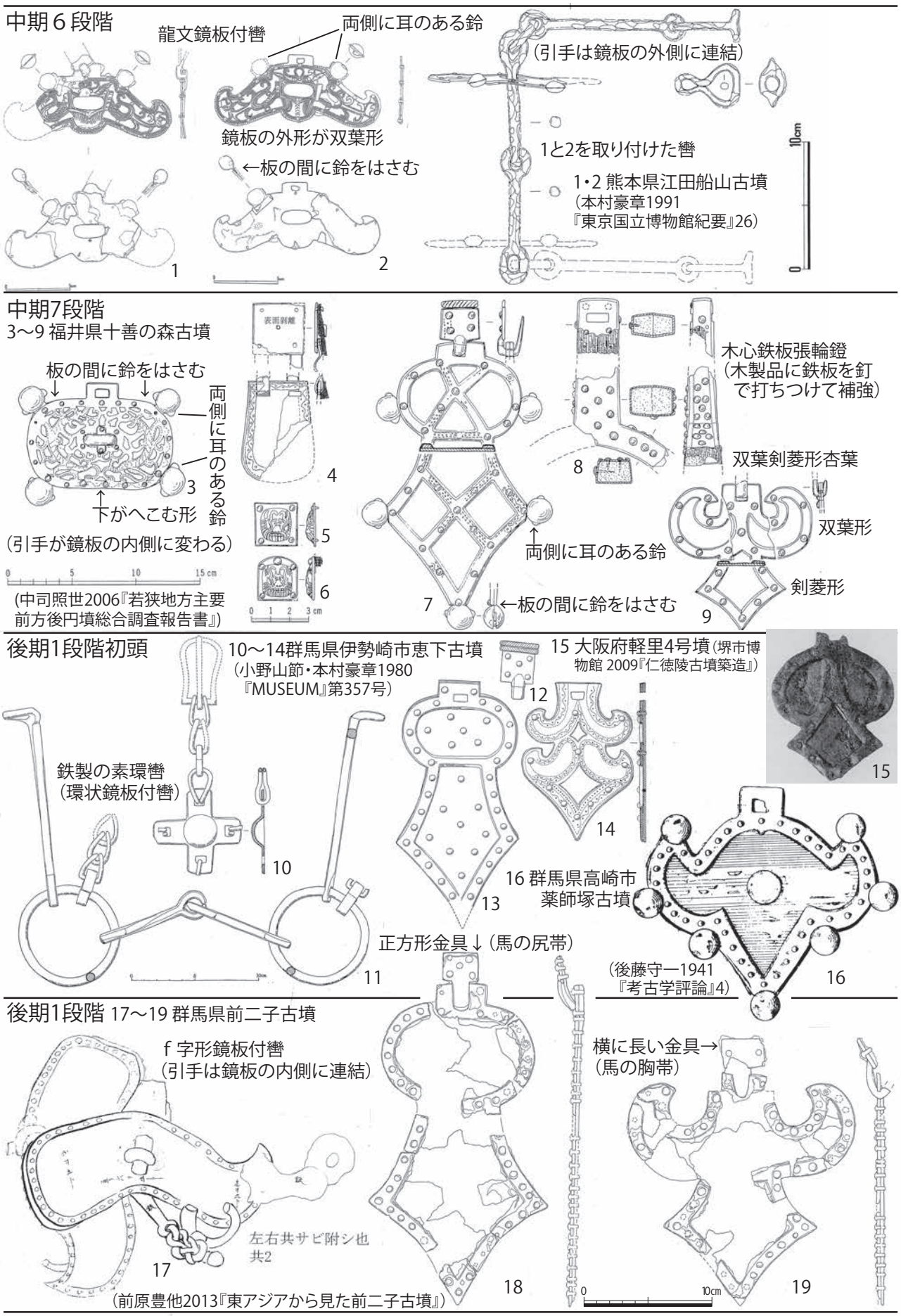


図４　群馬県域で出土した双葉剣菱形杏葉（右下）および関連する馬具

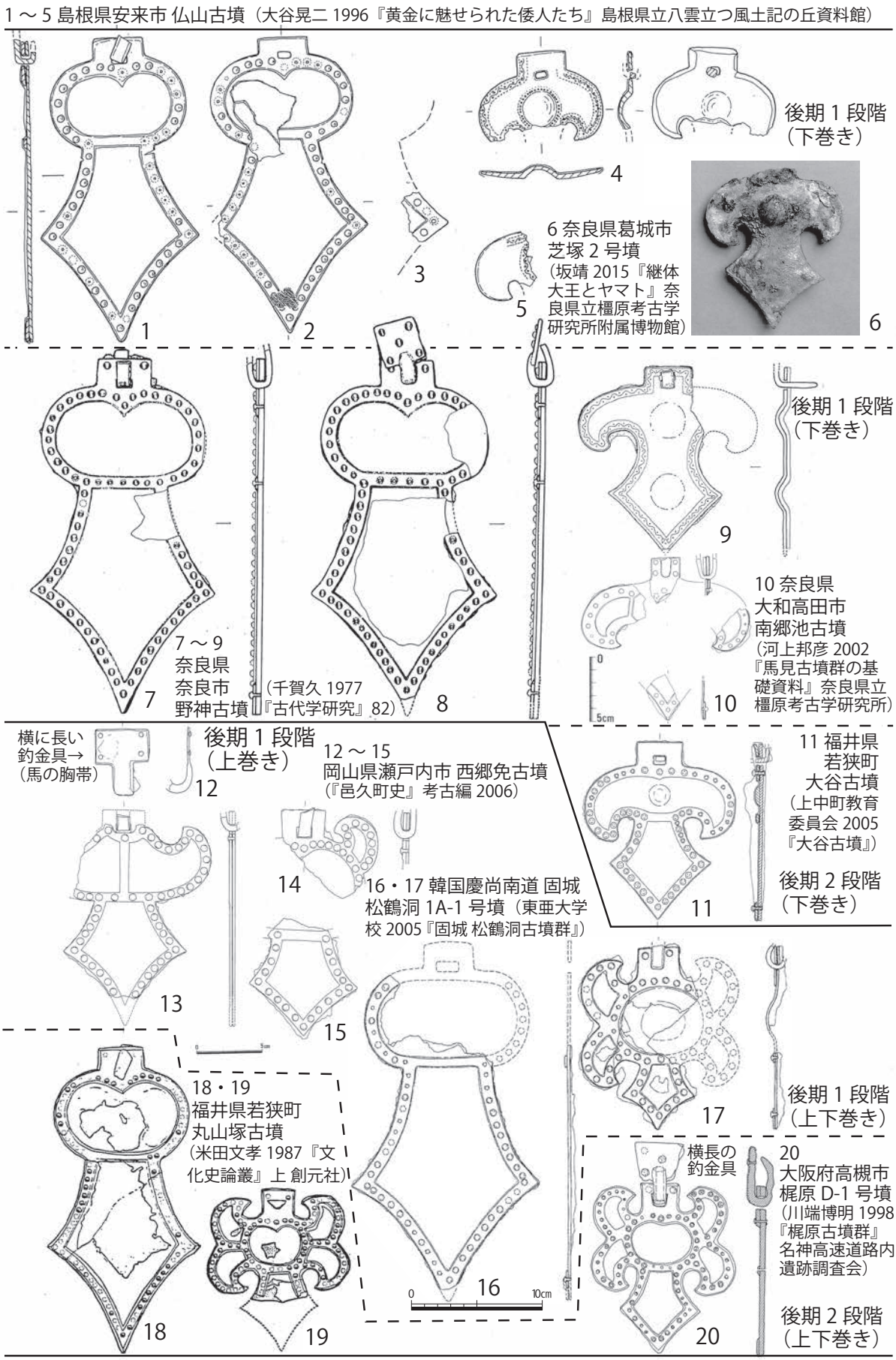


図 5　西日本および韓国出土の双葉剣菱形杏葉と関連馬具……「下巻き」と「上下巻き」が多い

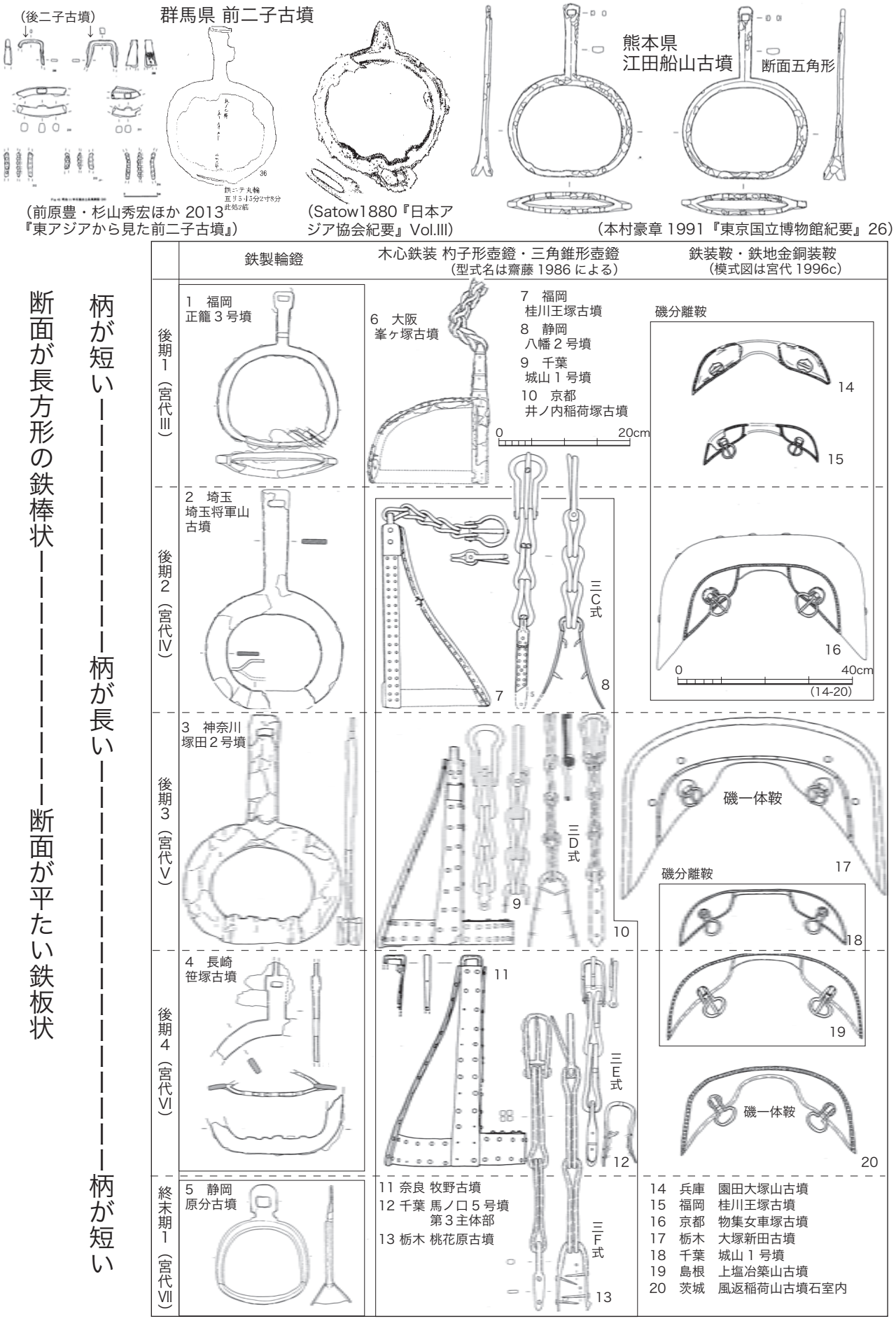


図6　古墳時代後期の鐙と鞍　縮尺1/8、鞍は縮尺1/12（内山敏行2013「馬具」『古墳時代の考古学』4　同成社）

赤城山南麓を襲った平安時代の巨大地震

加　部　二　生（桐生市教育委員会）

はじめに

ご紹介いただきました加部です。よろしくお願いいたします。かつて前橋市教育委員会に勤務しており、大室公園の発掘調査を行っていました。

その中で北駐車場のすぐ東側にＭ－１号墳という帆立貝形の前方後円墳があります。あれは私が調査しております。それを調査した時に、まさにＭ－１号墳の周溝を切るような形でみつかりました。最初、私は弥生時代の環濠かと思っていました。円弧を描いていたからです。どうも掘っていくと新しいものが出てきて、今思えばそれが大地震の地割れだったのです。その中には、浅間山の火山灰も堆積していました。文献に記述がありましたので、後で出てきますがその地震ではないかというような事が群馬の中でも言われ始めた頃の調査でした。非常に画期的な発見だったと思います。

１　群馬県東部の地質

群馬県は地震に強い地盤であり、あまり地震がないとよく言われる方がいます。たしかに足尾山塊の中古生層といわれる古い岩盤の上に乗っているという事で、硬い岩盤の上にあるから地震は大丈夫だと言われる方が結構いらっしゃったのですが、過去の数百年、数千年という単位で記録を紐解いてみますと、地震列島である日本に例外はないと言えるくらい大地震が起きています。それが先程も言いました大室公園でも検出している地震の痕跡になります。確かに死亡者に関しては西埼玉地震が昭和６年にありまして、その時は群馬で５人の方が亡くなられていて、荒砥地区でも鳥居とかの石灯篭が倒れたとか分かっているらしいです。有名な関東大震災の時の死者は０人であったといいます。そういう記録になっております。

私たちが生まれてから、こんなに頻発して震度７の地震がここの所立て続けに起きていますが、おそらくそういった今まで私たちが経験した中でも最大級の地震がこの群馬県で、弘仁年間に起きているのではないかといわれています。

日本列島の構造

地震の概略の説明ですが、日本列島というのはこういう太平洋プレートやユーラシアプレートという上の丁度境目に位置しています。元来この太平洋プレートに押されている感じでした。断面で見るとこういう感じで潜り込んでいき、ここに日本列島があるわけですが、これが潜り込んでいるのでここに軋轢が生じて、それが跳ね返り、地震になるというのが１つのパターンです。

タイプ１（海溝型）　地震にはもう１つ大きなパターンがあります。今のはタイプ１の海溝型というものですが、先程もいいました1923年の関東大震災や先日の東日本大震災も海溝型というタイプです。今年ありました熊本県の地震はよく耳にする活断層というのが原因で起きるものです。

タイプ２（直下型）　こちらをタイプ２といいますが、それが阪神淡路大震災と熊本の地震がタイプ２の直下型といわれるものです。実は先程言いましたように、日本列島は、太平洋プレートに押されているわけですが、2011年の東日本大震災の時は大きくこれが東に揺れ戻されていて、それで従来西へ押されているものが逆に東に広がってしまいました。実は皆さんも土地を買う方はよくご存知なのですが、今、私たちは発掘調査をする時に基準杭を座標で押えているのですが、それがこの東日本大震災の時に大きくずれてしまいまして、最大で茨城や福島あたりは、10mくらい東に拡がってしまいました。国土が拡がったと喜ぶ人はいないと思いますが、ここ、大室も私が調査した新里と同じだと思いますので、おそらく東に52㎝くらいずれているはずです。だんだんそれが戻ってきているのですが、そのパラメーターを国土地理院の方で補正値として出しております。私たちは、既に打設してある杭から測量する場合は全体にずれているのでそんなに問題はありませんが、最近はGPSを使って出す場合が多いです。そうしますと衛星は地震に関係ありませ

んので、ずれが分かります。ただまた太平洋プレートでこちらに押していますので徐々に戻っているという状況らしいですが、まだ完全には戻っていないと思います。2011年の地震でこのような現象が起きていたという事は座標とかを扱っていないと、新聞に出ていないので気付きません。

活断層　先程地震の２パターンを説明しましたが、直下型の原因になる活断層という言葉を最近はよく使いますが、活断層というのは一般的に最近から５万年以降に活動した、動いた断層の事をいっております。将来も活動する可能性があるという事でこれが地震の原因になっているわけです。原発の耐震の基準として現在から５万年以降と新聞などに出ていると思いますが、それを考慮するようにという事で皆基準を作っています。そういう事でタイプ２の活断層の地震が直下型地震となるわけですが、実は群馬県にもこの活断層が確認されているという事が分かりました。それが今、私がフィールド調査をしている桐生市の元の新里村です。おそらく新里地区の活断層が原因となって、弘仁の地震は起きたのではないかと考えております。それは後に写真で出てきます。そのようなものが原因で直下型の地震が起きているのではないかという事が言われております。

大久保断層　これが赤城南麓の活断層という事で、大久保断層と呼ばれていますが、大久保というのが元新里村にあります。今も大字大久保があります。活断層としては少し距離が短く、新里の大久保から、353号線という国道がありますが、それに沿ってそのまま大間々方面に抜けておりまして、おそらく大間々の桐原を抜けて、渡良瀬川を越えて桐生の梅田の方に抜けていると思いますが、よく分かっていません。現状で分かっている範囲ではそんなに長い活断層ではないと言われております。

太田市の活断層　それから最近新聞でも良く出てくるのは太田に活断層があると言われています。以前群馬大学におられて今、広島大学へ転勤してしまった熊原先生という方がいらっしゃいます。今回の熊本の地震でも大活躍をして活断層を見つけたりしたのが熊原先生ですが、大久保や太田は熊原先生が非常に調査をされていまして、実は今年の２月に太田で活断層の調査をしています。活断層の調査とは発掘調査と同じようにユンボで行なっており、ちゃんと発掘届も出したと言っていました。そして２月に行なったのを私も見せていただきまして写真も撮りましたので後でお見せします。そのような最近は埋蔵文化財ではなくて活断層なども発掘をする時代になってきています。手順としては埋蔵文化財の発掘調査と同じような順序で行なったようです。太田断層は、長い距離があるのだといわれていますが、これについてもはっきりとした事はまだ分かっていません。過去に何度か発掘調査を行なっていますが、確実に活断層をつかんでおりませんので、群馬の活断層については櫛引など利根の方にもありますが、明確に全部分かっているという活断層はまだ１つもありません。

これは豊洲の地下の図面に似てますが、地震の活断層のイメージ図です。こういう短いものと長いものがあるという事で、おそらく大久保の活断層などは短いタイプ。太田の方は長い方の活断層ではないかといわれております。活断層は現状で地表に出てきているものと途中で止まってしまっているものがありますので、そういうものが地上の航空写真とか、熊原先生も太田で行なう時にGHQが写した写真を元に不規則な線があるという事で活断層を想定されたそうです。そういう地中で止まってしまっているものに関しては地上からでは限界がありますので、今後の課題だと思いますが、いろいろな方法でそういうものを追求しております。しかし、まだ良く分かっていないというのが正直な所です。原発の存続の余地として、これは赤旗から取ったもので、日本は活断層だらけというのは本当の事です。これは原発に反対派の立場で書かれていますが、ただこういう活断層が群馬の所は少なくなっているように見えますが、そんな事はないと思います。これだとどうも大久保が入っていませんので、結構古い文献を元に作っているのだと思います。

トラフとは　よく南海トラフや駿河湾トラフなどという言葉を聞くと思いますが、こういった海溝のものがプレートの境目に出てきます。よく南海トラフで東海地震が起こると言いますが、トラフという言い方をしますが、海溝と和訳しています。こう見ますと関西や中部が多いですが、ここは例のフォッサマグナというものがありますから集中してあります。しかし日本全国ほぼあるだろうと思います。このように記されていないものが実際にはあったりしますので、確かに日本は活断層だらけなので、原発には適していない地形だと思います。

２　『類聚国史』に記された弘仁９年の大地震

こういった事で地震の起きるメカニズムや概略的な

ものを説明してきましたが、本題の平安時代の方に入っていきます。これは天神様で有名な菅原道真、最後は九州の太宰府に左遷されて向こうで亡くなっています。この方は中央の役人で、中央にいた時に『類聚国史』というものを編纂しております。後からの記述で書かれていますが、中央にいるので日本各地の事を報告で上がってきたものを記録してまとめているわけです。それを編纂したものが『類聚国史』という書物です。

弘仁９年の地震　これに弘仁９年、818年の記事にこうあります。「相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野等の関東一円に地震がありました。山が崩れて谷が埋ること数里。」という事は、山が崩れて谷が埋るものすごい大災害が起きたという事が書かれています。こういう話は、割りと誇張があるものですから本当かという話が出ていたのですが、実際これから写真で出しますが、山が崩れて谷が埋る状況が確認されていますので、あまり誇張でもないと思います。そして農民がたくさん死んだと書かれています。

液状化現象　この中で重要なものが、上野国の境で地震のため水潦という水溜りみたいなものが出来たと書いてあります。群馬県ですので当然津波などは起きていません。これは最近の見解では、地震の揺れでドブ水が吹き出る現象、液状化現象といいますが、おそらくそういったものではないかと思われます。地下の水と砂が地表に吹き出す噴砂といいますが、そういう液状化現象が起きているのではないかといわれております。実際に噴砂、液状化現象の痕跡というのは発掘調査で、平安時代のこの地震の噴砂が各地で確認されております。また後に写真でお見せします。ですから『類聚国史』の記述というのは地方から上がってきたものを割りと忠実にまとめてあるのではないかと思います。山が崩れるや谷が埋るなどそういう記述が割りと合っているのではないのかと最近言われております。

大久保の山崩れ　先程見てきました大久保活断層のすぐ近くに大久保の山崩れというのがあります。私たちは発掘調査で表土から掘っていきますと上に黒土があり、関東地方ですとその下に赤土の関東ローム層があります。ところがここは地層が逆転していて、黒土の上に３～４ｍくらいローム層が溜まっています。ですから平安時代の地表はここで、この上に山崩れが起こってしまって、このような山になっています。こんな丘が出来てしまうような山崩れ、山体崩壊が起きるくらいの大規模な地震でした。これはまさに大久保活断層の近くのものですから、もし大久保活断層が震源だったとすれば、本当に震源地の近くという状況になります。その近くで、これは新里で調査をした屋地川遺跡ですが、これだけ上の山が崩れています。今回、2011年の東北の地震でも崖が崩れたところが結構あると思います。山がここまで丸々崩れてきてしまうようなことはあまり聞いておりませんので、この弘仁の地震はいかに規模が大きかったかという事がこういう事からも分かると思います。資料の方にも出してあります。

「ぐんま昆虫の森」予定地の発掘調査　５ページに出ている写真です。今、新里にぐんま昆虫の森という県施設がありまして、昆虫館というドームが建っている所を事前に発掘した時の断面です。この断面は地層部分を白くスプレーをして分かりやすくしていますが、この断面の重要な事は、５ページ下に図面が出ていますが、これが１個の塊で流れてきています。こちらも赤土が流れてきています。そしてここに黒い三層になっていますが、これが実は今から6000年くらい前の縄文時代前期の土坑といっておりますが、ゴミ穴や墓穴で中から土器が出ました。

ここの下に黒い層がありまして、これが今から1500年前に榛名山が爆発した時の火山灰が入っている黒土です。どうもこの地震が起きる前は浅い谷状の緩やかな窪地でしたが、そこにこういった土砂が上流から流れてきたのだと思います。皆さんもご存知のように地面の地層というのは古いものから下に堆積するのが常識ですので、縄文時代が下にあって、1500年前の古墳時代が上にこなれければいけないのですが、この地層では逆転しています。上に縄文時代の遺構があって、下に古墳時代の火山灰の谷があります。おそらくこの塊ごと遺跡が流れてきてしまったのです。私たちが発掘をしている部分の調査だけならこの真ん中に土坑の平面図があります。半分しか掘っていませんのでこのようなものですが、縄文土器や石斧などの石器は他所から運ばれてきますが、こういった遺構、竪穴建物などの住居址というもの、古墳というものはそこから出てくればそこに造られたと考えるのが常識でした。ところがこの新里地域ではこの常識が通用しません。遺跡ごと地震の土砂崩れで流れてきました。これは重大な発見というか、従来の日本の考古学では予想しなかった現象でした。これは、ぐんま昆虫の森のドームが出来てしまっているのですが、現状のまま残しておきたかったです。

しかしそれは出来ませんので、断面に樹脂を塗って、布を張って、土層の標本を作っております。現在、新里の私がいる文化財の事務所がありますが、そこに常設で展示しています。もし皆さん興味があれば土日が休みですが、平日の勤務日には誰か居ますのでいつでもご覧になれるようにしてあります。そういった重要なものですから、本来は現地で保存するのが一番良いのですが、なかなか事前調査の原因も昆虫の森の依頼で行なっておりましたので、残す事は出来ませんでした。

こういったような現象からも先程の『類聚国史』の記述が誇張しているわけではないという事が分かりますが、更に不二山の上の段に皆さん行かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、上の段にここと同じような民家が復元されています。その辺りの下にもこんなに大きな地割れが確認されております。

上毛電鉄の北側　実は、この地割れはこれだけ見るとすごく大規模なのですが、私は新里で20年以上発掘を行なっていますが、旧新里村地区では村のほぼ中央より南側に、前橋から西桐生に行く上毛電鉄が走っていますが、その上毛電鉄より北側が赤城南麓の斜面地形になっています。上毛電鉄より北側で家を建てるとか道路を作るという時に埋蔵文化財の発掘をする前に試掘調査、確認調査というものを必ず重機で行ないます。上毛電鉄より北側で行なうと大抵どこでもこのような地割れが出てきます。珍しくはありません。今は家を建てるのも工法が優れていまして、地盤調査もしていますので、影響はないと思います。この地割れは掘ってこうなっているわけですので、黒い土が堆積するわけですが、中には空洞の部分があったりします。これは一番下まで私たちは、調査をしているわけではありません。これは地震が起きた後に出来た地割れ、先程言った活断層ではないのですが、こういった地割れを無数に確認しておりまして、これは線路より南です。広間地西というのは赤堀の近くの場所にあり、割れ方は先程より緩やかですが、こういったものが南部でも出ています。地割に関しては、太田でも出ています。ただ私が現場を見ている限りでは、先程の新里のような地割れはあまり出ていません。段がずれてしまうようなほどの地割れというのは見ていません。ですから太田断層を弘仁地震の震源だと考える方は新里の現状を見ているのかなと思ってしまいます。こっちはぐちゃぐちゃです。これは縄文時代の遺構も埋っているのですが、当然地中に埋っていても後からクラックが入って、発掘調査をすると結果的にこういう風に出ます。これは縄文時代前期の竪穴建物ですが、このような状況もあります。この久留美田遺跡は少し画期的でした。これも地割れがたくさん出ているのですが、新川前田遺跡は、みどり市笠懸との境の南部の地割れの状況です。これは掘る前の状況です。ここはロームというより水性の堆積なので粘質土の感じですが、そこに黒い土が埋まって堆積しています。これが全部地割になるわけです。これを先程掘ったのが不二山の昆虫の森の状況です。先程言いました液状化現象の噴砂ですが、これは古墳時代の竪穴を切って出てきているのですが、少し分かりづらいのですが、ここまで断面・竪穴の壁になります。これは平面的に家を調査しているわけですが、こういう感じで下から砂が吹き出ています。

噴砂について　私も噴砂に関して50遺跡以上で調査をしていますけれども、１つの共通性は先程言った地割れが多く見られるのは上毛電鉄より北側ですが、その赤城山の地形のロームの厚い所では割りと噴砂が起きていません。やはり噴砂が起きるのは沖積地というか河川際の所です。あるいは埋め立てたような所で、そういったものに関して多く見られます。

2011年の時も千葉の辺りで液状化が多く出てしまったのは埋め立てで出来ている所です。それから私が学会で最近早稲田大学に行く事が多いのですが、早稲田大学文学部の戸山キャンパスも液状化ですごくやられていて、どうしてこんな所でと思って後で絵図を見たら分かりました。昔は池だった所を埋め立てていたのです。それなので液状化が起きてしまって酷い状態になっていました。こういうものが下から砂が吹き出てきます。

これは新里のベイシアの事前調査で出てきたものです。あそこの下でも畠が出ています。これは小林一本木といいまして、これも噴砂ですが、赤堀に近い方です。液状化に関しても深谷とか尾島の方でも結構出ていますが、沖積地が多い平野部の方が、液状化の痕跡はむしろ地割れよりも多いかもしれません。こういった所でたくさん出ています。これは一番良い断面ですが、下から出てきてここを吹き出てこう上がってきたわけです。これが全て噴砂です。ここの遺跡の場合、非常に状況が良いのは、これは噴砂が起きた後にこの地震の洪水が来ています。それなので噴砂の面がそのまま平面的にも掴めたという貴重なものです。なかなか削られてしまうものですから大体今までこの部分

でしか見ていないのですが、ここの遺跡の場合は、地震の二次災害ですので、地震が起きてからどのくらいの時間が経過して起きているのかは現状では解りません。もしかしたら１ヶ月くらいのスパンはあるかもしれません。土砂崩れが起きて、それによって川が塞き止められてそれが二次災害になる。それが１ヶ月もかからず2,3日でなる可能性もありますが、それで噴砂がまだある内に土石流で埋っているわけです。ここまで断面です。先程と同じですが、ここまでが断面でこれが平面的に続いています。そしてこの上に先程の見たように吹き出てきた砂が堆積してこういう塊になります。この面を削っていっているので、今まで見た断面と平面になります。こういったものが噴砂と呼ばれるものです。

狸の巣穴か　新里に住んでいる人は平野部に住んでいると思っているのですが、私は元々前橋の者ですから、前橋・伊勢崎から見ると新里は結構赤城の中腹、裾野の中にあります。斜面地がほとんどですから、そういったものを発掘調査していたのですが、山間部を調査していると謎の空洞があります。狸の巣穴かと最初は思ったのですが、こういうものがたくさん出てきています。道路建設の事前調査で瀬戸Ｉ遺跡という県道を調査する時に出たものがあります。道路工事関係の人が来て言ったのです。山の中に行けばこんなのはたくさんあると。工事の人は経験上皆知っているのですね。最初意味が解からなかったのですが、これを下まで掘っていくと、土砂を抜けると下までずっと空洞になっています。断面を切ってみて分かったのですが、先程も見てきたように二次災害によって土砂が塊で流れてきています。山が丸々崩れてきているのですから、山は当然立ち木がたくさんあるわけです。そういった立ち木を飲み込んで流れてきて、それが下流まで来るので、木を飲み込んだまま堆積してしまいます。それが先程の空洞が斜めになっていて、下には水が堆積していますから、樹木がそのまま残っていました。木は水の中に入れておくと腐ってしまうのではないかと思われやすいのですが、実は水の中にずっと入れておくと逆に腐りません。ですから江戸城の石垣の下に松の丸太が入れてあるそうですけれど、水の中にずっと入っているので腐らずに今でも石垣の下にあるそうです。偶然地形的に下に水の層があり、木が腐らずに残っており、逆に乾燥している所は空洞になっていました。これも木の皮が残っていました。一番下の埋もれ木です。これは樹種鑑定をしてクヌギ、ブナなどでした。山に生えている木が流れて来ただけですからあまり意味はないかもしれません。それで私は災害史の研究会をしていた時期もありまして、群馬大学の早川先生と共同研究をしていました。冬季オリンピックが２年後にあり、それでハイジャンプというものがあります。ハイジャンプのスキー板の角度はこういう角度でピンと飛びます。スピードがもっと出るとこういう角度でいきます。この角度というのは相当スピードが速かったのではないかと早川先生はいっています。何度だか測ってみようとしたのですが、そういう感じで結構な土石流の速さをもって木が流れてきているという事が分かりました。そういった痕跡は南麓地域を調査するにつれて随分解かってきました。

不二山の南側に農免道路というものがあります。やはり先程大久保で見てきた状況と同じでして、ユンボが届く範囲まで行ないましたが、平安時代の地盤が出てきませんでした。それだけ山が丸々崩れてしまっているという事です。このような状況でして、非常に黒いのとロームのとめちゃくちゃに層状になっていますが、斜めの層でして、全て崩れたものですね。下に黒が出てきていますが、これがまだ地山の黒ではありません。もう水も湧いてきてしまっていて危険ですので、ユンボの届く範囲内で行ないました。限界まで行ないましたけれども下の地盤までは確認出来ませんでした。少なくとも4,5mは掘り柱状図は作りました。それで順番が逆になりましたが、先程の久留美田遺跡の時に重要だと言いました、今まで弘仁の地震の遺跡はほとんど水田でした。群馬の場合は浅間山や榛名山の爆発で火山灰による水田跡が調査されていますが、818年の地震による二次災害の洪水層の水田というのが見つかり出して、それが818年の遺跡のほとんどでしたが、この久留美田では水田ではなくて畠が初めて見つかりました。これはどういう事かというと、この筋になっているのは試掘の線です。畠というと皆さん畝間といって波打っていますよね。当時平安時代の畠は黒い土があるのですが、その高い部分がここになります。そしてその上を洪水層が流れてきているので、その畝間の低い部分にこの洪水の茶色い土が堆積しているわけです。それをユンボで深さを確認して、発掘調査の時に表土を剥ぐ作業を行ないましたので、写真の畠の畝が掘る前の状況です。これが出ています。これは発掘するとこういった感じになります。これは真ん中に地割れで切れていますが、畠で畝が出ています。ちなみに畠の土壌を分析にかけてどういう作物が

埋っていたかを調べました。

プラントオパール　皆さん草むしりなどをして手を草で切ってしまったという事を経験された方いらっしゃると思います。実は草で手を切るというのは、草の植物の繊維で手を切るのではなくて、その植物の中にある鉱物、プラントオパールという石が草の中に入っています。その石が植種によって形状が違います。石なもので、そこが畠や草原だった所が草が枯れてしまい、その上に洪水や火山灰で堆積するとパックされた状態になっていまして、それが発掘で出てきますと草は当然腐って残っていませんが畠の土は残っていますので、その土を持ってきて分析をかけると、当時の植生、どういう草があったのかという事が分かります。そしてここは全部分析をかけて、赤城山麓でも畠の遺跡を20以上は調査してきていると思うのですが、ほとんどの分析結果が、畠なので葉物でも作っているのかと思っていたら稲を作っていました。陸稲です。今まで私たち考古学で結構、生産基盤を基にこういう有力首長の力を水田の面積から測っていたのです。しかし、赤城南麓に関してそれはダメだと思います。水田は当時あまり作られていませんので、みんな陸稲で米を作っています。南麓はほとんど陸稲だと思いますので、これは平安時代の事例ですが畠だけれども米だったという事が分かりました。これは畝間の間隔はいろいろ離れていたりするものがあります。それは地形などの状況にもよると思いますが、ここも検出されたものは稲でした。これは古墳だといわれていたものの下に畠が出てきていました。当然平安時代の畠ですので、上に古墳があるというのは先程の道理を考えるとおかしいです。

土盛り　どうも新里地区では東部の方で古墳だといわれているものが多数あります。昭和10年に上毛古墳綜覧というもので県下一斉調査しています。今は平成の古墳綜覧を作っているらしいですが、その時に新里地区で古墳だとして上げられている高まりといったもののかなりの数が、どうも先程言いました地震で出来ていた土の山、固まって山になってしまっており、ここも実際２m以上の土盛りがあるのですが、断ち割ってみると下から畠が出てきました。これも古墳ではなかったという調査例であります。これも遺跡台帳では古墳としてありましたが、残念ながら古墳ではありませんでした。先程も言いましたように掘る前の状況です。平安時代当時の地面というのは黒い土ですから、これが畠の土です。そしてこれが畝間の窪地の所に茶色い土が堆積しています。

～休憩～

これも新里地区では斜面地形で、上毛電鉄よりは上の方です。大久保という所ですが、大久保活断層より上の台地で出ております。やはり畝間の状況でして、上からみるとこういう状況です。こちらが赤城山ですのでこういう斜面地になります。これが県道で、今県道はこの真上を通っています。これは試し掘りですので、トレンチが入っています。調査をする前の状況の表土を剥いだ段階の状況で、この黒いのが当時の地表で、ここに洪水で埋っている茶色い土が入っています。ここには溝があったのですが、それも洪水で埋っています。それでこれをよく見て頂くと、ここに縦方向に擦痕が見えます。石などが置いてあったりしますが、この擦痕の後に石が止まっていたりして、土石流が流れた時に木や石など大きなものが流れてきています。こういう大きなものが上から流れてきてここに止まっています。どうもそれによって抉られてしまった畠の土が筋状に残ってしまっているわけです。それが流れて擦痕になった後に土石流が堆積しているので、こういう筋状に見えるわけです。ですから何回にもわたって土石流が来ていると思います。それから部分的に石が止まっていますが、こういう抜けているものは下流まで石が行ってしまったものです。

ここに鏑木川がありまして、おそらくこの川はもっと急峻な渓谷な状況だった、谷が深い川だったと思いますが、この土石流で大きく、オーバーフローするくらいに埋りきってしまったようにかなりめちゃくちゃな状況になったのだと思います。更に新たに水がもう１回流れる事で、もう１回開折されて現行の鏑木川が出来ているのだと思います。おそらく１回丸々埋ってしまって、ここもギリギリまで調査をしてみたのですが、土石流の土によってかなりの量が埋っているという事が確認する事が出来ました。

泥流の断面　これも大久保活断層よりも上の部分です。これは先程見てきた泥流というものを断ち割った状態、断面の状態で見ています。これはかなり薄くなっていますがこれでも１mくらいはあります。この薄いのは赤堀との境の方で、上毛電鉄よりは南側です。

砂田遺跡　これは砂田遺跡という遺跡ですが、ここに見えているのは当時の溝です。平安時代の地震が起きる前に溝がありました。それがこの土石流で一気に

埋ってしまって、さらにここの地面の所はおそらく田んぼだったと思います。水田であった所がやはり土石流で埋っている状況が見て取れます。何層かに分かれているので、１回ではなくて、何回にもわたって洪水層が来ています。

早川の災害　これは下流ですが、山間部ですと何mも堆積しています。実はこの土石流は鏑木川の氾濫によるものですが、むしろ東側の大間々との境を流れている早川の方がかなりの被害を受けています。早川は伊勢崎を通り抜けて境町から尾島へ抜け、尾島で利根川に合流しています。その源は新里地区から流れている川ですが、早川の災害はかなり下流域まで伸びていまして、今は上武国道が尾島から埼玉の方まで抜けて新上武大橋まで行くのですが、あの上武国道を発掘した時は県の事業団で調査をしまして、尾島で早川の氾濫、この818の洪水層が発掘調査で出ています。下流にいくとやはり土砂の堆積が薄くなっていくのですが、現行の利根川よりも少し北側を流れていて、今の広瀬川の低地帯の所が当時の利根川ですから、それが伊勢崎から、尾島の辺りだと現行の利根川と変わっていない流路になると思いますので、そういった南麓を氾濫していった土石流も利根川に流れ込む事で収束はしていると思います。ですから洪水層が利根川を越えて深谷や本庄まで行ったという事はおそらくないと思います。利根川によって赤城南麓の洪水は収束したという風に考えられます。

818年の地膨れ　これも発掘調査をする前は新里村14号墳として登録されていました。お寺の墓地造成をするので、発掘をしてみて古墳がよく残っていたら残すよと住職に言われて調査をしたのですが、どうも人為的堆積ではない状況で、自然堆積といった土石の塊で出来ているものですから山状の泥流だという事が解かりましたので、これも古墳ではなく818年の地膨れでした。この場合は下に畠が出てこなかったのですが、何も無い平地の部分に早川の氾濫原で土砂が堆積した状況が山になっているという事が解かりました。

これは大久保活断層に近い部分です。人の高さがこれですから、これはもっと上まであったのだと思うのですが、ここは何かの落ち込みみたいでかなり土砂が堆積していて、大規模な黒土の上にロームがあるという、先程大久保で見たような地震による災害のロームがあります。そして山が丸々崩れているのでロームも下の方まで来ています。赤城山の山体は上に黒色土があり、ローム層の下に基盤の岩石、輝石安山岩という山石があります。ここに少し紫がかった石がありますが、これが輝石安山岩の岩盤になります。そして山が丸々崩れてきたので、ロームの他に塊になっており、黒土もありますが、まるっきり下の岩盤から崩れてしまっていますので、輝石安山岩、下の基盤の土まで地震で流れてきているという事が分かります。これは遠くからみますと、人為的ではなくて自然の断崖だったのかもしれず遺構がどうか分かりませんが、結構山の中ですので古代の造成の可能性もなくはないですが、もしかしたら自然の断崖みたいな所に堆積している、先程不二山で見てきたように遺跡が流れて来たと同じような状況で、塊で中に入っていますので、断面引くとなればこういう風に、岩盤の石が巻き込まれてきています。ですからその後に湯ノ口軽石や八崎軽石やローム層の中に数万年前の火山灰などがあるのですが、そういうものも塊で巻き込まれています。これは割りと古代でも新しい、もしかしたら中世くらいの溝なのかなと思うのですが、これも結構山間部の方で土砂があります。奥澤の地域で基盤層自体が黒いのとロームの境になっていまして、今調査をしている基盤自体が山崩れの層になっているという状況です。最終的に調査で溝しか出なかったもので、やはりユンボが届かないくらいの土砂崩れによるもので、この黒いものは当時平安時代の地面ではありません。全て崩れた二次的な地面です。先程から言ってきているように、新里も上毛電鉄より南側はあまり山がないので、北側の山が多い所ほど当然の事ながら土砂崩れの堆積層が厚くなってきています。それが新里の南部では１ｍを欠けるくらいの堆積層になってくるのですが、尾島で出てくる818に出てくる洪水は十数 cm くらいの厚みになってきます。これも不二山で見てきたものと同じような状況の地割れになると思います。これはまだ下にありますので、３ｍ掘ってもまだ下にあり、５ｍ掘ってももっと下まで入っていっているのではないのかなと考えられます。

これは遠くから見た状況です。これを見ていただくとこの層がここと一致するなど段がずれています。新里の北部の調査を行なうとこういう状況で結構地層に乱れがあります。実は去年に大規模なものが出てきています。それを言うと熊原先生が是非見たいと広島大からすぐに飛んできました。もしかしたら大久保活断層の一部ではないかというものも見つけています。これが今まで見てきた南麓のもので、これですとまだ上毛電鉄がもっと南です。この辺だと思います。ですか

ら新里の北部の状況を見てきているわけですが、このように丸くなっているのがおそらく山体崩壊、山が丸々崩れている部分です。これは宮城の方だと思います。

これは三夜沢の赤城神社です。こういうものが全部崩れたものが下流まで行っているわけですから、これだけの土砂が動いています。これは地形から見ていますので必ずしも航空写真ですから限界があるかもしれませんが、ピンポイントな点は発掘で確認しているものです。そういうものを検出しています。２ページを見ていただきますと、実は私も災害史の研究会で早川先生と一緒に地球惑星科学連合会という大きい会がありまして、そういう所でも発表をしまして、その時の資料を使っています。新里地区の地割れの方向を今まで発掘調査で何百と蓄積があるのですが、それの統計をとってみると、この図２というものになります。どうも北西側から南東側への地割れの傾向が多いという事が分かりました。これは震源との位置関係があるのかと言われてきているのですが、おそらく現状で考えられるのは私たちが調査をしている赤城山南麓のものですから、こちらが赤城山でこちらが下流、利根川の方向になりますので、南麓では必ず北から南へと川が南流するというのが常識でして、その河川の開折によって丘陵が出来ます。丘陵は南北方向にあります。たまには東西方向に丘陵もありますが、南北方向の丘陵が多いですから、そういった南北方向の丘陵上の遺跡を調査していますので、多分に地震の波が谷に吸収されるかもしれません。そういった関係で北西から南東への方向性はもしかしたら地形的なものが影響しているのではないのかなと最近は考えています。この丘陵がこういう方向のものですからそういう地震が、多少谷でやわらげられる事があるかもしれませんが、衝撃波がどのようにくるかのメカニズムはあまりよく分かっていませんけれども、そういう事が考えられるのではないのかなと思います。ですからあまりこの方向性から地震の直接の影響を反映しているのではないと考えています。先程見ました、活断層が大久保活断層と太田の断層が見られるという事を述べてきましたが、これが現状についてどのような状況になっているか見ていければと思います。

これはまさに大久保断層と呼ばれていたこの延長上にくるこの辺りに、ここは鶴ヶ谷という場所があるのですが、そこの所で最近土取りを大規模に行なっています。上の発掘調査は当然、実施したのですが、近世のお宮とかあったりして愛宕山と呼ばれている山だったのです。今は平らに取ってしまいました。

これは水平に堆積していますが、実はこの水平堆積の中にも地割れが見えていますが、問題なのはこの緑の部分です。この辺りでは珍しい凝灰岩という古いものが堆積している山です。これははっきりと境が解かります。これは潜っていっています。でこちらは凝灰岩です。こちらは先程の洪水層の中にも入っていると言っていた赤城の基盤層の輝石安山岩です。上が輝石安山岩の山で下が凝灰岩の境界になっています。これは熊原先生ですが、ここが大規模な活断層になるのではないかと思って調査しました。

これは先程見たものの断面でこちら側は全て輝石安山岩になります。ですからこういう方向、これは縦方向に向いていますので、こういう方向で凝灰岩の層が潜っていっているわけです。そしてこういう形で輝石安山岩の山が来ているというので、面白い地形になっています。

熊原先生は群馬大学にいらして去年 NHK のブラタモリで碓氷峠の放送時に出ていて、本当は地震方面が専門なのですが、あの時は坂本宿などの地割りを説明していました。そういう城下町などにも関心があるという事で、そちらで番組に呼ばれたらしいです。ですからこの間熊本の方でも大活躍をしていまして、太田の活断層についてもかなり、名古屋大の鈴木先生も研究をされているのですが、むしろ大久保の方は熊原先生の独壇場になっています。実は私たちは行政で行なっているものですから、最近は熊本の地震、東北の地震がありましたので、桐生でも遅ればせながらハザードマップというものを作成するという事になりまして、私どもの所にも意見を求められました。皆様も目の当たりにしました東北の地震で、あれだけの死者が出てしまったという事で津波の怖さをまじまじと私たちは見てきたわけですが、群馬の場合は津波が起こることはないのでほぼあそこまでの大災害にはなりませんと話しをしていました。

前橋市では、家の背後に山があると結構土砂崩れがある可能性がありますので、震度７くらいの大地震が起きてもそういう地形に住んでいなければそこまで危険な事はありませんと言っていたのですが、どうも先程の大久保断層がこの早川の貯水池、先程も言いました尾島の方にいっている早川の水を溜めるのですが、もっと上流から早川は流れているのですが、ここでギリギリまで水を溜めています。ダムですね。人工のダ

ム湖になっているのですが、活断層がこの直下を通っているみたいです。ですからそのハザードマップを作る時に可能性としてはこれが決壊すると水がギリギリまで溜まっていますので洪水がありえます。脅すわけではありませんが、早川沿いにはちょっとした水害が、おこる可能性があるという事は意見として言わせていただきました。今はまだ作成中です。

そして太田断層の話をしなければいけませんが、先程言った大久保断層はこの短いものになります。ただこれは実態が分かりませんのでもしかしたら梅田の奥の方まで行っているのではないのかと言っている人もいます。それから渋川の半田でも工場を作る時に調査をして、地震の痕跡が出ています。ですから大久保断層の西の延長が何処までいっているのか解かっていませんが可能性もありますので、もしかしたら短い活断層ではないかもしれないと言っている先生もいます。太田断層に関しては2010年に名古屋大の鈴木先生と熊原先生が中心に活断層の調査をしています。その太田断層の調査の写真はこれです。深くなるのでどうしても直には掘れません。埴輪で有名な太田の塚廻古墳群というのが竜舞にあるのですが、あちらの方はむしろ渡良瀬の氾濫原で、結構埋没しています。太田市の発掘調査を私もよく見せていただいているのですが、新里ほどひどい状況を見たことがありません。ただ太田天神山古墳の周溝には一部、ここの内堀で見ているような地割れが周溝を切っている、壊しているという状況が検出されていますが、ここまでは地震の被害を受けてはいないと思います。

この竜舞地点の調査でもあまり明確なものは分かっておらず、活断層を100％確実に掴めているという事ではない、ここは地形が乱れていて、潜っているものがあるという事で、もしかしたら下に伴って上が乱れたのではないのかという結論になります。

これはYP層というものが浅間山の火山灰にあります。あとこれは1108年・天仁元年の浅間Ｂ軽石がありますので、浅間Ｂが本来上まで来ないといけないわけで、これはちょっと乱れているのでその辺がどう説明するのか分かりません。

これが122号沿いの吉澤という所です。金山がこちらになります。金山よりもむしろ東側です。

これは太田から桐生に抜けていく道沿いですが、どうも熊原先生は前から目星を付けていたのはこの辺りで、GHQの写真を見ていくと不整合な地形が見られるのでおそらくそれが活断層ではないか、太田断層の一部ではないかという事で、発掘届けを出して２月に調査をいたしました。これが状況ですが、やはり縦には危険なので掘れませんが、竜舞よりは水平に堆積しております。これはまだちゃんとした報告書になっていませんが、この辺が少し乱れている感じがあります。どうもこれも活断層そのものを把握したのではないだろうという結論になりました。これは水平な堆積で、縄文時代以降の堆積らしいのですが、二次的にこちらが小さい扇状地形になっているので、どうしてもこういった砂層が砂粒の動きがあり、金山の方からの、西から東への動きですね。

これは東西方向にいれたトレンチですのでそれがこちらから堆積した砂層があるという事で、この辺が下の乱れがあるのですが、少なくとも上の方は不整合な面が認められませんでした。

これもGHQ写真を上から見たものでは不整合な面があるのではないかと思ったのですが、活断層ではなかったようです。下にダメ押ししたそうで、その後の結果はまだ報告が出ておらず、私も聞いていないのですが、人づてに聞いた話ではこれもだめだったのではないかと言っていました。

発掘調査で発見される地震の痕跡　私たちがよく発掘調査をしていて、埋蔵文化財とか古い事を世に出しているのですが、結構理解をされづらいというか、よく土建屋さんや土木工事の人にそのような古いものを出してきて何か意味があるのかと言われます。最近新里の現場には地震の研究者が出入りが激しくて、考古の人よりも最近は地震の人の方が多く見に来られます。私たちは元々考古学をやっていて副産物としてそういう地震の痕跡が出てきたものを役に立てられれば良いと思っていました。ちなみに先程も言ったように上毛電鉄より北側では地割れはどこでも出てきてしまうものですから、試掘調査をやって、地割れについては全部記録は取ります。図面におとして記録は取りますが、地割れそのものだけの場合は発掘調査はしておりません。試掘の後は本調査となりますが、それをしていたらパンクしてしまいます。試掘でどこでも出てしまうので地割れだけの場合は本調査はしていません。ただ先程も見てきたように昆虫の森ですとかのように竪穴建物跡が出ていてその脇に地割れがあるとか、面で開いている本調査を行なった場合に地割れが出ている時は調査をきちんとしています。地割れも下まで抜いていますが、埋蔵文化財というのはあくまで

も人が作った歴史を探るものですので、人為的な古墳ですとか住居跡といったものが出ない限り、自然災害の地割れだけでは発掘はしていません。どこでもやらなくてはいけなくなりますので。試掘の記録は取っていますが、本調査をしていないという状況です。ただ狭い範囲でも本調査を行なった時に噴砂や地割れが出てきますので、そういったものに関してはこちらから情報発信をしています。

そういった事で考古学の副産物で出てきた、本来の目的とは違いますが、私たちが未来に生きていくために役に立つというのであれば、研究者冥利に尽きるものですので、古いものが未来に生きていくのにいかに大事か分かる資料になると思います。

大津波の記念碑　今回の東北の地震でちゃんと昔の人は言っています。三陸の津波ですとか宮古の大津波の記念碑で、「高き住居は児孫の和楽、想へ惨禍の大津波、此処より下に家を建てるな」ときちんと書いてあります。ちゃんとそれを守っていればそういう被害に合わなかったと。明治29年と昭和８年になって部落が全滅しています。本当に明治29年の時は２人しか残らなかったと。昭和８年の時は４人のみだったと。石碑を建てて、ここより下に家を建てるなと警鐘を鳴らしていました。そういった風に私たちは発掘調査の結果地震があったと隠すのではなくて、確かにマイナスのイメージにはなりますが、今後私達が生きていく上ではそういったものを糧にして、反省のもと生きていかなければいけないわけですから、こういった歴史的なものを未来永劫残していかなければならない。という事で私達は発掘調査をしています。

朝日新聞の記事から　４ページには朝日新聞が2006年に載せてくれたのですが、先程私が説明していた剥ぎ取りの標本の前で私が説明している写真です。実はこの朝日新聞の坂本さんという記者は、今は群馬にいるかは分かりませんが、この前に神戸の支局にいらした方で、神戸の震災を経験された方だそうです。2006年に群馬に来た時に95年から９年後、最初に地震の事をやりたいと私どもの所に来ました。ですから2011年の震災よりも前の記事になっていますが、啓蒙的な事でこのような記事を書いてくれているわけです。「天災は忘れた頃にやってくる」という事で、先程までに述べてきたような事を記事にしてくれています。この後2011年に東北の震災がありましたので、その後の新聞は持ってきませんでしたが読売新聞がその後同じように新聞記事にしています。読売は熊原先生のコメントも寄せているので、もう少し細かく中に入った状況で記事になっています。６ページは先程中でも見せましたが、太田断層、先程から言っているように何も分かっていない状況です。太田の活断層だと言われている所は発掘を２ヶ所やっていますが確実に活断層というのは掴めていませんので、今熊原先生が何を考えているのか私には分かりませんけれども、私は少なくともこの桐生新里地域の状況から考えるならば、818年の地震は大久保断層が震源の起因とした直下型としては相応しいのではないのかと思います。大久保活断層自体そのものというのが先程の斜めが本当に活断層かというのがまだ結論出ていませんので、下まで追ってみますが、まだよく分かっていない実態ですので、要は結論として言いたいのはまだ活断層の状況は全然分かっていないというのが本音です。大久保もよく分かっていないし、どこまで行くのかも分かっていませんし、太田も果たしてあれが従来言われているこの線が本当に太田の活断層なのかも分かっていないというのが実態です。

言い忘れた事がありましたが、先日伊勢崎の図書館で講義を行なった時も質疑がたくさん出て、あの時はむしろその方が大変だったのですが、この大久保活断層の危険度というものが発表されていまして、ここ30年間に大地震の起きる確率みたいなものが出ています。それはインターネットで調べると0.６％と低い可能性です。ちなみに神戸の震災はその前活断層の予知図は７％、一桁台の確率が出ていました。ですから０．何％というのは非常に低く、この30年間に起きる可能性はないだろうというくらいの危険度の活断層です。

～質疑応答～

Ｑ１　新里とは少し離れているのですが、総社地区の辺りはあまり地割れとかの被害の報告を聞かないと思いますが、あちらの方で弘仁の時の被害みたいなものはなかったのですか？

Ａ１　総社は前橋台地という洪積台地になっているものです。先程の丘陵の間に河川が入ってきますので、地震の震源は赤城山南麓と考えてます。それのクッション的なものになる１つは古利根です。利根川は今の前橋の中心部を流れていて、かなり幅広い

崖線が出来ています。それがクッション的なものになるのだと思います。そして向こう側が総社のある前橋台地になるのだと思いますが、ただ総社だと古利根でも利根川にしても右側の右岸になりますが、先程の早川の氾濫などは左岸の地震の痕跡になっていますので、もしかしたら大久保断層がもっと西側に伸びて、渋川の方に伸びていくとするならば、半田の工業団地の辺りでは洪水が起きていますので、818年の地震による古利根のオーバーフローがどのくらい起きているのかは前橋台地の上でオーバーフローが起きている部分が少し出ています。ですから崖線が今でも３ｍくらいあると思いますが、あの台地の上までのオーバーフローはそんなになかったのではないのかなと思います。多少は開析した用水などは出ています。後は下増田辺りで洪水層の田んぼが出ています。ただ前橋台地ではありません。おそらくその大河川がありますので、クッション材としての影響が大きいのではないかと思います。しかし沖積地があれば液状化は起きていてもいいかなと思いますので、液状化に気付いていないかも知れないので、これからそういうものも注意して見ていく必要があるのではないかと思います。

Ｑ２　この内堀からも結構地割れが出ていると思うのですけれども、古墳の所ではそういった地割れなどは出ていますか？

Ａ２　最初にお話をした通り、私が調査をしたＭ-１帆立貝古墳の周溝は地割れで切られています。それは報告書に表示されていますので、断片的な地割れは出ています。南麓はもうどこでも出るのだと思います。前橋も荒砥地区でも、産泰神社の裏でも結構出ています。おそらく群馬大学の尾崎先生が赤城南麓の古墳の左の壁が大体崩れているという事をおっしゃっています。『横穴式古墳の研究』という本の中で。それは榛名の二ツ岳が出来た時の爆発で、火山災害の時の揺れで左壁が崩壊したのではないかと尾崎先生はおっしゃっていたのですが、最近の検討ではあの石室の崩れは地震の災害の揺れで崩れたのではないのかという風に考えられています。余談ですが、2011年東北の地震の時、桐生は震度６が出ているのですが、栃木の方は震源に近いのでもう少し被害が大きくて、栃木は横穴式石室の開口していた古墳がずいぶん潰れたそうです。相当入れなくなってしまったという話を、栃木の若い人が勉強会を行なっていますので、それで追跡調査でどれだけ崩れたかを統計出しているようです。

実は桐生の新里地区でも古墳の頂上に庚申塔が建っていました。庚申塔が地震で落ちてしまったので直しに行きました。そうしたら頂上にこういう陥没が見られました。

また、県指定の中塚古墳は、截石切組積みという四角くブロックで作った前橋の宝塔山古墳と同様な精緻なつくりをしています。あれも地震の時に天井石がずれ、土砂が落ち込んでしまい、土砂が山になってしまいました。県指定のため県にお伺いを立てたところ、入らせないようにしてくださいと言われました。ですから赤城南麓で石室の左壁が崩れたというのは弘仁地震の被害だと思います。

赤城山南麓を襲った平安時代の巨大地震

加部　二生（桐生市教育委員会）

はじめに

群馬県は地震に強い地盤であると言われている。確かに、過去百年間の地震による犠牲者は西埼玉地震(1931 年)の 5 人のみで、関東大震災(1923 年)では死者 0 人であった。

しかし、千年単位で記録をひも解くと、地震列島である日本国内に例外はないと言える。

1　群馬県東部の地質

第四紀　　赤城火山
新第三紀　　藪塚壮・馬見岡凝灰層
古生代～中生代　秩父中･古生層

顕生代	新生代	第四紀
		新第三紀
		古第三紀
	中生代	白亜紀
		ジュラ紀
		三畳紀
	古生代	二畳紀
		石炭紀
		デボン紀
		シルル紀
		オルドビス紀
		カンブリア紀
原生代		
始生代		
冥王代		

表１　地質時代

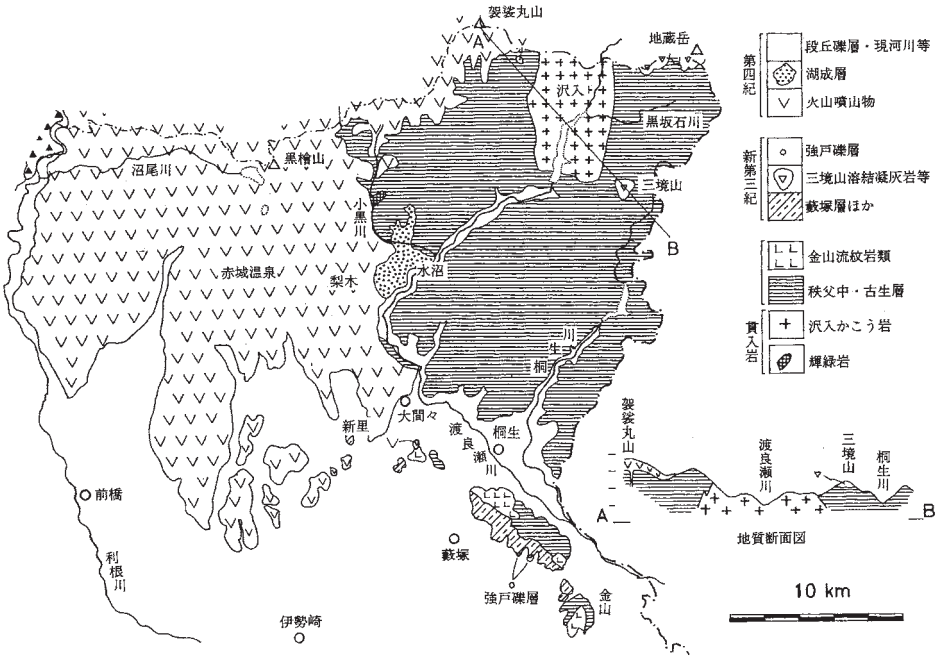


図１　勢多・山田・桐生地域周辺の地質図

2　『類聚国史』に記された弘仁９（818）年７月の大地震

菅原道真の編纂で８９２年に完成した。

「弘仁９年７月に関東地方一帯を襲った地震により山崩れが多く発生して、土砂が谷を深く埋め、多くの圧死者が出た。」

3　発掘調査現場でみられる地震の痕跡

旧新里村域では、上毛電鉄よりも北側の地域で各所に地割れが認められる。

○大久保地域の逆転土層　山が崩れた痕跡
○不二山遺跡の調査　谷が埋まる痕跡
○沖積地で検出される噴砂

4　震源地の推定

旧新里村北部の状況が特にひどい→大久保活断層か

5　まとめにかえて

安全だと言われてきた、群馬県地域でも過去には、東日本大震災を上回ると推定される大規模地震の被害を被っていることが明らかとなった。今後、発掘調査によって得られた被害状況をまとめて、ハザードマップ作成の参考となるよう整備していきたいと考えている。

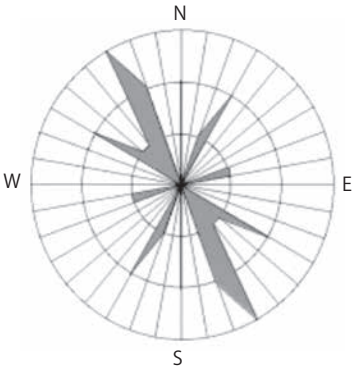


図２　地割れの方向は北西－南東に集中する

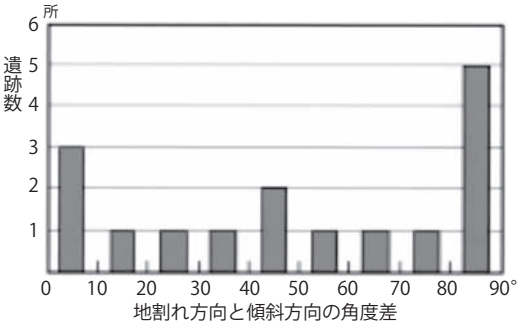


図３　地割れ方向と傾斜方向の角度頻度分布

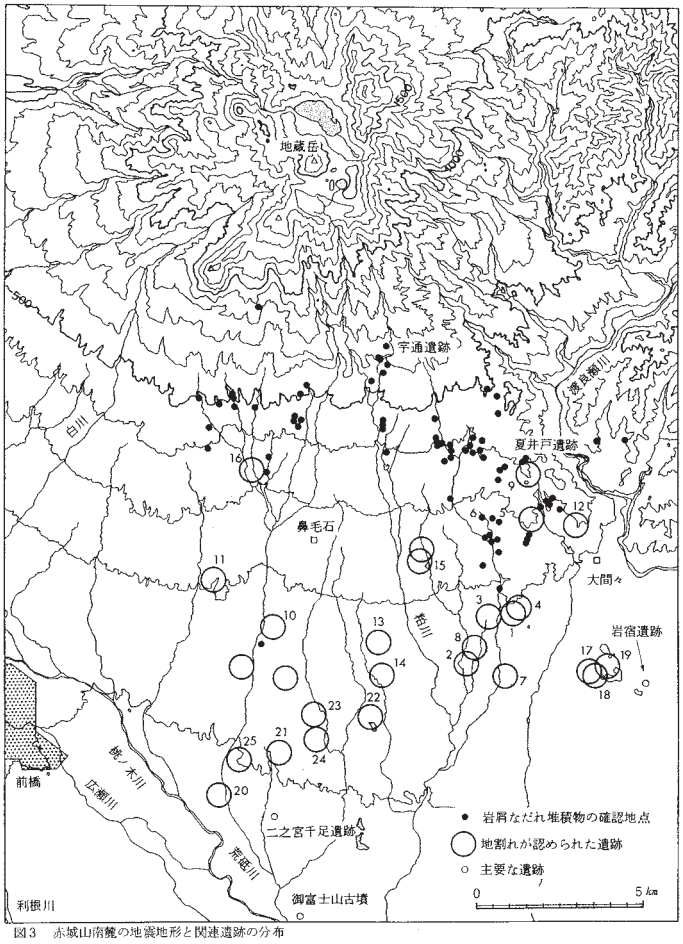


図３　赤城山南麓の地震地形と関連遺跡の分布

図４　弘仁９年の地震に伴う地割れと岩屑なだれの分布

1▼ 上野等坂東諸国に地震があり、甚大な被害を受ける

2▼ 地震に遭った諸国に使を派遣する

3▼ 上野国等境は被害が甚だしい

三七　〔類聚國史〕　百七十一　地震　災異五

弘仁九年七月、相摸・武藏・下總・常陸・上野・下野等國地震、山崩谷埋數里、壓死百姓不レ可二勝計一、

八月庚午（十九日）、遣二使諸國一巡省地震之損害甚者加二賑恤一、詔曰、　朕以二虛昧一欽二若寶圖一、撫育之誠無レ忘二武步一、王風猶鬱、帝載未レ熙、咎徵之臻、此爲二特甚一、如レ聞、上野國等境、地震爲レ災、水潦相仍、人物凋損、雖レ云二天道高遠不レ可レ得レ言、固應二政術有レ虧致二茲靈譴一、自貽二民瘼一、纖眇之由、薄德厚顏、愧二于天下一、靜言二厥咎一、實所二興嘆一、豈有二民危而君獨安、子憂而父不レ念者一也、所下以殊降二使者一、就加二存慰一、其有下因二震潦一居業蕩然者上、使等與二所在官司一（衍）同斟量、免二今年租調一、并不レ論二民庸一、以二正稅一賑恤、助二修屋宇一、使レ免二飢露一、壓沒之徒遠爲二斂葬一、務盡二寬惠之旨一、副二朕迺睠之心一、

文献１　類聚國史

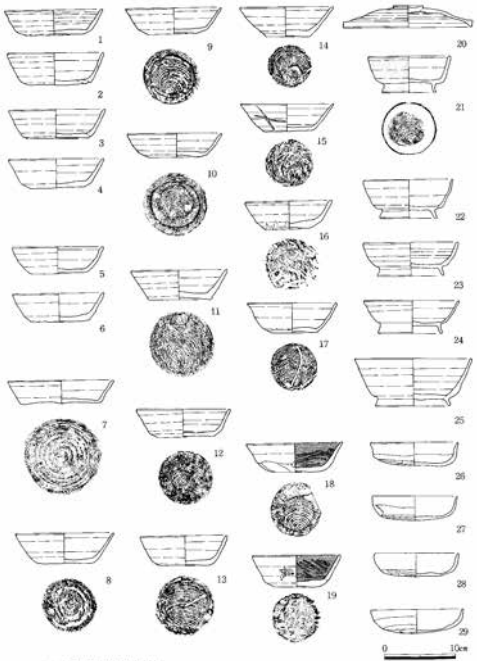


図５　桐生市砂田遺跡１号用水路出土土器

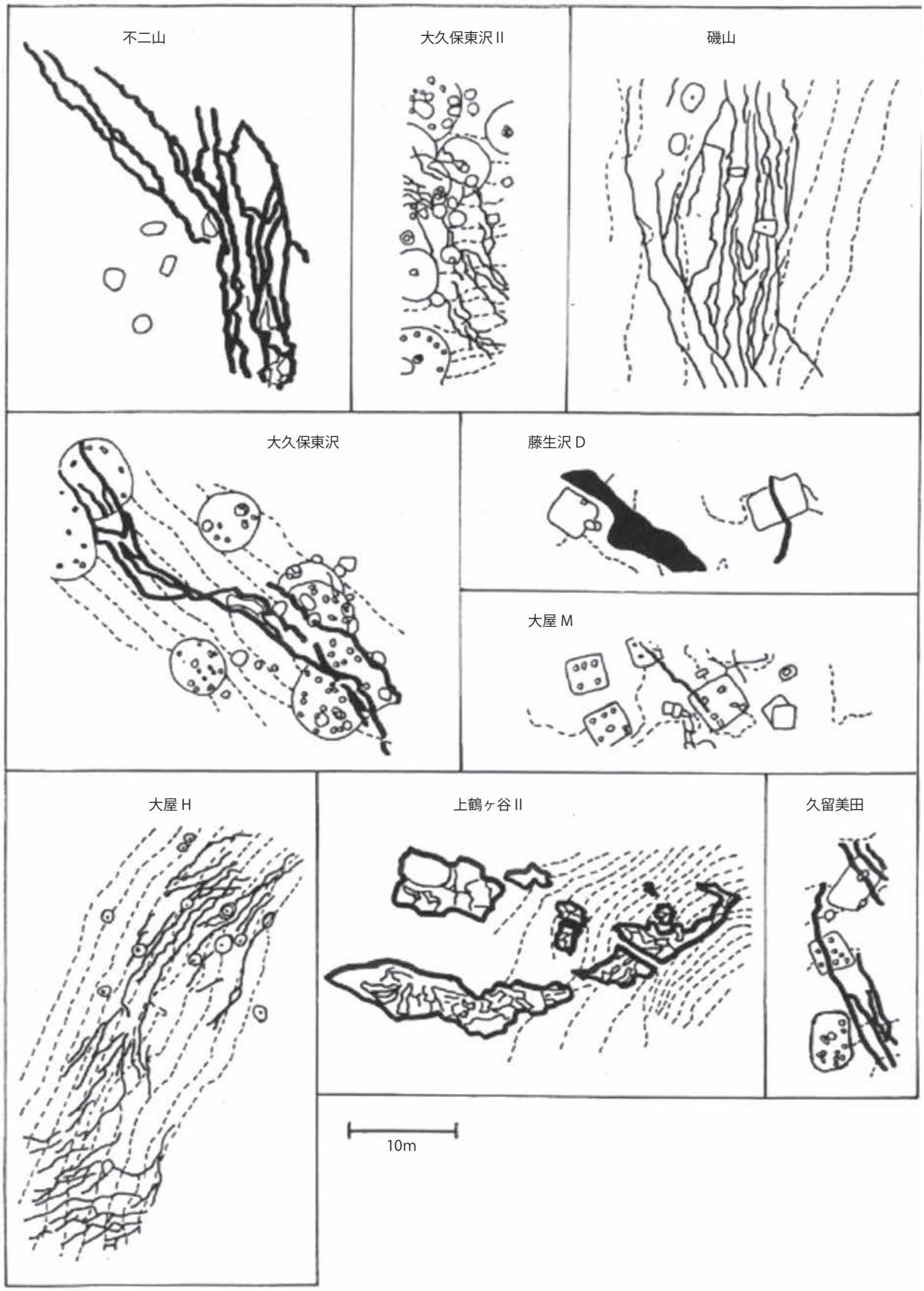


図 6　新里村の遺跡で発掘された 9 世紀の地割れ

わがふるさと遺産

新里文化財事務所の地層標本（桐生市）

弘仁地震のつめ跡残す

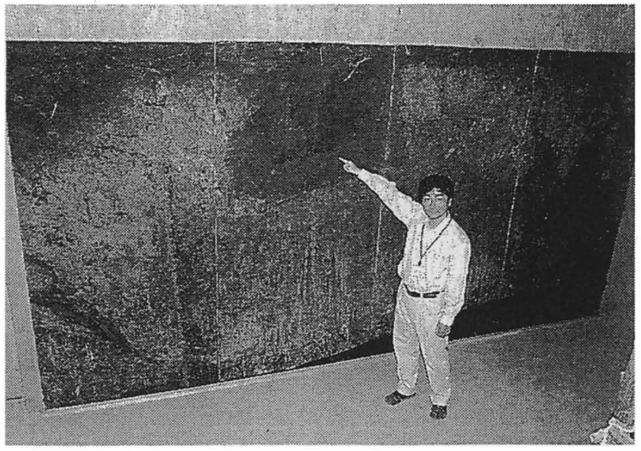
群馬には大きな地震がない――そう信じて疑わぬ県民は多いようだ。

この100年に限ると、地震で亡くなった犠牲者は西埼玉地震（1931年）の5人のみ。その12年前の関東大震災では死者ゼロだった。

だが、千年単位で考えるなら、地震列島に例外はないことを認めざるをえない。菅原道真編さんの「類聚国史」は、818年に関東一円を襲った弘仁地震についてこう記す。

「相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野等国地震ふる。山崩れて谷埋むること数里なり。圧死する百姓勝げて数うべからず」

「上野国等の境、地震災を為し」


千年以上昔の地震で地崩れしたと見られる地層の標本＝桐生市新里町で

ぐんま昆虫の森建設予定地から出てきた地割れ

ともあり、群馬の被害が最大だったと読み取ることができるのだ。

裏付けもある。以前から旧新里村（桐生市）を中心に、赤城山南麓の発掘調査の現場では、地割れや地崩れがあったことを示す地層が多く見つかってきた。90年以降、地震考古学の進展で、これらが弘仁地震のつめ跡と考えられるようになった。

11年前の阪神大震災では、地表に現れた活断層や崩壊した港湾施設の一部が保存され、公開されている。1188年前の地震跡はどうか。

「はるか昔のことでも、地震があったというのはマイナスイメージ。文化財として保護する対象でもなく、すべて埋め戻されて開発が進んでいます」と、桐生市教育委員会の加部二生主査。

かろうじて残ったのが、地崩れがあったことを示す地層の標本だ。「ぐんま昆虫の森」として整備された土地からはぎ取ってきたものをパネル化、新里文化財事務所の倉庫で、昭和の民具などとともに保管されている。見学も可能という。

「天災は忘れた頃にやってくる」。群馬にいながら、この教訓をかみしめるため、もっと見直されていい遺産だろう。（坂本哲史）

《メモ》桐生市教育委員会新里文化財事務所（☎0277・74・3881）は上毛線新里駅から徒歩10分。ここで保管される地層のはぎ取り標本は、高さ2・5㍍、幅15㍍分に及ぶ。常設展示されるのは幅6㍍分。下の層ほど古いという常識を覆し、標本では古墳時代の地層の上に縄文時代の遺構が載っている。地崩れが原因と見られ、地震のエネルギーの大きさがうかがえる。

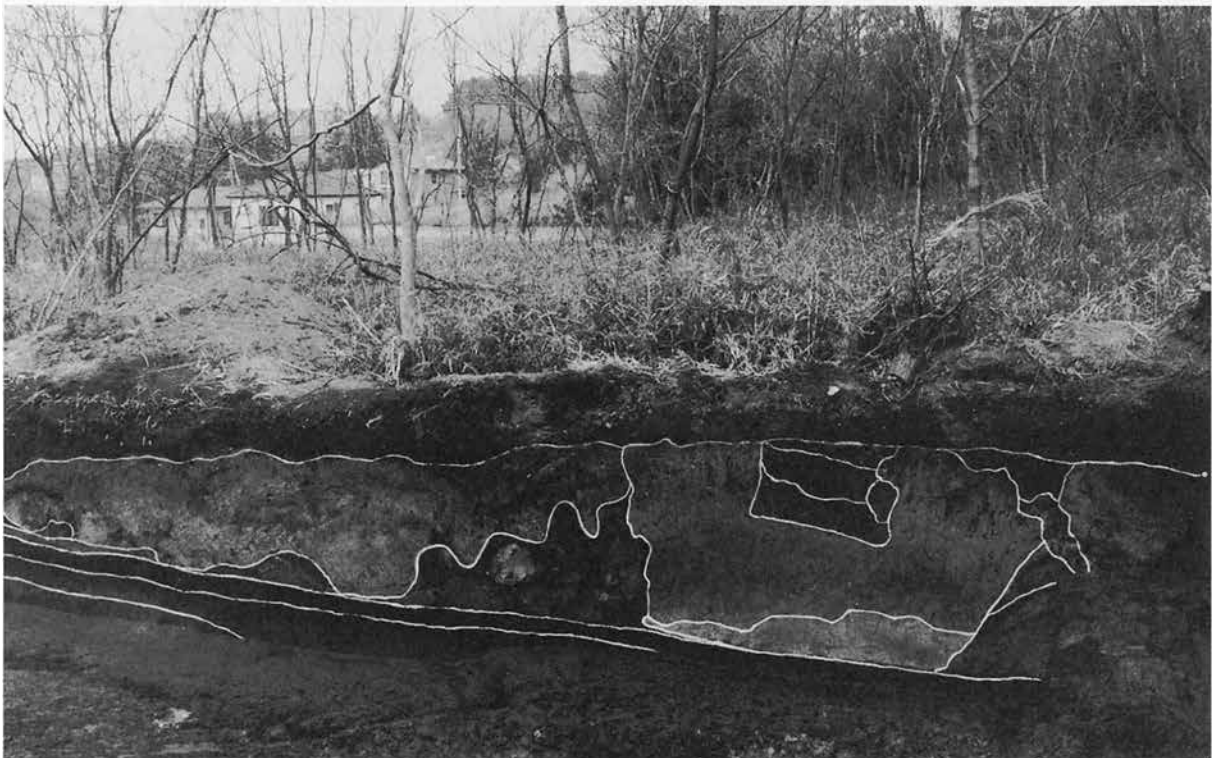


図７　桐生市不二山遺跡群の流されてきた土坑（Ｈ区Ｄ－１号土坑）遠景

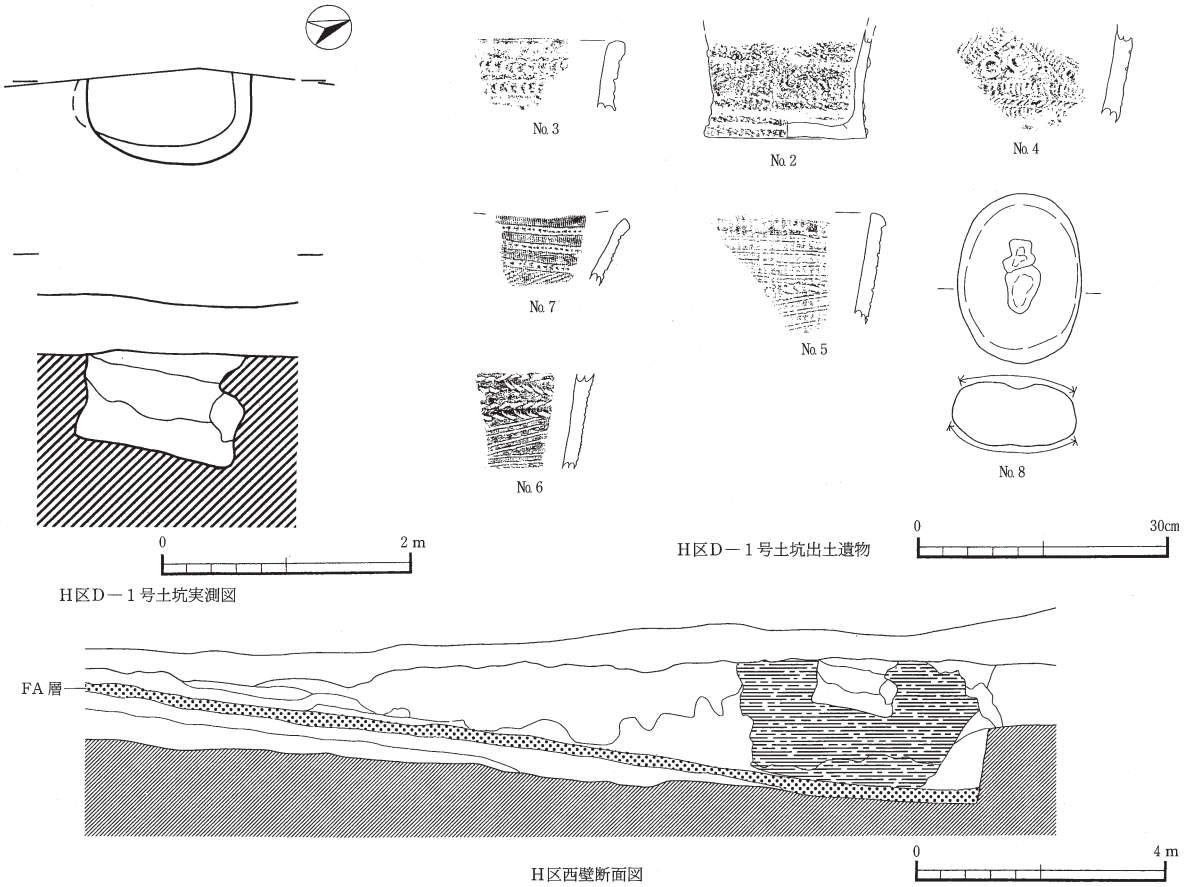
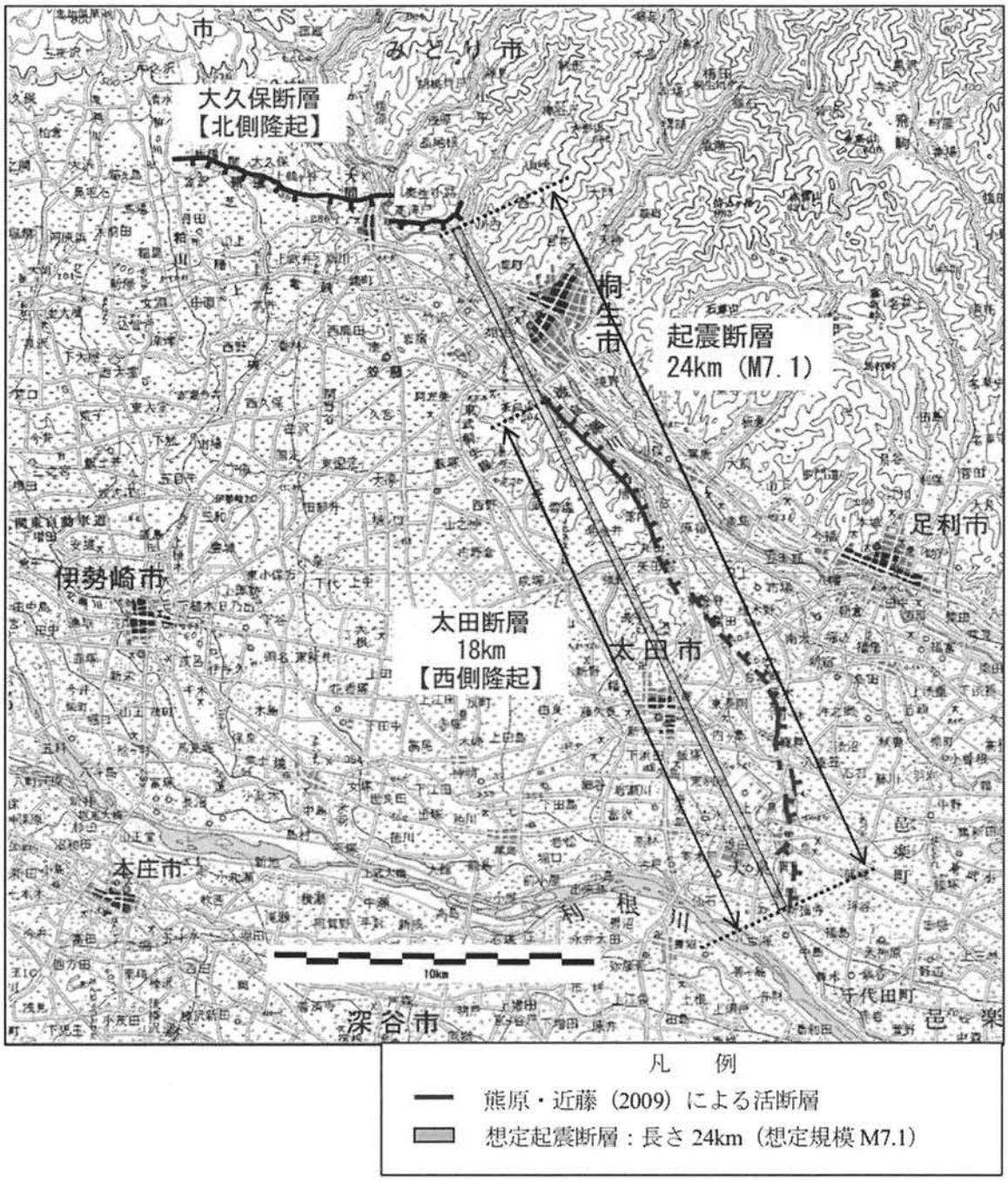


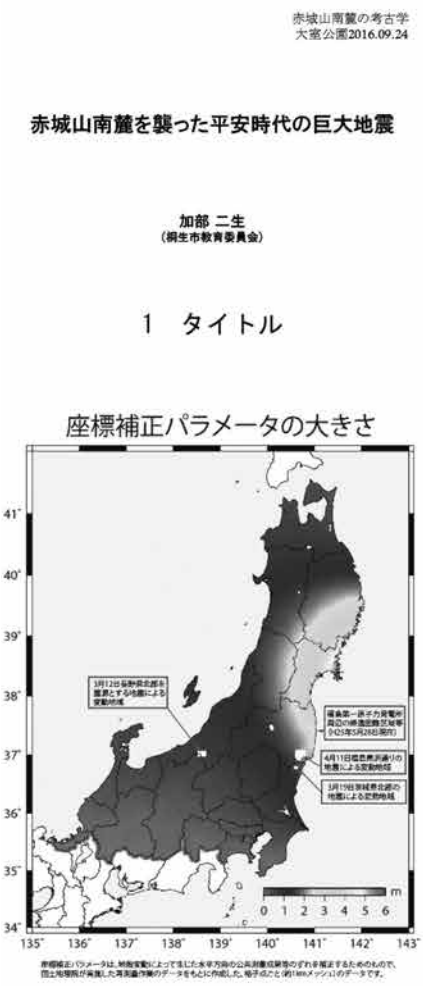
図８　桐生市不二山遺跡群Ｈ区の地層堆積図



太田断層の長さについて

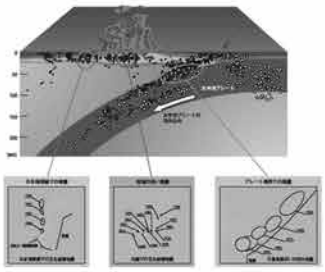
熊原・近藤（2009）は長さ約 18km（想定マグニチュード(M)6.9）の太田断層を示した。断層の不確実さを考慮して、想定起震断層としての太田断層は、北西に延長し長さ 24km（想定規模 M7.1）とする。南端は太田断層の南端とし、北端は西側隆起の逆断層の活動センスである太田断層と異なる北側隆起の活動センスである大久保断層直前までとする。

図９　太田断層の長さについて（群馬県2012『群馬県地震被害想定調査報告書』より）

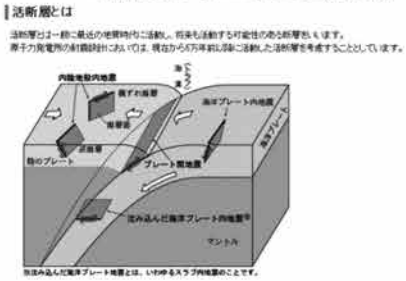


1　タイトル

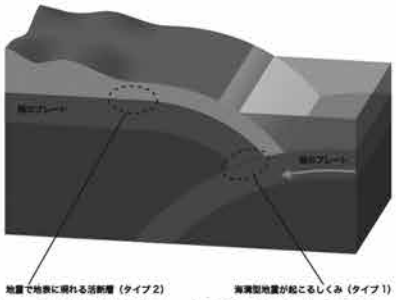
2　日本列島周辺の地殻模式図
（清野徹三 1987「科学」57）



3　地震のメカニズム
（戸田建設ウェブサイト
地震のメカニズムを知る）

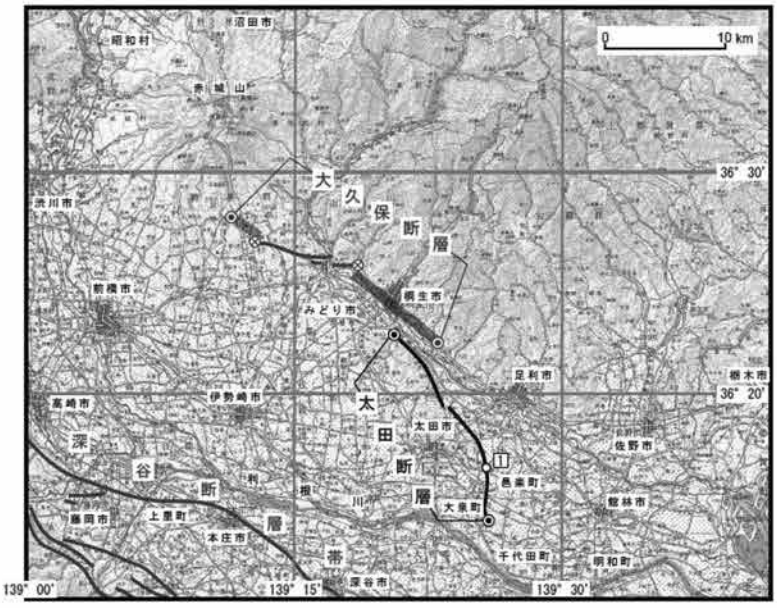


6　活断層の定義
（中部電力ウェイブサイト
地表の基礎知識）

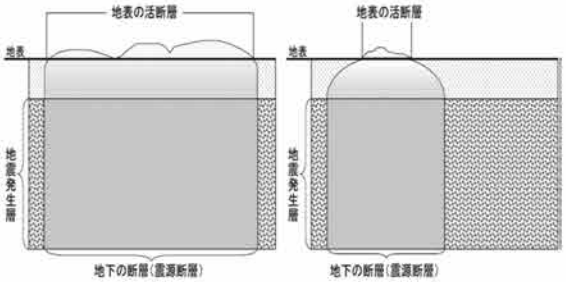


4　平成 23 年度（2011 年）
東北地方太平洋沖地震地表のズレ
（国土地理院ウェイブサイト
touhoku taiheiyouoki 2011 par）

5　タイプ 1　海溝型地震　1923 関東大震災・2011 東日本大震災
タイプ 2　直下型地震　1995 阪神大震災・2016 熊本地震など
（内閣府ウェイブサイト防災情報のページ）



7　赤城山麓の活断層



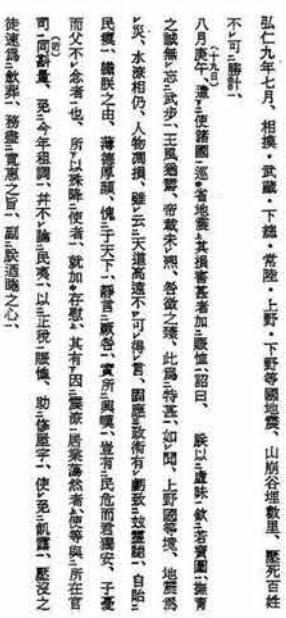
8　通常の活断層のイメージ（左）と「短い活断層」のイメージ（右）
（地震調査研究推進本部地震調査委員会）

安倍政権は再稼働・新増設狙うか…

日本は活断層だらけ

原発存続の余地なし

9　活断層の定義
（赤旗 2013 年 1 月 4 日号）


吾三日（類聚國史）　百七十一　災異五

弘仁九年七月、相模・武藏・下總・常陸・上野・下野等國地震、山崩谷埋數里、壓死百姓不レ可二勝計一、

八月庚午（十九日）、遣二使諸國一巡二省地震一、其損害甚者加二賑恤一、詔曰、朕以二虛昧一、欽二若寶圖一、撫育之誠無レ忘二武步一、王風遐暢、帝載未レ熙、咎徵之臻、此爲二特甚一、如レ聞、上野國等境、地震爲レ災、水潦相仍、人物凋損、雖レ云二天道高遠一、不レ可レ得レ言、固應二敬術有レ虧致一、斯語、自貽二民獘一、雖朕之由、薄德厚顏、愧二于天下一、靜言二厥咎一、實所二興嘆一、豈有二民危而君獨安一、子憂而父不レ念者一也、所レ以殊降二使者一、就加二存慰一、其有二因二農桑一、居業蕩然者一、使等與二所在官司一、同計量、免二今年租調一、并不レ論二民夷一、以二正稅一賑恤、助二修屋宇一、使免二飢羸一、壓沒之徒速爲二斂葬一、務盡二寬惠之旨一、副二朕遐略之心一、

10　類聚国史
弘仁 9 年（818 年の記事）

（山が崩れ数里の谷がうまり、数え切れない程の人々が圧死した。上野国（こうずけのくに）などの境では地震の潦（にわたずみ）ができた「潦」は水たまりのことだ。内陸の群馬県で津波はないので激しい揺れで地盤が液状化し、地下の水と砂が地表に噴き出す「噴砂」が起きたと考えられる。

11　菅原道真
（大宰府天満宮ウェイブページ）

12　大久保山崩れ

13　屋地川遺跡 6 区

14　不二山遺跡 H 区

15　不二山遺跡地割れ

16　広間地西遺跡地割れ

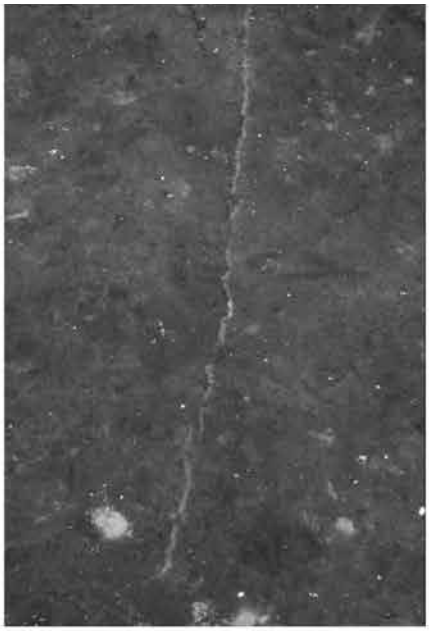
18　久留美田遺跡 B 地区地割れ

17　久留美田遺跡 D 地区地割れ

19　新川前田 A 遺跡地割れ

20　大屋 I 遺跡噴砂

21　石山西Ⅲ遺跡噴砂



22　小林一本木Ⅱ遺跡噴砂

23　蕨沢遺跡 W-25 噴砂

24　蕨沢遺跡噴砂

25　瀬戸 I 遺跡空洞

26　瀬戸 I 遺跡空洞

27　瀬戸Ⅰ遺跡樹木痕空洞

28　瀬戸遺跡樹木埋もれ木

29　不二山遺跡農免道路部分調査

30　不二山遺跡道路部分調査

31　不二山遺跡試掘

32　久留美田遺跡泥流に覆われた畠

33　久留美田遺跡畠（完掘状況）

34　石川西Ⅲ遺跡畠

36　新川薬師様 14 号墳

35　小林一本木Ⅱ遺跡畠 2

37　前田原Ⅰ遺跡畠

38　前田原Ⅰ遺跡畠（調査前）

39　前田原１遺跡畠（調査後）

40　砂田遺跡泥流

41　龍真寺遺跡泥流（山状）

42　大日遺跡山崩れ（調査風景）

43　大日遺跡泥流（山状）

44　五社遺跡泥流

45　大日遺跡断層（調査風景）

46　大日遺跡断層

49　大久保断層

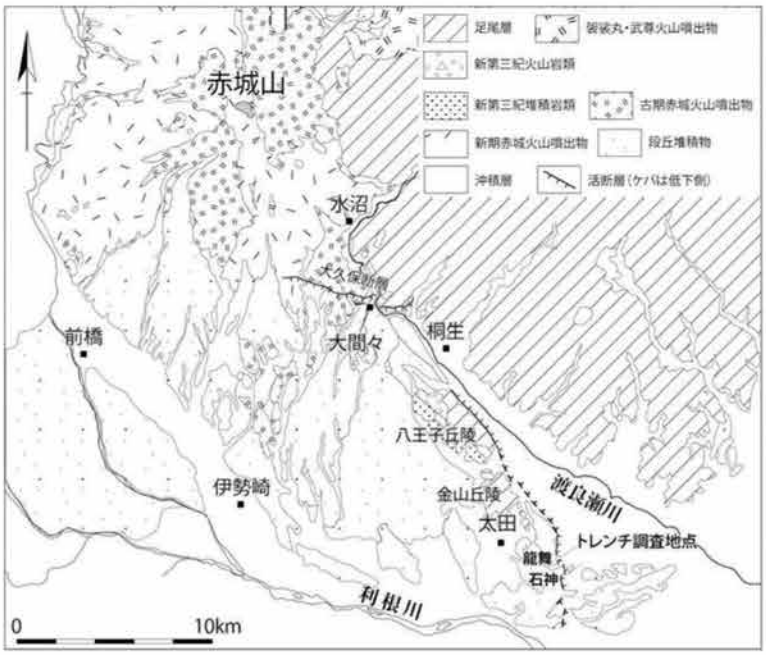
47　大日遺跡断層

48　赤城山南麓の地震災害の痕跡

50　愛宕山丘陵断層

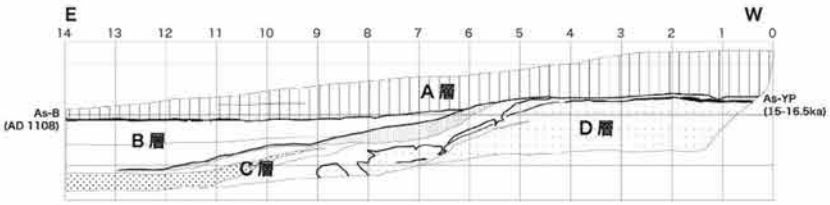
51　愛宕山丘陵断層

52　桐生市新里町早川貯水池



54　太田断層龍舞地点 2010

53　太田断層龍舞地点 2010



55　太田断層龍舞地点 2010. 2 月

56　太田断層調査地点 2016. 2 月

57　太田断層調査地点 2016. 2 月

58　太田断層調査地点 2016. 2 月

59　太田断層調査地点 2016. 2 月

宮古・姉吉地区

「此処より下に家を建てるな」

石碑の教え 守る

「此処（ここ）より下を守り続けてきた住民は、あらためて教訓の重さを胸に刻んでいる。

姉吉地区は、明治三陸大津波（1896年）で（11世帯、約40人）。沿岸部の家々が津波で押し流された宮古市で、ここは建物被害が1軒もなかった。海抜約60㍍の地点に建立された石碑の教えの警告を刻んだ石碑が立つ宮古市重茂の姉吉地区に家を建てるな」。先人

2度とも壊滅的な被害に遭った。石碑は昭和三陸津波の後、住民の浄財によって建てられた。

津波は今回、漁港から坂道を約800㍍上った場所にある石碑の約70㍍手前まで迫ったという。海辺にいた住民らは地震後、坂を駆け上がって自宅に戻り、難を逃れた。

海岸近くに船を浮かべ、ワカメ採りの準備をしていた姉石勇さん(69)は、山が崩れるのを見て地震を知り、すぐに自宅に帰った。

「家まで上がれば、津波が来ても大丈夫という気持ちがある」と話す。

津波は、湾の堤防を打ち壊し、コンクリートの巨大な塊が浜に打ち上げられた。樹木は根こそぎ倒され、岩肌が激しく削られた。

自治会長の木村民茂さん(64)は「2度も津波で全滅に近い被害を受けており、姉吉の危機意識は強い」と説明する。住民らは昭和三陸津波から50年目に漁港に観音像も建立。毎年6月に供養の法会を営み、惨禍と教訓を継承してきたという。

木村さんの気掛かりは現在の行方不明の親子4人だ。隣の地区の学校に子どもを迎えに行ったまま安否が分からない。

「家は無事でも人が犠牲になっては…」と無念そうな木村さん。「人は自然に勝てない。これからも津波の恐ろしさを伝え続けないといけない」と話している。

（東野滋）

「此処（ここ）より下に家を建てるな」と警鐘を鳴らす記念碑＝宮古市重茂の姉吉地区

姉吉地区に立つ「大津浪記念碑」の全文は次の通り。

高き住居は児孫の和楽／想（おも）へ惨禍の大津浪／此処（ここ）より下に家を建てるな／明治二十九年にも、昭和八年にも津浪は此処まで来て／部落は全滅し、生存者僅（わず）かに前に二人後に四人のみ／幾歳（いくとし）経るとも要心あれ

60 「河北新報」2011年4月10日号の記事

姉吉地区に立つ「大津浪記念碑」の全文は次の通り

大津浪記念碑

高き住居は児孫の和楽

想（おも）へ惨禍の大津浪

此処（ここ）より下に家を建てるな

明治二十九年にも、昭和八年にも津浪は此処まで来て

部落は全滅し、生存者僅（わず）かに前に二人後に四人のみ

幾歳（いくとし）経るとも要心あれ

講座・赤城山南麓の考古学2016　第６回

勢多郡と佐位郡ができる頃の赤城山南麓

～神沢川・桂川流域の遺跡・古墳の動向を中心に～

永　井　智　教（日本考古学協会会員）

はじめに

遺跡の遺跡調査をしますと、必ずその報告書を刊行します。私にとってその作業はとても楽しい時間です。自分らが調査をした遺跡にどんな意味があるのか、一定の結論を示すことが、発掘調査報告書の意味だと常々思っています。

報告書作りの中で、周辺の遺跡についてもたくさん調べます。その中にはいろんなヒントが転がっています。こうかもしれない、ああかもしれないという事が本当にたくさん出てきて、夜な夜な遅くまでずっと調べものをしてしまう事が多いのですが、そういう時に得た知識というのを、今回は少しばかりご披露させていただければいいのかなと思っております。私の手元には、最近この周辺（赤城山南麓）で私が掘った遺跡の報告書があるので、回していきます。

１　対象地域概観

今回取りあげます赤城山南麓地域、現在の行政区分では前橋市と伊勢崎市、平成の大合併で出来上がった大きな市２つに跨る地域となる訳ですけど、実際は合併前、赤堀町や大胡町・粕川村など、小さな市町村にわかれてました。更にその前の段階は、古代の奈良時代以降の行政区分をずっと引きずっているような、歴史的由来のある地域の名前が付いていました。個人的には粕川村の人が前橋市民ですとさも当たり前のように言っているのを聞いて、すごい違和感を覚える訳ですが、元々の前橋市に住んでいた方々も同じ感想を持つのではないかと思っています。それはそうと、地名というのは歴史を考える上で非常に重要な要素の一つになるのだろうと私は考える、そんな立場であることも先に言っておきます。

赤城山南麓は、今でこそ前橋と伊勢崎に跨っていますが、それは古代以来、小さい村が分離と合併を繰り返した、言わば一つの到達点と考えられるわけですが、当然村が分かれたりくっついたりを繰り返すという事は、その村と村の事情だけではなくて、その当時の社会的・政治的な意図というのが後ろ側にあると考えるのが、非常に自然な解釈なのだろうと思います。それはこの地域に限らず、全国的にも共通して言える事であろうと。

少し飛躍しますが、前方後円墳１つとってみても日本の南は鹿児島から北は岩手まで前方後円墳がいっぱいあるわけですけれども、まったく設計図がぴったりあうような前方後円墳が結構全国に点在しています。そうしたあり方を見ていると、当時の日本、日本とは言っていなかったわけでしょうけれども、そこも中央政府（大和政府）の働きで横並びに揃うようなネットワークがあったという事が分かります。結論的な話を最初に言ってしまうと、現在は前橋と伊勢崎に跨っている赤城南麓地域は、丁度、前橋市側が勢多郡、伊勢崎市側が佐位郡というように、古代に編成された行政単位である郡に対応してくるのだと思います。（市町村合併前の粕川や宮城などの町村名の前に勢多郡と付いてのはその名残り）そういうような少し大きな地域に編成されていました。

今回は赤城山南麓地域が、勢多郡と佐位郡に分割・編成された前後の話をきっちりしたいなと思っていたのですが、夜な夜な準備をしていたら前夜で終わってしまったので、勢多郡と佐位郡が分かれた前夜の話を中心にお話させて頂こうかと思います。

２　赤城山南麓の地形

南麓と言っても広いですが、前橋市と伊勢崎市の境界付近に、神沢川と桂川という小さな川が２本あります。場所的には粕川と荒砥川の間に相当します。その２本の川に沿った地域の遺跡を中心に話をしていければいいかなと思います。詳しい図がなくて恐縮ですが、これと同じものはレジュメの図１がそれに当たります。これは昨年調査した石山南古墳群の報告書を作る時に作った図をそのまま使って、夜中に手書きで作ったものを事務局に送って資料にしてもらいました。この図は赤城山南麓の地形がパッと見分かる状態

になっています。この図の一番北の端が赤城神社の少し北、だいぶ山の上になります。南の端は烏川が利根川に合流する沖積地です。中央よりやや下の所には斜めに太い川が流れていますけれども、これは広瀬川と桃ノ木川で、元々の利根川はこっちを流れていました。今回のお話で赤城山南麓といっている南端は広瀬川によって侵食された崖の端までという事になります。先ほどの前原さんの紹介でもあったのですが、今私は伊勢崎のオートレース場の対岸で発掘調査をしているのですけれども、そこが地形的には赤城山南麓の長い裾野の端っこなのかなと思っています。

3　赤城山南麓の河川　～神沢川と桂川～

赤城山南麓には図１を見ると縦方向にたくさんの中小の川が流れているのがおわかり頂けるかと思います。これらは単純に赤城山に降り注いだ雨水が自然に流れ下る中で細い谷筋を形成したもので、地形の勾配と同じ方向に平行する細い谷がたくさん出来ます。その中でも、赤城山頂小沼を源流とする粕川や、それに近い所を源流とする荒砥川は比較的大い川です。その荒砥川と粕川の間に神沢川と桂川はあるわけですが、これらも源流は旧宮城村の鼻毛石だとか、苗ヶ島といっているような標高が比較的高い場所にあるのですが、荒砥川や粕川ほどではありません。そこから地形の傾斜に沿って南に下って、現在では神沢川は最終的に荒砥川に、桂川は粕川に合流しています。

神沢川屈曲の謎　神沢川は真っ直ぐ南へ地形に沿って流れていますが、上武道路を越えた辺りで大きく西側に振れる所があります。カクッと不自然に曲がっておりまして、その周辺をアップにしたのがレジュメの図２になります。神沢川は本来、真っ直ぐ南に流れ、伊勢崎市の華蔵寺公園の南方で西へ流れを変えて粕川に入っていた可能性が考えられます。これは報告書を作る時に遺跡がどういう地形にあるのかを検討するために、古い地図を引っ張り出してきて、田んぼになっている所を全部色鉛筆で色塗りをしてみた結果です。そうした作業が私は大好きで、やっていると夜中の２時３時になってしまうのですが…。推定される神沢川の流れを具体的な場所で説明すると、波志江のパーキングエリアの辺りから華蔵寺公園の西側、サンデンの工場から伊勢崎の市街地北側を流れていたと推定されます。これは考古学ではなく、どちらかというと地理学の話になります。明治時代に陸軍迅速測図という、日本軍が軍事的な目的をもって作った地図があるのですけれども、それがなかなか面白い地図で、私の見解もそれを色塗りするところから始まっています。

では、なぜ神沢川は屈曲しているのかということですが、既に何人かの研究者が言っている事ですが、いつの頃か人口的に流れが変えられて、荒砥川へ注ぐように付け変えられているのではないかと思われます。余談ですが私は今、伊勢崎のオートレース場の近くの宮子という所に住んでいますが、今日もこの大室に来る時に神沢川の脇を通ってくるわけです。地形的には赤城山の山頂から本当に真っ直ぐ台地が伸びているにも係らず、やはり神沢川だけがそこを切断したような不自然な流れに見えます。付け替えられたのであれば、それはいつなのか、具体的な発掘調査成果も無いので今はわかりませんが、規模的には中世の用水路と言われる女堀と同じ、あるいはそれに匹敵する規模の大規模な土木工事であったのでしょう。

古代上野の用水路について　脱線ついでに神沢川の人工的付け替えを肯定する立場で私見を披露させていただきます。先程前原さんからの紹介の中にもあったように、昨年私が検討した前橋台地の古代水田についての検討の中で、条里制といっている田んぼの区画整理が奈良時代に行なわれた訳ですが、実は条里水田を作る時、かなり大規模な用水路を掘削しているという事がだんだん分かってきました。

具体的には２年前に私が担当した前橋市川曲町の発掘です。育英短大のすぐ北側に新しくホームセンターが出来たのをご存知の方もいるかと思うのですが、その場所を発掘調査した所、奈良時代に掘削された大規模な用水路が見つかりました。その用水路を先程の陸軍迅速測図や、国土地理院のインターネットサイトで閲覧できる戦後の GHQ 撮影の航空写真を見ていくと、私が川曲で掘った大溝というのが前橋の市街地、県庁前付近まで遡れる事が分かりました。今の利根川にばっさり切断されていますが、今の利根川は室町時代くらいに付け替えられたものです。今の利根川を見てこれが昔から流れていたと思ってはいけません。前橋から玉村の間の利根川は信用してはいけません。話を戻すと、県庁辺りから川曲まで、幅５ｍ深さ２ｍくらいの大規模な用水路を延々と掘っています。それにつながっていたと思われる用水路が、今も前橋市街地の中を流れています。馬場川という川がそれで、おそらく古代に流れていた用水路の末裔だろうと思ってお

ります。馬場川の先については、前橋青陵高校の方に向かって伸びていたのではないかと考えられています。女溝（オンナボリ）という古代と中世２本の用水路跡につながると考えれます。これは前原さんが開発に先立つ調査で部分的に調査したもので、古代の方は私が掘った川曲の大溝跡と同じようなものであったことがわかっています。

このような調査結果から、奈良時代の段階で上野国と呼ばれていた群馬県では、水田を作るのに今と同じような大規模な用水路の整備が結構普通に行なわれていたのではないのかと想像されます。必然的に神沢川の付け替えについても、同じような時期なのかと想像できるわけです。これはあくまでも利根川の向こう側の話をこっち側に持ってきた場合、という話です。ではこっち側での理由は何かと考えた時に、やはり前橋台地と同じように条里水田に関係するのではないのかなと考えられます。そういう視点で少し欲目を持って、古い地図や航空写真を見ていると、丁度神沢川が屈曲して迂回した辺り、具体的にはオートレース場から広瀬川を渡って環状線がグッと大きく曲がって伊勢崎商業高校周辺です。今は区画整理や圃場整備をされて大きい区画の水田になっていますが、古い地図や航空写真を見ると100mちょっとくらいの方眼の畔が所々に残っています。つまり条里制の単位である一町（109m）方格の地割りです。こうした点から、この神沢川が屈曲して曲がった先は、少なくとも奈良時代の頃には条里制が施行されて大規模な水田が作られていた可能性が高いように思います。更に全然レジュメに書いていない話をしていますけれども、この曲がっている神沢川は、この端の道を通るとわかりますがすごく深いです。渓谷のようになっていますが、そこから直接水を上げる事はおそらく無理なので、神沢川は直接用水路ではないのだろうという想像も出来ます。何回か私は車を降りて歩いてみた事はあるのですが、この屈曲する所から神沢川に沿って用水路が流れています。用水路が地形的に下っていく神沢川に対して、平行しながら下がらないように流れていて、田んぼの時期になると溢れんばかりの水が流れています。その用水路の先は伊勢崎商業高校の方へ行くようです。これはひょっとすると、古代に神沢川をまず迂回させた後、より上流から取水した完全にコントロールされた水を引き込んでいるのではないかと想像されるわけです。こうした視点ですぐ南側の北関東自動車道の発掘成果を調べようと報告書を引っ張り出してみたら、岡屋敷遺跡という遺跡が目に留まりました。今北関東道の側道端に「ラーメン屋敷」というお店がある所です。岡屋敷という地名だから屋敷と付くラーメン屋なのかなと思っていますが、そこでは平安時代くらいの土器が一番上に堆積している大溝跡が発掘されています。平安時代に機能が低下して埋まっている溝のようですから、おそらく奈良時代には掘られたのだろうと思いますが、先程私が紹介した、神沢川本流から地形の勾配で下がらないように大事に持ってきた用水路とだいたい重なる位置でその大溝は出ています。結論から言えば、おそらく奈良時代には既に神沢川は曲がっていて、曲がった所から水を引き上げていて、伊勢崎商業高校付近の水田を潤していたという事実はまず間違いないだろうと思っています。奈良時代の段階で既に曲がっていたと言いましたが、既に曲がっていた可能性が高いだろうと思っています。

本題からだいぶ逸れてしまいましたが、話が面白くなってきましたのでそのまま進めます。後の方で私と一緒に現場をやっている人が数名いらっしゃいますが、いつもの永井の話だと思って聞いているのかなと思いま。ちょっと今日はいい格好をしているだけですが。

神沢川とお富士山古墳　オートレース場のすぐ対岸には、お富士山古墳があります。先日の古墳めぐりバスツアーで行かれた方もいるかと思います。あの日、私は現場で泥だらけで掘っていましたが。お富士山古墳、先日のスマーク伊勢崎の展示会でも石棺のレプリカが展示されていましたが、非常に重要な古墳です。赤城山南麓という地域を考える上で重要というレベルの話ではない、もっと上の話です。

長持形石棺は、古墳時代中期、河内（大阪）などに巨大古墳がたくさん作られた５世紀代の話です。大阪に行って近鉄に乗っていると山のような古墳がいっぱい見える、あの古墳の主体部、埋葬施設はだいたい長持形石棺です。河内王権という言い方もしますが、当時の中央では標準的な棺が長持形石棺なわけです。河内を含む畿内以外の地域で長持形石棺が出ているという事は、すごく重たい意味があり、河内の王と直接交渉が出来た、関わりの深い人間という事になると思います。では東日本で長持形石棺を持っている古墳はどれだけあるのかなと考えた時、考古学者がまず口にするのがお富士山古墳、次が太田天神山古墳です。太田天神山古墳の方がお富士山古墳より古墳の規模が大き

いです。しかし残念ながらものすごい豪快な盗掘をされていて、長持形石棺は破片が中腹に転がっている有り様です。太田市はあまり太田天神山古墳をいじってはいけないと思っているのか、全然調査されていないので情報がありません。皆さんよくご存知だと思いますけれども、太田天神山古墳は東日本では最大の古墳ですので、ぜひとも太田市には調査をしてもらいたいなと言ってみます。群馬県ではお富士山古墳と太田天神山古墳の２つが長持形石棺を持っていますが、もう少し外側を見た時にどこかあるかというと、千葉県の高柳銚子塚古墳（木更津市）と三之分目大塚古墳（香取市）いう100m代の前方後円墳があるのですけれども、石棺が長持形石棺に似た組み合わせ式石棺らしいと言われています。（近場では前橋市今井神社古墳も長持形石棺に似た構造であったと言われている）それ以外に東北にもありません。ですから東日本で確実に長持形石棺を持つ古墳はお富士山古墳と太田天神山古墳だけ、ということになります。太田天神山古墳は長持形石棺の構造がよく分かっていませんが、お富士山古墳はレプリカが作れるくらいなのでよくわかっているという点で重要です。

古墳時代中期、５世紀に河内の大王陵に入るような人たちと交流がもてた人物がお富士山古墳に埋葬されているという事を考えますと、その力というのは赤城山南麓とか広瀬川低地帯、古墳を中心とした何kmの円くらいですとかいう話ではないだろうと思います。これは後々の結論の中でも触れるかと思いますが、赤城の南麓地域、この地図では収まりきらないくらい広い地域の人たちが共同で作った、共同で擁立した王の墓なんだろうと思います。そうなってくるとお富士山古墳の目と鼻の先の神沢川付け替えが同時期という可能性も出てきます。今のところ直接的な根拠はありませんが、外堀から埋めていくとそういうような想像が出来てきます。

あともう一つ、お富士山古墳の立地も面白いです。広瀬川に沿って自然堤防という、川辺に一段高い場所があって、川から離れるに従って低くなります。よく子供の頃に水遊びをしていて、泥の上を水がザーッと流れていくと、その流れの縁は高くなるのを覚えている方もいるかと思います。そういうような原理と同じで、自然堤防というのがしっかりとここの縁にはありますが、自然堤防の内側というのは低くなっています。（後背湿地）おそらく神沢川が真っ直ぐ南に流れていた時というのは、伊勢崎商業高校の西側の低いところは相当の湿地帯だったと思います。地元の人に聞くと、ろくでもない土地だと言います。今は水田で家は建っていません。ブルドーザーが沈んでしまうそうです。自走できなくなるそうです。そう考えると、お富士山古墳がある北側の伊勢崎商業高校西側は、先程の条里水田が施行されたのだろうといった場所ですが、それ以前から、ドブっ田というような表現がぴったりくるかもしれないですけれども、ぐちゃぐちゃの低湿地だったのだろうと思います。大規模に稲作のできない、水のコントロールができない劣悪な土地が広がっていたのだろうと思うのですが、お富士山古墳は乾いた自然堤防と湿った土地に跨っています。丸い後円部は湿地帯、四角い前方部は自然堤防に乗っかっているということが部分的な発掘調査で分かっています。お富士山古墳は、わざわざそういう場所を選んでいる。というと永井考え過ぎと言われてしまうかもしれませんが、「オレは半分湿地帯を制覇したぞ」みたいな、意気込みのようなものを感じる立地だと思います。そう考えた時、やはりお富士山古墳に埋葬された王が、神沢川をガクッと曲げたのかもしれないと思います。

暴れ川だった桂川　桂川は神沢川の東の支流である東神沢川とかなり近い所から流れ出しているのですが、ずっと南に下ると大室古墳群のある丘を迂回するように東へ流れ、皆さんよくご存知だと思います多田山丘陵、良い古墳がたくさんありましたけれども、多田山丘陵と大室の間を流れている川です。それをずっと下っていくと、桂川は伊勢崎市下触町でカクンと東へ不自然に曲がって粕川にぶつかっています。丁度粕川にぶつかる所が赤堀の運動公園です。屈曲した後の直線については、パンフレットを最近前原さんが出していましたけれども、中世の女堀に桂川が乗り入れている状態です。女堀は中世に掘られている用水路ですから、少なくとも桂川の屈曲は中世より後で、中世を遡ることは絶対ないという確認が取れます。航空写真等で確認するまでもなく、桂川は本来真っ直ぐ南へ下っていたわけでしょう。桂川で面白いのは、石山丘陵東側の中畑遺跡という、赤堀村時代に調査をしている遺跡があるのですけれども、報告書を見るとある時期に遺跡を覆うような洪水堆積物層があります。白っぽい砂が厚く堆積している状況があるということが何となく見て取れます。しかし報告書が昭和50年代ですので、正直よく分かりませんし、調査を担当して報告書を出された松村一昭先生も昨年末に亡くなられてし

まって、今となっては検証も少し難しいのですが、おそらく桂川が氾濫した時に被ったのではないのかなと思います。更にこれを南に下って、かつての粕川への合流点、先日のバスツアーで行かれた一之関古墳の辺りはここ数年で急に道路が広くなったのですが、本関町古墳群とか新屋敷遺跡とかいろいろな名前で拡張前の発掘調査がされているのですが、その調査をしている最中で奈良時代の家の埋りかけた窪地の中に、やはり白い洪水の砂が堆積している状況が確認されています。さらに東へ少し奥まった所は、現在伊勢崎市で佐位郡正倉跡という指定名称で範囲確認調査をしている三軒屋遺跡で、つい先日正倉ではなく今度は郡庁院ではないかという建物と区画溝が出てきました。私は伊勢崎市の担当とは付き合いも長く、よく現場を見せて頂くのですが、同様の洪水堆積物が区画溝に確認できました。佐位郡衙の一部までを埋めるような洪水堆積物層があるということです。それは中畑遺跡から本関町古墳群・新屋敷遺跡の国道拡幅の調査、三軒屋遺跡といった洪水の流れを考えると、本来は粕川も今よりもう少し東側を流れていた可能性があるのかなと思います。ついでに言うと桂川、戦後 GHQ の写真を見ると、カスリーン台風、この被害の爪痕がはっきりわかる写真がありまして、国道50号は完全に切られて仮橋が架けられている写真なんかもあります。それを見ると桂川は相当に暴れたみたいで、その氾濫で運ばれた土が白くバーっと映っています。それは今私が言った洪水の流れと同じ所で確認ができます。

こで少しまとめますと、神沢川は奈良時代に条里水田の水源として使った可能性が考えられ、お富士山古墳の時期に荒砥川へ付け替えられた可能性が考えられること、桂川はどちらかというと暴れ川だったようですけれども、なかなか手を焼いていた部分もあるのかもしれませんが、とは言え洪水がある度に運ばれてくる泥というのは肥沃な泥ですから、それを再び上から耕していけば良い稲が育つ、良い水田ができたのではないかと思います。そんな川２本の話でした。

では今までは地理的な話をしたので、次は遺跡について見ていこうと思います。最初に古墳を時期別に少し追いかけてみて、その後に古墳時代から時期を追って集落遺跡を追いかけていこうと思います。とりあえず古墳・古墳時代の集落等の話をざっとした所で休憩を入れるような感じでいこうと思います。

４　神沢川・桂川流域の古墳

特にこの川筋は古墳が多いです。最近県教育委員会でやった古墳総合調査では、この中にも調査員をやられた方もいらっしゃると思います。

この地域が荒砥村と呼ばれていた時は、荒砥村の古墳の総数は何基だと思いますか。上毛古墳総覧では365基です。365はどこかで聞いたことある数字だなと思いましたが、１年の日数ですね。あまりにも古墳が多かったので、１年の日数で止めたという話がありました。そんないい加減な…という話ですが、実際には荒砥村の中では365基どころではない数の古墳が作られている状態です。荒砥村のすぐ隣の赤堀村にも相当数の古墳があり、本当に古墳だらけという状態でした。

古墳時代はみなさんご存じのように、前期・中期・後期と大きく３時期です。前期、中期の古墳は少なく、後期の古墳はたくさんあります。

群馬の前期古墳　元島名将軍塚古墳、前橋台地のど真ん中、高崎市になりますが、前方後方墳です。忘れてはいけないのは朝倉・広瀬古墳群中に前橋天神山古墳、前橋八幡山古墳です。前方後方墳の前橋八幡山古墳は今でも雄大な姿で横たわっていますが、その南方にあった前方後円墳の前橋天神山古墳は、本当に残念ですが古墳の中心部分がかろうじてピラミッドみたいに残る状態です。

とは言え群馬県では何と言っても、前橋天神山古墳が前期の古墳としては代表選手として出せると思います。それはなぜかというと、卑弥呼の鏡などと言われる三角縁神獣鏡複数面をはじめとする豊富な副葬品、葺石あり、周溝あり、段築もあるという、古墳としての要件を全部揃えた古墳として群馬県では一番古い古墳です。

他にも玉村に芝根村七号墳と昔言っていた川井稲荷山古墳という古墳もあり結構古そうだという話ですが、今は場所すらよく分からないという状況になっています。あとは太田の朝子塚古墳も結構古いですが、前橋天神山古墳に比べればまだまだ新しい部類です。結構前ですが、太田の北関東道建設で調査された成塚向山遺跡という、大騒ぎした例もまだ記憶に新しいですが、誤解なく言えば成塚向山は古墳ではないと私は思っています。方形周溝墓だと思っています。古墳の前身のものだと思います。なぜそう思うのかというと、埴輪も無い、葺石も無い、堀もちゃんとしていない、古墳としての要件を全く備えていないからです。ですから正しくは古墳ではない。ただ、地域の中では

古墳というべきなのでしょうけれども。

少し話が逸れましたけれども、群馬県の中では前期古墳というとポンポンといくつか挙がりますが、ちゃんとした古墳は非常に少ないです。その中でも一際抜きん出ているのは前橋天神山古墳ということですが、前橋天神山古墳があるのは赤城山南麓からは広瀬川の対岸、前橋台地上にあります。広瀬川低地帯と前橋台地の境界を体感できるのは、国道50号の小島田の信号から関越道の高崎インターに向かって走っていくと、陸橋で両毛線を越えて一度下がってから、駒形町に向かってバイパスが少し上りますよね。それから真っ直ぐ平らな道になりますが、そこが前橋台地の界になります。ここからもう少し上に前橋市街地の方へ行った辺りに前橋天神山古墳があります。

赤城山南麓地域と、広瀬川低地帯を挟んで向かい合った地域に前橋天神山古墳が位置しているということが結構大事なんだと思います。いま前橋市でお話をしているから前橋天神山古墳が素晴らしいと言っているわけではなく、大事な話ですのであえて触れました。

赤城山南麓の前期古墳　前橋台地の縁の方には群馬を代表する前期古墳があるという状況の中、赤城南麓地域には明確な前期古墳がほとんどありません。強いて言えば前方後方墳の可能性がある華蔵寺裏山古墳がありますが、古墳の上に水道施設が作られていて、現地に行っても古墳なの？という状況です。私が小学生の頃、親に華蔵寺公園へ連れて行ってもらった時、その頃から私はそういうのが好きなんだなぁと思いますが、埴輪の破片を一つ拾った記憶があります。今にして記憶を辿れば赤く塗った白い埴輪で古そうだったなぁと思うので、ひょっとすると華蔵寺裏山古墳は、今では良く分からないけれども赤城山南麓地域では唯一に等しい前期古墳だったのかも知れないと思っています。あともう一つ、華蔵寺裏山古墳の北東に地蔵山という自然の丘陵があり、周りにたくさんの後期古墳があるのですが、地蔵山の山頂に一際大きい古墳があって、調査は全くされていないのですが、それが前期古墳ではないかという話があります。亡くなられた松村一昭先生は自費でも掘りたいと言っていたという話ですが、結局掘る事もなく、亡くなられる数ヶ月前に会った人の話ですと「地蔵山を掘らない事が俺の心残りだった…」という話をされていたそうです。良い話なのか怖い話なのか分かりませんが、前期古墳が赤城山南麓で今後見つかるとすれば伊勢崎の華蔵寺から地蔵山の間の地域にある可能性はあります。だけど実際現地を見る限り、前橋天神山古墳に比べると相当に劣るものであるということは確かでしょうし、他に同時期のお墓を見ていくと赤城山南麓の荒砥でもいっぱい発掘されている前方後方形の周溝墓、溝をめぐらしたお墓、弥生時代からの延長で来るような、そういう古墳からすれば１ランクも２ランクも落ちるような墳墓がいっぱい造られています。ただ前期古墳がないからといって前期の人がいないのかといえばそんなことはないのです。周溝墓はたくさんありますので、逆に言うと古墳に発展できなかった、飛躍しえなかった人たちがたくさんいたのかなと思います。いずれにしても赤城山南麓に前期のちゃんとした古墳はないということは特徴として押せる所かなと思っています。先程少し触れました中期のお富士山古墳は、前期古墳がない地域だから出来たのかもしれないです。広瀬をはじめとする前橋台地では前期からの勢力は根強いでしょうから、なんとなくそういう所は退ける中で、これから伸びていく赤城南麓地域に中央の王権がテコ入れした結果、お富士山古墳が成立したのだという想像も可能なのかも知れません。

中期古墳　地形的には赤城山南麓の南端とも言える場所にお富士山古墳が造られ、５世紀の前半と思われますが、まずそれが非常に重要です。伊勢崎市の西野大塚古墳や達磨山古墳、蕨手塚古墳といった、お富士山古墳直前と思われる大きな円墳も重要です。

西野大塚古墳は大室よりもっと標高の高い所、粕川に面する結構な高台上の見晴らしが良い所にあります。昭和40年代の終わりに、度々登場します松村一昭先生が土地改良に伴って発掘調査しておりまして、その時にびっしり巡る葺石をだいたい８割方掘っています。残りは工事の対象から外れたので保存されているようですが、その時に比較的古い古墳だと指摘はされていたのですが、最近赤堀の資料館で保管されている資料を点検させてもらったところ、結構古い埴輪がありました。５世紀前半くらいでも良いのではないのかなという埴輪です。

達磨山古墳と蕨手塚古墳は、先程前期古墳かもしれないと紹介した地蔵山古墳のすぐ麓にあります。現地に行くと結構立派な古墳です。

それ以外にも、ここでは具体的に出していませんが、いくつか中期でも古そうな時期の円墳が赤城山南麓の谷筋には点々とあります。それらはよくよく地形を見てみると粕川とか桂川もそうでしょうけれども、特に粕川系統の谷幅が広い所、田んぼが広くとれるよ

うな場所を見下ろす高台上にだいたいあるという傾向が導かれます。そういう大きい円墳を造れるような小勢力が赤城山南麓には点々といたということが確認できます。これは石山南古墳群の報告書を作っている時に気が付いたことで、結構良いなと思ってここでお話しました。赤城山南麓の谷筋に田んぼをどんどん作り、水田面積を増やし、今でいうならば私的財産を増やしていった人たちが大きな円墳を造っていった結果なんだと思います。例えば、蕨手塚古墳や達磨山古墳は昭和30年代に群馬大学が埋葬施設を調査していて、副葬品で鉄製の農具をいっぱい出しています。一般的に中期の古墳というのは鉄製の農具をたくさん出すという特徴はありますが、殊に赤城山南麓地域の中期古墳で鉄製の農具がたくさん出ているというのは、やはり開発に関係するんだろうな、開発に一生を捧げたような人のお墓なのかなという印象を持ちます。確認しておきますが、古墳は単純な大きさだけではなく、形が階層を示しています。言ってみれば円墳までしか造れなかった階層の墓なのです。そしてそれを超越して最高ランクの前方後円墳を造る、お富士山古墳を造る下地となっていたのではないかと思います。今お話した大きな円墳、それらに葬られた谷筋の良い場所を選んで開発した人たちの先祖や子孫がおそらく連合体のようなものを作り、そういった人たちが神沢川の流れまでも変えて、ガツンと水田を増やした時、そのシンボルとして私はお富士山古墳が作られたのではないかと思っています。お富士山古墳があまりにも裸の王様すぎる立地であることへの説明が上手くできると思います。恐らくお富士山古墳のある場所は、赤城山南麓地域の玄関なのでしょうね。玄関先にこれみよがしに大古墳を造っているようなイメージです。

今私はお富士山の目の前で西太田遺跡を調査しています。お富士山古墳と同じ時期の遺跡は全然出てきていません。現場に立つと、やはりお富士山は記念碑なんだろうなと思います。そんなことをぼんやり考えながら掘っている西太田遺跡は、とにかく普通の集落とは違う異様な遺跡です。時期的には古墳時代の後期から奈良時代、平安時代にかけての遺跡ですが、普通の遺跡の４倍くらいあるような大きい竪穴住居がたくさん出てくるような遺跡です。いろいろ考えていくと西太田遺跡のすぐ下流には、昔の伊勢崎の市街地、江戸時代には伊勢崎河岸と言っていたのですが、『伊勢崎市史』をペラペラ見ると江戸から船で入れる限界だったといっています。これは典型的なご都合主義な発言ですが、昔はもっと川の水が多かった気がするので(笑)、気がするだけで根拠は全くありませんが、そう考えれば今調査をしているお富士山古墳の目の前の西太田遺跡は、東京湾から船で来られる船着場みたいな性格を持っていたのではないのかなと思えてきます。船着場というとすごくイメージが限定されてしまいますが、正確には川津という言い方が良いのでしょうね。そこにお富士山古墳が造られているというのは、おそらくお富士山古墳周辺が河岸場みたいになっていて、そこから赤城山南麓地域に物資が供給されるような、分かりやすいイメージをできると思います。お富士山古墳が裸の王様みたいであるという所から始まった話ですけれども、赤城山南麓地域全体に目先を広げてみれば、その玄関先でもあるし、まさに東京湾を経由した入口なのでしょう。

実は群馬は古墳がたくさんあり、よくよく言われるのが東山道ルートで長野県の山の中を抜けて初めて辿りつく平野部だからという話があるのですが、たしかにそういう方向性での開発というのは古墳時代前期にはあったのだろうなと思うのですが、実はその上野地域が本格的に飛躍していく時期は東京湾まわりに物資や情報が入るように変わってからみたいです。これらは大きく地域を変えていったのだろうなと思いますが、そういう中でお富士山古墳ここにありという、いわばモニュメントなのです。

ちなみに同じように船で東京湾から入れる限界の場所が群馬県にはもう一ヶ所あります。高崎の倉賀野です。倉賀野は近世中山道の倉賀野宿という性格を持っていたわけですけれども、倉賀野というと倉賀野古墳群という前期末から中期前半の、お富士山前後の時期の大きな古墳が２基あります。浅間山古墳と大鶴巻古墳です。やはりお富士山古墳と同じように物資、物流の拠点だったような場所にシンボル的に造られている古墳だろうなと、これは高崎市文化財保護課の課長をされている若狭徹さんがいろいろな本で指摘されていることで、これは面白い話だなと思いました。それにヒントを得て先のお富士山の話に辿り着いた部分もありますが、そういうような位置づけです。ですから東京湾から繋がった船で入れる限界がお富士山古墳の所と倉賀野古墳群の所の２ヶ所あるというような事を確認していただければいいのかなと思います。そしてお富士山古墳が造られた以降も、実際には赤城山南麓の地域の中では、比較的規模の大きな古墳が点々と造られていくわけです。中期後半くらいになりますとその

お富士山古墳の系統を引いている、２代目、３代目なのか、次男、三男なのか分かりませんが、前方後円墳の今井神社古墳が50号と上武道路が交差する近くにありますけれども、今井神社古墳が形からいってもお富士山古墳に近いですし、嘘か真か確証は持てませんが長持型石棺に影響を受けたのではないかという石室材が境内に積んであったりします。あとは昔少し小耳に挟んだのですが、古墳の社殿を改修した時、真っ赤に塗られた石室が見えた事があるという噂もあるようです。埴輪も実際にはお富士山よりは新しい特徴を持っています。やはり今井神社古墳の場所も赤城南麓の端、末端だという所が特色だと思います。ですからお富士山に葬られた人は、スケールダウンしながらも今井神社古墳に引き継がれていくのではないのかなと、これはそう思っていますというだけで、具体的にもう少し埴輪の検討や古墳の形の検討をしていけばいいのだと思うのですけれども、最大の問題点としてはお富士山古墳がちゃんと発掘されていないという点です。古墳の形がはっきりと分からない。古墳の研究というのは設計図を透写台の上で重ねて一致するかどうかというレベルの研究までしている状況ですので、古墳の正確な形が分からないというのは、考古学的には非常に厳しい情報の制約になってしまうので、伊勢崎市はぜひお富士山古墳を調査していただきたいと思います。ここは前橋市なので大きな声で言っても大丈夫かなと思います（笑）。このような状況でお富士山古墳の次は今井神社古墳に王権が移る可能性が高いと思っております。それについては後日私個人の研究ではなくて、行政レベルの取り組みで解決していただかなければ分からないということです。あとは先程言いました西野大塚や達磨山、蕨手塚という大型の円墳の系統というのは、お富士山古墳が造られて今井神社古墳に至るまでの間にまだ点々と造られているようです。ただお富士山古墳以降には円墳から少し出世して、帆立貝式古墳といっている小さい前方部が付く形になっていきます。赤堀茶臼山古墳がその中では非常に分かりやすい代表選手になると思います。先日のスマークの展示の中でも紹介されていましたので、あえてここで触れることは必要ないかと思いますが、すぐそこの多田山丘陵上にあります。そういった古墳やもう少し標高が下の方ですが、スマークの近くに丸塚山古墳という古墳がありまして、それは帆立貝式です。埴輪の特徴から見てもお富士山古墳より後であることがわかります。

おそらくお富士山古墳の王を擁立した小首長は最初円墳だったのですが、今井神社古墳段階では王の墓がスケールダウンをすると自分たちのお墓がスケールアップするというような、何と分かりやすい話だなと。おそらくそこに地域の中が細かく分かれていく理由が隠れているのだと思います。冒頭の所で話した、村が分解したりくっついたりというのは、そういう部分でも推し量れる事なのかなと思っています。

後期古墳　単純な墳丘規模だけで言うと、お富士山古墳以来に再び赤城山南麓地域で大型の古墳が出現するのは前二子古墳になります。すぐそこにある古墳ですけれども、前二子古墳がお富士山古墳以降この地域で現れる、厳密に言えば今井神社古墳が入るのだと思いますが。私個人としてはお富士山古墳から今井神社古墳へという流れはありなのかなと思うのですが、大室については場所的に少し離れるというのもありますけれども、たぶん別の背景があるのではないのかと思っております。どちらかといえば先程言った中小の有力者が王のお墓を小さくした代わりに自分たちのお墓をスケールアップした、その延長線で生えぬいてきたような人が前二子古墳の主ではないかと思っております。少し時期的には開きますが、桂川の対岸にある赤堀茶臼山古墳が前方部の短い帆立貝式、前方部が短い前方後円墳ですけれども、その形とこの前二子古墳、共にスマートではない形です。前原さんを意識して前二子古墳はすごくいい古墳だと言うわけではありませんが、その平面形態はすごくダサい。これは私個人的には赤堀茶臼山古墳の、前方部が途中でブツッと切れてしまったような形に良く似ていると思うのですけれども、ひょっとすると直接的な繋がりはないにしても、それまでお富士山古墳や今井神社古墳を擁立して支えてきた中小の有力者たちが更に大きくなってきて、まさに生えぬいた人たちがこういう前方後円墳を造り、その時に自分たちのアイデンティティの確認みたいな意味を込めて赤堀茶臼山的な前方部の短い、少しずんぐりむっくりした墳形にしたと考えるのはあまりにも話が飛躍しすぎているかなと、前原さんごめんなさいという感じです。ですが真剣にそのように思う気持ちは正直あります。

大室の三古墳についても、諸説あると思いますが概ね前二子古墳→中二子古墳→後二子古墳の順で造られたということで異論はありません。ただ前二子古墳と中二子古墳は埴輪を見る限り時期が近いのではないのかなとか、後二子古墳の時期がいま一つはっきりと決

まらない（埴輪が編年的に難しい面がある）等、まだまだ前原さんの仕事はいっぱいあるのだと思っています。もちろん私たちもお手伝いをしますので、ということですが。

いずれにせよ地域の中では大きい前方後円墳が連続して造られているという点は、非常に面白いと思います。それが桂川と神沢川の間に挟まれた一画にあるということ、レジュメの方のサブタイトルでつけた神沢川と桂川流域を中心にというのは、読みかえれば大室を中心にという意味になりますので。

あとこの時代に前二子古墳の時期がピークになるのではないかと思うのですけれども、初期群集墳と群馬の研究者が言っているものがあります。群集墳とは密集して小さい古墳が造られている状態の古墳群です。古墳時代後期になると群集墳といわれている古墳群が出てくるわけですが、それは古墳を造れる人がどんどん増えてくるからです。最初の頃は偉い人しか入れなかった古墳が一家に１基みたいになってくるわけです。私個人的には古墳時代前期に古墳を造れなくて方形周溝墓に入っていた人たちが、初期群集墳に対応してくるのではないのかなと思っております。なお、初期群集墳に対して後期群集墳や新式群集墳というのもあります。新式群集墳といっているものは、おそらく皆さんが一番良く見るタイプの古墳です。横穴式石室が口を開け、小さい円墳、それがたくさんあるようなものが新式群集墳です。

初期群集墳といっているものは結構扁平な見かけで、細い堀がくるっと巡って、必然的に盛土の高さは低く、尚且つ埋葬施設が残っていたとしても穴を掘って木棺を直接埋めているようなもので、盗掘を受けていないにも係らず副葬品が出なかったりします。ただ、埴輪は一丁前に並べている例が多かったりします。ですから、すごく古墳コンプレックスの塊みたいな人が作ったのかなと思えるのです。お墓の中に何も持っていけないくらい、手持ちのものを投げうってでも埴輪を立てるような感じかと思ったりもします。そうした初期群集墳といわれているものは赤城山南麓の至る所に出始めます。多田山丘陵の上の方にもあります。先日のスマーク展の方でもそういう説明がされていましたけれども、そういった人たちが開発を支えていたのではないのかというようには思います。彼らが発展を遂げる中で今度は小規模な前方後円墳に到達する流れというのも、中期とは多少異なりますが再び生まれてくるようです。

「赤城山南麓型」小型前方後円墳　テラスを広くとる小型前方後円墳と前原さんが呼ぶ一群は、私にとって非常に思い出深いものです。図は前原さんが新泉社から出した『東国大豪族の威勢』の第42図を昨日の夜中デジカメで撮ってお見せしているだけなのですが、この元になる図は今でも覚えていますけれども、寒い冬の日、当時上泉にあった文化財保護課のプレハブで小二子古墳の報告書を作っている時、私の目の前で前原さんがサラサラっと作ったんです。報告書に載せるように。こうやって報告書は作るのかとその時に衝撃を受けたのですけれども、その図を前原さんが最近出した著作で使っている、それを今ここで紹介しています。私はこれを「赤城南麓型」といった方が良いのかなと思っている前方後円墳です。昔これを表現する時にオバQという言い方をしたのですけれども、そんな感じです。オバQみたいな周溝、堀の形をしているのですけれども、中の墳丘は柄鏡形であったり、結構それっぽい形になっています。これはおそらく、前二子古墳や中二子古墳に入るような人たちの下で初期群集墳に入っていた、古墳を造るには底辺層の人たちが開発によってだんだんと蓄えを持つようになって、最終的にはこういう所へ辿り着くのではなかろうかと思っています。最終的に辿り着いた形というのは、奇しくも先程お話をした赤堀茶臼山古墳みたいになってしまいます。前方部の先端をブッツリ切り落としてしまったような、もう少し長ければカッコいいのにと思う形です。赤堀茶臼山古墳と直接繋がるとは思っていませんけれども、やはり赤城山南麓地域では２番手についてくるような人たちが造る前方後円墳は、前方部が短いのかもしれないです。なぜかといわれると困ってしまうのですけれども。とは言え前二子古墳が前方部の少し短いずんぐりむっくりした形は、私は２番手からの生えぬきこそ相応しいと思います。

「赤城山南麓型」小型前方後円墳は、粕川沿いに比較的集中する傾向があります。このタイプの古墳は、赤城山南麓の中では村長さんレベルの人たちが造れる形みたいで、前提としては谷筋の開発に終始した結果、辿り着いた形なのかなと思っています。

5　古墳時代の集落

古墳は皆さん歩いていれば山になって目立つからわかりやすいと思いますが、集落遺跡というのは発掘調査をしなければ分からないものです。赤城山南麓地域ですと、昭和50年代から60年代にかけて大規模な土地

改良が実施されまして、その時に今では考えられないような面積の発掘調査が何年も行われました。それが20年、30年かけてやっと最近報告書が出揃いつつある状況です。赤城山南麓地域にはたくさんの古墳があって、如何せん荒砥村は365基で止めたくらいですから、一家に１基古墳を作っていたとしてもその一家は何回も家を建て替えるでしょうから、竪穴住居と古墳の数は全然比較にならないでしょうが、ものすごい数の集落遺跡が見つかっています。それを全て網羅した話をするとなると準備だけで数ヶ月は要しますし、話すのに軽く３時間はかかってしまうと思います。しかもそれは恐ろしくマニアックになる可能性が高いのでやりませんし、物理的に無理と言った方が良いのかもしれません。とは言え古墳のない赤城山南麓の台地上は、ほとんど古墳時代の集落で埋め尽くされていると言っても過言ではない程です。その間の谷筋は恐らく全て水田化され、集落の稀薄な馬の背状の台地上は、隈なく畑地となっていたと思われます。ただ畑は榛名山南東麓の遺跡のように火山灰を厚く被るわけではないので、発掘調査では良くわかっていませんが、そういう土地利用をされていたのではないかと私は思っています。今とあまり変わらない景色かも知れないです。当時のムラの景色は。

豪族居館の多い赤城山南麓　いわゆる豪族居館と言われる遺跡が複数知られているのも、赤城山南麓の特徴です。ある程度内容が明らかとなっている前橋市荒砥荒子遺跡や丸山遺跡、大室公園の南駐車場の外れにある梅木遺跡もそうです。伊勢崎市の原之城遺跡も著名なものです。最近では笂井八日市遺跡も同種の遺跡とされています。

豪族居館として同様のものに、全国的に有名な遺跡、群馬を代表する遺跡でもあるのでしょうけれども、高崎市の三ツ寺Ⅰ遺跡があります。上越新幹線建設に伴う発掘調査で見つかって、今ではかみつけの里博物館の展示のメインになっている遺跡で、石垣を伴う城のような構造です。赤城山南麓のそれは三ツ寺に比べれば大分簡素なものですが、そういうものが多数あるという事、それは先程言ったような中小の有力者たちがこういうものを作っているのかなと思うわけです。しかしながら先程の「赤城山南麓型」というべき、オバQみたいな前方後円墳の主が皆居館に住んでいたとしたら、もっとたくさん見つかってもいいと思います。それくらい赤城山南麓は発掘調査をしていますので。ではこの豪族居館には、はたして有力者が常時居住していたのでしょうか？

豪族居館という言葉は三ツ寺Ⅰ遺跡の調査以降使われるようになったものですが、インパクトが余りに強い言葉で、どう読んでも豪族が住んでいる場所となってしまいます。ここからは私の自説を披露する形になりますが、おそらく谷筋ごとに開発を頑張っている村長さんたちの連合体があって、おそらく水利権で繋がっている。彼らは年一輪番管理で祭祀を執り行う施設を持っていた、それが豪族居館の実態ではないかと思っています。豪族居館といっている方形区画に囲まれた遺跡は、河川に浸食されて壊れている例が多い。先程の荒砥荒子遺跡や梅木遺跡がそうです。三ツ寺Ⅰ遺跡は壊れてはいませんが、猿府川という小河川に跨っています。豪族居館は水利権と祭祀権を確認する装置であるという事、まるで私が今初めて言ったような言い方をしましたけれども、高崎の若狭さんは三ツ寺Ⅰ遺跡の解釈として同様の可能性を以前から指摘されています。私は若狭さんの理解を赤城山南麓に持ち込んだに過ぎません。

豪族居館といわれる遺跡が赤城山南麓に複数あるからといって、豪族がたくさん住んでいたわけではないと私は思っています。今後その辺は検討されていかなければいけないのかなと思っています。実は去年の今頃、ここ大室で私の畏友横澤君が豪族居館の話をしましたが、聞きにいらした方もいらっしゃると思います。その話を私も聞きに来て、話の後に今のような話をしながら遺跡見学に行った記憶があるのですが、今後は豪族居館という言葉を一回無くしたような気持ちで検討していかないと、地域の中では理解できない遺跡になってしまうということです。ただ赤城山南麓の古墳時代を代表する遺跡ではあるので、これをちゃんと評価していくことが、この地域の歴史をしっかり読み解いていく中で大事なことなんだとプッシュしておきます。ここで休憩に入りたいと思います。

～休憩～

6　奈良時代の遺跡

次に奈良時代の遺跡を見て行きます。先ほどの古墳時代集落から続く話になります。古墳時代の集落が古墳時代だけで終わる事はまずありません。連続してずっと人が住んでいる状況を確認できる例が多くて、古墳時代の後期から奈良・平安時代まで続くような集落遺跡が大半の状況です。古墳時代に成立した景色が

奈良・平安時代までずっと引っぱられていくような状況があるのだろうと思います。連続的で伝統的なムラが点在するような、そんな景色の中で注目しておきたい遺跡がいくつかあります。

例えばレジュメの方でも挙げています、伊勢崎市の本郷下遺跡という７世紀末くらいの遺跡があります。厳密に言えば飛鳥時代と言った方が良いのかもしれません。飛鳥から奈良へ都が移動し、大宝律令等、律令国家が急速に整備されていく時期に相当します。本郷下遺跡では竪穴住居以外に、掘立柱建物、倉庫ではないかと言われているものが２つ並んでいる状況がわかっています。土地勘のある人だと本郷下遺跡は伊勢崎にある“ゆまーる”という温泉施設の目の前なんですけれども、そういう遺跡が登場したり、南原遺跡という多田山丘陵の南、自動車大学校の南東ですが、その辺りには古墳時代からずっと連続している遺跡があって、時期や場所によってエリアの使い分けがなされているような例があります。南原遺跡には掘立柱建物が結構入ってきており、先の本郷下遺跡みたいな雰囲気があります。おそらく伝統的な集落が律令国家の影響を受けて役所的な機能をもってきたような場所なのかなと思っています。もう少し時期が下ってくると、南原遺跡西方の向井遺跡に、掘立柱建物がコの字形に並び、焼けたお米がたくさん出てくる遺構群が形成されます。向井遺跡周辺では“中”と墨書された土器が結構出ていますが、決定的なものとしては、「中臣」と書いてあります。「中臣」はどう考えても人名と思われますが、おそらく「中臣」を名乗るような人たちがここには住んでいた可能性が高いと思っています。それは古墳時代から引き続き住んでいた人たちの中で力を蓄えた人たちがいて、奈良の、中央の「中臣」という苗字をもらったのだと思います。話しが前後しますけれども、この赤堀周辺の小地域には藤原秀郷伝説という、藤原氏（中臣の末裔）の伝説が残っています。

南原遺跡南方の川上遺跡も注目されます。ここは調査が古くてなかなかわからなかったのですが、大きい穴の開いた石を据えた遺構が出ています。調査当時は仏塔の礎石、塔芯礎だろうと言われて川上廃寺と言われた時期があったのですが、最近どうもお墓ではないかとなりました。私がこの近くを調査した時に報告書で検討した際、発掘当時の図面を引っ張り出してきてみたら石の周りに溝が回っていることが分かりました。溝が回っているのと石を囲むような掘立柱建物の存在も分かり、しかも入口が西側妻側にあります。要は細長い建物の扉を開けると一番奥に火葬墓が見えるという、墳墓堂や霊廟と言うような施設だと思うのですが、それが実は川上遺跡のお寺だといわれた遺構の実態だということを突き止めました。なお、こういう霊廟のような施設は関東地方ではほとんど例がありません。似たような例を探しても、千葉に１例あるかなというくらいで、あとは西日本です。岡山県あたりに行くとそういうよう施設自体を陶棺という粘土で作った棺桶で表現しています。こうした西方かなり遠方の情報がここに入ってきた背景には、「中臣」と名乗る人たちがいたからと思います。ほど近い多田山古墳群で唐三彩の陶枕が出ていますが、それがあの古墳に追葬で入れられたのが８世紀、南原・向井・川上の各遺跡が成立してくる頃です。そういう事を考えると、ここに住んでいた人は唐三彩を持っていて、多田山の切石切組積みの立派な横穴式石室に追葬された、村長さんレベルの人だったのかも知れません。なお、多田山古墳群の新しい時期の古墳の内容が異常であるということは、「中臣」墨書がたくさん出てくる現象と無関係ではないのと考えています。蛇足になりますが、多田山古墳群の報告書をよくよく見ると、出土品の中に鉄の釘がたくさんあります。群馬の古墳を私は何基も掘っていますし、前原さんもたくさん掘っていますが、棺釘が出てくる事例はほとんどありません。ふと気が付いたら多田山は釘がたくさん出ているなと思い調べていくと、やはり地域の中ではランクの高い古墳から出土していることが多い、というような話を関西の研究者の友人に話したところ、「関西では棺釘は普通に出ますよ、関東は出ないんですか？出ないんですねぇ」と馬鹿にされてしまいました。

釘付け木棺、棺を釘で留めている棺は関西のルールです。こちら関東のルールはおそらく棺桶に入れないで、戸板みたいなものに入れて石室の中に入れるのか、それとも組み合わせ式といっているこの寄木細工みたいな感じで組み合わせた棺を使うのか分かりませんが、鉄釘を出す古墳は畿内との関わりが強いと言えそうです。遺物としては非常に地味ですが、釘がたくさん出てくる古墳は要注意だなと思った次第です。その要注意の古墳からは唐三彩も出ていたり、近傍には「中臣」と墨書してある土器がたくさん出てくる遺跡があったり、侮れない事実と思っています。なお、この遺跡群は佐位郡の〇〇郷、具体的な郷名は分かりませんが郷中枢部分であると思っています。

地域の中では政治の拠点になってくるような場所に具体的な個人名が確認できるというのは非常に面白い事だと思っています。多田山古墳群の優れた終末期古墳もセットで考えていけば、中央政府との結びつきを持った人が、古墳時代からの伝統的な社会の中にも出てくる余地があることがわかります。そういった人たちが地域の政治的一端を担っているというのが実態なのではないかと思います。

国という単位の下に群、その下に郷という単位がある、そういう行政単位の整備もこの時期にされていきます。ここで取り上げた南原遺跡周辺の遺跡群には、そうした歴史的評価が下せるのかと思います。

また、南原遺跡周辺の遺跡は、諸般の事情で正式な報告書が出ていませんでした。当時の私は他に現場を抱えていないのを良いことに、伊勢崎市教育委員会の協力を得て調べ込んで検討した経緯があります。こうした作業は、今後大規模な発掘が減っていくと思うのですけれども、ちょっとした発掘をした時、周りで既に調査をされていればそれを一生懸命重ね合わせて検証する、これが今後の発掘調査、考古学研究の流れになるのかなと思っています。

古代寺院　お寺の話も少ししておきます。有力者は大きい古墳を造って、有力な家族はちょっとした古墳を造っていく時代があったわけですが、時代の変化と共に大化の薄葬令も出て、古墳造りを止めなさいと、むしろ公共事業に関わってくださいという流れが出来て、古墳は消えてしまいます。古墳が消えた後、それに替わるような地域の中でのシンボルは寺院です。南麓地域の中では伊勢崎市上植木廃寺が白鳳期の寺院としては重要です。前橋市の総社にある山王廃寺と並ぶ大規模な寺院で、赤城南麓の勢力は上植木廃寺の造営に一生懸命心血を注いだのだろうと思います。そうした状況の中、今度は有力な豪族、公の職にいたかどうかは微妙ですけれども、そういった人たちも私的な財産をなげうって寺院を造っていく動きが生まれます。伊勢崎市十三宝塚遺跡が今は芝生になって残されていますが、これは昭和50年代初頭くらいに調査をしていて、工業団地の造成で調査をしていて、とある前原さんと縁の深い方が調査を統括されていて、最初はこれが佐位郡の郡衙だといって一生懸命郡衙になるように発掘をしたのですけれども、郡衙にならなかったという過去を持つ遺跡です。今の評価ですと奈良時代後半くらいに造られた寺院跡とされています。前橋市の上西原遺跡は荒砥にありますが、十三宝塚遺跡と同じようにきっちり囲まれた中にお堂が二三あるような寺院跡で、十三宝塚遺跡と非常に似ています。

私の先輩で伊勢崎市に出浦さんという方がいらっしゃいますが、十三宝塚遺跡と上西原遺跡を比較検討されています。出浦さんによると、全国的に見ても、十三宝塚と上西原みたいなコンパクトにぎゅっとまとまったようなタイプのお寺は無いそうで、全国的に見ても珍しいものが佐位郡と勢多郡に一カ所づつあるという状況は、佐位と勢多の結びつきの強さを示しているよねと話してらっしゃいました。出浦さんはその背景に檜前部君氏という氏族を考えているようです。檜前の墨書土器が上西原遺跡周辺でまとまって出土していること、十三宝塚遺跡の所在地は檜前氏の本拠地とされる佐位郡淵名郷にあります。二つの寺院は佐位郡と勢多郡に跨って活躍した檜前氏によって建立された可能性が高いのでしょう。

こうした小規模な寺院が国分寺の少し後くらいから出来始めるようです。先の十三宝塚遺跡と上西原遺跡以外にも、赤城山南麓地域では瓦が採取される遺跡が数ヶ所ありますので、そういったものがひょっとすると今後寺院跡になってくる可能性があるのですが、今のところ調査がそこまで進んでいない場所ですので、良くわかりません。

具体的に少しヒント的に出すと、前橋市二之宮町、今井神社古墳に近い所に神社境内に瓦散布地があるらしいです。もしかするとあの辺にも寺院跡がもう１つくらいあっていいのかなと思っているわけですが、地域の中では仏教を一つの糧とした開発の方向性が生まれてきているようです。その辿り着いた先というのは、おそらくずっとずっと標高が高い所、図１の一番上に宇通とかいてあるかと思います。赤城神社と同じくらいの標高のこの場所には、宇通遺跡という寺院跡があります。昭和40年代の山火事の後に発見され、群馬大学の尾崎先生が調査をして、昭和50年代から60年代にかけて当時の粕川村教育委員会の小島純一さんが調査をされた遺跡です。典型的な山林寺院とか山岳寺院といっているような平安時代の遺跡です。

人間が住んでいる所がサト（里）、その周りにあるヤマはサトヤマ（里山）、その更に向こうにはヤマ（山）が、更に向こうにはダケ（岳）という険しい山。そういう同心円で理解した時、宇通遺跡はヤマとダケの境界にあるのだと思います。人間が普通に生活をする範囲の限界に寺院を造っています。修験などに関わってくるような立地なんだろうなと漠然と思って

いました。

宇通のすぐ下、サンデンフォレストという山を３つくらい開発して作った大きい工場があります。私が20代後半のある時期、とある調査会社に所属し調査に２ヶ月従事しました。私が離れた後、遺跡は平安時代の製鉄遺跡になっていきました（室沢・中ノ沢遺跡群）。鉄生産に関係するような人たちが住んでいたムラがあって、そのすぐ上の宇通には寺院があることがわかりました。

「もののけ姫」というアニメを見たことがある方もいらっしゃるかと思いますが、それに描かれているタタラ場みたいな世界が室沢・中之沢遺跡群であったとイメージできます。タタラ場の上には、山の神様の怒りを懐柔するような役割の仏教施設として宇通の寺院がある、短絡的にはそんな理解も出来るのではないのかなと思っております。

郡衙・官衙　ここから先は郡衙や官衙の話ですが、佐位郡では三軒屋遺跡が郡衙ということで確定しております。伊勢崎市もそっちのシフトで動いている状況で、佐位郡の政治的な中枢は三軒屋遺跡周辺であるとわかります。

一方勢多郡では、郡衙は未だに不明です。かつて上西原遺跡が調査された時、この近くに郡衙があるかと色めき立ちました。今でも上西原遺跡周辺に勢多郡衙を想定する意見もありますが、周辺は土地改良で広大な面積を発掘調査しています。郡衙があればもう見つかっているはずです。私は上西原遺跡周辺に勢多郡衙を想定するのは無理だと思っています。むしろ佐位郡衙である三軒屋遺跡の立地を参考にすれば、交通路との関係を重視するべきと思います。東山道の国府ルートと言われ、「あづま道」とも呼ばれる道がありますけれども、その道沿いに非常に良い場所があります。国道50号の小島田の交差点付近、古墳時代の豪族居館ではないかといわれている笂井八日市遺跡があります。

郡衙は基本的に船で米を運ぶ関係があるので、低地に接している必要があります。関東地方で確認されている郡衙の遺跡は基本みんな河川に面しています。そう考えた時、勢多郡衙は前橋市の小島田周辺、前橋東高校南方の台地縁のどこかにあるのではないかと私は密に思っています。しかしながらこの場所は今ひとつ遺跡の実態が分からない、正直何とも言えない感じです。ちなみに郡衙の遺跡というのは常時人が住んでいる場所ではないですから、地表面に遺物がたくさん落ちているという事もあまりありません。私は昔、埼玉の深谷で幡羅遺跡という郡衙遺跡の調査に関わった事がありますが、畑に全然土器は落ちていません。ですが表土をめくってみると掘立柱建物が並んで出てくる。要は日常生活がそこにはないのでゴミもない。古代のゴミで残るのは土器片です。そういう状況を考えれば、必ずしも人がたくさん住んでいて、土器がたくさん落ちているような場所がイコール郡衙遺跡かというとそうでもない。勢多郡衙は広瀬川低地にはり出した台地の縁に、今も静かに眠っているのではないのかなという想像をしています。なんて夢のような話をしておいて、実は全く違う場所から勢多郡衙が出てくるかも知れませんが（笑）。その時はとりあえず苦笑いをしてもらえばいいと思います。

あと特記すべき遺跡という事で最近気にしている遺跡、遺構を挙げておきますと、佐位郡、勢多郡の所謂南麓地域では古墳時代の終わりから平安時代までの間、先程挙げた製鉄の遺跡がたくさんあります。東日本の製鉄遺跡というのは、震源は近江の国、今の滋賀県にある勢多丘陵という場所です。近江国勢多の人たちが積極的に東に来て、製鉄を伝えたというような感じだとは思うのですが、勢多郡という地名はまさにそれです。人間が移住した結果として地名も来たのでしょう。そんな徒然の中で考えていけば、製鉄の遺跡が勢多郡域を中心に、一部佐位郡まで及ぶような範囲にたくさんあるということは納得できます。製鉄遺跡の近くからは、氷室と考えられている大きな穴が見つかることがあります。本当に氷室なのかどうなのか、私もはっきりとは言えません。実は今調査をしている西太田遺跡でも見つかっています。大きい穴なんです。大きい穴で真ん中に吸い込みみたいな窪みがあり、覆土には炭がたくさん堆積しているという特徴があります。この手の遺構に対して積極的に氷室という評価を下したのは栃木県の中山晋さんという方で、その論文を読むと氷室になってしまうんですね。現状ではこの種の穴が氷室かどうかの確証はどうやっても持てないので、何とも言えないとは思っているのですが、製鉄の遺跡に近い所で出てくる事例は赤城山南麓に限らず、例えば太田の金山丘陵、北関東自動車道の調査で掘った峰山遺跡で製鉄炉の脇からこれが出てきます。これが氷室だとすれば製鉄を行なっている人たちが火傷して熱いとなった時、とりあえず火傷には氷ですよね。当時氷は薬みたいな扱いだったと言いますから、氷を特別に取っておく施設が熱関係産業遺跡にあるというのは、非常に合理的だと思うので、一つ考

えておきたいことです。

ただ前橋市の柳久保遺跡などは、近くに製鉄遺跡があるというわけでもないですし、私が今掘っている西太田遺跡にも製鉄遺構はありません。製鉄遺跡にもあるという言い方に過ぎず、火を扱う作業場に近い所に氷、という話なんだろうと思います。

冬の赤城山南麓で発掘していて思う事は、とにかく寒いです。たまに降る雪をこういう穴の中にぎゅうぎゅう押し込んで、断熱材の藁で蓋をしておけば、結構な季節まで雪が持つかもしれません。そういうような事で氷を取り置いた施設である可能性は高いでしょうし、あとは単純に大型の穴倉である可能性もあるでしょう。今後いろいろ考えていく必要があるのかなと思っています。何れにせよ赤城山南麓地域では調査例が多いので、この地域の１つの産業の形がこれに現れる可能性もあるでしょう。

以上で終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

講座　赤城山南麓の考古学 2016　第 6 回

於　大室公園　民家園離れ

2016. 10. 1

勢多郡と佐位郡ができる頃の赤城山南麓

～神沢川・桂川流域の遺跡・古墳の動向を中心に～

はじめに

赤城山の南麓地域は、現在の行政区分では前橋市と伊勢崎市となっているが、平成の大合併以前は勢多郡と佐波郡（佐位郡と那波郡の合併による郡名）が複雑に入り組んだ地域であった。これは古代以来、小さなムラが分離・合併を繰り返した一つの到達点であったと考えられる訳で、その背景には地域内の事情以外に、政治的な力が働いていたであろうことは、容易に想像される。これは赤城山南麓に限らず多くの地域に共通して言える事で、列島内各地に地域オリジナルを持ちつつも一斉に出現する古墳・埴輪を引き合いに出すまでもなく、必ず日本史上の動向と何らかの形で連動している。

結論から言えば、今を遡ること約 1300 年前、赤城山の南麓は勢多郡と佐位郡と呼ばれる地域に編成された。歴史を振り返る我々にしてみれば大きな出来事であるが、はたして当時を生きた人たちはそれをどのように思っていたのか。二つの郡界付近を流れる小河川、神沢川と桂川の畔で最近調査に携わった遺跡と古墳を素材に、あれこれ考えていることを少しばかり披露させていただきたい。

1.　対象地域概観

今回取り上げる神沢川と桂川は、赤城山南麓を刻む数多の中小河川の一つで、荒砥川と粕川の間を南流している。二つの小河川は共に前橋市鼻毛石・苗ケ島町（旧宮城村）付近に源流をもち、地形の成りに沿って南へ下り、現状では神沢川が荒砥川へ、桂川は粕川へと合流している。しかしながら地形図の谷筋を色分けしてみると、本来二つの河川は共に粕川の支流である可能性が考えられる。

神沢川については、以前から人為的に転流させられた可能性が指摘されていた。それは前橋市西大室町付近で西神沢川と東神沢川が合流した後、谷に沿って南へ直線的な流路が、伊勢崎市波志江町と前橋市飯土井町付近で急激に屈曲して、直線的に荒砥川へ向かっている点に注目した見解である。なおこの屈曲部以南の微地形を地形図から観察すると、神沢川は本来、現在の北関東自動車道波志江パーキングエリア付近を経由して、毛蔵寺公園の南方付近で粕川に落ちていたか、平釜川・赤坂川といった伊勢崎台地を刻む小河川を経由して広瀬川に直接落ちていた可能性が考えられる。

もう一方の桂川は、現在の流路は大室公園東側から多田山丘陵の裾を回り込むように振れた後、現在のまるか食品付近で南へ下る谷筋に入った後、中世の未完の用水路である「女堀」に乗り入れて粕川に

落ちている。多田山付近の流路は地形的にかなり不自然で人為的な転流を思わせ、「女堀」への乗り入れを根拠とすれば中世後半頃の所作と考えられる。以上の点から古代の桂川は、現在西桂川と言われる小河川であったと考えるのが妥当だろう。西桂川は大室公園南側を頭に南下する谷筋を概ね流れており、石山丘陵の東側から地蔵山丘陵の西を流れて粕川に落ちているが、地形的には地蔵山の西を流れていた可能性が高い。なお、古代桂川の流路を傍証する現象がいくつかの遺跡で確認されている。一方は旧赤堀町の中畑遺跡、もう一方は伊勢崎市の粕川南側の新屋敷遺跡～三軒屋遺跡で確認されている、洪水堆積物層の存在である。818 年に赤城山南麓を襲った地震に伴う地すべり由来と思われ、桂川を一気に下った土石流が、粕川と合流するところでオーバーフローした結果と思われる。

2. 古墳の動向

前期　明確な古墳は存在せず、基本、前方後方形を含む周溝墓群ばかりが目立つ。そうした状況の中で、伊勢崎市華蔵寺裏山古墳や、その北東の地蔵山古墳は前期の可能性が指摘されており注目に値するが、調査を経たものではないので不明と言わざるを得ない状況。現時点では、赤城山南麓には前期古墳は不在であったとすべきか。

中期　中期の前半、南麓の末端でもある広瀬川に面した台地上に、長持形石棺を埋葬施設とする大型前方後円墳であるお富士山古墳が唐突とも言える出現を果たす。また、それに近い時期と考えられる円墳が、南麓でも粕川の開析谷沿いにいくつか分布している。伊勢崎市の西野大塚古墳では野焼き焼成の壺形埴輪が出土しており、お富士山を遡る可能性があるが、達磨山・蕨手塚古墳はほぼ同時期と推定される。これらの円墳は粕川の谷筋でも、特に幅の広い、可耕地面積の広い部分にまとまる傾向がある。谷筋を谷津田として開発した地域首長の連合がこの時期に形成され、彼らの擁立した王が、お富士山を作り、畿内の大王と同じ形の石棺に葬られたと考えられる。なお、お富士山の立地を改めてみると、広瀬川(利根川)を通じて東京湾と繋がっていることに気がつく。また、川の対岸には、既に上野最初の本格的大規模古墳として前期に築造された、前橋台地の朝倉・広瀬古墳群中の八幡山・天神山古墳を望むことができたであろう。こうした特徴は、いやがおうにも様々な想像を掻き立てる。

中期後半には、形態的にはお富士山の系譜を引くと思われる今井神社古墳や、赤堀茶臼山・丸塚山古墳のような前方部の短い帆立貝式の前方後円墳が作られる。特に赤堀茶臼山は秀逸な家形埴輪をもつことで著名で、円筒埴輪も畿内地域との関わりを窺わせるものである。

後期　後期初頭、お富士山以来再び現れる大型前方後円墳として、前橋市前二子古墳がある。前二子は前方部のやや短い特徴的な形態で、当方近くに中期に築造された赤堀茶臼山との関係を想起させるものである。前二子の後、程なくして中二子古墳、少しおいて後二子古墳と、三基の前方後円墳が作られる(大室古墳群)。周辺には、初期群集墳と言われる小円墳の密集する古墳群が多くみられる。目立つ副葬品をもつ古墳はごく少数で、大半は貧弱な内容であり、富はむしろ前二子のような大型前方後円墳に集約されている点に注意しておきたい。

後期後半になると、中規模の前方後円墳が、主に粕川・神沢川流域を中心に多く作られる。新式群集墳とも言われる、横穴式石室をもつ円墳主体の古墳群は数えられない程ある。これらは中期以来の谷津田開発の結果と言えるもので、「赤城南麓型」とも言える特異な形態の小規模前方後円墳が群中に含まれる場合もある。一定の社会的紐帯の存在を教えてくれる。

3. 古墳時代集落遺跡の動向

集落遺跡はその調査事例があまりに膨大であり、個々に取り上げることは不可能である。また、これらは古墳と違い発掘調査しない限り正確に確認することができないので、分布論的分析に耐えないものである。以上を踏まえた上で古墳時代集落の立地傾向に注目すると、古墳が流れ山のような独立丘陵上にあることが普通なのに対し、集落遺跡は谷に臨む低台地上に漫然と竪穴建物群が広がるケースが多いようである。これは水田経営もさることながら、集落と地続きの台地上を畑地として耕作していた可能性を窺わせるものである。

中期～後期前半、方形の区画溝に囲まれた「豪族居館」の存在も、南麓には特徴的な該期の遺構である。これらは粕川・荒砥川の支流に被るかのような立地を示し、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡に顕著な河川の浸食による破壊は、むしろ特徴と言える。また、南麓の「豪族居館」は、対応する王墓が今一つ明確でない点も興味深い。先述したように、これらが河川と積極的に絡む立地である点は、水利との密接な関係を示すと思われる。中小規模の前方後円墳の被葬者達によって輪番管理された、水に関わる祭祀場が「豪族居館」の実態と考えることも可能であろう。

4. 奈良～平安時代集落遺跡の動向

奈良時代のそれは古墳時代から連続するものが多く、これらは発展的かつ伝統的な地域であったことを傍証するものである。反面、これまで無遺跡ないしはそれに近い場所に出現する、複数棟の掘立柱建物を含む遺跡の存在も特徴的である。これは国・郡・郷(評)といった行政単位の整備に伴い設置されたと思われ、具体例としては伊勢崎市本郷下遺跡があり、竪穴建物以外に、倉庫とみられる掘立柱建物が数棟確認されており、ある程度公的な雰囲気をもつ。時期はやや新しいが、旧赤堀町の南原遺跡も類似の内容をもち、今一つ輪郭ははっきりしないが「郷」の中枢をイメージさせるものである。

平安時代になると立地や予想される性格に差が生じる。標高の高い方へ集落が進出するのである。牧の管理施設の可能性がある旧大胡町の堀越中道遺跡や、製鉄に関わる旧粕川村の室沢・中之沢遺跡郡は代表的なものだが、これは従前、赤城山を険しいダケに例えた時のヤマ・サトヤマと認識されていたであろう範囲に食い込む現象として注目される。

5. 寺院

佐位郡域の伊勢崎市上植木廃寺は白鳳期の建立で、県内でも山王廃寺に次ぐ古く大規模な本格的

寺院である。古墳に例えるなら、大規模な前方後円墳と言って良い。勢多郡域にこれと同等の寺院が無い点は、勢多の力が無かったというよりは、本来的同じ地域であったことを窺わせる。

奈良時代後半、国分寺建立の頃に出現する佐位郡の十三宝塚遺跡と勢多郡の上西原遺跡は、遺構配置の類似する兄弟とも言えるような中規模寺院跡で、檜前氏との関係も指摘される。これについては恐らく、佐位・勢多両郡の関係性の深さを示しているのだろう。

標高の高い、旧粕川村のう宇通廃寺の存在は、先の平安時代におけるヤマへの進出に関係するものと理解され、背景に製鉄があったことは、その直下の室沢・中之沢遺跡群が教えてくれる。

6. 郡衙・官衙

佐位では三軒屋遺跡が郡衙として確定しており、先の上植木廃寺の南方低台地上に設置されている。一方の勢多では、かつて上西原遺跡周辺が疑われたが、明確な遺構は確認されていない。個人的には広瀬川・桃木川の沖積低地を望む、前橋市小島田町付近の可能性があるのではないかと思う。

7. 特記すべき遺跡

佐位・勢多の丘陵部、赤城山南麓には、古墳時代末頃からの多くの製鉄遺跡が分布している。荒砥川という名称は鉄生産に関わる地名であるし、そもそも勢多とは近江国の勢多との関係ある地名との指摘がある。なお、近江の勢多には、古墳時代末頃に東日本全域に影響を及ぼした一大製鉄遺跡群である「勢多丘陵生産遺跡群」があり、人的交流の可能性を教えてくれる。

他にも「氷室」の可能性がある大型土坑が、特に南麓の丘陵性台地に特徴的に分布しており、製鉄遺跡の近傍に佇むのは興味深い。

東山道駅路については、国府ルートが南麓の末端を通っていたと思われる。伊勢崎市三和工業団地遺跡では、駅家と考えられる遺構が確認されている。やや時期が新しいのでその扱いは慎重になる必要があるが、南方の地名「植木」がエキの転じた地名と理解すれば興味深い。

おわりに

・勢多と佐位は古墳時代から連続する、伝統的な社会が広がっていた。
・本来不可分で、一体の地域として今後は分析されるべき。

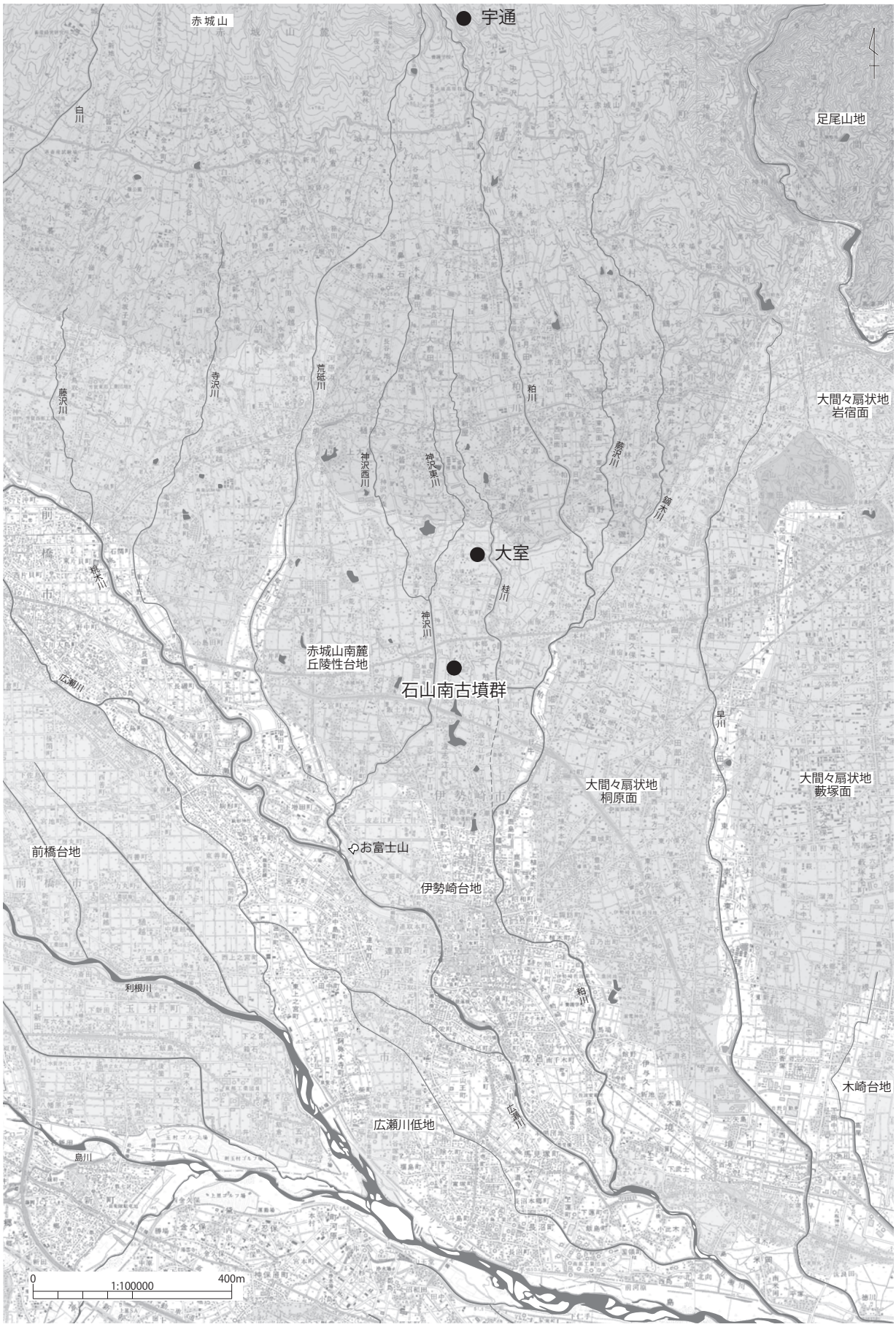


図１　『石山南古墳群』より（赤城山南麓の地形）

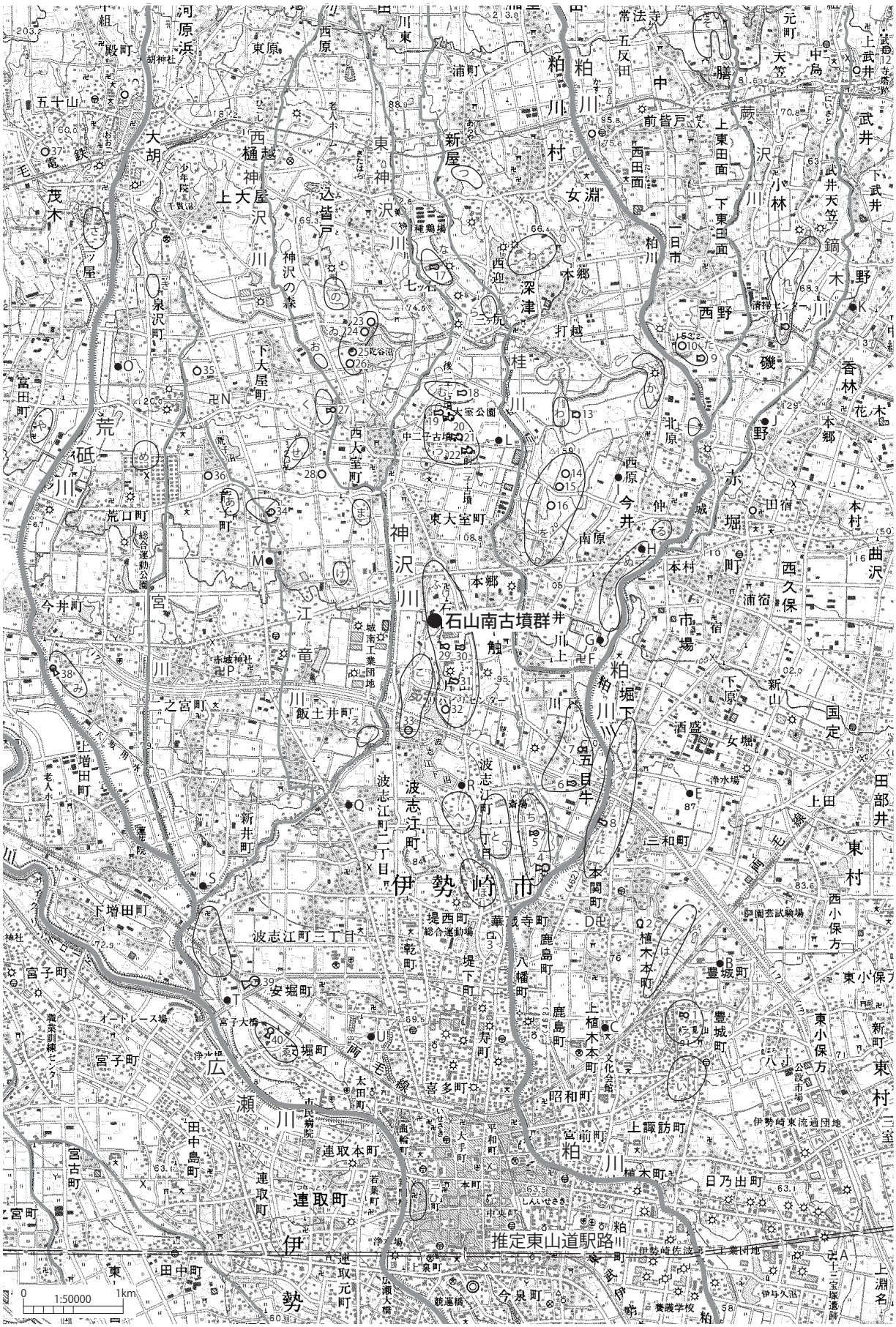


図２　『石山南古墳群』より（周辺遺跡分布図）

図３　『南原遺跡10』より（古代佐位郡の遺跡分布図）

図 2 に対応

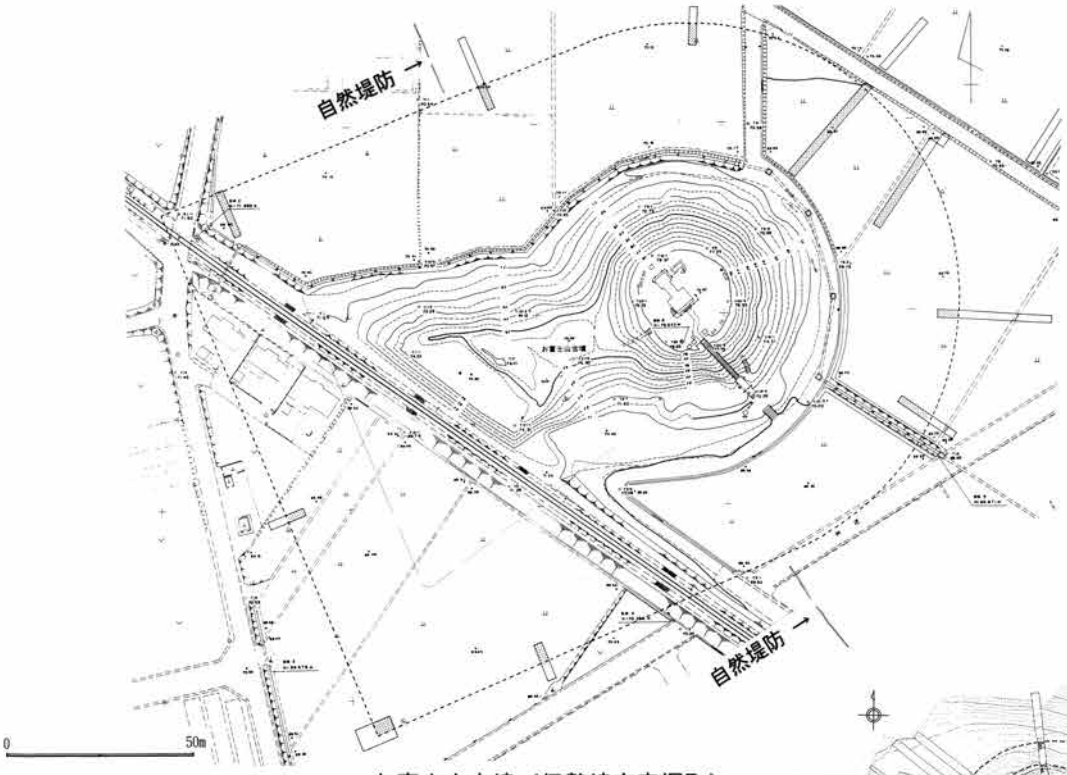
古　　墳		27	伊勢山 / 前方後円墳	わ	三騎堂	め	柳久保
1	荷鞍山 / 前方後円墳	28	荒砥富士山 / 円墳	か	轟山・吉沢峯	み	今井神社
2	丸塚山 / 帆立貝式	29	赤堀村 78 号墳 / 前方後円墳	よ	今井北原	し	お富士山北
3	華蔵寺裏山 / 前方後方墳？	30	庚塚 / 前方後円墳	た	西野神社丘	ゑ	お富士山南
4	五目牛二子山 / 前方後円墳	31	片田 / 前方後円墳	れ	峰岸山	ひ	三光町
5	地蔵山 / 前方後円墳？	32	祝堂 / 円墳	そ	白藤	集落など	
6	五目牛清水田 1 号 / 前方後円墳	33	宮貝戸 2 号 / 円墳	つ	(仮) 新屋	A	十三宝塚　寺院
7	洞山 / 前方後円墳	34	舞台 1 号 / 帆立貝式	ね	深津	B	原之城　豪族居館
8	一ノ関 / 前方後円墳	35	向原 / 前方後円墳	な	西原	C	三軒屋　佐位郡衙
9	愛宕様 / 造出付円墳	36	荒砥杉山 / 円墳	ら	三ヶ尻	D	上植木廃寺　寺院
10	西野大塚 / 円墳	37	堀越 / 円墳	む	上縄引	E	舞台　周溝墓ほか
11	十二社 / 帆立貝式	38	今井神社 / 前方後円墳	う	大室	F	川上　寺院ほか
12	中塚 / 方墳	39	お富士山 / 前方後円墳	ゐ	(仮) 乾谷沼西	G	南原　郷関係遺跡
13	赤堀茶臼山 / 帆立貝式	40	安堀 / 前方後円墳	の	横俵	H	今井学校　豪族居館
14	中里塚 / 円墳	古　墳　群		お	水口山	I	多田山東
15	多田山 12 号 / 円墳	い	権現山南	く	伊勢山	J	社前　祭祀
16	多田山 15 号 / 円墳	ろ	権現山	や	阿久山	K	野一本木　豪族居館？
17	西原 1 号 / 前方後円墳	は	大道西	ま	地田栗	L	梅ノ木　豪族居館
18	内堀 1 号 / 前方後円墳	に	本関町	け	天神山	M	荒砥荒子　豪族居館
19	小二子 / 前方後円墳	ほ	台所山	ふ	石山・庚塚・片田	N	上西原　寺院
20	後二子 / 前方後円墳	へ	(仮) 波志江沼東	こ	吾妻・牛伏・今宮・宮貝戸	O	丸山　豪族居館
21	中二子 / 前方後円墳	と	蟹沼東	え	荒砥二ノ堰	P	古瓦散布地
22	前二子 / 前方後円墳	ち	地蔵山	て	舞台	Q	波志江中野面　周溝墓ほか
23	荒砥村 70 号 / 円墳	り	洞山	あ	下押切	R	波志江中宿　粘土採掘坑
24	荒砥村 68 号 / 円墳	ぬ	南原	さ	上ノ山	S	荒砥前原
25	小稲荷 6 号 / 円墳	る	城	き	丸山	T	西太田
26	小稲荷 3 号 / 円墳	を	多田山	ゆ	富田	U	本郷下

図 3 に対応

集落遺跡など		18	大沼下　集落	36	大道西　道路跡	54	十三宝塚　寺院 官衙的集落 掘立群	P	御富士山　後期群集墳
1	南原　古墳～平安集落 掘立群 墨書土器	19	中屋敷西　集落	37	三軒屋　佐位郡正倉	55	赤沼　集落 掘立群	Q	本関町　後～終末期群集墳 小形前方後円墳含 蔵手刀 丸鞆 巡方 鉄釘
2	今井北原　集落	20	岡屋敷　集落	38	下諏訪町　集落 掘立	56	連蔵　不明 瓦 瓦塔		
3	多田山東　古墳～平安集落 四面庇掘立	21	西太田　集落掘立 掘立群 砂鉄集積	39	伊勢崎・東流通団地　集落 製鉄	57	武占　集落	R	大道　後期群集墳
4	御伊勢坂　集落 瓦塔	22	中組　集落	40	大道上　集落	58	保泉・丸山西　集落 銅印	S	権現山北　後期群集墳
5	下寺　集落 掘立	23	本郷下　集落 掘立群	41	下吉祥寺　集落 掘立	59	伊与久・久保田東　集落	T	権現山南　後期群集墳
6	中畑　奈良・平安集落 掘立群	24	塚越　集落	42	六道　集落	60	上武士・新井　集落	U	頼光塚　後期群集墳
7	向井　集落 掘立群 墨書土器 炭化米	25	備足山　不明 瓦塔	43	大根谷戸　集落 あずま道	古墳群		V	下谷　後期群集墳 後期大形前方後円墳含
8	赤坂北　集落	26	寿町　集落 掘立 皇朝十二銭	44	天神沼Ⅱ　集落	A	峰岸山　後期初頭～終末期群集墳	W	淵名　後期群集墳 終末期大形円墳含
9	赤坂南　集落	27	光仙坊　集落 須恵器窯	45	田部井館跡　炭窯	B	神社丘　後期群集墳	X	清音　後期～終末期群集墳 方頭大刀 鉄釘
10	川上　集落 火葬墓 寺院 墨書土器	28	舞台　集落 須恵器窯	46	南原間　製鉄	H	南原　後期群集墳	主な後期古墳・古代墳墓	
11	北通　集落 墨書土器	29	鯉沼東　集落	47	下大久保　製鉄	I	大室　後期前方後円墳 3 基	a	多田山火葬墓　安山岩製蔵骨器多数
12	鷹巣　集落 灰釉 墨書土器	30	関　集落	48	野間　集落	J	石山・片田　後期群集墳 小形前方後円墳含	b	後二子　後期大形前方後円墳
13	北通西　集落 掘立建物跡	31	新屋敷　集落	49	下ノ西　集落 掘立群	K	下触牛伏　終末期群集墳 方墳含 蔵手刀 鉄釘	c	祝堂　終末期大形円墳 二重周堀 石室下掘込地業
14	吾妻　集落	32	上西根　集落 丸鞆	50	矢ノ原　東山道 (牛堀・矢ノ原ルート)	L	蟹沼東　後期～終末期群集墳	d	五目牛二子山　大形前方後円墳
15	大沼上　集落	33	恵下西　集落	51	上淵名　集落 瓦 瓦塔	M	地蔵山 後～終末期群集墳 後期大形前方後円墳含	e	下淵名雙児山　大形前方後円墳 埴輪
16	宮貝戸上　集落	34	恵下　集落	52	下淵名塚越　集落	N	五目牛南組　後期群集墳 小形前方後円墳含	f	(仮称) 裏神谷　終末期大形円墳か 未調査
17	宮貝戸下　集落	35	南久保　道路跡	53	下淵名　集落	O	胴山　後期～終末期群集墳 方墳含	g	阿弥陀　後期前方後円墳　三累環頭大刀 埴輪

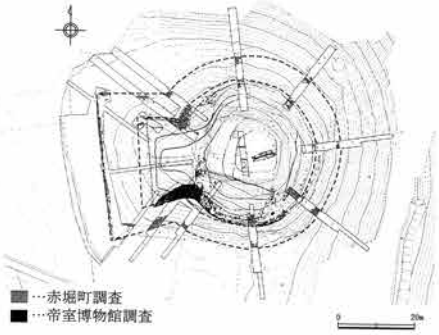
勢多郡と佐位郡ができる頃の赤城山南麓

神沢川・桂川流域の遺跡・古墳の動向を中心に



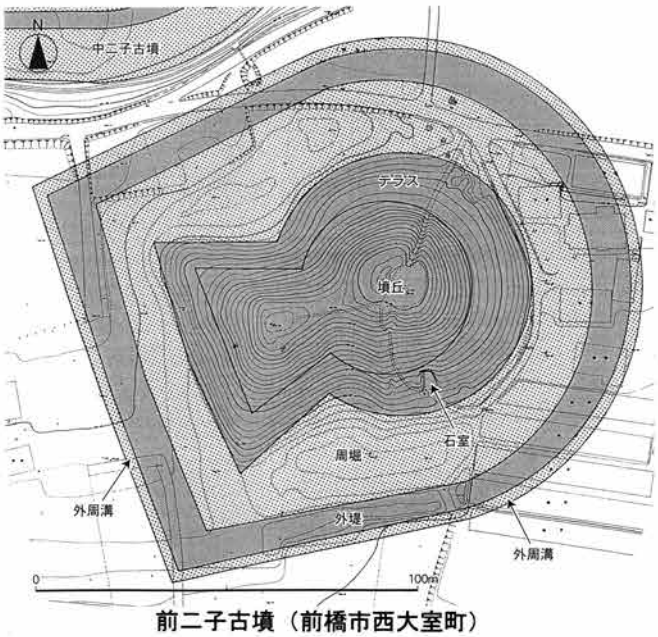
お富士山古墳（伊勢崎市安堀町）

※報告書より作成　永井加筆



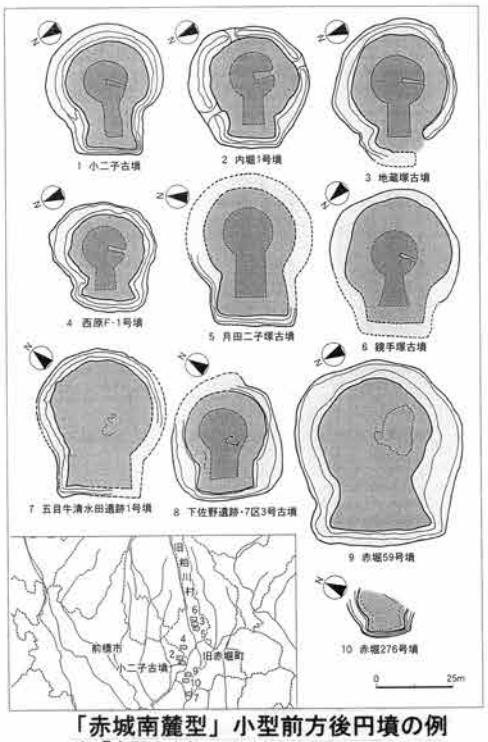
赤堀茶臼山古墳（伊勢崎市今井町）

※伊勢崎市パンフレットより



前二子古墳（前橋市西大室町）

※『東国大豪族の威勢』（前原豊 2009）より



「赤城南麓型」小型前方後円墳の例

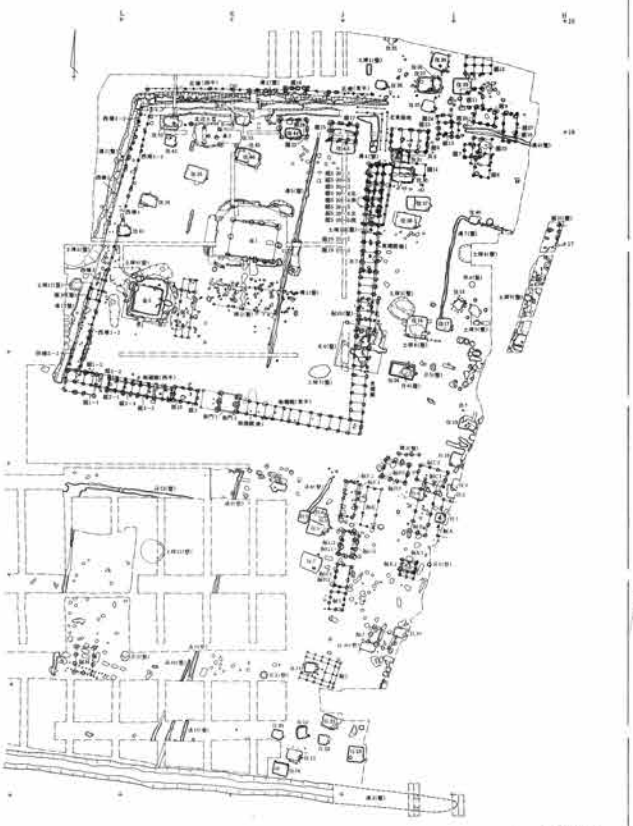
※『東国大豪族の威勢』（前原豊 2009）より

「豪族居館」荒砥荒子遺跡（前橋市荒子町）

※報告書より作成

佐位郡 十三宝塚遺跡（伊勢崎市境伊与久）

※報告書より作成

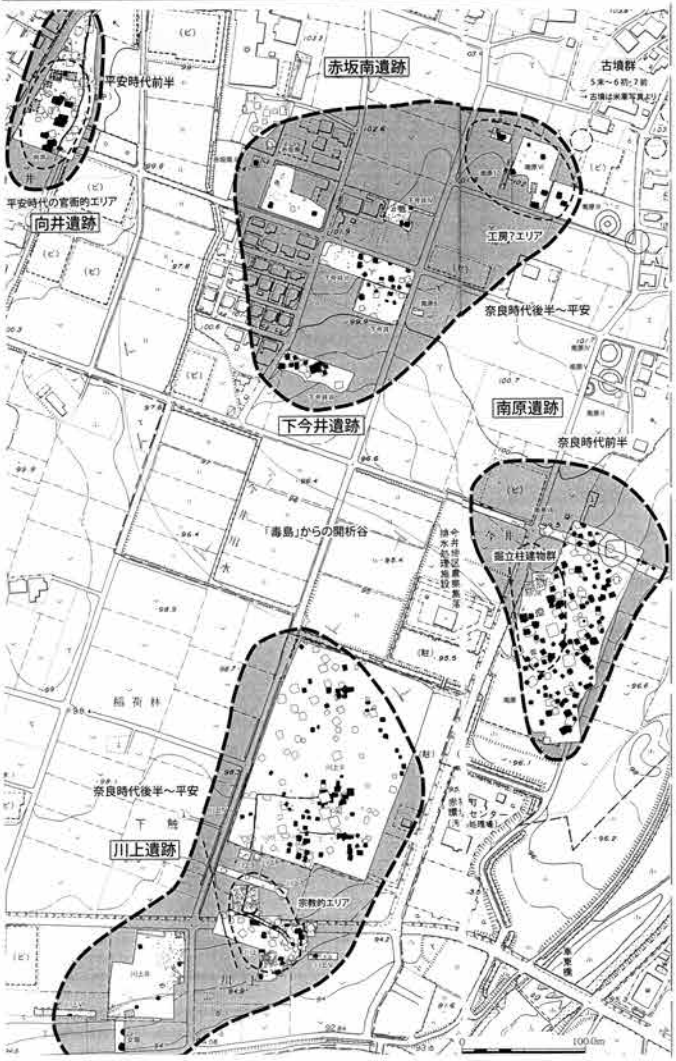


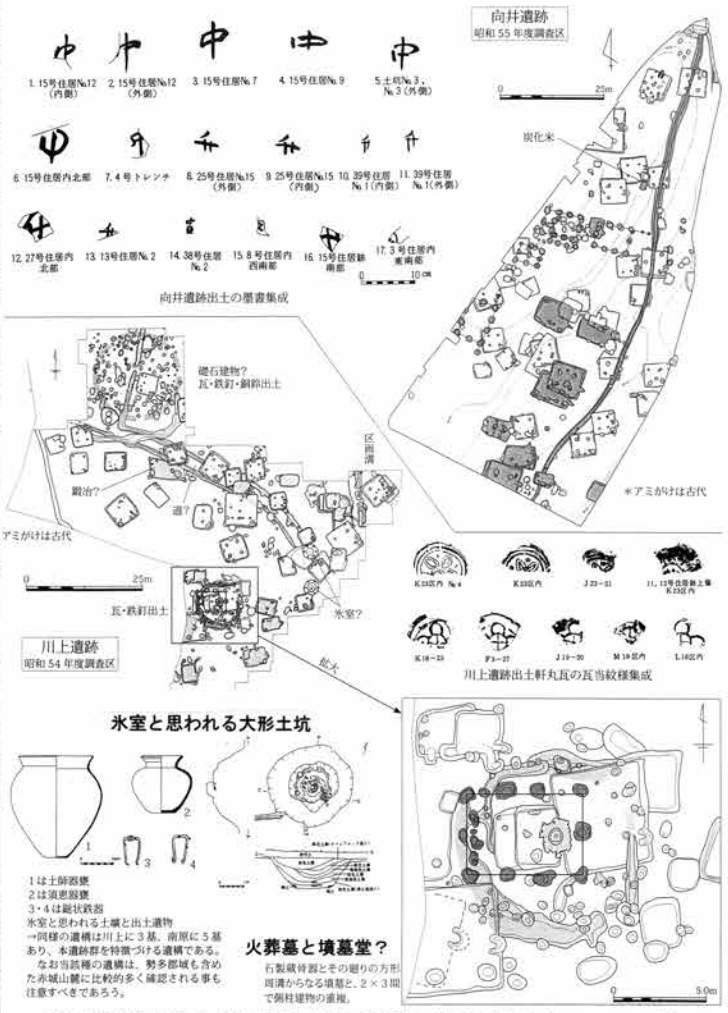
S＝1/2000

勢多郡 上西原遺跡（前橋市下大屋町）

※報告書より作成

S＝1/2000





南原遺跡周辺の古代景観と構成遺跡（伊勢崎市今井町・下触町）

※報告書より作成